

珍談と獵奇の型破り雑誌

奇譚クラス

未亡人愛慾小説集

9月

歴史奇譚

成吉思汗の死

爆弾娘行状記 湯の町騒動

奇譚クラス

九月号

奇譚クラス 九月号

定價 九十円

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可 (毎月一回 一日発行)
昭和二十六年一月二十四日 日本国有鉄道特別優待雑誌第一八七号
昭和二十六年八月三十日印刷 昭和二十六年九月一日発行 (第五巻第九号)

- ・爆弾娘行状記……続湯の町騒動……加茂川清子
- ・怪奇探偵小説……妖魔の最後……津田文吉
- ・売淫婦白書……肉体の驟雨……笠置良夫
- ・舌相諷刺奇譚……木賃ホタル紳士録……能登一三
- ・同性愛無理心中……聖・怨・花……松井籟子
- ・艶色二重ア……百円札の雨……佐々木直
- ・夜之助好色旅記……秋宵夜譚……乙宮多巳雄
- ・純情乙女の告白集……織姫の悲哀・悲しき轍・
・恋及慾乱舞……小間使の日記 (鍵穴から覗いた人生・
・諸国好色地圖……(連れ込み宿の女中……(マニキュアガール)・
- ・人工性器……花木 実
- ・上海愛慾行脚……楊 馬 珊
- ・女医の肉体当番……穴吹 武

変態奇譚怪奇集

・いつまでも若い夫人の秘密・
・人形と心中する純情娘・
・阿片窟にうごめく人の群・

躍進する雑誌界の寵児

奇譚クラスの次号予告!!

不良少女マリ



「死んで!! あたしと一緒に死んで!!」いきなりマリは私に抱きついて来た。横倒しになったヨツトの舷側から二人はからみあつたまゝ海中に投げ出された。

柔軟なマリの肉体がさながら蛇の様に私のからだにからみついて来るのだ。口から鼻から汐辛い海水が流れ込んでくる。苦しきにも含みながら、私はマリのからだをつきはなそうとした。

「死んでたまるものか!」

だん／＼薄れてゆく意識の中で私は必死になつて叫んだ。

愛山久作「不良少女マリ」

オフセ 無理心中を挑む不良少女マリ
ツト色 降伏した敵將を引見する成吉思汗
刷口繪 國際奴隸船の日本娘たち
グラビヤ・モード・アラベスク

森の精・水の精の裸女
 色刷冗談室 艶笑娛樂館
 眞夜中なやまし奇譚

第一話 深夜の睦言 久松研二 42
 第二話 盗まれた強盗 明石三平 42

飛切奇抜色好み短篇集

裸女像 自壊 莖亞久津 58
 尻をともし女 天宮將吉 60
 猫をかぶつた源氏の君 赤壁 元 62
 寸劇(迷探偵×氏捕物譚)

謎の血痕 伊勢みどり 77

奇譚クラブ 九月号 目次 未亡人愛慾小説特集

爆彈娘行狀記 湯の町騒動 加茂川清子 33
 須磨利之 画

怪奇讀物 鱗夫人 青梅洋史 38
 竹中英二良 画

ユーモア奇譚 西瓜仙人 八瀬田音兒 47
 曾根三太郎 画

青春小説 情熱は炎の如くに 小島伸二 52
 桑 玄太 画

愛慾小説 どぶろくの宿 美戸部進 64
 松岡敏一 画

愛慾奇談 つかんだ女体 兵庫一平 66
 明石三平 画

軟派小説 愛憎の崖 眞木龍史 70
 美濃村晃 画

かつぎ屋未亡人 桑の實は赤い 尾上六歩 78
 美濃村晃 画

事実奇談 國際女奴隸船 早乙女見 82
 喜多玲子 画

濃艶小説 刺のある毒花 春山耀子 84
 紀市郁榮 画

探訪讀物 援助を求める女たち 紀市郁榮 92
 秋田冷光 画

變態小説 海濱の情痴 三宅リ子 100
 今幾久 画

艶笑漫才 港が見える丘 中村米藏 106
 中澤公平 画

歴史奇譚 成吉思汗の死 中澤公平 108
 美田京二 画

実話奇談 不良少女マリ 愛山久 114
 志乃田よし 画

歴史奇譚

成吉思汗の死



より好色あつくことなき

成吉思汗の遠征の

第一の目的は美人國の王

妃たちを思うがまゝに

もてあそぶことだつた

モンゴルの老帝に占領された

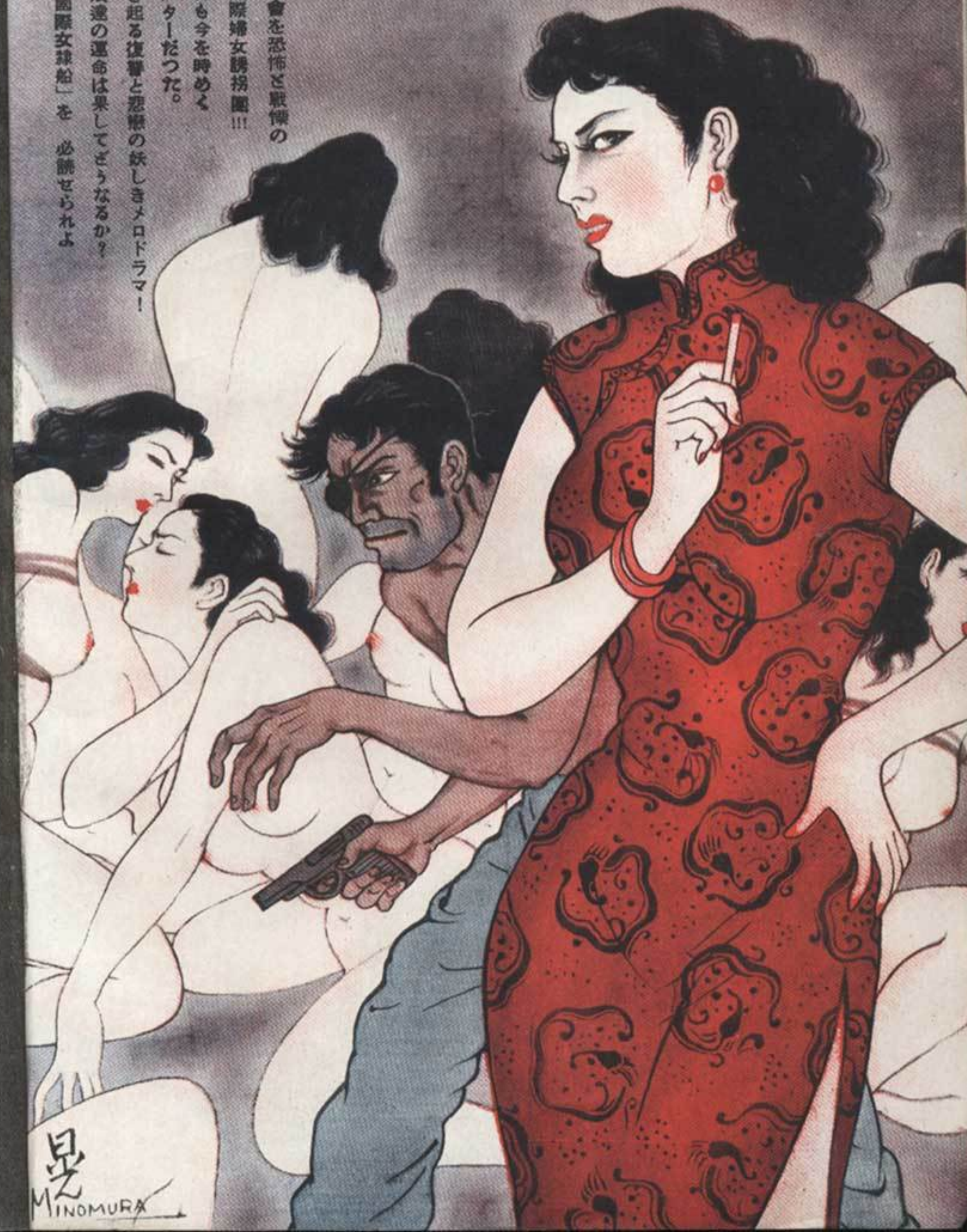
美人國タングートに擄りひろげられ

る妖艶なる歴史奇譚

船隸女國際

早乙女晃作

平和な日本の大都會を恐怖と戦慄の渦に捲き込んだ國際婦女誘拐團!!!
その團長は意外にも今を時めく
中國映画の花形スターだった。
戦亂のかげに捲き起る復讐と悲戀の妖しきメロドラマ!
誘拐された日本娘達の運命は果してどうなるか?
早乙女晃作「國際女隸船」を 必読せられよ



晃
MINOMURA

水林の精と水の精

ヌード・アルバム



叢林の
乙女



木の間を渡る
陽ざし明るき
松ばやし
光は肌に
縋となりあり



さあわれは
君を愛せし
今宵こそ
君のこゝろを
いざ聴かすべし

せらぎのニンフ



川石に
 吾れ腰掛けて川床に
 老たえずみて
 もの言わぬ
 夏の心奥書
 今も忘れず





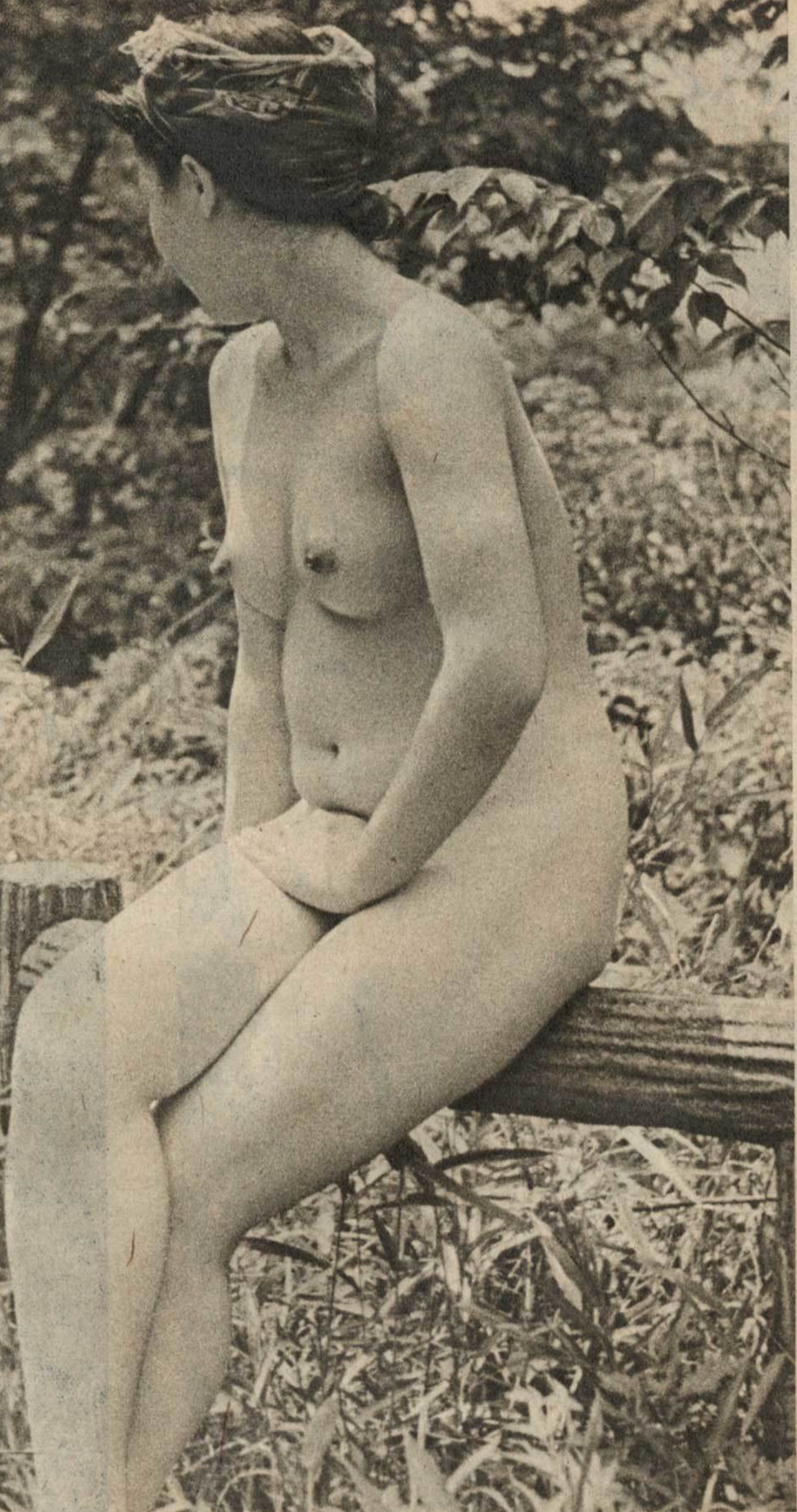
乳房めたく
腕やわらか
少女なり
荒々しく
抱き
いぬが



虫の鳴く声に
緑の中に
若いまーにり
峠道



本誌写真部写真



存在しないページ

※落丁や切抜きらしき痕跡が無い為、
占領軍の検閲により削除された可能性も



口上

さあいらつしやい〜艶笑娯楽館の開館でゴザアイ、御用の有る方もお用のナイ方も、好きな人もきらいな人も（モチロニアノホウが嫌いな奴はいねえだろうが、オツトこれは内緒々々）どうかごゆつくりお遊び下さい艶笑娯楽館の開館でゴザアイ!!

エロニヤ人生同人
佐野瓢人 風流太郎
伊勢みどり 明石三平

幼児期

(1) 「母ちゃん、ボクどうして生れたの？」
「ヒニン薬がインチキだつたからです」

(2) 「父ちゃん、母ちゃんは毎晩帰つて来ないね」
「うんホテルへ泊つてるんだよ」

(3) 「ウチの母ちゃん毎晩ホテルへ泊つてくるんだヨ」
「なーんだそんなの、ボクんちの母ちゃんも青カンで泊つてくるんだい」

少年期

(1) 「なんですね子供のくせに頼つべたへ口紅なんかつけてツ」
「先生が図画が上手に画けましたつて、褒美にくれたんだよ」

(2) 映画館で、
「スクリーンをちつとも見ないで後ろばかり見ていて寝な手ね、どうしたのよ」
「ボク、キッスの実演を見てるんだい」

(3) 「愛ちゃん映画へ連れてつてよ」
「映画は教育上いけない、父ちゃんなんか一度も行かないだろ」
「じゃあストリップならいいの？」

青年期

(1) 「此の手紙君の情もやると渡して

くれないか」

(2) 「ウン、オーケーだい」
「これは君にあげるよ」
「なーんだ十円か、さつきの人は百円くれたよ」

(3) 「ねえルミ子さん、僕はもうあなたなしでは一日として生きていられせん」
「あらそう、じゃあこれ香箋よ」



(1) 「貴女のお手紙実にすばらしかったね、僕はもうこんな幸福なことはない、貴女の言うように早く結婚しましう！」
「ちよつと待つて、中村さんへの手紙と間違えたのよ」

中年期

(2) 「俺はお前と結婚した時が一番幸福だったナ」
「あら、私は結婚出来たことが一

番不幸だったわ」

(3) 「おい、やかましいじやないか、早く赤ん坊を寝かしなさいッ」
「貴方の方を先へ寝かせますわ」

(4) 「出て行けッ、お前なんか一日だつて此の家には置けない、さつさと出て行けッ」
「そんなにガミ〜言わんでも今出て行くよ」（養子はツライ）

老年期

(1) 「前さん、なんだかこうムヅ〜するよ」
「若い頃を思い出して感懐してるんかい」
「いやだね、ハ、ハツクシヨン」

(2) 「お前さんや、いやに此の頃新聞を熱心に読んでるけど、又第三次世界大戦でも始まるんかね」
「いやあ、回春剤の製造法が連載されてるんだよ」

(3) 「お前さん、昨夜は何処へ行つて来たんだよ」
「老いらくの何とやら、逆さくらげで一杯やつて来た」
「え？くらげも此の頃では食えるのかい？」

末期

(1) 「お爺さんや、もう最後だから遺言しなさい、何でも聞いてあげるよ」
「お前の全ストリップが見たい」



陳列品一

弘法大師の筆

妻「まあ見事な筆ね、こんな太いのには墨を一杯含ませて一気に遠筆をふるつたのね、やはり書く時は無念無想だつたのかしら？」
夫「そりやあ彼も人間だもの、コーフンしただらうよ、この筆をおろすときは……」

陳列品二

十字軍の貞操帯

妻「戦争つてつくづく嫌ね、女性にこんな貞操帯なんかさせて人権蹂躪も甚だしいわ、妻の姦通を圧迫しながら、自分達は戦場で慰安婦に接しているんですものね」

夫「そんなことは昔のことさ」
妻「いゝえいけません、今度戦争が起つたらあなたに貞操帯を嵌めてあげますッ」

陳列品三

浪子のハンカチ

妻「武雄さんとの別れにこのハンカチを振つたのね、涙を誘うわねあら、このハンカチ血が着いていてよ、胸の病気の血じゃないかしら、いやーね」
夫「違ふよ、ほらここに注意がある、浪子はその日Mであつたと」

陳列品四

間寛一の下駄

夫「こいつは随分大きな下駄だなまるで狙みたいじゃないか、こんなので蹴られたら宮さんも氣絶したろうな」
妻「あなた何言つてんの、それは隣の初代横綱の下駄じゃないの」

陳列品五

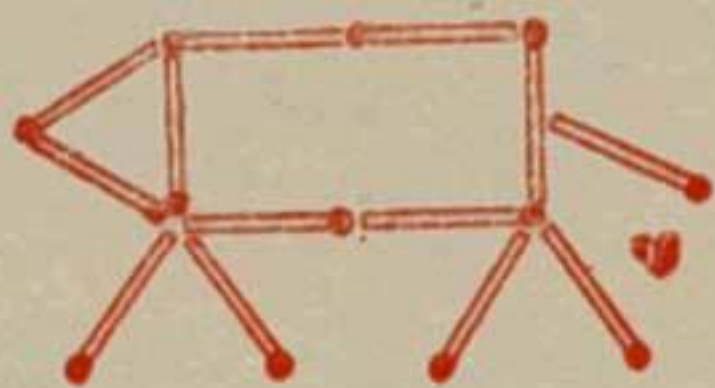
津村浩三の聴診器



○連想判断

此の丸いものを見て何を連想しますか？
その答に依つてあなたの性格が判ります。
○マツチ棒を並べて作つた豚ですが、此のうちのマツチ棒二本だけ

動かして後を向かせて下さい。
絶対的に二本だけですよ、尻尾は真中に付いているのですから間違わないようにして下さいよ
○次も同じくマツチ棒の問題です六本で梅の花を作つて下さい折つたり曲げたりしてはいけません。



夫「お前が処女だとゆうので結婚したんだが、明らかに再婚だつた、この聴診器を婚前に借りてお前の処女鑑定をすればよかつた」
妻「すみません、でも高石かつ枝さんも非処女でしたわ」

陳列品六

野見宿彌のフンドシ

妻「まあ汚いフンドシね、こんなのを締めて角力をとつたのかしらそれにいやーなシミまで着いているじゃないの」
夫「おい、あんまり大きな声で言ふなよ、そりやあ誰だつて運動すれば汗をかくじやないか」

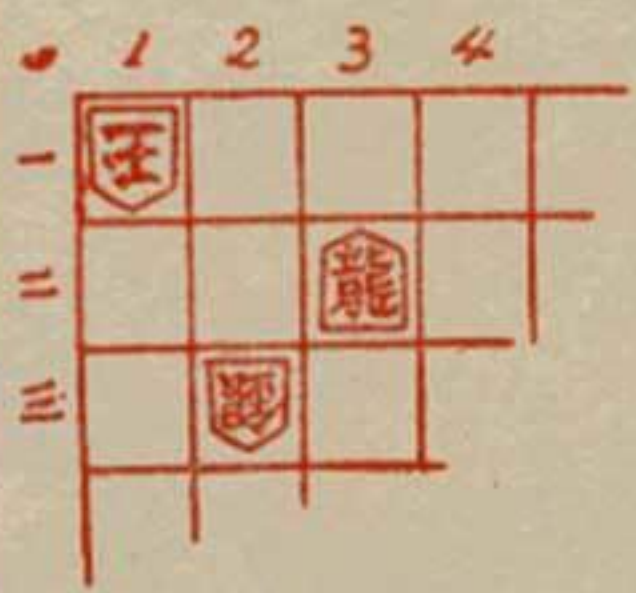
陳列品七

那須與一の下駄

妻「案外小さいのね、こんなので波に揺れる舟の風の的なんか本当に射たんでしうか、矢張り片眼をつぶつて要をねらつたのかしら？」
夫「いや、彼女のハートをねらつた」

○とんち詰将棋新題

持駒 香車一つにて詰めて下さい。



陳列品八

丹下左膳の妖刀

妻「あのグロテスクな丹下左膳つて、こんな太い刀を使つたのね、でも左手だけで抜く時はいゝけど鞘へ入れる時はうまくいかなかつたでしょうね」
夫「大丈夫さ、男だもの」

陳列品九

銭形平次の十手

妻「大江戸八百八町の兇賊を寒からしめた捕物名人の武器がこんな十手一本だとは……ね、それにこそ」

それでは次の問題を考えて下さい三問とも答えが正確に出来た人は普通の頭脳の持ち主です。

(イ)

彼女は百五十円持つて買物に行きました。お菓子屋さんとでキャンデー五十円、チョコレート四十円それから一個二円の飴玉を七個買いました、さておつりはいくらでしうか？(オマケなんてありません正確に考えて下さい)

先生が凸坊に「千六百二十八円に五百五十九円たせばいくら？」

う錆びてしまつちや妾だつて嫌気がさすわ」
夫「矢張り男の武器は毎晩磨かなくつちやあね」

陳列品十

左甚五郎の張形

妻「なんだか身震いがするわ、本当に生きているよう……でもどうしてこの物だけ太い金のクサリでしぼりつけてあるの？」
案内人「はい、毎日五六本紛失しますのです、之が三十六本目で誰にも盗られないようにこうしてあるのです」
(犯人は誰か？)



と聞くと、凸坊が答えました。「二千百七十七円です」
何故でしうか？

(ハ)

酒も煙草ものまないとても細君孝行な或るサラリーマンの月給日でした。だが矢張り彼は真つ直ぐに家には帰りませんでした。何故でしうか？(勿論競輪競馬なんて彼はどんなものか知りません悪友に誘われても一緒に行きませんでした)

【答は二十九頁】

昨日今日、そして明日とたえまなく移り変わるストリップの動きをとらえて皆様にお知らせするストリップサロン、本日は題しましてストリップ十秒一話ものがたりとゴザアイ。

ストだストだと云うけれど
天の岩戸の昔より
ちやんと日本にやりました
いまさら始めた事じやない

「おい、ストの元祖は天の岩戸へかくれたアマテラスオミミカミだつたな」

「違うよ、アメノウズメノミコトだよ」

「いや俺の云っているのはストライキのことだよ」

「俺の云っているのはストリップのことさ」

ストだストだと云うけれど
きわどい所をかくしてる
アマノイワトのバタフライ
あいつを取らなきや
つまらない

「あら、あたしのバタフライがないわ。妾困つちやつたわ、どうしましよ。」
「アハハ、僕のマスクを貸してあげまじよか？」

検察官「君、あの演出はちよつと行き過ぎじやないかね」
ストリップ劇場の支配人「絶対そんなことはないと思ひますが」
検察官「じゃあ、もう一度あの舞台とところをやつて見せて呉れ。」

何度行つても留守ばかり
おやじの行方をたずねたら
可愛い、坊やは言ひました
「ボクノトウチヤン」
チュトリップ

「あなたッ、今日もまたストリップを見て来たんでしよッ。」
「冗談じやない。一度お前を連れていつてやろうと思つて下検分をして来たんだヨ。」



「お母ちゃん、坊やが妾のお人形を裸にして仕舞つたのよ。」
「なぜ……、そんな悪戯をするんです。」
「デモ、トウチヤンが、イッテタヨ、チュトリップが、リュウコウシテルンダッテ。」

何処かの旦那がこんな歌を唄ひました。
ゼンストばやりの此頃だ
お前も裸でいるがよい
帯も着物も、洋服も

ナンニモ買わずに

若い奥さんも負けずに言ひました「いゝわよッそのかわり、あたしのゼンストを毎日見るんだから入場料を、着物よりも洋服よりも高く取つてあげるから」

「写真一枚、撮らせて下さい」
「あら嫌だワ、だつてあたしこんな汚れた着物ですもの、いま裸体になるから待つて頂戴な。」

「お嫁に貰つて戴くとしても、何しろ貧乏世帯ですの、本当に裸なんですが……。」
「結構ですとも、でもズロースだけは、はいて来て、戴きますように。」

「君、ストの方はうまく話がついて居るだらうね？」
「え、御安心下さい、イザと言ふ時には直ぐに駆けつけて呉れる様に警察に連絡をとつて置きましたから。」
「莫迦なッ、ストリップショーに警察を呼ぶ奴があるか！」

ストだストだと言ひけれど
君の言うのはストライキ
ボクの言うのはストリップ
月給あげろ 足あげろ！

「明日から私達の酒場、不況切抜策として内緒でゼンストをやるのよ、是非来てちよらだいな。」
「俺の会社も明日からやるんだ、賃金値上のゼンストを。」



真夏になりますと此の世が恋しく、殊に若い幽霊氏は慾情して参りますよう、

「あゝ君々、リンドク屋さん」
「ギョッ、旦那おどかしつこなしですぜ、こんな暗い所で、それに古井戸なんか傍にボーツと立つていて、まるで幽霊——」

「ハッハハハ……僕はそのミスター幽霊なんだよ」

「え？ ジョ冗談を……流行の服を着ている貴男が幽霊だなんて……」

「そうかね、生きて居る人間に見えるようじや大丈夫だ、時に今宵われ慾情すつてわけだが、面白い所へ案内してくれないか」
「へえ、ようがす、それで、旦那はどんなタイプの女がお好みなんですか」

「ハスの花のように妖艶なそれでいてフワフワと掴みどころのない、両手を胸の辺りでだらつと下げる癖のある未亡人がいい」



「それじや全く幽霊みたいな女ですな」
「心あたりがあるかね」
「あります幽霊人口の一人なんですがね、御案内しましよ、お乗りになつて下さい」
「いや僕は後へついて行くよ」
「大丈夫ですか、わたしはスピードを出して走りますよ」
「平気だ、空中を飛ぶのが僕の商売だから」
つてわけで、女の部屋へ案内されたミスター幽霊、

「はゝゝ、こりや僕の好きなタイプにびつたりだ、君は何て言うの？」
「あら私？ ゆう子つてのよ、今晩はあなたを寝かさないわよ」
「望むところだし、かし明け方までには帰してくれよ」
「駄目々々、さズボンを脱いで……、私はもう何だかコーフンして来たわ、これこの通り真ッ裸になつてんのよ」
「じゃ電気を消してくれよ」
さて汗の三戦五戦がありまして暁の光がさし込もうとゆう夜明け前、

「僕はもう帰るよ、アハハ、さいなら」
「アレ待つて此の人あつかましいよ、オールナイト三千円頂戴！」
「僕は幽霊だ、おアシが無いよ」



真夏の暑さに、あなたはグンニ
ヤリしていませんか？ 物憂くだ
るく、ひとりで居眠りが出るよ
うな方は艶笑パラダイスを一巡り
して下さい。一服の清涼剤どころ
か三伏の暑熱を吹きとばし、五本
のヒロポンに匹敵しますよ、では
どうぞこちらへ――

エデンの國

アダム「ね、このリンゴ君の頬の
よりだね、この艶々した紅色、
とつても美味しいから食べてみた
まえ、うるわしのわがイヴよ」
イヴ「だつて私リンゴなんていや
よ、バナナの方がいいわ」

飛行塔

夫「どうだい此の乗心地は……身
体が絶えず震動しつゝ、ぐるぐ
廻りながら頂点へ昇つてゆく――
実にいい氣持だね」
すると何を思出したのか妻君



「わたし、夜の方がいいわ」

ブランコ

男「旦那、ムシロを貸しますよ、
一回十分間百円です」
紳士「よし、二回分借りるよ」
男「へえ、毎度ありイ――旦那、
其処へムシロを敷いて寝ころがつ
て下さいよ、エヘヘ、只今丁度娘
さんの番ですから十分楽しんで下
さい」
それはブランコのある風景――



木馬

子供「母ちゃん、父ちゃんがもう
帰ろうつて言つてゐるわ」
母「いゝえ、まだまだ、いゝ子だ
からね」
それから三十分――
夫「おい、いゝ加減に下りないか
いつまで木馬なんかに乗つて揺つ
てるんだ」
妻「だつて、いゝ氣持なんですも



噴水

妻「あなた、こちらへいらつしや
いよ、ね、ほら涼しいでしょ」
夫「池に鯉魚真鯉、おや金魚もま
じつてゐるな、それに噴水か、噴
水つていゝものだ、勢よくチュ
ーッと噴き出て、霧の如く散り乍
ら虹を作る、あゝ氣持がいい」
妻「ボーッと紅い顔して」「アラ
あなたつたら、私思ひ出すわよ」
（はて、何を思ひ出したのでしょ
う？）



登山

彼「夏は登山に限りませんね、平地
では味わえない高山のこの涼風、
あゝ魂も溶けるようなこの快感――
さあ、元氣を出して頂上まで登り
ましょう」
彼女「私もうへたつちやつたわ、
頂上まで押して行つてくれない」
彼「待つてました、オーケー押し



濱の砂遊び

彼女「今度はあなたを砂の中へう
づめますわよ」
彼「えゝ、どうぞ、あゝいゝ氣持
すでな」
彼女「そゝらね、首だけ出して胴
体はあなたそつくりの身体が出来
たわね」
彼「でも、此の砂人形、男だつて
証明出来てないですね」
彼女「アラ、だつて私まだあなた
の知らないんですもの」

海

彼「オーイ、波子さーん、いつま
で海に入つてゐるの――、早くあ
がつておいでよ――」
彼女「だつてエ、あがれないのよ
ウ、困つちやつたわア」
彼「えー？どうしたの？」
彼女「海水着がどつかへいつちや
つたのよウ」



公園

彼女「まあ、この自由公園にはど
うしてこんなに沢さん山羊が飼つ
てあるの？」
園丁「食糧の紙に不自由しないか
らです」



エロエロ賣店

◎豆 一粒百円より
|| 此のママはつまむと指先がぬ
れることあり勿論手洗所の設備
はございます！
◎ソーセイジ 大小種々
|| 大小長短好み次第。大変お
いしいものです。未亡人及び娘
さんには特に好評！
◎桃 十円より
|| 桃太郎さんの生れて来た大き
な桃から一寸法師用の桃まで揃
つています！

變態歌謡曲

キスを召しませ

(薔薇を召しませ)

眠い夜明けのぼんやり夢は
そつと見て来たストリップの
揺れているあの乳房

抱きしめる甘い膚

君よ青春の

甘いキス 甘いキス

召しませキスを

風に散りゆく名もない花も
恋のこころはうれしものよ

親にさえ言えぬ恋

なやましの赤い唇

君よ感激の

赤いキス 赤いキス

召しませキスを

憧れの毛生航路

(憧れのハワイ航路)

禿げた毛よ なるる風

みんな抜けたる頭上悲し

毛生薬を塗つてはみたが

希望消えゆく

なぜ毛が生えぬ

あゝ 憧れの黒髪航路

あるべきに生えぬ毛よ

娘十九の話せぬなやみ

一人風呂場でつくづく見れば

滑り心地の

この快き悲し

あゝ 憧れの毛生航路

大人の涙

(男の涙)

夜の病院 叩いて開けて

大人面子を知り涙

せめて注射で

あゝせめて注射で

痛みを止める

胸も淋しいこの病

旅の留守居に 間男された

哀れ亭主よ 何を泣く

別れ話を

あゝ別れ話を

言われちや困る

妻の稼ぎで食う男



ハテナくらぶ答

(二十六頁ハテナくらぶの答)

① オッパイを連想する人

(好色家、若しくは赤チャン)

オカネを連想する人

(守銭奴、商人、事業家等の性格)

鉛筆の断面図だと思ふ人

(あなたは純真な童心があ

ります)

服の釦のことを考える人

(あなたの性格は、キチヨウメ

ン)

ベル(呼鈴)を連想する人

(あなたは人を訪問するのが好

きですね)

ドーナツを連想する人

(喰いしんぼ)

電灯、電気スタンドの傘

(そんなに気になりますか電気

料金の値上げが！)

車を連想する人

(そんなにあわてないで少し落

着く方がいゝですよ)

② 図の如し、豚が頭だけ後を向い

たところ、何も全体を後向

きにして下さいとは言つていま

せんからね。



③ 六本のマッチ棒を揃えて頭を梅

の花の如く合わせるのです。真
中の一本を逆にしておくと一層
梅の花に見えるでしょう。
④ 二香で即詰、たゞし香車は玉
の横腹へ横向きに置くこと。始
めからとんち問題だと言つてあ
るじやアないですか。

漫才

觸る宗教

○ エントツ
△ アチヤラ

○ 「やあ君、暫く見なかつたが病
氣だつたの？」
△ 「いや、此の頃
凝つて、いるん

ね」
○ 「あゝ肩が」
△ 「違うよ、シユ

ウキヨウにだ」
○ 「あれはいゝで
すな、若人の力を

誇り、スポーツの
華」
△ 「それは蹴球、
僕のは宗教だ」

○ 「あゝあの模様
との同性愛か」
△ 「いやだね君の
言い方は」

○ 「それで君は何
教？」
△ 「触る宗教なんだ」

○ 「金ヅルにでも触るんか」
△ 「むちむちと張りきつた女体、
希望の双つの丘、その丘越えて憧
れのジャングル」



⑤ イーおつりは六円です。
ロハ坊が間違えたのです。
ハハ遠い所なら乗物にも乗らね
ばなりません。いくら近い会
社でも曲り角ぐらいあります
からね、定規を当てた様に真
つ直ぐに帰れるものですか。

○ 「木立に囲まれた生命の神秘境
あふるゝ泉の清らかさ」
△ 「その通りだよ、そこへ触るの
がわが宗教の真髄である」

○ 「ホほんとに、僕も信徒にして
くれ」
△ 「駄目だね、君のように五体完
全なる者は」

○ 「え、どう
して？」
△ 「先づ盲人
であることを
第一の資格と
する」

○ 「君だつて
完全じやない
か」
△ 「黒眼鏡を
かけてごまか
すんだ」

○ 「それじや
まるで盲人マ
ッサージ師じ
やないか」
△ 「早く言え

ばそのものズバリだ」
○ 「触り心地はどうだい？」
△ 「まるでつきたての餅だね」

○ 「君の奥さんと同じだね」
△ 「いや有難う、女房も僕は餅の
ようだからね」

○ 「触り心地はどうだい？」
△ 「まるでつきたての餅だね」

○ 「君の奥さんと同じだね」
△ 「いや有難う、女房も僕は餅の
ようだからね」

○ 「触り心地はどうだい？」
△ 「まるでつきたての餅だね」

○ 「君の奥さんと同じだね」
△ 「いや有難う、女房も僕は餅の
ようだからね」

譚奇滑稽珍聞

昭和二十六年十月一日
奇譚滑稽新聞社発行
編集人エロニヤ人生同人

獵奇！美女殺人事件か？

怪トラックから投げ出された裸女

深夜銀座街頭の怪事件！

昨夜十二時頃銀座四丁目警邏隊詰所へ蒼白になつて駆け込んだ青年が裸の女がバラバラに切断されて死んでいますと急報したので直ちに警官数名が現場の銀座路へ駆けつけましたところ、奇怪にもそれらしき死体も見えないので青年に聞き及ぶたが確かに死体を見たとの話なので、附近の人達にたずねると次の如き怪しい事実が判明した。

それによると同時刻尾張町方面より疾走して来た怪トラックが現場附近に来た時車上より一縷まとわぬ素つ裸の美女が投げ出されたが、手足は切断されたものらしく路上に落ちるとバラバラになつて散乱した、附近を通り合わせた人達が驚いて立止まつている

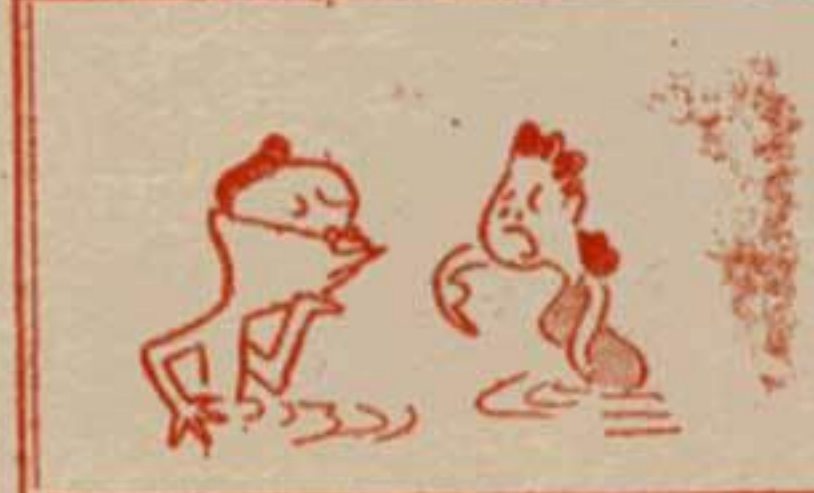
間に怪トラックは一応停車して二三人の男が散乱した無惨な死体をトラックにもう一度積み込みいづれかへ逃走したとの話であつた。

警視廳都内に非常警戒！！

トラックの番号は一〇五六四と判明

事件発生後十五分にして直ちに全都に非常警戒が行われたが其の後の聞き込みにより怪トラックの番号は一〇五六

愛異浴海水



怪トラックの主判明す

意外な終末！

本社では事件と見るや時を移さず敏腕記者を八方に派し怪トラック一〇五六四号の所有主を探したところ左の如き意外な事実が判つた。

該トラックは都内某百貨店所有のもので明日より開催される全日本洋裁展の準備の為に深夜まで使用されていて、展覧会用のマネキン人形の出来上りが遅れた為夜更に運搬していたものだつた。

之につき支配人は語る人形の製作が大変遅れていてましてね、あまり急いだのと運搬人が新米だつた為とで銀座で落して壊してしまひましてね、今それについて小言を云つていたところですよ。殺人事件なんてとんでもないことですよエヘヘ……

以上で遂に裸女バラバラ事件は幕となつた訳である。

全日本洋裁展

丸桃百貨店で開催

全国洋裁連盟主催の洋裁展は明日より十日間丸桃百貨店九階催場で開かれる。

尚連盟が本年度の最優秀作としてデザイン最高賞を贈つた流行服は現今までの洋装の型を破つたもので、それは只十種位の三角の布を肉体の一部につけるだけである。

大長篇小説

深夜の愛慾

田村奉二郎
岩田専十郎画

寝静まつた深夜の都会の通りもない饒跡を彼女は恋しい彼に逢いたさに恐しさも忘れて歩いていた。

突然暗闇の中から飛び出した黒い影が彼女の背後から物も言わずに組み付いてきた。彼女は恐怖に声も出なかつた。柔軟な肉体は暴漢の荒々しい呼吸の下で必死にもがき二本の脚は宙を跳つたがたゞその空しい抵抗は暴漢の獸慾に油をそそぐだけなのだ。



彼女は最後の力を振りしぼつて声を限りに彼の名を呼んだ。だがその声はむなしく饒跡の闇に消えて行くばかりであつた。暴漢に抱きすくめられたまま、彼女の肉体は絶望を感じてふるえた――深夜の饒跡に演じられる猫の恋である。

オナニ

靴 クリーム



滑稽珍聞案内

八十人以上の男に犯された美しき処女を求め給五万円上の方ルボ作家二

ノミ 南京虫シラミ蚊高価買受一四百円迄血液を多く吸つたもの歓迎血液銀行

求職 専卒長年事務経験有デモヤリマス元職安所長

ホタル 売リマス電灯節約注文に込ズ 最雪堂KK

女 へん在車豊裕安品高来店ヲ乞フ 特殊喫茶業所

眼 肉タイ人ハ来レ素敵ナ見ラレマス一回千円三助組合

自殺 シタキ未亡人來レ何スベツトノ上デ 独身俱樂部

ズ ロス腰巻中古品買入報参上新品交換歡迎 変態男

始末書を入れた巡査

腰巻の間から風俗壊亂?

九月一日午前七時頃牛込区早稲田鶴巻町四十七番地建築請負業山田徳太郎方裏手の井戸端を指さして、頻りにゲラ／＼と笑い崩れている三人の中学生があつた。折しも其処を通りかゝつた早稲田分署の鑑田巡査が中学生の後方へ歩み寄り何気なしに其視線の行方へ目を注ぐと山田の内縁の妻かね子さん(三五)が井戸端へ出て洗濯して居るのだが着ている着物が余り短いのでチラチラと赤いものが見え上り、あまつさえとんでもない場所まで開陳しているの、独身の鑑田巡査もハツと驚き直ちに同女を拘引して風俗壊亂の下に罰金一円に処した。同女は自分のナニをナニした

滑稽賣物節

○此方の隣の馬鹿者に蚊帳を売りにやつたれば、売名を忘れて、蚊帳の布を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に「ハモ」を売りにやつたれば、売名を忘れて、蛇に似た魚を買わしやんせんかいな、ヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に靴を売りにやつたれば、売名を忘れて、皮の下駄を買わしやんせんかいな、ヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に新聞売りにやつたれば、売名を忘れて、南京豆の袋紙を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に鶏卵を売りにやつたれば、売名を忘れて、ヒヨッコの巣を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に小楊枝を売りにやつたれば、売名を忘れて、小人島の材木を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に鶏卵を売りにやつたれば、売名を忘れて、ヒヨッコの巣を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に鶏卵を売りにやつたれば、売名を忘れて、ヒヨッコの巣を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

○其又隣の馬鹿者に鶏卵を売りにやつたれば、売名を忘れて、ヒヨッコの巣を買わしやんせんかいなヤレコラサ、ドッコイシヨ

古代人の性体位の研究?

腿塚村の洞穴より

白骨を發見す

東京停大古代史研究室では先月中旬より古代縄文文化の遺跡と見られる腿塚地方の洞穴を調査していたが洞穴内の土中より古代人のものと思われる白骨二体分を掘り出した。二体の白骨は骨盤骨格等より見て男性と女性のものらしく、発掘時に於ける白骨の体位は互に抱き合い或る種の行為を行つていた事を如実に語る恰好であつた。

考古学上珍しい参考品だと研究室では語つてゐるが白骨の調査が終つていないので年代等は今のところ不明である。あれはウソじや

真相を語る村の古老

腿塚村の古老は之につき次の如く語り本社記者を呆れさせた。

「あの穴は僕等の若い時に石炭を掘つた穴でな、使わなくなつてからよく僕等の友達が村の娘を引っぱり込んだものじや、二十年程前に落盤があ

かね子さんに対して罰金一円也を返して内済にして呉れと始末書を一冊入れたと言ふ。但し之は明治四十三年十月十五日東京新聞紙上に書かれてあつた記事である。

よろづこんさると

○女性と話をする近道はありませんか?(気の弱い男)

●電話をおかけなさい、交換手はたいがい女性ですから。

○世界中で一番の馬鹿は誰でしょうか(賢い青年)

●まずそんな事を訊く人でしょうな。

○私は未亡人ですがどの指に指輪をはめるべきでしょうか(悩める未亡人)

●左の無名指にはめて下さい。エンゲージ、リングを。

○結婚して三年たちました。所謂ケンタイ期なんです。何か新鮮な刺激を教えてください(或る良夫)

●一度別れなさい、そしてもう一度結婚するのです、するとまた三年は持ちます。

○金を一文も使わないで面白い観ものはありませんか(けちん坊)

●夢

○私はAと云う美青年に求婚されてはいますが、許婚者のBも嫌いではありません、会社のOさんとホテルへ行つた事もあり今のところCさんと別れる気持はありません、ところが最近になつて課長のD氏が私に求愛して来られました。私もD氏を好ましく思つてゐるのですがそれを知つたボーイフレンドのEが会社の金を持ち出して私と一緒に逃げてくれと申します、私はEも好きなのですが一体どうしたら

大もの大會

賞金百万円

一等より五等まで

審査員

チターレイ夫人
阿部定子女士
弓削道鏡博士

主催滑稽珍聞社

岩の部

三日間 絶対お見逃さなう

大坂 OK座

おはれ

絶対に音のせぬ

有名人使用の

「アベ」ベコト 時代が来た

第一景

「あなた、又来たわよッ」
元子さんはコ
ーフンして頬を
真ッ赤にしなが
ら失業中の（い
や此の場合は就
職途中の）夫
三村君に注進で
ある。
「え、又か、今
日はこれで三十
八人目だね、ま
あ、いゝや、一
応面会してみよ
う」
そこで来客は
主人の三村君と
対談することに
なつた。

「初めまして、私は人間生増薬販
売株式会社社長です」
「あゝ、そうですか、それで御要
件は？」
「何卒私の会社へ一つ御無理でも
ございませうが、就職して頂き
たいもので……」
「それで条件は？」
「先ずサラリーは十万円でも二十
万円でもお望み次第と致しまして
奥様には毎日美容院とデパートと
温泉へ行つて頂くだけの御手当を
差上げ、住宅は本宅と別荘を新築
させて頂きます」
「たゞそれだけかね」
「いえ、貴方様には若い娘を何
人でもお世話致します！」

第二景

「次の法案は、税金撤廃法並びに
生活手当支給法であります」
「提案理由を説明致します。我国
過去の男性横暴政府は、人民の血
と汗の結晶である金を税として取
上げ、人民を第五等国並に圧迫し
たのであります。我国の興隆は無
税から、並びに生活手当の支給
から、我が政府は総選挙の公約に
依り、こゝに此の法案を提出する
次第であります」
パチ／＼／＼（満場拍手）
「賛否を問います」
「賛成！」「さんせい」「サンセ
イ！」
「全員賛成に依り本法案を可決致
します！」
（首相は申すに及ばず、全閣僚、
衆、参議員全員が婦人でアル）

第三景

「ごめん下さい」
夫を会社へ送つて、出勤前の甘
いペーゼを思い出しながら、楽し
くリズムミシンを踏んでいた新妻
の玉子さん、玄関の開く音にふと
手を止めて、
（押貸しか知らず？）——注、押売
りにあらず——



不安に思いながらも、

「ハ―イ、誰方？」
「あの、税務署ですが……」
「ギョッ、（今日はどうしても頂
けないわ）」
四五日前に貰つたばかりなのに
又持つて来たのか知ら、と彼女は
恐怖心にかられる。



「主人が留守ですし、まだ此の間
頂いたばかりですから……」
「そんな言訳は聞けません、私達
は法律の使徒ですから、生活手当
税法に依り、どうしても受取つて
貰います。第三期分十三万八千円
ありますから、どうぞ、ハイさよ
うなら！」
部厚い札束を玄関へ置くと、税
務署員は脱兎の如く逃げ去つた。

第四景

宮場前広場近くのボリスボツク
スである。一人の青年が婦人警官
の尋問を受けている。

「あなたはどうして宮場広場を一
人で歩いていたんですか」
「はあ、僕は独身主義者で……」
「独身主義追放令が出ているのを
知らないですか」
「いえ、ですから昨日まで地下
へ潜つていたんですが、ちよつと
外の空気を吸つてみたくなりまし
たので……」

「宮場前広場はアベックでなけれ
ば入れないことになっています」
「えゝ、それも知つていたんです
が、ついフラ／＼と……」

「それがいけません、あそこは男
女両性の精神的並びに肉体的な生
活を行う神聖なところですよ。其処
へ独身者のあなたが入つたとゆう
ことは、公然ワイセツ罪になりま
す。が、此処に一つの恩典があり
ます」
「と言いますと？」
「私は結婚して頂くことです」



第五景

「あなた、御飯まだなの？」
「はい、いたゞ今、どうぞ召上れ」
「まあ、真ッ黒ね、いつまでもあ
なたは御飯がうまく炊けないのね
ッ」
「すみません」
「さあ卵を五つ割つてね」
「はい」
「黄味は全部私が食べますから、
あなたは白味だけ飲みなさい」
——風——
オギャア／＼ツ、ギヤア／＼ツ
「おゝ、よし／＼泣くんじやない
／＼、ベロンベロン」
オギャア／＼、
お父ちゃんはお乳が出ないんだよ

トホ、トホ、夕方には母ちゃんが金
社から帰つてくるからね、おゝい
子だい、子だ、バアバア、あ笑つ
たら一人で遊んでおいで、父ちゃ
んは之から洗濯をするからね」
——夜——
「ウーイ今帰つたよ、ゲーブツ」
「お帰りなさい、ヤイツ、又飲ん
で来やーいしましたね」
「会社のつき合いでね、あなた、
悪く思うことないわよ」
「毎晩々々、一度ドヤシテ——あ
げましようか」
「すまん、之からは氣をつけます
わ、でもこんな晩くまであなたな
にしてたの？」
「お襦袢の修理！」



第六景

駅員「もし／＼あなたは此の電車
に乗つてこられたんでしよ。こ
この利用賃を受取つて下さい」
乗客「今日は一寸荷物が多いいので
又帰りに頂きます」
駅員「いけません。皆がそいつ
て辞退されますが、これは会社
の規則で電車を利用される方々
に利用賃としてお支払いするの
です。是非領収して下さい」
乗客「困りましたな。この調子で
は乗り換える度に財布が重くな
つてー」

トホ、トホ、夕方には母ちゃんが金
社から帰つてくるからね、おゝい
子だい、子だ、バアバア、あ笑つ
たら一人で遊んでおいで、父ちゃ
んは之から洗濯をするからね」
——夜——
「ウーイ今帰つたよ、ゲーブツ」
「お帰りなさい、ヤイツ、又飲ん
で来やーいしましたね」
「会社のつき合いでね、あなた、
悪く思うことないわよ」
「毎晩々々、一度ドヤシテ——あ
げましようか」
「すまん、之からは氣をつけます
わ、でもこんな晩くまであなたな
にしてたの？」
「お襦袢の修理！」

湯の町騒動

爆弾娘行状記

ゆ ま ち そ う ど う



加茂川 清子
え TOSHIYUKI

一行二十八人の大世帯、それが女も男もオッサンも小娘も、洋服の人、着物の人、全く種々雑多な人種が混っている特異な集団。それは一体何でしょう？

私達が伊豆の修善寺温泉へ着いたのは、八月の中旬、お盆を間近に控えた真夏の午後。私達を歓迎してくれたのは、旅館菊屋別館ばかりではなく、町全体、いや、近郷附近の村のネーちゃん、アンちゃん迄が、駅頭に出迎え、入替り立替り、旅館へ押し付けて来るという始末でした。

こうした田舎町では、自分達の知っている映画俳優達が、大量に姿を見せる事によつて、俄然、騒然と沸騰するものなのです。もうお分りですね、京都映画の青春トリオが、秋の大作、石坂洋次郎原作の「青春期」の撮影の為に、こゝへロケーションにやつて来たのです。私も主演女優に抜擢されたので、大いに張り切つて、ロケの一行に加つていました。こゝでは、盆踊りと湯の町情緒を背景にして、受持の先生を慕つて女学生夏子がやつて来る、さゝやかなラヴシーンなどを撮るので、一週間程滞在の予定で。

ゴロゾロツと旅館へ雪崩れ込むと、衣裳や道具やカメラやフィルムなど、大量の荷物を整理する間もなく。

「暑い、早く温泉で汗流さんと、たまらんわ」

と人夫の人達は裸になるし、女優さん達も、早速帯を解いて、あられもない姿。映画ファンの皆様は、女優さんなんてな人種は非常に上品なものと、お考えの方があるかも知れませんが、それこそ、オム、ミス、ティク！

銀幕に映らない場面では、奥にふしだらでデタラメなシーンが、沢山あるのです。

但し、あたしだけは例外ですがね。
「エッちゃん、一緒に温泉へ行こう、一ベ
ンあんなの身体見たいのや」
と、二枚目の伊藤肇さんが、私を誘いま
す。

「嫌やわ、うち、男の人と一緒になんてかな
わん」

「そやけど、温泉入つてるシーン撮る時に
はどうせ裸見られるで、カメラに入る部分
は、お乳の辺から上と後姿だけやけど、拝
観者のレンズには、全身が映るのやさかい
なア、そやさかいエッちゃん、その時の心
臓修練の小手調べに、一ベン俺と入ろう」

強引に勧誘してる傍から、池田良さんが
一枚加つて、又私を誘いました。

「みんなケツタイな助平やなア、そないに
見たいのやつたら見せたげる」

私もシャクに觸つて、手拭を持つて立上
つたら。

「こら、風紀紊乱やぞ、ロケ中は一切淫浴
厳禁する！」

一行の御大、吉村幸三郎監督さんから、
一発ガチンと喰つてしまいました。

小島教諭——池田 良
高野教諭——伊藤 肇

女学生夏子——加茂川清子
秋子——小杉 葉子

小島の姉
芸妓静代——木暮道代

という豪華キャスト。汗を流して、さつ
ぱりした浴衣に着替えて、夕膳に向つた所
で、もう自称ファンどもの来襲、大部分は
うまく撃退したんですが、何でも土地の無
頼漢で相当名のある若僧、竹越三吉とかい
うアンちゃん、とうとう乗込んで来て、
プロマイドにサインしてくれという注文。

折角、ちよいとビールを飲んでやろうと思つたのに、どつかりヘタリ込んで、くどくどと話しかけて来るんです。結局欠伸を生殺しにして、一時間近くも坐られてしまいました。

二

朝の温泉は、長身麗麗の小杉葉子さんと一緒でした。私の本名は樟島恵津子、京都の河原町を荒した不良女学生だった時代からの愛称で、誰もあまり藝名を呼ばず、みんながエツちゃんと言います。そして第二日にして、旅館の女中さん迄が、エツちゃんにしてしまいました。

「エツちゃん、三吉さんからお手紙」

お湯を出ると、女中の加津子さんが、私に色封筒を差し出しました。どうせレディメイドのファンレターだろうと思つて、部屋へ帰つてから封を切つてみると、これは、実にエゲツナイ、煽情的な恋文なんです。読んでるうちに昂奮して、顔が赤くなるような——。今日は撮影第一日。私と小杉さんはセーラー服を着て、沼津の駅と下田街道を走るバスの中、修善寺へ着く三カットを撮つてから、禅利修善寺へ参詣する所を撮りました。

地は峯嶺南北に連り、東西僅かに達磨山から流れ出た桂川の溪谷が貫き、浴槽は此の谿流を挟んで軒を並べ、山水双美の温泉境をなしている——と言ふのが、パンフレットの宣伝文句なんです。修善寺物語の本場だけあつて、仲々情緒に富んでいます。但し、二人でコッソリやつて来たなら、もつといふでしよろけれどね。

修善寺公園で休憩して、皆から離れて、私は有名な夏目漱石の碑を見に行きました。

土地の娘さんが三人程、すぐサインブックを持つて、追つて来ました。

私がボンヤリ碑を見ていると、突然誰かが私の手を握つて来ました。ハッと振り返るとすると、もう一つの手が抱くようにして、私の乳房に触つて来ます。昔の私ならパスツと横面の一つも殴り飛ばしてやる所ですが、今は人気商売の悲しさ、耐えがたきを耐えて、とにかくその嫌らしい触覚から遁れました。

「加茂川さん、朝の手紙読んでくれましたか？」

竹越三吉の赤い舌がヘラヘラ動いています。

「えー」

「お返事頂きますか？」

ニヤけた表情で、又ぐつと私に接近して来ます。朝の手紙の返事というのは、今夜お盆の宵祭だから、一緒に見物がてらに、町を散歩しないか、という用件なのです。「あのオ、実だね、今夜、あたしが温泉へ入つてるシーンや、その他二場面程の撮影がございますので、すみませんけれど……」私は逃げるようにして、皆の休んでる茶店へ戻つて来ました。

三

さてその夜。家族湯の一つに照明がつけれ、カメラが持込まれました。

小島先生を慕つて修善寺へ来た夏子が、先生の姉が藝妓であることに失望し、悶情を抱いて温泉の中で涙を流しシーンの撮影です。

夢を碎かれた乙女心の淋しさに、自ら悶え慰めながら、爪を噛んで、天然岩の浴槽へ降りて来た夏子が、そろつと浴衣を脱いで、温泉に浸り、湯の面に月を映して

先生、先生——

と眩きながら、月影を碎き、流れ落ちる涙を、金波と散つた湯でそつと洗うという所を、カメラの異動だけで、ワンカットで描く非常に難しい、しかも性格表現の多い、一番大切な場面なのです。

本番にかゝるまでは、シユミイズを脱ぐとズロオスは穿いたまゝで、お湯に入ります。どうもケツタイな具合ですが、本番では、やはり早乙女の羞恥の表情も出さねばなりませんので、全部脱げという指示なのです。その代り、旅館の旅客も、不要な人達も、全部立入禁止で、監督さんとカメラとライトと、私の四人だけという事になりました。

折角アテにしたお客様方には、本当にお生憎様です。その代り、奇譚クラブの読者には、その撮影シーン、これからお話し致しますわ。

拍手木みたいなのがカチンと鳴ると、いよいよ本番の撮影開始。

私は渡り廊下を降りて、岩屋風呂へ来ると、その平らな岩場の上で浴衣を脱ぎます。その間、千々に乱れた乙女心を抱きながら、心の動揺を表情だけで表現します。

カメラは真正面から斜めに移動しながら、私の全身を映しています。そこでいよいよ私がシユミイズに手をかけ、肩を外すあたりで、今度は斜後に移り、肌膚を脱いだ所では、乳房の膨起が少し画面に入りますがやがてカメラは後へ廻り、ちよつと囁む恰好で、ズロオスを取つた時には、裸身の後から上半身より映りません。

そこでカメラが先廻りして、岩層温泉と湯煙を映し、私が身体を洗めるのは、波紋

だけで描いて、浸つてしまつてから、再び真正面から私を映します。腰を下して足を投出し、お乳のすぐ上までお湯で隠すのですが、何しろ波紋を消して、月を映さねばなりませんので、お湯が静かになると、魚眼レンズを通したような具合で、よくは分りませんが、胸の隆起は画面に入ります。それに、私はチャタレーの森が濃いので、お湯を透して、それ迄画面に出ないかと心配になりました。所がそのお蔭で、羞恥が非常にうまく出来たと、後で監督さんに褒められました。

「たとえ元藝妓であつても、それは悪い事でも賤しい事でもないわ。でもその人が、私の好きな先生のお姉さんだから、たゞ何となく淋しいのよ、先生、先生……夏子はバカな子ねえ、そんな事で泣いてしまつたりして……」

それだけの科白で、湯に浮んだ月を掻き乱します。これは後で特殊技術で、月が木暮さんの顔になるんです。カメラが私から離れて、乱れた金波銀波に移ると、その間に急いで眼薬をさし、再び、先生先生……私の表情の大写しになると、キュツと臉を閉じます。そこでハハラと眼薬の涙が頬を伝うのです。

これを映画館で御覧になると、実に愁然たる気分を誘ひ、本物を絞り出させようというんですから、いやはや全く、えらいスナマヘンドス、何しろ超大作ですさかい。そこでカメラが止つて撮影終了。こんな場面、何度も撮り直されたんではたまりません、が、先づ大成功でした。

「まあゆつくり浸つて、御苦労はんやつた」と監督さんは去つて行きましたが、私も



私は平らかな岩場の上
て浴衣を脱ぎ、カメ
ラは真正面から斜めに
私の全身を映していま
す。

と、お湯の中を覗き込
みながら、話してくるの
です。本当に嫌な奴！
助監督さんなどが、止
めるのも聞かず、二三人
を押倒して、強引にやつ
て来たのだそうです。そ
の後から若い衆が四五人
やつて来て、又さかんに
口論を始め、退場してく
れと揉み合いました。
喧嘩はかまへんけど、
こつちはお湯から出られ
へんし、今にもノボセ上
つて、鼻血が出そう。早
うあつちへ行つてほしい
わア

四

第三日は、大山咋命を
祀る御社日枝神社の祭礼
神輿が出、ダンジリが出
て、笛や太鼓で町は賑い
ました。

その祭礼を背景にして
今日はカメラの大活躍で
すが、私は殆ど出演しな
いので、旅館でよく冷え

たビールを頂き、さば寿司を逆戻りする程
タラフク食べて、涼風の縁から、溪流を渡
る多彩な祭礼を見物してればいゝので、甚
だ結構なお祭です。

旅館の番頭さんは囃子太鼓の名手で、櫓
へ太鼓を打ちに行つて、とても上気嫌です
明日の夜は境内で盆踊りがあるそうです。
私もお祭気分になつて、神社の方へ行つ

てみました。氷菓子、バチバチ、金魚売り
いろんな商売が雑然と交錯し、晴着の娘や
漬ツタレ小僧が、下手なお神楽のヒュード
ンに見とれたり、鉄砲射ちに夢中になつた
りしています。

三吉は鎮守の森で、打上げ花火の点火役
をやつていましたし、三吉の乾分達は、花
火を売つたり、街頭香具師をしたりしてい
ます。又笛篳篥と十六弦の雅楽が奏でられ
て、五年樽の梅干みみたいな顔の巫女が、櫓
を振つて徐ろに舞い始めました。私も射的
屋の傍からそれを見てみると、後から軽く
肩を叩いて来るもの、振り返ると小杉葉子さ
んでした。

「何見てんの、ア臭い、お酒飲んでんのね」
「ビール三本——あゝえゝ気持やわア」
「恐るべき御嬢さんね、それでもまア、ア
イスキャンデーの箸までしやぶつてゐるのよ
りは有すべきやわ」

二人は雑沓を避けて、緑濃い森の小徑へ
入つて行きました。遠くに馬鹿囃子を聞き
ながし、静かなアロムナードをそぞろ歩く
のは、感傷やロマンを越えた、何かとても
快よい清涼剤です。

と——バラバラツと木蔭から躍り出して
来た三人の男。辻強盗でもなさそうだが、
私らを取巻いて来たので身構えろと。

「兄貴が呼んでるんだ。一寸そこまでつき
合つてくれ」

頬に傷のあるのが言います。さては三吉
の一味が腕力に訴えて、私を籠絡して来た
んだなと感付きました。葉子さんは青くな
つて、ちぎみ上つてしまいましたが、私は
重なる鬱憤に、今日こそは往年の口紅女学
生に還つて、一つ暴れてやろうと、決戦態
勢を整えていました。

汗を拭いて、何の気なしに立上り、露天温
泉から出ました、そのトタンに、カメラが
カラカラと鳴り出したのです。カメラ主任
が悪戯して、何駒かのフィルムに、私の本
当の裸体を写してしまつたんです。

「嫌ア、馬鹿！」

私は思わず赤くなつて、温泉へ飛込めと
カメラの方へバチヤ——お湯を浴せてやり

ました。

所がその時、ガヤ／＼人の足音がして、
誰かが此所へ降りて来ます。私はノボセそ
うなのを我慢して、お湯の中で縮こまりま
した。それはあの三吉だつたのです。

「ヤア、もう撮影は終つたんですか、是非
拝見したいと思つて来たんですが、ヘンな
野郎達が邪魔をするもんだから」

果せるかな、一人の若いのが、強引に袖を引いて来ました、其奴を軽く引外すと、その間に葉子さんは、森の方へ駆けました「加茂川さん、大人しくついて来ないと、痛い目にあいますぜ」

と後から羽がい絞めに組んで、お乳をいじくつて来る奴を逆に手首を引いて、斜から引掛けた大外刈りが見事に決つて、ブーンと腰車で一廻転。ギョツと潰させた所は女三四郎の貫録充分です。

「唯の女だと思つて見くびると、ちよいと訳が違ふんだからね」

と、鉄火口調でチョイと凄んでから、傷の男の脾腹へ一撃、うーんと鳩入を押えた所を左にはたいて、雨蛙を踏み潰したような恰好で、地面の泥を食わせてやると、もう一人の若いのが、呆氣に取られてもう逃腰、私がグンと近付いて行くと、そのまゝ森の中へ駆け込んでしまいました。

「さ、行きましよ」

私は吃驚して葉子さんの手を引いて、急いで森を出ました。本当は、私もちよつと怖かつたんです。

所が、その武勇伝まではよかつたんですが、それが動機で、状勢は急に悪化しました。つまり三吉一味は、面子にかゝるとばかりに、愛情を怨みに代えて、本格的に挑戦して来たのです。

その夜、打上花火を、旅館の私達の部屋へ向つて放ちました、丁度夕食後、男の人達はお酒に酔つて、そろそろ恒例の狼談会が始まり出した時、火箭が障子を破つて飛び込み、ドカッと万華の火花を散らして、大音響と共にそこで炸裂したのです。

キヤーツ！

と、胆を潰されたのは確かに事実で、み

んな爆煙の中に飛上り、すわ原爆攻撃かと思ふ彼も、暫くは顔色もありませんでした

それが更にその次の日には、撮影している所へ投石したり、或は大音響を立てたりして、仕事を妨害して来るんです。そもその事の起りは私なんですから、私は大いに責任を感じて、監督さんに謝つたのです

「えゝよ、えゝよ、何も悪い事したんやあらへん。君の方が正しかつたんや、とにかく早う仕事だけ済まして、引揚げる事やなア」

と慰めて下さるんです。しかし私の癪氣性は、そんな生温い事では承知出来ないんです。

それに、湯の町の雨のシーンが必要なので、雨が降る日まで、とにかく滞在しなければなりません。尻尾を巻いて返散するくらいなら、たとえ敗れても、堂々と大決戦を挑んでやります。

所がその夜は、どうしても、年に一度の盆踊りのシーンを、撮影しなければなりません。こゝの盆踊りは、空には打上花火が開き、地上ではドンパンや爆竹や、いろいろの花火を点火して、まるで支那の正月みたい賑やかに、夜を徹して花火を競うのです。所がその花火の総管理者が三吉であり、踊りの櫓は、囃子も唄も三吉の輩下の者に独占されてしまします。だから、三吉の息がかゝらない事には、全然盆踊りには手も足も出せないのです。

そこでその御氣取に、特命全權大使として、私が選ばれたのです。昨日の乱暴を詫ひる旁々、お酒を三本持つて、是非今夜の踊りを撮影させてくれと、頼みに行くのです。それは全く熱誠断腸の事ですが、

私には一つの計画があつたので、黙つてその役を受けました。

果して三吉の態度は急に変わり、クソ叩きに私を欲待して、とても上気嫌でした。その心の間隙と油断を把握して、私達を信じしてくれさえすれば、それで第一階段は成功なのです。旅館へ帰つて、その事を監督さんに報告すると、とても喜んでくれました。夜の準備もあるので、一日の汗を流しにすぐ岩屋温泉へ降りて行くと、池田さんや伊藤さんが入つて来ました。もう裸になつてお湯に入つてしまつた後なので、逃げ出すわけにも行かず、モジモジしていると、男の人つて、随分心臓ね、平気で私と一緒に入つて来るんです。そして、肩を流してやろうとか、何とかかんとか言つて、とうとう私の裸をすつかり見られてしまいました。だつて、手拭を取上げて、手と足を持つて、無理矢理に岩場へ引上げたりするんですもの。

そして池田さんは、マジメくさつて、まるで詩人みたいに、こんな事を言いました「女の肉体は、さながら一枚の生きている地形図だ。双つの丘陵がある。平野がある。谿谷がある。そして疎林がある。滾々として湧き出す泉もある——」

「いやエツちゃん疎林じゃない、ジャングルや」

「嫌らしい人。風紀紊乱やわ、後で監督さんに言いつけてやるから」

「ちよつとくらい叱られるより、エツちゃんの身体拝ましてもろうた方が、余ッ程隨喜の涙がこぼれる。その円い乳房をじつと見てると、遠い幼い日へのノスタルジアが湧いて来るね、乳房は情感を堪えた美しい丘や」

「エツちゃんの肉体は、春の潮と花の香りに満ちてる。生きたワフロデーや。その乳



房はヘリオトロップの甘さに揺れてる。こんな娘を、こんな具合に抱いたら、えゝ氣持やろなア」

「イヤー！馬鹿！あつち行つて——」

さんざんカラかわれていじめられて、温泉から上ると薄化粧、旅館の揃えの浴衣を着て、夕飯を軽く済ませると、さア鎮守の森へ出発です。

五

今宵は月もない暗夜、大篝火に浮出された大櫓の上には、竹越一味が陣取つて、笛や太鼓で盆踊り唄をやっています。櫓を取巻く花笠と浴衣と仮装の人々は、大きな花の輪を作つて、手拍子揃えて、賑やかに踊っています。今宵こそ、何もかもを忘れて老いも若きも男も女も、踊り疲れて明日の太陽が上るまで、踊つて踊り明かすのです。空には時々打上花火が、五彩の火玉を華と開いて、暗天に華麗な虹を懸けます。踊らない人々は、大型の爆竹や色々の花火を焚いて、或は火箭を飛ばし、青や赤の火玉を走らせ、景氣のいゝ音を立てて、踊りの氣分に拍車をかけます。三台の露天台に一杯花火を載んで売っているのは、昨日私を襲つたあの三人でした。

日没と共に、踊りはいよいよ最高潮、私達もその輪の仲間に入り、カメラは活動を始めました。

「ねえ、あの鎮守の森から花火が飛出したら、それを合図にして、三台のカメラはフルに活躍してよ、きつと素晴らしい特ダネ写真が出来ると思うさかい。一台は森、一台は櫓と踊りの輪、一台は花火屋の露天と人の波に焦点を合せてね」

私は三台のカメラにそう言いつけておい

たのです。

「監督さん。もう撮影済みでした？」

大体必要なシーンの撮影が終つた頃、私は承認を得ると、そつと踊りの輪から姿を消しました。今三吉の奴が一杯氣味で、櫓の上へ登つて行きました。

正に好機到来です！それから間もなく、鎮守の森の中から、神殿の方に向つて、打上げ花火が飛出しました。火元責任者は三吉であり、花火に関する一切の事故は彼の責任になります。そればかりか、こうした愚連仲間、案外信仰心が強く、祭礼中に事故が起ると、何よりも神罰を恐れ、一年間不運が続くという迷信を、とても固く信じているのです。

空に向けられていた管の花火の筒が、発射直前に倒れたのでしよう。森を破つて横向きに走つた巨火は、神殿の傍をかすめて皆が踊っている櫓の方へ向つて来ます。

ワーツと大声をあげて、三吉は仰天しました。火箭は踊りの輪を貫き、そのすぐ先の空地で、ドカーンと大爆発を起して、無数の火の滝が、踊りの群集の上へも降りかゝつて来ました。

人々は悲鳴と叫喚を上げて、櫓の方へ雪崩れて行きました。と、あゝどうした事でしよう。櫓の脚がメリメリと鳴つて、ぐらつと揺れたかと思つと、そのまゝ大音響を立てて、斜に崩れ出したのです。

驚いたのはその上に居た竹越一味、足許からグワラ／＼と大崩壊を起した櫓と一緒に、笛も太鼓も柱にしがみ付いたまゝ、墜落を始めました。

花火屋の三人が、これ又驚いて、親方救援に飛出そうとした時、その前を流れる無数の群集の中から、誰かが何の気なしに投

げたのでしよう。タバコの吸殻がその屋台へ落ちました。

トタンに、山と積まれた花火に次々引火して、煙幕が噴き水雷が走り、大爆発小爆発、ドンドンバチバチ、五彩の花火が屋台を舐め尽しました。誰かが水をかけろとドナると、花火屋の若いのが、頼むから水をかけてくれるなど、手を合しています。いくら火は消えても、花火を濡らされたのは、全然台無しになつちまうからです。しかし、花火の方は益々激しく炸裂を続けて、遂には隣の屋台もその隣のも、三台共爆音と硝煙に包まれて、全く危くつて近寄る事も出来ません。

踊り連中は、折角の楽しみを壊されたと言つて、すぐに櫓を直すように、三吉に喰つてかゝつています。カメラはフルに廻転して、鎮守の森の大騒動を捕えています。三吉がベコベコ謝つていると、その浴衣の



懐の中へ、いつの間に爆竹が飛込んだのでしよう。ポコーンと爆発してしまつたのです。ふところから濃煙と火花を噴出して、三吉は腰を抜かしたまゝ、立上れそうにもありません。

花火の屋台は益々猛烈に炸裂して、殆んどその全部を焼き尽しています。その花火屋のポケットからも、ドンパンが爆発してギヤーツと飛上る始末。

と、今度は鎮守の森から、物凄い大爆発と素敵な五色の閃光が、夜空を赤々と染めて、まるで噴火山のように噴き上つたのです。森に積まれていた花火に、火がついたのでしよう。続いて又一発、轟音と火の滝が、神殿の方にも降り出しました。

遂に町の青年団が非常召集され、消防と警察が出動しました。

又しても森を震撼する大爆発。もう火元責任くらいの騒ぎじゃなく、さすがの三吉

マダム・スゲイルの怪談

夫人

史洋梅

なけなけい

も、全く顔色を失つてしまつていました。
三吉が警察へ連行されると、日頃の専横が激しいから、神罰が当たつたのだと、町の人々は口を揃えて彼を指弾しました。
屋台は全部灰燼に帰し、櫓は崩れて、またその惨状を、森から吠える巨火が照らしています。竹越一家の威信は、全く地に墜ちてしまつたのです。

ニユース映画も及ばないこの特ダネ写真
を、一部新聞社に提供して、その交換条件

(1) 夜の蟲おどる

春には春のコスタイム(衣裳)というが香西清子のような二流の雑誌の婦人記者では、六月から夏にかけての雨季にそなえ、ナイロンのレイン・コートを新調するのがセイゼイである。

に、大々的に報導してもらいます。
一方、シナリオを変更して、この騒擾を映画の中に折込む事にしました。全国の何百万の映画ファンは、この映画の封切られるのを、大きな期待を持っています。本当に秋の超大作として、これは特別興行になる事でしよう、宣伝価値百%、私達も京都へ帰つたら、社長から功労賞が貰える筈なのです。

打上花火の筒に紐をつけて、発射直前に
予定の方向へ引張つて倒し、巨箭を踊りの

ポケットメモのページへ「第三
三月曜日紅屋ストア」とかいたのは、
は、レイン・コートの件のほか一
寸した用事をかねての予定である
探訪原稿の整理や女ばかりの座
談会の記事取り——そんな明けく
れの女にとつて、第三日曜はもつ
とも手のぬけるときだが、そのチ

輪の方へ飛ばせたり、予め櫓の脚を鋸で切
つて、繩を解き、人力で押す事によつて、
倒壊するように仕組んだのは私だけ
ど、花火の屋台へ煙草を投げたり、敵さん
の懷中やポケットへ爆竹をはり込んだり
境内の騒ぎに駆けつけて、留守にあつた後
の、森の打上花火の堆積に火を放つたりし
たのは、まだ誰だか分りません。
全予定を終えて、明日は修善寺温泉とも
お別れです。今日は町長さんと警察署長さ
んが、町のダニ撲滅の功績に対して、感謝

ヤンスをねらつて京阪製紙の門野
周七から誘いの手をさしこまれた
門野は渉外部の係長で清子の女
性春秋社へは単に商売柄の出入り
であるが、二年つきあつてると、
私的感情のムキ出しになるのは当
然、彼は男、こつちが女とすれば
世のさだめみたいなのである。
映画ぐらいなら——とすぐ約束した
場所は、心齋橋の紅屋ストア。

たいな四十男にはそつとした女の動
物臭いゼスチュア(仕草)がくす
ぐつたいような快感となつて体内
につたわる。
一寸腕時計をのぞく。
「今日はえらいめかしてきただ
ネ」
酒の匂いが、これまた動物臭い
反映を女に及ぼす。

子はさつさとWC(便所)へ立つ
排泄物は液体だけなのだが、門野
がWCのドアを二度もふりむくほ
どの時間をついやして彼女は出て
くる。こんどは門野と正面の椅子
へ腰おろす。そしてさも好奇な色
ツぽさで、次のようなことを、コ
フヒをのみ乍らいう。
「いや門野さん……ウチ(私)ア
レ無いのヨ……」
門野はいつしゅん！コフヒの味
も香りもさめたような眼で清子をみ
る。——清子には男がある。軽い
アル中で、飛田の近くのアパート
で寝たり起きたりして、気がむく
とスーラぱり(フランスの画家)
の絵を描く。金儲けの方にも経世
の智にも乏しいが、「情婦マノン」
のミシエル・オークレーに似た
仲々の美男子で、今年二十七にな
る清子より三つも年下だ。去年の
冬。クリスマス晩の晩以来のこれは
「情夫ミシエル」といつたところ
であらう。こいつの子どもができ

状を持つて御礼に見えました。
私は今、本当にのびのびした気持ちで、最
後の温泉情趣を満喫しています。裸の天国
露天風呂の中で、葉子さんと一緒に肉体を
較べながら——
葉子さんも監督さんも、私に向つてこう
言いました。
お転婆娘に栄光あれ！
(終)

十月号に掲載！
續湯の町騒動

怪奇談



たらしいーと云われてナニも眼を丸くしなければならぬ門野周七ではないのだがソレは中年男の猪のような嫉妬にちがいない。

二人は装身具売場へおとりてゆくレイン・コートはすぐ清子の手中にはいる。門野はその包みをいッたん取り返して、女店員に命じ清子のアパートへ送らせることにした。

心斎橋から千日前の方角へつれ立つた。

スバル座の前で清子を持たせ、門野は公衆便所へとびこむ。用をすますと、清子の腕をとつて殊勝に約束のスバル座へ消えた。

席につくと、
「あすこの便所は十年前と同じだな」
「し出ぬけになンなの貴方ー」

スクリーンにはまだ写真が出ていない。

「あゝいう場所にWCはダメだよ大阪はアレを青い樹でかこむ手はないのかネ、イヤどうも恐れいつた、アノ便所の落書にはー」
「イヤな門野さん。ナニをみてらッしたの」

と清子の声は生理的にいちじるしい変化をみせ、指先で、男のヒザをこついた。

「ナニをみたッて説明外だが……」
と言葉を折つたのは、フト紅屋でいつた、「アレが無いのよ」といつた女の言葉をウツカリ思い出したからだろ。彼の眼に妖しげな血色のさしかけたとき、場内は暗くなつた。

「門野さん。ワザワザその落書をみにはいたンじゃないの不潔ネ」

門野は返事もしないで、清子の手をじぶんのヒザの上へよせた。清子はにぎられたまゝ次ぎの指圧電波の色模様を不良少女みたいに空想する。門野は、清子の手のひらを、トントントン、ツートントントン……といった一種のリズムをもたせて叩く。電波送信機の記号をおくるようなくすぐッたい仕事だつた。

清子は今までこういう電波を彼から二度三度うけた。スバル座を出る時間が夜であることを男はチャンと勘定にいれてるから、清子のほうで電信文を解きほぐすのはなンでもないことであつた。なンでもないことであるから、スグ返電をうつた。いつものように、明快に「ノウ」と答えた。

御堂筋に出たのは夜の九時ごろ春らしい卵色の月がおぼろに浮んで、無気味な雲が周囲によりそひてみえた。何人もの毛ぶかい男がひとりの美女をクドいてるような春らしい結構の図である。

「ーこんなこと、悦チャンにわるいけどな、清子さんはもとどおり独りにおなりよ」

門野はライターに火をつけた。「ーそして貴方の書いたストーリーイ通りやれと仰有るの」

「ーま、将来はネ」
「奥さんは？」
「俺のかい。そのまゝでいいじやないか」

「2号さんなの？あたし……」

「という訳でもないが……ある一つの時期だけネ」
「ごめんだわ。ソンの」
「じゃ清子さんは悦チャンの子ども生むの？」
「生みもしないわ。別れもしないわ」

悦チャンというのは岸悦男、むろんアル中の、清子の情夫のことである。

「今のまゝじやーきみの生活は濁るばかりだものなア。よく考えることだよ」

Dデパートの裏だつた。女の生活が濁ることを心配していながらこんな暗闇へくると、男はガラリと變つてしまふ。いまも、そりう場所へ、こッそり足を入れたとみるや、門野は矢庭に清子の顔を力一杯だきしめた。もう酒精はキレている時間だ、それでもマラスキーノの匂いは男の唇にのこつて

いる。それが濡れたような桜の突でつくるーということが、テラと清子のアタマにひらめいた。女が生理的に要求するような匂いをその酒はもつていた。二年のつきあいだつたが

「体だけはー」と清子はそのとうりの意味に生きてきたがー。今、ソレは何度目の接吻だろう。しかし、今夜のような、ホノ甘い酒氣をおびた門野の唇にふれるのは初めていつていい。清子も、手に力をいれた。力のいれる部分が次第々々に移動していつた。

もはや、二人の唇は死んだようになつていた。

「あたし、産まないわ。悦チャンの子どもなんか産まないわ」
「うわづつたような声をあげた。しかし、別れるとは云い切らなかつた。」

(2) 情夫のやかた

雨がふつていた。ここ十日近くも晴天がつづいたので、雨はあたたかも黄色の縞をつくつてゐるかのよう

に眼に映る。
「何時？」
清子はダブル・ベットの殆どをセンリヨウし、肢をひろげて寝て

いる。
「もう厭だぜ」
ミツシエルの悦男は焼いたパンにバターをぬりたくる。風食らしい

アパート「スゲイル・パンション」。なんのことはない、経営主が密漁船でもうけ、それでこの高級とも下級ともつかないアパートを造りその名を「鱈館」(スゲイル・パンション)と名づけたまでのことー。

「ここではあたしも、一寸とした夫人わえ」
と清子が口ぐせにはこるのも、その圧倒するような肉体と美貌をもつてゐるからだろ。だれも「女性春秋」の女記者とはおもつていない。夜の帰館がおそいのでダンサーかバー勤めの女ぐらにおもつてゐるのだろ。

「ネエチャンの愛が、少しがチヨイと目につきすぎた。用心しなヨ。市民病院の坂アタリに、あすこでネエチャンを見たんだつて」

悦男は情婦の清子を、ネエチャンと呼んでゐる。このアパートでもソレが一種の愛嬌になつて悦男をみかけて、アヲチヨットネエチャンなどとからかつて呼ぶバア勤めの女なんかい。彼は別に意に解しない。年上の女でもあるし、そんな氣もするから、他所々しく生活してゐた時代からの呼名をつかつてゐる。ソレでも

「子どもができや……ネエチャンは返上するよ」と白状してゐる。

「女性春秋」へ挿画をもちこんでゐたところからのネエチャンだと云えば、門野周七にとつて恋がたきである。息子みたいな氣のする青二才に、清子をかッさらわれた恨みを、悦男はしらぬ筈はない、男がいつたん女への欲望を果してしまふと、対岸で火をもやしてゐる色がたきの恨みや悩みなど問題なしになつてしまふ。

だらしない恰好、男用のガウンをきこんだまゝ清子は円卓の前へ腰かけた。

「雨だぜ。今日はおやすみヨ、ネエチャン」

「夕方と晩と、二ヶ所の探訪があるわ。本社のほうはサボつていいけどね」

「ネエチャンが裸を描かせる氣なら、僕あそんで食べさせてあげる

ヨ」
「大したミエね。そんなことできるの？チヨイ・アルの悦ちゃんに」

チヨイ・アルとは初期アル中のことだろう。悦男は、清子のガウンの裾をベツとめくりあげた。白い部分がムキ出しになつた。ヌムヌと光つてゐるようなヒフである

「イヤな悦ナヤン。真ッ風聞——」
「顔を外すから描かせてヨ」
「どうするツて？」

「からだだけ絵にすればいいんだ」
「顔は体から外れて？バカネあんたア——あたしの体二人とないのよ。スグバレるわ。太腿部曲美……なんかのアメリカの本よんだのよ。人相書きでソウメン（捕縄）くえなかつた稀代の女盗が、肉体が特別によかつたものだからソノ体相書きとかでスグあがつたんだつて……だからあたしのヌードなんか、すぐバレちゃうじやないの」

悦男は少しひるむ眼をした。真剣にバレットをもつたことが近頃でない。和酒より洋酒につよい彼も、またこの道の毒を浴びた青年で少からず異常の性格をおびてゐる。夜！アレの場合、清子の手がふれなければどうにも役をなさないときがある。「意氣地なしネ悦ちゃん幾つ？」と切口上に出られると、悦男は眼にいッぱいの涙をためる、そしてぐッしより汗ばむ。

「晴れたら茶臼山の植林地へ行こうかな」

窓に立つて彼は呟く。
彼が半日とてもはいやいでいるかとおもうと残り半日は死人みたいにうツとしいという性格からみて、彼のベツト近くに立てかけてあるカンバスの黒と白の女像画はいかにもこの男の両面をみるようで面白い。それだけでなく、悦男がしつこく云うヌードのモデルを拒みながら、淡い快感を彼女自身味わつてゐる。

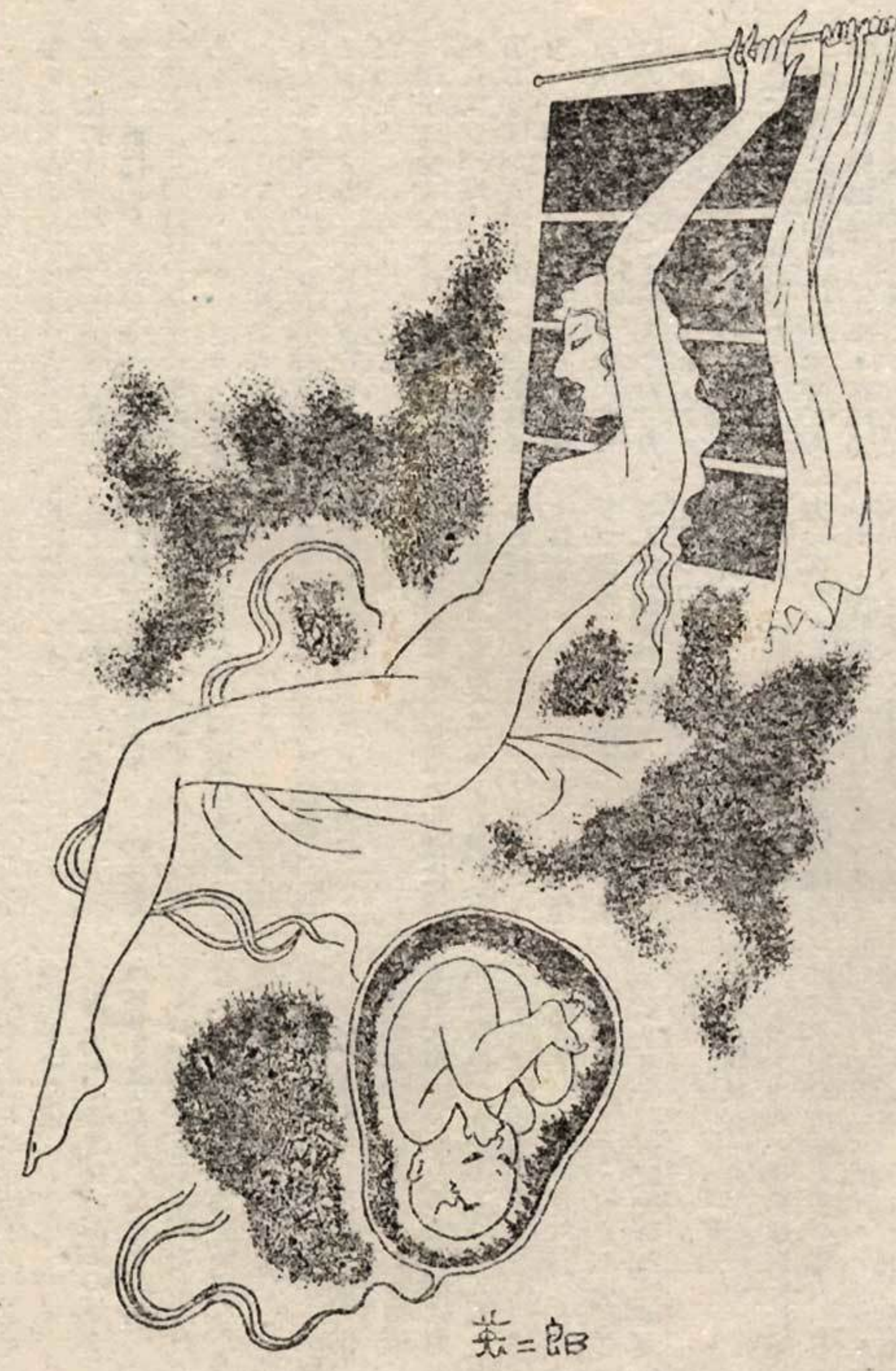
清子が紅屋——スバル座——大丸裏

「バア・ヒンバルナツスと門野清七と歩きまわつてから十日すぎた。今日の雨——清子は三面鏡のヒキダシから赤表紙のノオトをくり出した。夕方は社用探訪でデザイナーのK女史を訪問するのだがそのあとの夜間のものは、門野に紹介された女医の香々見を私用でコッソリ訪ねてゆくのである。夜までふれば偉いな雨かもしれない

悦男は股間のくぼみに黒いひかつた眼をおとし乍ら、
「僕ゆるべおそくネ、北歐怪談という本をよんだんだけど、妊娠してゐる女がさ、亭主にかくれてよその男とキスしたら、ミツクチ（鬼唇）の子どもが産れるんだつて……その挿画がまたスゴイ……ホントに僕怕かつたナ……」
清子はギクリとした。痛いところをツネられたほどのショックをうけた。——門野にはあゝいつたもの、彼女のからだは二ヶ月なのである。

灯頃になつて雨はスツカリあがつた。清子は悦男とつれだつて山王町の通りへ流れた。

「今頃から植林地へもゆけないで



英二郎

しよ」

「ネエチャンはバカだナ。ジャンジャン町の灯がみえてるのに——」

「お酒はドをきめてネ」

「飲みやしないヨ。今夜はストリッブ・ファイナルへいけこむとしよか」

手をあげて、アベノ・ホテルの角でわかれた。清子はまもなく上町線の乗場にたつた。プランをズリ上げて、すぐ神ノ木の香々見女医を訪ねるつもりである。青い電車は、ラッシュアワーのせいで混んでいた。——何気ないときフツと今わかれたばかりの悦男をおもいうかべた。北歐怪談というのはアノ男のデタラメではないのか、或いは何もかも承知のうえの、彼の皮肉な言葉ではないのかと思いをめぐらし、胸をおさえた。いつにない悪感(おんかん)がした。

(3) 怪死報

悦男の変死をきいたのは翌朝だった。死体は天王寺公園音楽堂の裏側のしげみにあつて最初清掃人夫によつて発見された——という薬品はアヒサン。酸化物の一種なのである。——死んで十時間を経ているというから、自殺したのは前夜の十時半ごろと推定がつく。彼がストリッブ・ショウをみたとすれば、A劇場がバレー少時間後の出来事であろう。それにしても死ぬる——というような理由を、清子は見出せなかつた。ストリッ

ブをみてから——そんなことは直更想像もできぬことである。しかし、悦男が死体となつたからには理由はともあれ事実は歴然としてクローズ・アツプされている。……悦男がアヒサンをのんだ時間。その時間に、清子は香々見女医のところに行った。これは偶然ではないしかし、この時間に悦男が毒死しているということは由々しき偶然である。遺書はない。それらしい手記も部屋にはのこつていない。それだけに、彼が語つた。「妊婦が夫にかくれて他の男と接吻したら……鬼唇の胎児が出てくる」という話はききずてならぬ性質をおびてきた。

何もかも知りつくして、悩んだ揚句、彼は死んだのだらうか。泣くにも泣けなかつた。清子は年若い夫の死と同時に、怖るべき秘密を重ねなければならなかつた。清子は悦男の子でない子をやどして

いた。むろん、香々見女医を紹介してくれた門野周七の子でないことも明らかである。死人に口なし——の現在、どうやらその秘密は隠しておえそうだが、悦男が死んだその時間に、彼女は墮胎手術の相談をもちこんでいた。清子は肺シンジユンで産むにたえない——という確かな理由はもつていたが、方便になりかねないだらう。そしてそれは絶対秘密にはできぬ危険性すらおびていた。

新聞はこの事件をさも邪魔臭そうに小さく取扱つた。原因は病苦となつていた。——清子はこの日から胎内の子どもを産む気もちに変つていた。

門野周七がハイヤーに乗つて夜おそく清子を訪ねたのは、悦男が自殺して十日目だつた。清子はズツと勤めをやすんでいた。

暗い小旅行をしたあとの寂しい気もちの中で、門野を迎えたのだが、極力自制して、かれの腕をほらい乍らいつた。

「あたし墮胎を……考えなおしてみます……」

「……え？あんな非道人の子供を産む？……」

女医を紹介するまえに、苦境を告白されて事情をしつて門野周七は、冷徹な白い歯をムキ出して唸るようにいつた。

「あの人とはもう何くわぬ顔つきで、一度だけ、一度だけあたしのところへ帰るでしよ。悦男が死んでしまつたんですもの……」

「清子さんもイヤに感傷的になつたもんだネ——ま、サントリイでもついでくれませんか。ややこしい話だが、悦男の思い出や、あんなに捨てていつた男の噂でもゆつくり聞かせてもらいましよ……」

「門野さん……今夜はダメ。ね、帰つてちようだい。お酒のあと、きツと、どちらかが崩れてしまつてしよ。……だから。今夜は、これでお別れしましよ」

きかずに門野は腰かけている女へ、骨ぐみのたけだけしい体をおツかぶせていつた。男はすでに酒をほしている。酒をのんだ男の体重はこりも重いものか、とおもつた一しゆん椅子もろとも、うしろへ重なつて転げた。

「うツ、うツうツ」

何か呻きながら、門野の左手は清子のムツチリした下アゴを押しあげ、右手はけんめいにスカート

をまくりあげようともがいた。

清子は、別人のように抵抗したフト手にふれた花壺が、したゝかの氣勢と打力で、門野の横びんにとんだ。わツと叫んで門野は尻モチをついた。手が放れた。突差に清子は立ち上つた。そして、はずれたスカートのボタンをはめた「一体——だれに、女をたてるんだネ？」

それに答えるような、いまの清子ではなかつた。

門野が出ていつたあとで、清子は悦男がもらした「北歐怪談」の一冊を取り出した。悦男のアノ鬼唇の話はドイツの古い伝説である

本の裏に岸洋治とサインがあつた洋治は悦男を弟とする双生児だつた。

アパートの人々すら気づかない三人の共同生活を始めたのは去年のクリスマス夜の夜。それは、清子

が悦男と夫婦関係をむすんだ第一夜にあたる。洋治とは悦男のことか？そうではない。

洋治は悦男が自殺する三日前に失踪してしまつてゐる。清子との不義(ヘトラブル)に責任をかんじたのか。動機はともあれ、結果はヤツぱり清子をすてたことになる。

やがて弟の不慮の死は洋治にもしられることだ——清子が、あの人

は帰つてくるというのには、兄弟愛をさしていることばなのだらうしめやかな、この二階の7号室は

やがてまた紫煙と、男女の嬌声で渦巻くのではあるまいか。

たゞ清子の心に、云いようもない二つの黒い影がかぶさつてゐるのは事実だらう。

兄と弟。二つの影だ。洋治が家を出しても、悦男は兄のことを口にしたことがない。清子から云出せば却つて不機嫌だつた。

——悦男が死んだ謎は、洋治に

ひそめられてゐる——と考へて考へられぬことはない。云いかえれば洋治こそ、悦男の「遺書」なのではないか。

二年、三年すぎた。鱗館の二階7号室の灯はきえずに赤々ともえてゐる。血と脂肪にふくらんだ遺書を持つ女が一人未だに生きてゐるが、赤ン坊の泣き声をきいたものはない。(完)

譚奇な夜中

忍びこんだ。

ひっそりと静まり返つて、時折、チュチュと音がするのは鼠ぐらいのもの。

「しめく、あんまり能率を上げるもんだから、ぐつすり疲れて今頃は白河夜舟」

黒い影は、泥のついた地下足袋のまゝ茶の間に上つた。

懐中電燈の丸い輪が、スポットライトのように部屋中を隈なく浮び上らせて行く。

茶簞笥、鏡台、小型の洋服簞笥、机、その上には悩ましい裸体の額画その左隣には、今流行のミスターT型のダブルの背広が吊下げてある。それに続いて、グレーのニールツク、殆んどがぶん／＼と匂うような新品ばかり。黒い影は頬冠りの下で思わずにたりとほくそ笑んだ。

「まるで、おあつらえ向きだ。全く若い夫婦は無用心だよ。簞笥にだつて鍵一つかけちゃあいねえんだからな」

一通り目ぼしい物の見当をつけ終つた黒い影い薄汚れた茶ッ葉服の上衣をまくと、腹に巻きつけてあつた大風呂敷を、さつと畳の上に拡げた。

「先づ最初は手近かなところで、ミスターTから頂戴させて頂く事にして……」

へへえ、こいつは上物だ。純毛だよ二万円はしただろう……お次はグレーのツーピース、洒落たニールツクだ。おや、いい匂いがする。ジ

ヤスミンの香だね。全く若い女性の

体臭は男の官能を刺激していけねえや、そのお次に桐簞笥より取出しましたる品は、あそこにもある此処にもあると云つたケチな品ではござい

ません、い……いけねえ、つい脱線しちゃつたよ。薔薇模様の訪問着、羽織、錦紗の袋帯、燃えたつような紅の長襦袢と」

黒い影は、いなせなポーズで長襦袢を羽織つてみた。

「こいつらはうちの山の神にプレセントだ」

と、ふと何気なく呟いた途端、隣室から

「いやよ／＼それだけは許して、ねえ／＼お願いだから、それだけはいやなの……」

黒い影は一瞬、弾じかれた如く二三尺飛び上つた。

「あゝ驚いた／＼確かに、誰か俺をつけていやがるに相違ねえ、油断大敵アーメン、天理王のみことさま。こ

いつは気付かれねえうちに大至急仕事を片づけつちまおう」

と震える手付で、洋服簞笥の扉を無理矢理こじ開けようとすると、

「あら、そんなとこ、無理に開けちゃいや／＼いやつたら。傷がつくじやないの。いたむわよ」

「へ、へい、恐縮さんで、ではこのまゝそつとときますですから」

案外気弱で素直な泥棒である。

「こ、こうしちやいらねえ。どうやら見つかつたらしいぞ。さ、退散退散」



と、大風呂敷に山盛りぎつちりつめ込んで、いざ結ばうとすると。

「もつと強く絞つて、もつと、もつとよ」

「へ、へい、かしこまりました。もつと強くで。へい、ではこのくらいきつく、ぎゆう……と、へい、思い切り強く、絞りました」

「あゝ、いゝわ。それでいゝわ」

「やれ／＼力のいる仕事だ。どれ、どつこいしよつと」

いざ泥棒が大風呂敷をかついで立ち上ろうすると、またもや、せつばつまつた悩ましい声が……

「ねえ、行つちやあ、イヤ／＼行つちやあイヤ／＼あたしを残して先に行つちやあ、イヤよ」

「へ、へい」

「あなただけ勝手に行かないで、あたしも一緒に行くわ。ねえ、だから待つて、待つて」

「こいつは危ねえ。こんなのを待つてた日にや、首にお縄がかゝつてしまふよ。では何れ更めてお邪魔させて頂きますから、今夜の所はこれで御勘弁を、はい、さようなら」

云うが早い、泥棒は大風呂敷をかついで一目散に逃げ出した。

その隣室では、ルミ子さんが中村君の腕の中で、さも幸福そうにくつたり眠りこけていた。

(完)

譚奇しな夜中眞

第2話

盗まれた強盗

「あ、もう一度盗んで」

強盗が、物を盗まれるなんて、そんな馬鹿な事が、とおつしやつたつてね。君、事実、それこそ大変なもの、それも二度と取返しつかない、云うに云えない大切なものを、僕が、其奴から盗んでしまつたんだから仕様がないうやないか。

そら、つい此の間の夜、君と偶然アベノ橋の上で会つて新世界へ一杯飲みに行つただらう。あの真夜中の出来事なんだよ。

あの晩、君もよく知つてゐるように日曜作家の僕は、雑誌社の原稿料が丁度手に入つた時だつたので、ついうき／＼しちやつて、例になく、君と生ビールやビフテキを散々飲んだり喰つたりした後で、君とわかれてからのことだ。飛田でもひやかしてやろかと思つたが、実は次号の原稿締切日が二日後に迫つてゐるのが、氣になつて、この勢いで傑作をものしてやろと、終電車で忙しう我が家へ帰還したのが、丁度十二時僕は御承知のようにしがない、二階借りの一人身、丁度、階下の夫婦は子供を連れて和歌山の田舎へ墓参の留守、こいつは絶好のコンデイションだと、万年床に破れ蚊帳を吊つて、その中へ餉台兼用の机を持ち込み、いざ傑作をと意氣こんではみ

たのだが、どつこい創造力の方でなか／＼云う事をきいてくれないんだ。次号は思い切り、ぐつと趣向を変えて、アラン・ポーの黒猫に輪をかけたような凄味のある奇抜なアイデアで、読者が一読、肌粟を生ぜしむる妖奇譚小説を書かんものと、ペンをやけに振り廻しては見るものゝむし／＼する暑氣に、酔さめの神経がいら／＼するばかり、挙句、両足を立てたり、組んだり、伸ばしたり

布団の上へ仰向けに転がり、ぼんやり、電球に群がついてゐる夏の虫の羽音を聴くともなく聴いていたり、七転八倒の苦しみさ。物干に通じる窓も全部開けつ放してあるのだが、どうにも暑くて、やり切れない。

果ては、東西古今の怪談を次々と思ひ起しては見るが、そんな題材はもうちつとも新鮮ではなくなつてゐるし、目の肥えた読者を、あつと云わせる事は出来ない。

いつそ思い切つて、其の物ズバリの題材は見当らぬものかと、ペン軸で、やけに頭髪を掻きむしつてもみるが、とんと、妙案が浮んで来ないんだ。

その時だつた。隣家の階段が、微かに、ミシ、ミシ、ミシと音を立てゝいるのにふつ

と氣がついたんだ。別に珍らしい事でもなかつたが、こつちはテーマとアイデアに必死になつてゐる時だけに、妙にピンと反応するものがあつたんだ。

毎晩、一時間になると、きまつて隣家の二階借りの若夫婦が、トイレに立つんだが、下の老人夫婦に遠慮して、しのび足で階段をゆつくり降りて行くんだ。

時々、

「ねえ、あなた、怖いから、一緒について行つてよ」

と今にも溶けそふな甘い声で、ねだつてゐる新妻の寝乱れ姿が、目に見えるような、おし殺した囁きが洩れて来る事だつてあるんだ。

未だ、最近結婚したばかりの、湯氣が立つてゐる若夫婦が、階下に遠慮した、しのび足でそつと降りて行く様子が、微笑ましいようで、可哀想にも思えるんだ。

誰だつて、新婚当時は、思い切り動物的に愛し合いたいもんだらう。実際、夏場所大相撲ぐらゐの元氣と闘志がなくては将来が思いやられるからね。それはとにかく。

暫らくすると、小用をすませた夫婦が階段を上つて来る足音が響いて来たんだが、僕は不思議な発見をし

たんだよ。確かに降りて行つた時は二人の足音だつたのが、今度は一人の足音しか響いて来ないんだ。

おかしいなと思つたが、よく注意して耳をそば立てゝいると、さつきよりも、ずつしりと重い足音の調子なんだ。「はゝあん」成程そらだつたのかと、うなづけたんだ。

可愛い、エタボの乙羽信子によく似た、隣の妻君は、愛する良人の腕に抱つこされて、上つて来ているに違いないんだ。

僕は壁一重隔てた隣家で、そんな愛らしい光景が繰開けられてゐるのに、一寸悩ましくさえなつてしまつた。

ところが、其の時、きらりと、僕の脳裡に妙案が閃めいたのだ。そうだ。これだ。これを書けばいいんだ。僕は思はず手を打つた。

草木も眠る丑満時、押し殺したような足音が、ミシ、ミシ、ミシと階段をきしませて、上つて来る。良人は眠らずに、新妻がトイレットから帰つて来るのを待つてゐる。良人は妻が階段を上り切つたら、抱きついて、おどかしてやろと、ふと悪戯な考えを実行する。足音はとう／＼階段を昇りつめる。

「襖をびつたり閉めてくれよ」

良人は素知らぬ調子で云う。襖はびつたりと閉められる。

良人は、わつと小声で襖の陰から飛び出す、が、一瞬、冷凍人間のようになり物を云わなくなる。良人の眼前には、黒覆面、黒眼鏡、黒の背広の

譚奇なまし中夜と眞

強盗が、冷たく光るコルトの銃口をせうら笑い乍ら、突きつけている。うむ、こいつは面白くなるぞ。これだ。これだと僕のペンは石炭を投げこまれた機関車の凄まじい勢いで原稿用紙の上を超スピードで走り出した。三枚、四枚、五枚、瞬く間に十枚を突破する。この調子だと、今夜中に三十枚は書き飛ばせるぞと、夢中になつて、ペンを走らせていると、ミシ、ミシ、ミシと、また。階段を上つて来る足音が響いて来るんだ。

さつきのは、やつぱり一人だけだったのか、それにしても随分永いトイレだなと感心していると、どうやら階段を上つて来る足音は僕の家のらしいんだ。その証拠に、坐っている畳までが微かに響いて来た。

僕は一瞬、体中の毛穴から、どつと冷汗が吹き出したように感じたよ。勿論、階下には誰も居る筈がないんだからね。今頃、訪ねて来る奴は深夜の歓迎されない物騒なお客にきまつているんじゃないか。

僕は観念して、眼を閉じたよ。心臓がドキ／＼とドラムのように鳴つてやがるんだ。

僕は裸の胸に氷をあてられたように感じて、ぼつと眼を開いた。冷たいと思つたのは、コルトの銃口さ。しかし、それよりも、もつと／＼ビツクリさせられたのは強盗の服装なんだ。君、自然は藝術を模倣するつてのは誰かの名言だが、事実その通り僕が今、書きまくっている強盗に

そつくり生き写しの奴が現れやがつたんだからね。僕は夢でも見ているんじゃないかろうかと唇をぎゅつと振つて見たが、哀しいかな現実なんだ。

其奴は油断なく、コルトの銃口を僕の胸に突きつけたまゝ、傍らにあつた寝巻の帯で、器用に僕を後手に縛りあげやがつた。

そして押入を開けやがつたんだが古雑誌に、原稿の書きつぶしの束、それに饅頭の空瓶が、五六本転がっている外には、目ぼしい品物の何んにもないのに、一寸期待外れの様子だつたが、洋服掛に掛けてある、此の春、月賦で眺らえて未だ全額拂い終つてもいない、背広を畳みもしないで、風呂敷に包み込みやがるんだ

僕はその隙を見て、縛られている帯を全身の力で絶ち切ろうと頑張つた。頑張れば帯は必ず切れるんだ。何度か／＼糸でついてあるぼろ／＼の帯だつたんだから、強盗の奴、そんな僕の様子には気付かないで、上衣の内ポケットから、原稿料の入つた袋を見つけ出しやがると、一枚、二枚と、僕の鼻先で、百円札を御丁寧にゆつくり数えてゆきやがるんだ

しめて、二千三百円残つていた。こんな事なら、全部飲むか、飛田でパン助でも買つとくんだつたと後悔したが後の祭り。すると強盗の奴それだけでは不足なのか、眼でもつとねえのかと凄みやがるんだ。

「ない」と音を横に振ると、「隠すと射つぞ！」と云わねばかり

に、コルトを憐々し気にぐつと鼻先へ持つて来やがるんだ。

その時だつた、僕は何気なく強盗の胸の辺りが異様なのに気がついたので。

「財布だつたら、押入れの中にある古雑誌の間に挟んであるよ」とデタラ

メを云つてやつた。強盗の奴。真に受けて、押入に首を突つこんで、ごそ／＼探し始めた。

今だ、僕は帯を絶ち切ると、強盗の大きなお尻めがけて、ドンと体当りを喰らわした。不意をつかれた強盗は、「あつ！」と黄色く甲高い叫び声を挙げて、うまく僕の体の下へ倒れやがつたんだ。二、三分格闘が続いたが、どうだい君、腕力には自信のない僕が、強盗の腹の上へ馬乗りになつて美事に組伏せてしまつたん



だから素晴らしいじゃないか。強盗の奴、もうそんな羽目になつていても覆面と黒眼鏡を取らわまいと懸命に抵抗しやがるんだが、とう／＼僕は、其奴の覆面を無理矢理、引裂いてしまつたんだ。

僕の予期した通り、覆面の下から現れた顔は、切長眼のそつとする美しい女の顔だつたんだ。顔はや／＼骨ばつていたが、唇には、オペラ色の

譚奇なやま中夜真

ルージエを薄く塗っているんだ。女の身軀しと云う眠だらうが。僕は物騒なコルトは布団の下へ押しこんでも一遍、じつくり女の顔を眺めて見た。ふつと素つぽを向けるその風情に、また何とも云えない、魅力があるんだ。それに体だつて、普通の女には見られない、豊かな肉体だし、乳房なんか、まだ男を知らないような新鮮な感じなんだよ。

女は苦しくなつたのか、荒々しく呼吸を、はづませて。

「さあ、早く警察へ突き出しておくれよ」

と青ざめた美しい頬を紅潮させて毒づんだが、それがまた、何とも云えないんだ。

「そう興奮するなよ、強盗をやるような君にも似合わないじやないか」

「興奮するのは当り前よ、女のあたしの上へ男のあんたが、馬乗りになつて絞めつけてるんだから」

「あゝ、成程、：なか／＼話せるじやないか、君、じやあ僕と一つ此処で取引をしないかい」

「どんな取引をさ？」

「色気のない口のきゝ方をするなよ、君が、僕の提案事項を承認してくれたら、僕は何んにも云わずに君を許してやろう、どうだい、承認するかい」

「口惜しいけど、その提案事項をさつさと云つとくれよ」

「君は金が欲しかつたんだらう。だから、僕は君に、その二千三百円、そつくりそのまゝ呉れてやるよ。そ

の代りだね、僕にも君の持つてゐる大切な物を盗ませて欲しいんだ。そうすりやあ、五分と五分で、どっちも恨みつこなしだからね。どうだい」

女の顔には瞬間、さらりと複雑な翳が動いたようだった。

「どうだ、盗ませて呉れるかい」

女は切長の臉をやゝ吊上げて、二度、瞬いたかと思つと、僕の顔を凝つと視つめたまゝ、唇の端に冷たい笑を浮べると云つた。

「さつさと、あんたの気のすむようにおしよ、フタ箱で寝るよりは、ましだからね」

女は観念の臉を閉じた。

が、女の本能か、くね／＼と体をくねらせると媚びるような表情になり情火をめら／＼と燃えつものらせるのが、感じられた。

僕は押さえつけていた、女の両腕をそつと離した。

女も僕の首に白い腕をからませて来た。

そうして熱い息を僕の耳もとで吐くと、こゝろ騒いたんだ。

「ねえ、約束破つちやイヤよ、思い切りサーピスするからさ」

と、まあ、こゝろ云う次第なんだがね。どうだい、君。僕が散々苦心して考へていた妖奇スリラー小説よりも、この方が、よつぽど、面白いやないか。

「事実が小説よりも奇なり」とはよく云つたものだよ。

ところがだね君困つたことにはあの夜から僕はその女強盗が忘れられなくなつてしまつたんだよ。實際あんないゝ、女は全く生れて始めてだつたね。

それで僕は彼女と約束したんだがいつでももう一遍襲つて呉れないかその時は殺されても本望だから、僕を盗んでつて呉れろつてね。どうだい君、愉快じやないか、お蔭で毎晩遅くまで眠らずに彼女の御来駕を待つてるものだから近頃すつかり不眠症にかゝつてしまつたらしいんだよあはゝゝゝゝゝ

(終)



(マンガ) サカエマスオ
月のものが止つたよ

笑話二題

□ 拂わぬ積り

A 「君、ボクに借金のあることを忘れやしないだらうね」

B 「勿論、忘れやしないさ、だが君は一体、いつ迄覚えてるつもりなんだい？」

□ 罪は同じ

妻「あの人達つて、あんなおテイスイのよい事を言つて、私達と別れたら、どんなことを話すでしょうね」

夫「俺達と同じことだらうよ」
妻「まあ、随分バカにしているわ」

西瓜仙人

田共色
ユーモア



八瀬田吉児
曾根三太郎

浜寺海水浴場で海日傘の下に秋刀魚を二匹ならべたような恰好で妻と私は水着を砂まみれにして寝ころんだまゝ水平線の雲の峰を眺めていた。
「あの——もし——あんたは岡山牧野さんじゃないゼスか？」
無遠慮に人の海日傘の中へ、のそく這

いこんで声をかけた男がある。
妻と私は無言のまゝお互いに顔を見合せた。
どうも見覚えのない男である。二十七才の筋骨たくましい体つきだ。多毛質と見えて日焼けした胸からサッポータ一枚の臍のあたりまで黒々と剛い毛が天の橋立そつくりについてる。まるで「人間は猿から進化した動物である」の証明書みたいな人※

年、狭いアパートに住みながら妻は私の友人の奇人変人が次ぎく々と来訪するので何時も目を白黒するのであるが、韓国人のチンパンジーみたいな男までがこんな海辺で馴れ／＼しく話しかけたには肝をつぶしたらしい。
「あア驚いた、誰？、あなたのあの方御存じ？」
妻はウサンくさい眼つきで聞いたが私と

※間だ。
「えゝ、私は岡山の猫谷村に居たこともある牧野ですが——失礼ですが貴方は」
「あゝやつぱり牧野の信ちやんだ、どうも似てると思いました。私を忘れましたか、オヤツチヨ一の朝鮮の金在益ゼス、一寸待つて下さい」
嬉し気に白い歯をニッコリのぞかせ、男は忙しそうにまた海日傘から飛び出して行つた。今年の節分に結婚してまだ半年、狭いアパートに住みながら妻は私の友人の奇人変人が次ぎく々と来訪するので何時も目を白黒するのであるが、韓国人のチンパンジーみたいな男までがこんな海辺で馴れ／＼しく話しかけたには肝をつぶしたらしい。
「あア驚いた、誰？、あなたのあの方御存じ？」
妻はウサンくさい眼つきで聞いたが私と

しても返事のしようがない。全然記憶にない人間である。
五分もたぬうち、またその男がやつてきた。大きな西瓜を二つ抱いて海日傘の陰に這いこむと。
「やあ、これは奥さんゼスか、西瓜喰べましよう、冷えてるから美味いゼスよ、さあ牧野さんも」
チンパンジーは大きな拳骨でガンと西瓜を一なぐりに割ると自分から先にムシャリ／＼喰いだした。妻はセバードに見つかつた三毛猫みたいに小さく縮み上つて私の後に座つた。私も困つて、
「どうも思ひ出せんのですがね、どなたでしたかな？」
「アハハッハ、まだ思ひ出さんゼスか、そら、田の草取りに歌つたでしよ——アールラン、アールラン、アールラリヨオウ」
チンパンジーは順につたり西瓜の汁をぬぐいもせず突拍子もない大声で喰ひ出した何しろ砂浜せましと人のゴツタ返してる海水浴場のことだ。びつくりして皆こちらを見る。私はあわてゝ、
「もういゝよ、もういゝよ、思ひ出したよ」と手を振つて止めた。その唄を聞いた途端私は本当に思ひ出したのである。
何だ、あの時の金田太郎ことオヤツチヨウ一の太郎やんではないか。もう十一、二年も前のことだが、このチンパンジー君とアールランの唄と西瓜については切つても切れぬ縁があるのだ。本当はチンパンジーが西瓜をもつて来た時、すぐ思ひ出せる所だが金田太郎が何時の間にかゲン俗して金田益なんて本名に返つてゐるから解らなかつたのである。

岡山県も山陰に近い故郷猫谷村に私が十八才のニギビ華やかな少年——決して美少年ではなかつた——の頃、土地の百姓中川竹藏爺さんの家に二年程働いていた太郎やんだつた。

私の故郷では農繁期に雇う日傭人夫をオヤツチヨと呼ぶ。田植や稲刈時には毎年四国から讃岐の衆がきたものだが稀には鮮人を傭う家もあつた。朝鮮のオヤツチヨは大飯は喰うが賃金も安く、仕事は倍からするといふ噂だつた。

十七才の夏、オヤツチヨに來た太郎やんは竹藏爺さんに氣に入られて常雇いとなり二年ほど住み込みでよく働いた。非常に唄の好きな少年で夏の田の草取りの時など得意のアリランを上手に声をふるわせて唄いながら悠々と一町二段の田の草を一人で取つた。

その頃、近処の貧農の子でお京ちゃんという小麦色の肌をした愛くるしい娘があつた。太郎やんと同年の十七でこれもよく働く娘である。太郎やんと隣り合せの田を老いた父親と二人でいつも黙々と田の草を取つていた。

ガラ／＼と田打車で青い稲株の間を押し、あちらの畦からこちらの畦へ押して廻るのであるが、太郎やんの唄声はお京ちゃんやんの白い姉さんかぶりと可愛い紅だすきの姿が近づいたたびに、ひとしお哀調を帯びて馬鹿デカくふるえにふるえまくつて広い水田一杯にひびき渡つた。

「竹藏爺さんとの太郎やんはお京ちゃんに惚れとるらしいぜ」

「太郎やんはまだ十七じやそうなけん、きつと初恋じやろな」

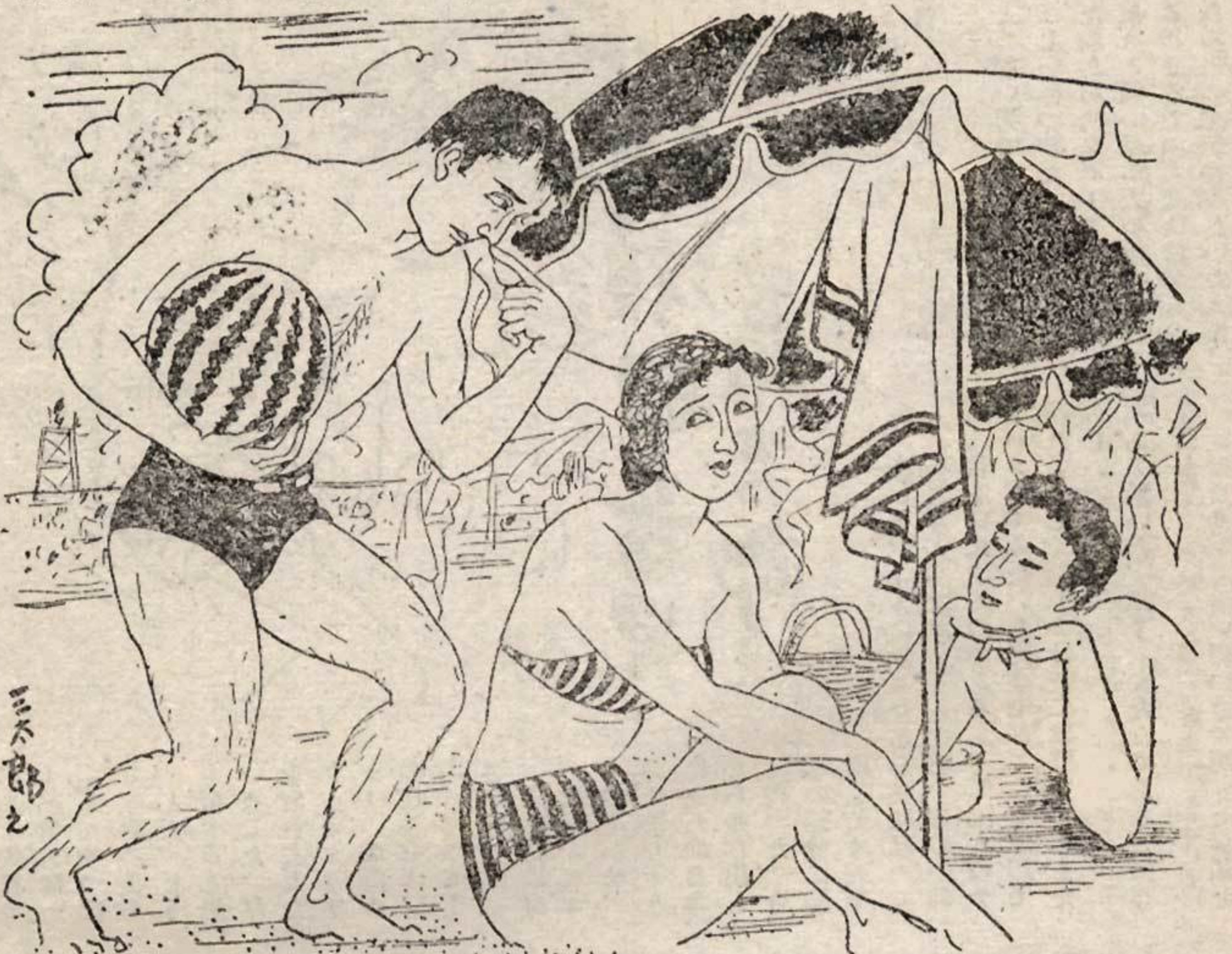
「お京ちゃんの方はどんなんじやい」

「それじやてより働く子じやけど何しろ人種が違ふのじやけんお京ちゃんもウンと言ふまい」

「ホンにのりこりや可愛そうじやけどモノにはならんじやろ」

夕涼みの団扇片手に大人達の間でこんな話が交わされるようになった。くわしく書くなら田舎の年中行事の楽しみの一つ、お盆が近い八月十日頃の或る夜のことだ。悶々の情やるかたない太郎やんは思案に余つて、ついに私の処へ相談に來た——。

と書くとも如何にも私が偉そうに見えるが私は別に村長の息子でもなければ素封家の御子息でもない、ありふれた中農の小作で太郎やんより一つ年上の、当時十八になる



つたが田舎者は噂が大きいので勝手にそう信じていた——どうにも仕ようのない有名な小僧だつたから、太郎やんがそこを見込んで私に相談に來たわけである。

長い夏休みも半分すみかけてるのに宿題はおつぽり出したまゝ、親父に見つかつたら大目玉を喰うであらう「吾輩はノミである」を燈下まさに耽読の候とばかり夢中で読んでいた私は、鼻の横のニギビをつぶしながら庭に面した縁端へ太郎やんと一緒に腰かけて、やおら色事の伝授に取りかゝつたのである。

「信ちゃん、ボクはお京ちゃんが好きなんじやけど、どないにしたらえゝじやろ？」
「どないに好きなんじやい、つまり肉体的にか、精神的に好きなんかどうなんだい」
「つまりその——その——お嫁に欲しいんじやよ」

精神的も肉体的もクツもヘツタクレもない、お京ちゃんその物が全部好きなんだろ。太郎やんは生ツバを呑みこんで言いにくそうに赤くなつた。毎日の田の草取りで真黒に陽焼けた顔が赤くなつたんだから何の事はないまるで黒靴に赤の靴ズミを間違えて塗つたみたいに奇妙奇天烈な色になる。

「そりや無理だよ太郎やん、結婚するには第一どつちも年が若すぎるぜ。それより結婚なんかせんと、ほかの方法で結婚したと同じ効果をあげることを考えるのが利巧と言ふもんじやよ、それならやり方一つで簡単にいくぜ、どうじやな？」

これが十八の少年である私の言つた言葉なんだから、我ながらどうも誠にイヤハヤ恐れ入る。

「そんならボクはどうしたら好えんじやろ」

?

「お京ちゃん」と恋愛するんじやよ、まず試しに口説いてみるんじやね」

「ボクはまだ日本語が下手でし、女と話すときは何だか体中が熱くなつてカユくなるんで、どうもいかんゼス、手紙にしたいと思ひますが、どうでしょうか、ウマイ文句はないゼスカ」

「ラブレターかい、そいつは止めとけよ太郎やん、形勢が悪くなつた時の証拠物件になるからなア」

「それじゃどうしたら好えじやろ信ちゃんボクの氣持を可哀そろと思つて何とかしてくれんゼスカ」

こう哀れつぽい声で一膝のり出して来られると、まるでこれでは私が口説かれてる恰好で始末が悪い。幸いに親父は竹藏爺さんとこへザル碁を打ちに行つてゐるしお袋は月例の十日講へ出かけて家には誰も居ないから好いものゝ、いさゝか照れた次第である。

太郎やんは色が黒くて頬骨がとび出て、ちよつと鉛細工の理がヒゲを失つて戸まどいしたような顔をしてるが、ブ少年の私よりは幾分ましな方だから持ちかけようではまんざらモノにならぬこともあるまい。水際だつた美少年だと田舎娘は恥かしさで固くなるから話も疎々よりしまい、かえつてこの位の容貌が田舎向きの恋愛には好都合だらうと思つたから、私は太郎やんにいろ／＼女を引つかけるコツを伝授したのである。

お京ちゃんには絶対にイヤラシイ目つきや言動を謹しむこと。お京ちゃんの親父さんに田圃で顔を合せたらなるべく心安く口をきくようにすること。それが成功したら

暇な時分に夕方でも好いからお京ちゃんの家へ西瓜の一つも買つて遊びに行き、親父さんと世間話をして帰るようにする。この時はお京さんに目もくれぬこと。決して惚れた心を見破られてはならぬ。それが成功したらいよいよ次ぎに口説きの秘策を授けるが、当分は氣ながに私の言つたことを実行するように――必ずアセツてはいかんと言つて太郎やんを帰したのだが、その夜十一時すぎ私は太郎やんに表の戸をドンドコたゝかれて寝入りばなを起された。

「何だい太郎やんかい、静かにせえやい親父が目覚ますぞな」

私はブツ／＼小言をいゝながら表へ出た月のさすモミの木の下で太郎やんが割れた西瓜を抱いてフウ／＼大息をついている。

「信ちゃん、エライことじやがな、ボクはもう――ボクはもうたまらんゼス」

「この阿呆！お前は俺があれほどアセツたらいかんせと言つたのに、お京ちゃんの家へ今夜早速西瓜を持つて乗り込んだんじやろが。たゞき返されるのは当り前だ、親父とまだ心安うもならん間から娘の家へいきなり行く奴があるかい問拔けッ」

「まあ信ちゃんそり怒るなよ、ボクの話聞いて下さい。ボクはもう体中がカユウてカユウて、熱うて目がまいそりゼス」

と駄のわからぬことを言つて割れた西瓜へかぶりついた。私ももう一つのカケラを引つたくつて甘い汁をすゝり乍ら恐い顔をして太郎やんの話すのを待った。

太郎やんは冷えた西瓜を一口喰うと少しは心も静まつたものかボツ／＼語りだした

「信ちゃん、女ちうもんは実に変なもんゼスな、ボクは今夜しみ／＼大発見をしたゼスよ、まつた／＼」

馬鹿野郎、笑わせるな。しみ／＼大発見をするようなトンマが何処の世にあるかい、私は腹の中でお可笑かつたが余計な口を利いたら太郎やんの下手な日本語はますます／＼口ごもつて複雑怪奇になる心配があるので相変らず苦り切つた表情をしていた。

その時に太郎やんから聞いた話は非常に露骨だつたし、言葉が前後してわかりにくかつたから簡単に要約して書くことにする

太郎やんは夕方私の家から帰つて風呂水を汲むとその日はもう用事がなかつたので彼の居間になつて納屋の隅の四疊半で早くから寝たそうであるが、根が純情で生一本の直情徑行に出来上つてゐる太郎やんだ。

まして十七才の初恋ときてるから思い立つたら矢もたても堪らない。大人でさえ「恋は思案の外」とか「恋は盲目」という位だから、少年の太郎やんに氣ながにやれというのがそも／＼無理だつたか知れない。

彼はその夜は胸が躍つてどうしても寝られないので私の教えた事を何か一つ実行すれば満足して寝られるだろうと考へた。しかしまさかお京ちゃんの家へ行つて寝ている親父さんをたゞき起し、「今晚は、サヨナラ」と二言喋つて帰るわけにもいかず考へあぐんだ末に自分が使われてゐる竹藏爺さんのこの畑から西瓜をちぎつて行つてお京ちゃんの家へソツ／＼と置いてくることを思ひついた。

西瓜の代金は竹藏爺さんに後で話して自分の給金から差し引いて貰えば好い。太郎やんは自分の考へに有頂天になつて早速実行に移つたのである。

夜露に濡れながらゴロ／＼ころがつてる青い坊主頭の西瓜を、ボン／＼、ボン／＼と爪ではじいて熱れ加減の好い奴を探して

ると、夏だというのにコオロギが畑一面に鳴きしきり、初恋に悩む太郎やんの胸を堪らなくセンチにした。どうやら一貫五百匁位のよく熟れた手ごろな奴を探しあてると夜露にしめつた着物の裾を尻からげにワラ草履をベタ／＼鳴らせながら、とんだ不埒な深草の少将よろしく太郎やんはお京ちゃんの家裏口に立つた。勿論もう出入口の戸は閉つてゐる。

そこでおとなしく西瓜を戸の前に置いて帰れば何事もなかつたものを、そこがオヤツチヨイ育ちの浅ましきである。だいたいで男奉公するような人間に悪人はなく人の善いのが多いものだが、人の善い割に小ズルイ性質をチラ／＼出すのも、これまた雇われ人根性の哀れさかも知れない。太郎やんはちよつと慾を出した。

このまゝ黙つて西瓜を置いて帰るんでは余りにモツタイナイ。何とかしてお京ちゃんに寝顔を見てやろう、もしまだ起きてるようだったら声をかけて中に這入り、自分も一緒に京ちゃんや親父さんと、この西瓜を喰つたらどんなに美味だろうと考へた

つまり初めの思ひつきから考へが一段飛躍して色氣と味氣が一べんに頭をもち上げたのだ。

そこで西瓜を左手にかゝえたまゝ戸の節穴からソツ／＼中を覗いて見た。

猫の額ほどの土間をへだて、六疊の間と言つても畳は三疊しか敷いてない一間きりの家だ。残りの三疊は板の間で乏しい台所道具がならべてある。その三疊の間から半ば板の間にかけて青い木綿蚊帳が一杯に吊つてある。親父さんは屋の仕事の疲れからグッスリ眠りこけていたがお京ちゃんも暗い四十燭光の電燈を低く下して蚊帳から首

だけ出し古い小説本を読んでいた。

暗い外から電燈のともつた狭い部屋を覗くんだから、すっかり蚊帳の中まで見えるむし暑い夜だったから敷布団だけで体の上には何も掛けてなかつた。お京ちゃんは薄い寝巻一枚で体をなぐめに寝そべつてゐるのだが下半身は生れたまゝの恰好でマル出しだつた。

本を読みながら右手はときどき枕もとの紙袋から金平糖をつまんで口には持つて行つてゐる。そして左手は——あゝ実にその左手が、今まで太郎やんが夢にまであこがれてさわりたいと念願した個所で、しきりと細やかに指先をしならせ乍ら動いてゐたのだつた。

それを見た途端に太郎やんは体中がカユク熱くなり、お京ちゃんの左手と太郎やんの左手とどんな関係があつて起きた現象か知らないが左手が電氣にふれたように痺れて大事な西瓜がツルリすべつて戸袋にガタツと大きな音を立て、当り地面に落ちて割れてしまつた。ちやうど久米の仙人が洗濯娘の赤い腰巻を見て飛行の神通力を失い空から落ちたのと同じようなものだろう。

サア失敗つた！、あわてた太郎やんはそれでも割れた西瓜を拾い上げることだけは忘れず、かゝえあげるが早いか無我無中で茄子畑を飛び越え、胡瓜の垣を踏み散らし南瓜のツルに足をとられてズデンドウと引つくり返つて割れた西瓜を更に泥んこにしたりしながら横つ飛びに逃げ帰つてきたというのだ、イヤハヤ誠にドウモ／＼である「フーン、あんな無口でしとやかな娘がなあ？、フーム」

私は太郎やんの「しみ／＼大発見」した話を聞き終ると星の色も更けた夜空に向つ

て大きく溜息を吐いた。
「太郎やん、これやあ根本的に口説き方針を変えにやあならんぜ」

そのとき私はどんなデタラメの口説き方針を教えたか忘れてしまつたが、早熟の肉体をもて余しながらも赤貧の娘に生れ合せたばかりに何時も若い男達へ肩身せまく控え目に振舞つてゐる無口なお京ちゃんの性には何か切ない哀愁をおぼえた。しかしこれは単に哀愁を感じただけであつて、安っぽい同情心を起したわけでも、太郎やんを出し抜いてやろうと変な野心を持つたわけでも勿論ない。向う三軒両隣の娘だけはどうもな事があるうと絶対手を出してならぬと雷親父とヒステリーお袋に固く宣告を受けてゐるんだからこの誓いを破れば私は親不孝になる。田舎のドンファンをもつて自他ともに許した私といえども親孝行に対しては少なからぬ理解を持つてゐる方だからと言ふのは嘘の皮で本当は、近処の娘だけにフクレさせたが最後之助、家をホリ出される事になつてゐたからだ。今頃の青年とちがひ十八才の私には家をホリ出されるのだけは本当に恐ろしかった。また私の家の雷親父はオドシでなく本当にホリ出しかねない強い気性の男だつた。

太郎やんは西瓜を取り落して逃げ帰るまでの間、お京ちゃんにも誰にも見られなかつたと言つてたが、お京ちゃんは女性特有の敏感さで、あの夜の行為を太郎やんに見られたと感づいたらしかつた。村の細道で彼とすれ違ふ時も顔をそむけて通るし、お京ちゃんの親父と太郎やんが田の畦で立話でもはじめようものなら

「お父さん、蛇があそこに居て逃げないよ、恐くて田の草が取れんわよう、早う来

て追うてナ——とか言つてなるべく話をさせまいとする風だつた。
太郎やんのお京ちゃんへの想いは薄情に

されるほど募るらしく、終いには「信ちゃん、あんたの教えてくれた方法はどれも先が長うていかん、ボクは故郷の慶尚南道に

三太郎



親父の残してくれ
た田舎が
二段ほど
あるんじ
やけど、
それを売
つて持参
金に持つ
て行くと
したらど
うじやろ
ボクを嬬
にしてく
れんじや
ろか？」

と私に
また相談
に来た。
「馬鹿を
言えなん
ぼ貧乏人
の娘でも
金に惚れ
て結婚す
るような
女はこの
村にや居
らんぞ」
その時
私は虫の
居どころ

でも悪かつたかケンもホロ、の返事をした
間もなく太平洋の雲行きは荒くなり太郎
やんは故郷の朝鮮へ帰つた。それからもう
十一・二年になる。私も何時までも子供で
ブ少年の夢を見るわけにいかない。兵隊
の飯も喰い南方の戦野でニヤケ根性を徹底
的にたゞき直されて復員した時にはどうや
ら人間らしくなつていた。大阪に職を得て
からは減多に故郷へ帰る時もなく、太郎や
んやお京ちゃんのことは、とうの昔に忘れ
去つていた。

三



Sakai

漫 画

我が家の虫干し

酒井 滋

妻「あなた、虫干したいんだけ
れど、ダンスはからつぽなのよ」
夫「お前も俺も裸になつてそれを
干せばいいんじゃないか」
妻「あなたッ、これで全部よッ」

「あなたは何時からストリッパー
になつたんですか」
「長いタケノコ生活で着るものが
なくなつてからです」

汐風が涼しくチンパンジー君のたくまし
い胸毛を撫でて吹きすぎる。
「太郎やん——ではなかつた失礼、金さん
あなたはたしか朝鮮へ帰られたとか聞いて
いました、どうでした？戦争は？」
私は砂浜へ寝そべつたまゝ西瓜を喰いな
がら訊ねた。
「大東亜戦争ゼスか？こんどの南鮮北鮮の
動乱ゼスか？、ボクは子供の頃からこれ
もナツバの方でねコッワは好かんゼスよ」
「え？、講和は嫌いなんですか金さんは」
「えゝ、戦争は好かんゼスよ、私はコッワ
じやないもんね」
金さんは相変わらず妙な日本語を使つて判
断に迷わす。昔とちつとも変らない。よく
聞いてみるとコッワとナツバは私達の子供
の頃よく使われた言葉の不良少年を大別し
て喧嘩好きの方を硬派、女専門の方を軟派
と呼んだその軟派と硬派のことらしかつた

「金さん、何時こちらへ来たの？」
「日本へ来たのゼスか、昭和二十四年に来
ました。岡山へも行つてみたゼス」
私はひよいと妙な興味を起した。
「で、お京ちゃんには逢いましたか？」
「いえ、実は逢うつもりで行きましたが岡
山では逢いませんでした、あの家にはもう
誰も居ませんぜしたよ、何でもお京ちゃん
は戦時中、村の処女会の幹事をしつたも
んゼスから町の赤十字病院へ何べんも傷病
兵を見舞に行くうち、とうとう白衣の勇士
と恋愛して終戦後陥落したとか村の人が
言つてました。相手の男には奥さんも子供
あつたそうゼスがね」
「ほう、そんな事があつたんですか、でも
金さんも今じやもう立派な奥さんや大きな
子供さんがあるんでしょね、朝鮮の人は
みな早婚だつて言いますから」
「それがまだ何も無いゼス。ボクはまだ一
ぺんも結婚しません」

金さんの声はさみしそつた。
話によると金さんは、いまだにお京ちゃ
が忘れられず、一昨年日本へ密航してくる
と真つ先に岡山の猫谷村へ行つた。
そこで村人の噂を綜合するに、どうやら
お京ちゃん、妻子と別れた男と二人で大
阪に世帯を持つてゐるらしい事が分つた。
広い大阪へ出てきた金さんは同じ鮮人仲
間の協力を得て是が非でもお京ちゃんを探
し出し、不倫の恋を潜算させ自分の女房に
するつもりだつたという。雲を掴むような
訛ね人も、たゆまぬ努力は恐ろしいもので
今年の七月金さんはとうとう恋しいお京ち
やんの居所を突きとめた。
西淀川区塚本に間口の小さい店をもつて
アイスキャンデーとラムネを売つていた。

足の不自由な主人を見たり、めつきりふけ
たお京ちゃんの背中に負われている赤ん坊を
見ると金さんは何も言えなくて相手が見忘
れてるのを幸いに、遂に店先を覗いただけ
で帰つてきたということだつた。
「ボクはね、お京ちゃんに何人子供が生れ
てゝも問題じゃないゼス。嫌と言われたら
好きになつてくれるまで一生でもネバリぬ
いて待つ決心ゼした。ボクも今では屑鉄ブ
ームで二十五万円ほど儲けましたよ、お京
ちゃん結婚したらウンと元氣を出して百
万円溜めてゼイタクをさせてやりたいと楽
しみにしてましたゼス。けどもね、足の
不自由な主人を見るとね、やはり人間は自
分の都合ばかり考えられんゼス、ボクも今
度こそサツパリあきらめます。動乱が終つ
たら朝鮮へ帰つてお京ちゃんによく似た女
を探して結婚します」
「でも金さん、猫谷村にだつてまだお京ち
やんより美人が居ないとはかぎりんぜ、終
戦後の日本女性だ、金さんの腕一つでど
うにでもなるだらうにさ」
「いや、もう結構ゼス。お京ちゃんほどし
とやかな女は猫谷村には居らんゼス。この
前猫谷村へ行つたときも娘さんたちは睦に
しやがんで立ち小便してました。あれを真
正面から見せられると、まるで牛ゼスもん
ね」
私の妻は「キヤッ」と一声、真赤になつ
て涙目から飛び出した。
「アハハッハ、奥さんはなか／＼肥えてま
すねえ、失礼々々ボクは体が熱うでカユ
て——」
金さんは喰い終つた西瓜の皮をボンと砂
の上に投げずると勢よく青い海へシブキ
を立てゝ走り込んで行つた。(終)

情熱は炎の如くに

小島伸二



山峯玄太画

と思つて気になるんだ、知らないか」

「知りませんわ」

飽気ない否定の裏に、なにか潜んでいるような気がした、それが宮井を嫉妬へとかりたてる、踊る気がなえていく。

「隠くすな、なにか関係のある男だろう」

「あのひと……フ……」

輝子はいたずらっぽく肩をすぼめて笑つた。

「気になるよ、知つているんだらう」

「知らないわ、度々、見るひとだけれど、踊つたことはないの……」

「フロアでは他人、どつかでは愛人」

「いやな宮井さん」

きゅつと背を振られ、痛いとも言えず、宮井は顔をしかめた。

「こゝへ度々踊りにくる」

「えゝ」

輝子の返事が曖昧になるほど、宮井は疑惑と嫉妬がもたらがってきた。

「おのれ坊主め」

輝子をリードしつゝ、徐々に男の方へ近づいて行つた。かちつと視線がありと、急にひとなつこい顔をして、

「やあ、宮井君」

と言う、

「あれッ、僕の名前を知つてやがらあ」

あつ氣にとられていると、すうつと坊主は遠くへ流れていった。

「宮井さんが、御存じのくせに、いやに、わたしにからんで……いやだわ」

曲が一変して軽快なタンゴになつた、照明が赤がゝつた明るさになつたのを機会にからみついてくる輝子の手をふり払うようにして、ボックスへひきあげた。

ついてきた輝子は、

な、青光りのする坊主頭をによつきり立て、踊つている男の姿である。

「あいつ、どこかで見たことがある」

そう思うと、坊主頭が氣になつて、ステップが乱れた。

「宮井さん、今晩は変ね」

馴染のダンサー、パートナーの輝子が熱い息でさゝやいた。輝子は息も熱い、そうして軀も燃えているのか熱い。

いつも、ラストまで燃えつゞけ、その勢をかつて、天満アパートの一室で、宮井た

曲はブルースである。フロアでは男女が抱きあつて、スローテンポに合して揺れるように、ゆるやかに踊つている、それにつれて照明が煽情的に動く。

フロアはかなり混雑している、ふと見廻した、宮井の眼に異様なものがうつゝた。

「おやッ」

小さく叫んだ、その異様なものとは、このホールの雰囲気とは、およそ縁の遠そう

「今晚はほんとうに変ね、ラストまでのお約束だったのに……まだ、そのあとを楽しみにしていたのに」

甘ったれた鼻にかゝった声を、不平そうにボククスまで持つてきた。

「待つてくれ、少し考えたいんだ」

宮井はそう言いつゝ、フロアへ視線を走らせたが、もう坊主頭は見当らなかつた。

「どつかで見たやつだ」

呟くと、

「よほど気になるのね……いゝじやないのあんな坊主のこと、それより約束を忘れちゃいやよ、わたしは、こんなのよ」

輝子はよりそつて宮井の手をとり、自分の胸へあてた。

「大変な動悸でしょう」

「うゝむ」

「気のない返事ね、踊りがいやだったなら、さきにアパートへ行つて待つてゝちようだい、ね、ねッ……」

また笑つた。

「輝子が、知つているんだね」

「知つてゐるわ、名前だけ」

「なんて言うんだ」

「安尾了海」

「了海、名まで抹香くさい、だが、僕は坊主に知己はない」

「じやあ、わたしすぐ帰るから」

輝子は、黒のイブニングドレスをゆらゆらさせながらフロアの方へ降りて行つた。

二

飲むまいと思つたんだが、変に坊主頭がしこりとなつて、うつうつと楽しくなかつた。

大阪新聞社裏通りの、腰かけ料理、鍋市

で蛸の足をしゃぶりながら、一級酒の盃をちびりちびりなめていると、

「おやぢ、一本たのむよ」

と、さびのある声が、のれんをわつて入つてきた。

ふり返るとあの坊主だつた。

「おゝ宮井君奇遇、奇遇、一夜に二回も逢うなんて、神いまだに見捨てたまわらずか」

「神ではない仏だろう」

「それに違ひない」

どさりと、となりの腰高椅子へこしかけた。

「このごろどうしている」

変に馴れ馴れしく言う、どしがたき野郎だと思つていたが、少し酔の廻つてきた頭は、さいぜんのように坊主頭が氣にならなかつた。

「いぜんとして、うだつがあがらぬ、君は？」

「おみかけ通り、尾羽打ち枯したこのていたらくだ、抹香の臭いだけは一人前だがアハ……」

「やつぱり坊主か」

「年来の希望を達したわけだ、宮井、それでも君は、もう課長さまだろう、大日本海運株式会社庶務課長宮井礼次郎、字面がいゝや」

なにかもこの坊主知つてやがると思ふと、変に不安なものが感じられた、だが、いまさら

「君は誰だつて」ときくわけにもいかぬ、どうせろくな坊主じやなからう、ホールでチークダンスなんか踊つて、その足で棚経をあげる、仏も浮かばれぬだろう。

心のうちでは毒舌をたゝいたが、なんとしても、この男の正体がつかめないのには

参つた。

「りよ、了海君」

名前だけは知つていゝ、ざまみろという顔になつた。

「わしの名を知つていてくれるか、南無阿彌陀仏」

了海も相当酔がまわつてゐる。

「宮井君、輝子を可愛がつてやれよ、あれは純情無垢な、聖観音さまのような女じや」

「君の女だつたのか」

「なかなか、もつと深い縁しのある女じや」

「馬鹿野郎、この破戒僧め」

拳をふりあげると、鍋市の大將が、天ぶらはさみで、その手首をきゆつとしめた。

「宮井さん、喧嘩やつたら、駅前広場でやつとくんははれや、はたのお客さんにも迷惑やし、第一、店の什器がいたみまつさ」

「すまん、すまん」

拳をひろげて盃をつまみあげた、宮井は暴力をふるうような柄には産れていない。

どうしたきまぐれか、鍋市、南光亭、花の家と、了海とからみあつて飲み歩いた。

意気投合とはこのことであらう。

三

いつにない、明るい陽のあるうちに、アルコール抜き素顔で、宮井は江成町の我家へ帰つてきた、こんなことは珍らしいことである、酔うて帰るか、さもなくば、輝子のアパートで夜を明すか、超アブレゲールぶりを発揮する宮井だのに……。

玄関まできこえてくる読経の声に、しばらく立ちどまつていたが、

「なあんだ妹のやつ、仏心を出したものだ」

と呟いたが、ふと十三日というのがまざまざと頭に泛びあがつた。十三日は母の命日である。

素顔で帰つたことゝ、母の命日とが、なにか因縁があるように思えて、宮井は背筋に寒さが走つた、長いこと父母の霊前に手を合したことはないと思ふと、妹綾子の心づかいに、ずんずん頭がさがつてきた。玄関の戸を静かに開けた、思はず袴を正すような氣になつた。

足音をしのばせて二階へあがつた、読経は重く軽く、抑揚をつけてたんたんと流れる。輝子の隙間からそつとのぞいた。思はず、あつと声が出そうだった、了海の青い頭がつんと立つてゐる。破戒僧めと思ふと、お経の文句までが疑われてくる、宮井は輝子の外にしやがでなかの様子をうかがつてゐた。

「たあ……れえ……ほう……にい……ん……さあ……こう……やあ……あ……」

「けえん、と鉦が鳴つてお経がすんだ」

「南無阿彌陀仏々々」

ちやりちやりと、硝子玉か水晶かしらぬが大玉の珠数をもんだ、ぼしやぼしやと了海がつゝいて呟いた。

「綾子さん」

馴れ馴れしく呼ぶ声は、俗人の感情になつてゐる。

「ありがとうございました、ちようど母の命日だったので、うれしかつたわ」

綾子の言葉も普通でない。

「ねえ綾子さん、宮井君に話してくれませんか」

「まだなの」
「駄目じゃないですか、僕は待つてゐるんですよ」

全くの俗人である。じつとなかの様子をうかがつてゐる宮井は、再び「あつ」と叫びそらだつた。

了海が綾子を膝に抱きあげるなり、唇を合わせたのだつた、最早や凡てを許しあつてゐる仲らしい、なにおか言わんやである、哑然とした思ひである。

息ずまるような長い接吻であつた。

「もう、凡てを許して下さつても」

燃えるような了海的眼である。

「いや、いや、それだけは勘忍して……」

きいて宮井はなにか胸のつかえがおりたように思つた、足音を忍ばせて階下へ降り

「綾子、綾子」

と呼んだ。

「はあい、お兄さん」

くつたのない声である。

「なかなか、やりよる」宮井は苦笑した。

いく分上気した顔で綾子が降りてきた。

「今日はどうしてこんなに早く？」

「母の命日だ」

「あらッ、よかつたわ、ちようどお坊さん

にきてもらつてゐるのよ、早くお二階へあ

がつて下さい」

綾子はいそいそと梯子段をのぼつた。

「兄が帰つてまいりましたの」

「ほう、宮井君が」

障子を開けると、了海は台風一過、なに

ごともなかつた顔をしてゐる、綾子よりは

役者が一枚上である。

じいつとみつめてゐると、宮井の頭にふ

とある情景が浮んできた。

大日本海運の守衛室である、終戦直後の

混乱時代だつた。

「僕はもう月給取なんかにはならん、坊主になる、坊主が一番いゝ商売だ」

守衛長の大倉だつた、その大倉が頭を丸めて目前に控えてゐるのだ。

宮井はようよう了海の正襟をつかんだが

まさか、大倉だつたのかとは、いまさと言

えなかつた。

「このアブレゲールの破戒僧め」と敵愾心

をあふりたてようとしたが、少しも憎めな

かつた。

「宮井君、一ぱい飲みに行こうじゃない

か」

墨染の衣の主には似合わない、俗人の言

葉である。

「破戒僧め」

「坊主だつて人間だ、蝟も食べば酒も飲む

さ、さあ行こう、線香臭いお布施でも金に

はかわりはないんだ」

了海は、そう言いつゝ、御布施の包紙を

だして、ぼらりと畳の上においた。

「ふん、坊主三日すりや、なんとかと同

じだ」

了海は封をきつて百円札をそろえた。

「三本ありやちよつといけるよ、さあ行こ

う、蝟の足でもしやぶりながら話そう」

了海は立つて衣を脱いだ、衣の下にはち

やんと背広を着込んでゐる。

「用意周到だね」

「そりや七変化だよ」

革のさげ鞆からチョコレート色の短靴を

出し、衣の袖でごしごし靴を磨いた。

靴をだしたあとへ墨染の衣をくるくると

丸めて突つこんだ。

「了海君、あまり脱線するなよ、それより

お経をならえよ」

「こいつは耳が痛い、だが、お経なんか眠

はないよ堂意即妙、すらすらと創作できる

よ、たあ……れえ……ほお……に……ん……さ

あ……こう……やあ……あ……うまいもんだろ

う、有難そらだろ」

了海はろろろと抑揚をつけて唱えた。

「うまい、大したものだ」

「だが、こいつは、綾子さんに惚れたを逆

に呼んだだけのことさ、万事この手法だ」

「あきれた坊主だ」

そばで綾子は真顔な顔をしてゐた

「多僧智識とはさつとこんなものさ」

了海はしやあしやあとしてゐた。こんな

坊主を好きになるなんて綾子も変り者だ、

と思いつゝ、宮井は二人の顔を交々みつめ

てゐた。

四

花の家自慢のかれの天ぶら料理、了海は

がりがりかじる、青坊主、真緑な顔、白い

歯がまるで牙のようである、丹波の大江山

酒呑童児の再来かと思ふばかり。

「宮井、飲めよ、今夜は僕の散財だ、三本

がとこいてしまおう」

「生臭坊主」

「まだまだ序の口だよ、パンパンだつて買

りよ、僕は聖僧ではない、俗僧だ近代的僧

侶だよ」

天ぶらを、がりつとかじつた。

「宮井、今度の日曜日奈良へ行かないか」

「奈良？俗氣を起すなよ」

「僕は人間だ、奈良への行楽もいゝよ、青

葉若葉、眼にしみる奈良の初夏……たゞし

条件があるんだ、アベツクだよ、こんどの

日曜日だ」

ぐいぐい強引に詰めよせてくる了海坊主

におしまくられて、否応なしに宮井は承諾

ともなく、うやむやに約束してしまつた。

「そろそろきまれば次は青春享樂の常道、ホ

ールへ行こう、だが、君の行くホールは僕

は苦手だ……君はあすこがいゝんだろ」

「新世紀……」

「うん、ちよつと」

「大体、ホールと坊主なんて融合しない

よ」

「莫迦言え、寺の本堂がいくらでもホール

になつてゐるよ」

「そらだつたなあ」

「とほけるな」

「僕も実は新世紀は少しいや気がさしてい

るんだ、それと今度の奈良行、僕はどうも

乗氣がせぬよ、やめるよ」

「やめるッ、承諾してから舌の根もかわか

ぬさきに變更するとは、地獄行だぞ」

「どうなと勝手にしろ」

宮井は奈良行の条件が氣に喰わなかつた

了海坊主には綾子がある、だが自分には、

あれから、一度も新世紀へは顔を出してい

ない「もつと深いえにしのある女だ」とい

う了海坊主の言葉にこだわつて、輝子の情

熱がつけ焼刃のように思え、あの肉跡が汚

らわしくなつてきてゐた。

輝子のあの技巧が、了海坊主の秘伝であ

るテクニック再現だと思ふと、耐えることの

できない屈辱を感じる、誰か輝子に伝授

しなければ身につけ得られぬ、老巧な技巧

を会得してゐる。

「べつ」

宮井は外へ出て路傍へ唾を吐いた。

「もう帰るのか」

さびのある声がおつかけてきたが、宮井

は橋樑交叉点の方へ、急ぎ足で去つた。

新世紀のホールの魅力がぐいぐい、うしろへひつばつたが、それをふりきつて宮井は桜橋から西への電車に乗ってしまった。

五

「綾子どこへ行くんだい」

日曜日の朝、破約したつもりであつたが早くから綾子が外出の準備をするので、皮肉の一つでも言つてみる気で、宮井は台所へ顔を出した。

綾子はせつせと、寿司の折詰をつくつていた。

「どこへ行くんだい」

パジャマのボタンをひねくり廻しながら再び尋ねた。

「わたしだつて、たまには郊外へも出たいわ、新緑の若葉香る、箕面公園よ、婆や相手に家のなかでくすぼつていられないわ」「そうでございませうとも、ゆつくり遊んで来なはれ、留守はわてがちゃんと守つていまつさ」

二三日前に雇つた婆やは氣さくに言つて綾子の肩を持つた。

「反対はしないよ、青春時代、大いに享樂すべしだ、箕面なとづかなと、奈良なと、どこへなと行つてくるんだね、だが、誰と行くんだ、父母なきあと、僕には責任があるから」

「ホ……兄さんじやあるまいし、監視なんて全然いらぬわ、わたし変なひと、行かないわ、女学校時代のクラスメード……日曜だから、兄さんはお留守？」

「留守はできないよ、僕だつて若いんだからね、たまの日曜日だ郊外へでも行くか、しかし綾子、早く帰つてくるんだよ」「え、兄さん、お弁当いらぬい」



「そんなものはいらない」
言い捨て、二階へあがり、また寢床へもぐりこんだ。

綾子め、破戒僧と……胸がくしゃくしゃして、奈良へなど行く氣がしなかつた。坊主と綾子のアベック姿の前で、しょんぼり

と立つ、みじめな姿を想像するとたまらなかつた。

そんな悲慘を味うよりも、発売禁止になつたのを無理に入手した、秘蔵書チャタレ夫人の恋人でも読んで、大いに羞恥醜態の情を感じる方が有意義ではなからうか、そんなことをぼんやり考えながら、煙草の煙をふきあげていた。

「行つてくるわ」

入口へ姿を見せた、綾子の清々しい初夏の洋服、美しく清い、この女を坊主めが、ちよつと嫉妬を感じた、だが綾子の言葉を信ずれば、了海坊主と同行の筈ではないか「早く帰つてくるんだよ」

兄らしい応接さと威厳をもつて言つた。「兄さんもおでかけだつたら早く帰つてね」

「うむ……おい綾子、自動車を呼ぼうか」「結構よ市電で行くわ」

とんとんと階段をおりてしまつた、綾子が出て行つたらしく階下は急に静かになつた。

とり残されたようなさびしさがおしよせてきた。

僕は特急の機関手で可愛い、娘が駅毎にいるけど三分停車ではキスする暇さえありません

東京、京都、大阪……特急と怒鳴つてみたが、氣は少しも晴れなかつた。

チャタレ夫人の恋人も、冗談グループの歌も、宮井の寂寞は救つてくれなかつた

六

綾子が出て行つてから小一時間は経つた

であろう。

自動車が家の前で止る音がした。

「おうい宮井ッ」

あいつじやないかしらと自動車の止つたときに思つたのが的中して、破戒僧の怒鳴る声がした。

婆やとなにか、しばらくぐたぐた言つていたが、やがて梯子段のこわれるような音をたてゝあがつてきた。

「どうしているんだ」

破戒僧が颯爽と入つてきた、合の背広を着こんではいるが、抹香の臭いは抜けていない、線香屋の前を通るような匂がする

「寝ているんだよ」

不貞腐れたように言つた。

「早く支度をしてくれ、自動車を待たしてあるんだ、君が来なけりや意味ないよ」

掛布団はとる、敷布団はめくりあげる。

パジャマの釦ははずす、世話女房もかくありなと思うが、それにしても少々手荒い

「朝めしもまだよ、顔だつて洗つてやしない」

「早くしろ」

階段のおどり場へ出て、

「おうい婆やさん、洗面道具を持つてあがつてくれ」

と怒鳴つたかと思うと、南側の窓から顔を出して

「運ちゃん、三十分ほど待つていてくれ、客待賃は支払うから」

と、怒鳴る、一人三役の大活躍である、了海坊主の頭からは湯気の立つてゐるようなもの凄さである。

「宮井、輝子も来ているよ」

「ええ」

「新世紀の輝子だよ」

やつぱり来てやがる、げんなりした氣持になつた、坊主め、こともあらうにアベツク行に僕の女をむしりとつて……、むくむくと怒が腹の底から盛りあがつてきた。それと同時に、よし輝子め、どんな面をしている見てやりたい好奇心もわいてきた。思いつきり面罵して、奈良行をぶつこわしてやる、そんな悪魔的な氣になつた。

「そう急がせなくても行くよ」

七

市電、桜島線を東へ自動車はまっしぐらに走る、偕行社でカーブしたと思つたとたん、左側へ、青葉ごしにお城のやぐらが見え、行楽、ふと、そんな想像がわきあがつてきた、馬場町B K前を瞬に過ぎ、やがて前方に、近鉄のビルが、走つてくるように近づいてきた。

と、ともに宮井の胸は高鳴つてきた。

「輝子め、どんな顔をして僕に接するだろう」そんな氣持が宮井をおちつけなかつた

赤信号。上六交差点で信号待ち停車、その僅かな機会にも、宮井は鋭敏に視線を走らせて、輝子の姿を物色した。

いる、いる、ビルの西側、輝子は顔をほてらせて、自動車を迎え、また送り、眼はくるくると動いている、了海坊主を待つて

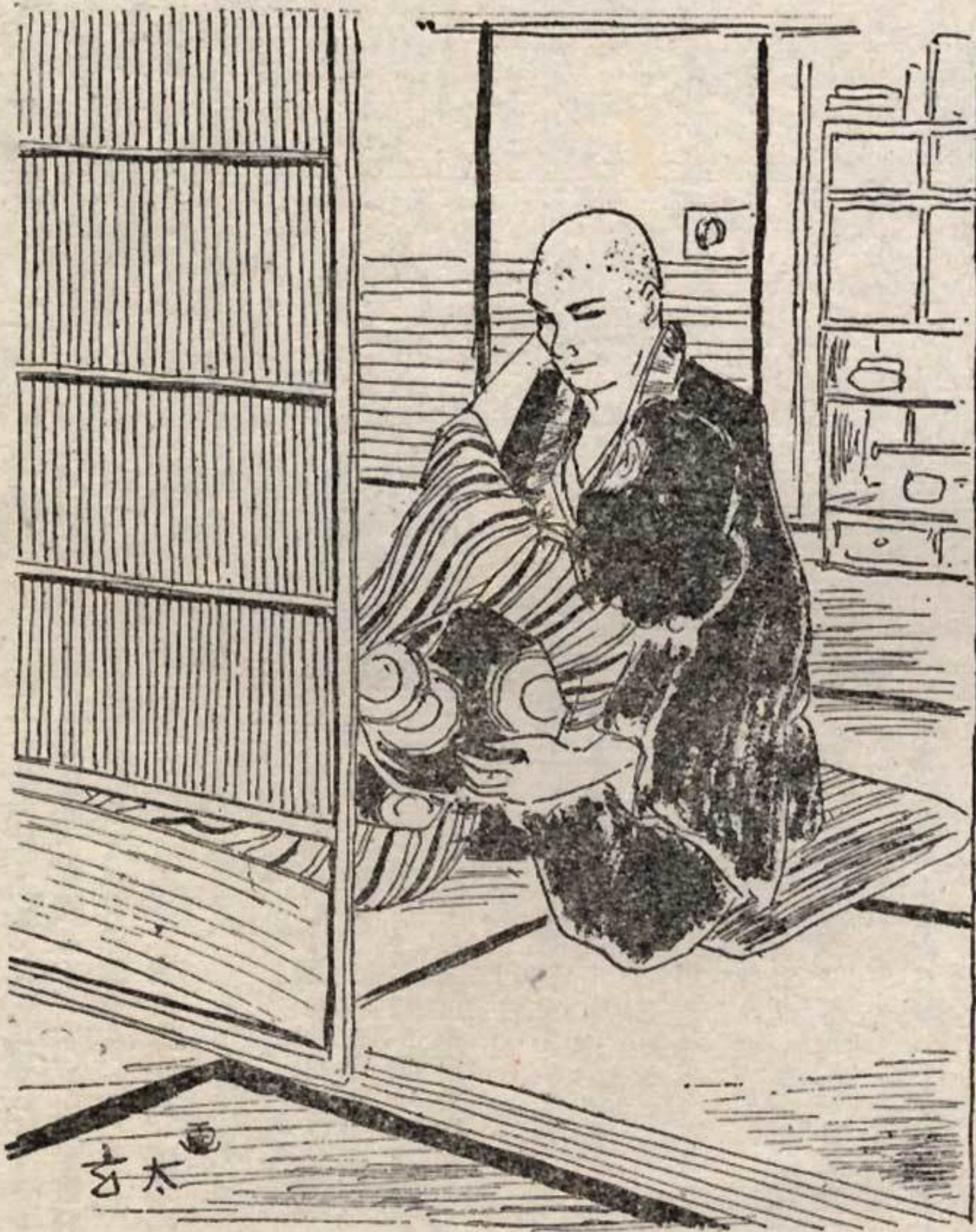
いるのだろう。

「いまにみる」

なんとなくそんな氣がした。

自動車がとまると、逸早く駆けつけてきて、ドアをひいた。えん然と笑を泛べた輝子が自動車のなかをのぞいた。

宮井はふいつと横を向いて、さつさと降りた、そのくせ五官を異常に働かせて了海坊主と輝子の挙動に注意を怠らなかつた。



「宮井さん」
輝子の甘い声が近寄つてきた。
「少しも、この頃、お見えになりませんの

ね」
「はあ」
「交ね」

人混みのなかでも、輝子の鼻息は強く宮井の鼻を刺戟した、官能をそり立てる句である

「了海坊主は？」

「あらいやだ……」

宮井は急しくあたりを見まわしたが、青坊主は忽然と姿を消していた。

「あの破戒僧め、どこへ失せたかな」

(漫画)

結婚

さわたり・昭治

「ヨーツ、どうしたい、そんな大きいつかい棒をして」

「結婚するんだヨーツ」



口汚く罵った。

「どうでもいじやないの、さあ行きましよう」

思いきり輝子を面罵してやろうと思つていたのに、破戒僧の遁走が、宮井の心の計画をくつがえしてしまつた。輝子と二人きりならわるくない、ふとそんなことを思つた。

夫婦展示會 風流太郎

◎御心配無用

夫「お前、俺の出張している間にバカにキッスがうまくなつたじやないか、誰に教えて貰つたんだい？」

妻「心配しなくてもいいわ、通信教授よ」

◎幻滅の悲哀

夫「今日街でね、ウシロ姿のとても素晴らしい女を見つけて、後をつけたんだけど途中でがっかりしてやめちやつたよ」

妻「その人がふりかえつたら、変な顔をしてたんでしよう」

夫「うん、俺とこの家へ入つていつたんでね」

◎観賞無料

夫「この畫、どうだい？ちよつと形が面白いじやないか！」

妻「やめてよ、そんな安物をひねくり廻すのはみつともないわ。あつちの美術品陳列場の方へ行きましよう。どうせ買わないんですもの」

◎身の程を知れ

妻「あなた！この店、もうこれだけしか、スタイルブックないのかしら？」

夫「お前のうしろに鏡があるよ」

人混みを、腕を組んでいく輝子の肉体的感觸が、むづむづと宮井の官能をかきたてた。

「男つて他愛のないものだ」宮井はそう自嘲しながら、人波に押されて改札を出て行つた。

「おうい、こゝだ、こゝだ」

人並、図抜けて背高の了海坊主が大きな声で呼んでいる、乗車口に列をつくつて待つてゐる、聖僧の仮面をかなぐり捨てた了海坊主は、俗氣の多い市井人になりきつた声で、

「早く来んか」

と怒鳴つた。

「行くものか」と心で反撥した、輝子をつれて行つてまで、坊主におべつかをする、そんな必要も責任もない。だが、

「さあ、行きましよう」

強引に輝子にひつばられて、了海坊主へ近づいた。

「おやッ」

宮井は了海坊主の陰で小さくなつてゐる綾子をみつめて呟いた。

驚くことはないが、綾子の嘘がいじらしかつた、箕面公園は阪急にあるはずだが。

「宮井、箕面公園が今日は移転したんだ」

了海坊主がにやりと笑つた。綾子は真赧な顔をうつむけていた。

「宮井、輝子は僕の妹だ、破戒僧の兄にして、ダンサーの妹ありか、よきコントラストではなしかアハハッ……」

とてつもない大きな声で笑つた、その声は無人の境を行く如き、傲岸無礼の響きだつた。

「女房より深い縁しのある女、の意味が判つただらう」

あたりかまわぬ大声である。

「宮井さん、兄たちとは別の車に乗りましよう、気分がこわされてしまふわ」

輝子が大胆に、宮井の背をきゅつと振つた、常套的な愛情のテクニックなのである。

「痛いよ」

とさゝやいて、スカートの上からお尻をそつと振り返した。

「輝子、もう奈良へ行くなどよそうじやないか」

「だつて、兄にわるいわ、それに奈良だつて……」

見上げた輝子の眼はうつとりと濡れてゐた、大胆な露出的嬌態である。

「奈良にだつて？」

「あるわよ」

人混みを利用して、宮井は腕に力を入れて、輝子の腰をくつと抱きよせながら、奈良行電車に乗つてしまつた。

了海坊主は、どこに乗つたか、そんなことはもう宮井の念頭になかつた。

アベツクの行楽には、犬の仔、猫の仔、四でも邪魔ものである。

二人きりだつたら、息もつまるような長い接吻をするだらうに、それもできなかった、心のうちに燃える情熱を、宮井はもてあましてしまつた。

かてゝ加えて、揺れる電車はなお罪をつくる、輝子の肉体的感觸が、宮井の妄想を逞しく盛り育てゝくる。

「輝子」

そつとさゝやいた。

「えゝ」

見合した顔、輝子の眼の光は、燃えあがつてくる情熱を、必死になつて抑圧している色だつた。

(了)



エロとユモアをふんだんに盛り上げて、下痢をしない程度に料理して食膳へ出したのが、この三つの飛切奇拔色好み短篇集である。眉にツバでもつけてゆつくり読んで呉れ給え。

裸女像自壊

莖 亞 久 津

(1)

「これは素晴らしい——」
鴉鵲堂は、禿げた頭へ手をやって、感に堪えた声で云った。目は女の乳から局部への線に釘付けしたまゝである。

「では、これにさいますか？」
「えい、これにします」

——真白な肌。触れれば冷たからう滑らかなキメのこまかさ。秘のよううに盛り上つた乳。腰から臀へのまるみ。内股の、かすかなゆがみに震えている筋肉。背の高さは五尺一二寸か。一条纏わぬ全裸。

鴉鵲堂は、さすがに肌を手を触

れることはしなかつたが——片時堂主人の持物となつた。

をあげて腋の下を見せ、みだらでない程度に股をひろげ、心持ち首

をかして上向き、全く微動もしない女体の周りを、ゆるゆる見て回つた。非の打ちどころがない。

「なんぼだ？これ」

「はあ、とことんお負けしましてこれでございます。」

いまだき珍しく和服に角帯を締めたこの美術商は、傍の算盤を取上げて、パチパチと弾いて見せた。

「二万一千、ま、二万やな。よろしおま、貰いましょ」

こうして素裸の石膏美女は、でつぷり太つた奈良の筆墨商、鴉鵲

(2)

「おまアんは誰や？誰やな？」

鴉鵲堂は、干いた喉に、生まつばを呑み込んだ。

「そないびつくりせんでも。——」

屋買うてもろうた石膏ですがな」

「あ？屋の？」

「さいです。お情にほだされて、夜伽にまいりましたの。つまり、サーヴィス上」

「えッ？」

夢を見ているんじゃないか、と反問した。今日思わぬ性感を刺激される妙なる彫像を手に入れて、十年若返る気持になり、つい祝杯

のウイスキーを過ぎすぎ、そのまゝ寝込んだまでは覚えている。

「小父さまは、まだお若いんでしよ？いけるんでしよ？」

愕いて灯をつけようと枕スタン

ドへ伸す手を、女は押える。

「まだ早いわ。その時がきたら、見させてあげるわ」

「いかん／＼。頭が痛い。もうこの歳になると、下の方はさつぱりじや」

「わりに早寝なんですね。それじやあたし、加勢してあげるわ」

「御免蒙る！触らんとしてくれ！腑に落ちん。お前が、わしのよう

なものに情を持つとは心外や」

「そう。あたしもとく、人間なんて好かないの」

「そらそうやろ——」

「人間以外の動物が好きよ。取分け、猛獣がいゝわ」

「ほい、変つてゐるね——」恐怖は余裕をもつて、いつか興味へと変つてきた。何しろ、相手は女である。

「こないだ天王寺の動物園へ、浮気の相手探しに行つたの」

「へい。で、見つかつた？」

「まず錦蛇。だけど、あれは大きすぎるわね」

「御尤も——饅くらいなら無難やが」

「混ぜ返さないで。山嵐もいた



わ

「あんな針金細工に、抱かれないんか？」

「幾らなんでも御免よ。——馬もいるのね、動物園に」

「牛もいる」

「珍しくもない。馬は、仕事もなしに欲情だけしていたわ」

「目の前で——？ たにしの頭見せてかい？ あんなのどうや？」

「止してよ。露出狂には魅力がない。——それよか、鶴、鷺、おしどり、せきれい、雁、鴨、には、しぎ、白鳥、五位鷺、鶴、あひるぼん、ここのとりと何百羽と飼つてある大きな鉄傘の網の中ね」

「あゝ、中に池や樹のある」

「えゝ、岩肌は真白に乾いた下痢便だけど、あたし、あの中で、このまゝの姿で佇つていたいと思つたわ」

「しよむない空想やな」

「でも、あれがあたしの理想だつたわ。でなきや、虎がいたけど、あの虎となら、一緒に夫婦暮しをしてもいいと思つた」

「おやゝ、愛咬のついでに、身ぐるみ食てしまひよるで」

「そこに悩みがあるの。——どう気分は？ 催しません、こんな話をして」

「なんの話？——いや、いつこ

うに」

「じや最後の手段、暴力を揮うわよ」

「な、なにをする！ く、苦しい——」

鴉鵒堂は、悲鳴をあげた。女の胸を払いのけようとするが、腕に力が入らない。女は、裸のまゝ、鴉鵒堂の上に馬乗りになり、弾みをつけて揺さぶり出した。

「い、いかん！ おまえ、お、おれを殺すのか！」

「大きな声出すんじやありません苦しいのはいつ時よ。こゝを過ぎれば、すぐに極楽——」

「うわーッ。た、たすけてくれ

え。……うい、うーつうッ」

「うーつ、うッ！」

何か物の壊れる音が、このとき鼓膜の底でしたように思つた。しかし鴉鵒堂は、歓喜の息をついてどつと押寄せる疲れでそのまゝ眠り込んでしまつた。

(3)

朝、遅く目を覚まして起き出ていくと、老婆が顔色を変えて怒り出した。

「あんた、なんぼわてが根性ある云うたにしても、あんなにしてしまわんでも、よろしやないか！」

「いきなりなんのこツちや？」

「きのうあんたが買ってきた女の体や」

「えッ？」

すぐ引返して書斎へ入つてみると昨夜テーブルの上に立てゝおいた等身像が、見るも無残に背丈は消えて粉々に大小のかけらと化している。

鴉鵒堂は、且つ驚き且つ怪しんだまさか、老婆が自分で壊しておいて逆手を取っているのではあるまい。

「一万円？ と、訊か

れるまゝに半値に落して話したその金高の惜しさに、正銘腹立てゝいるのであらう。第一、この壊れ方は老婆の手とは背けない。木ッ端微塵だ。

それにしても、どうしてこんな結果になつたのだらう？ ゆうべ、夢ともうつゝとも判断つかず、この女像と契り結んだのは確かだがすべて奇怪の一語に尽きる。

不可能な思いで一片々々、ジグザグに割れたかけらを選び分けてみると、中の方に白い紙切れが目についた。取出してみると、片かなで小さな文字が連ねてある。

「ユウベハ、アイシテクダサツテアリガトウ。アナタに買ワレルマデドノ男ノヒトカラモ向ケラレタ視線ガ、アレニカンスルモノデシタ。ヒル、アナタカラ受ケタマナザシモ、例外デアリマセン。アタシノ体内ニ、ソレラガ鬱積シテ、非情デアルベキ私ニ、火ヲツケテシマツタノデス。

芸術ノ神ノオキテニソムキ、欲情ヲモヨオシタワタクシ、アナタニモトメタ抱擁ノ絶頂ノシユンカシニ、カク私ハ、自滅イタシマス——」

呆氣に取られて鴉鵒堂は、まるで怪異譚中の一編を、今様に読んでゐる気がした。

——(終)——

屁をともし女

天 宮 將 吉

一

梅の間とか、竹の間とか、古風の、ありきたりの呼び名で呼んでいる。

沢根牛之助を案内した部屋は、松の間とかいうことで、なるほど、窓ガラスを開けると、庭には目につく松が一本植えてある。その向うに、真竹が二三株植わっているのが見られる。あれが竹の間であらう。

女中は、牛之助より二つ三つ年上かと思える目の大きな、自在に表情をやつる術を心得た女である。三十三三と思われる。

牛之助は、勤め先の夏季慰労休暇を利用して、鮎釣りで名高い吉野川の上流、霊場として有名な大峯山の麓へ二泊三日の旅で遊びに来たのだつた。うまく行けば、釣道具を借りて鮎を釣り、清冽な吉野川の流に泳ぎ、夜は鮎の塩焼にビールを飲んで螢を眺めに河原へ出掛け、避暑納涼のレクリエーションを一人で充分味わつてくるつもりであつた。

「お一人とはお珍しいですのね。」

お淋しくありませんか？」

「淋しいところへ、と思つて来たんだよ。一人に限るね、旅行は——」

出バナを折られて、女中は笑い顔になつた。でも、近ごろは、みなアベツクの二人づればかりだわと心の中で思つた。——この人は変つてゐる。

「何か、お書きものでもなさるんですか？」

「とんでもない、字も絵も下手の骨頂ときいてゐる。これ出来るかね？」

女中は驚いた。男が、右手の人差指を一本立てて、ピンピン動かしてゐる。

「アラ、まあ……」

「貸さない？ 道具——」

——男の表情がまじめだし、ちよつと様子が違うことに気がついた。しかし迂闊な受け答えは出来ない。顔を見て笑つてゐると、

「獲れるんだらう？」

「エ……」

「やはり塩焼くらいかね、天ぷらにはしない？」

それで、鮎のことだと、初めて

分つた。風ひなか、おまけに会つた初ツバナから、あの方の申込みとは、何んぼ何でも早すぎると思つた。

「御注文があれば致しますわ、天ぷらにでも何にでも」

「それよか鮎ずしの方がいいかも知れんな」

「釣の方は相当なさるんですか？」

「ところが、二三回誘われてハスを釣つただけ。何しろ、こんなところへ釣道具を持つてこない程だから」

「釣なんて退屈じゃないのか知ら？——好きな人には、たまらないらしいけど」

「退屈するかも知れな、あんたのような美人と話してゐるのに比べ」と——

「アラ御冗談……」

そう云つて打つ真似をし、目の相をくずした。

「道具お入用なのでしたら、帳場でお聞きしましょうか？」

「まあいい、後のことにする」

御用があればベルを鳴らしてくれ、出て行つた後で、座布団を二

つに折つて、電車を降りてから二時間もバスに揺られてきた体を休めてゐると、又入つてきた。

「生憎、釣の道具あいたのないのですつて、——若し、どうしてもお入用なら、何とかすると云つてますが」

「いや、い——」

寝たまゝで牛之助は仰向いて答えた。

「お夕食、何か御注文ございません？」

「ビールがあれば、二三本。それに塩焼でね」

「ほかに？」

「なし」

「お眠りになるんですしたら、お布団敷きましようか？」

「いやよろし、——何とか云つたあの温泉はどうなんだね？」

「塩ノ葉ですか、——湧かないですよ」

「相当ボーリングを掘り下げて、有望なように聞いていたが」

「一時は出たんですけど、容量と温度がそれ以上に上らないんで、経営出来ないらしいんですの」

「費用倒れに終つたわけか——」

「そうです。——うちのお湯沸いてますから、いつでもお入り下さい」
それで、ちよつと体を休めてから、牛之助は浴衣に着換えて湯殿へ行つた。

二

その夜、夕食の給仕をしながらこの女中は面白い話を聞かせた。面白いと云つても、当人に取つては、悲劇である。

竹の間に泊つた新婚の夫婦が、よる便所へ行つた新妻が部屋を間違えてこの松の間へ歸つてきた。灯が消えてゐるので、新夫の傍に添寝するつもりで、この部屋に泊つていた四十男と枕を共にした。

四十男は、この宿屋は中々いゝ所へ気がつく、女まで取持つてくれるとは有難や、と喜んで好意を無にしなかつた、花嫁は、途中で氣付いて驚愕の声を発したが、もはや如何ともなし難い、男も、泣くな泣くなと慰めて、さて後から事の一端始終を聞いてびつくりした。しかし後の祭で、新夫に対しても、又この花嫁に対しても、慰料を払つて片付く事柄ではない、それにしても、慌てたこの宿屋の主である。何しろ、部屋を間違つたのは花嫁であるが、また、宿屋の方で間違わせた、とも云えるからである。潔く、大の男二人が畳に頭をすりつけて、懺悔し

ている新夫に謝りつづけた。今更
なんとも怒り様がないので、青白
く俄か瘦せた青年は、すべて災
難とあきらめます、と顔をひき吊
らせた。お蔭で宿泊料一切無料の
上、そこばくの見舞金（これは四
十男から出た）を受けて引揚げた
が、気の毒ながら、今後後々まで
純真に夫婦喧嘩は出来ないこと、
思われる——。

「僕もそんな目に会つてみたい
な」

もうビールの酔が廻つてきてい
るので、牛之助は、人の不幸より
も滑稽味の方を感じる度合が強い
「アラ御奇特な——、お嬢さんを
人様に差上げなさるんですか？」
女中はわざと間違わせている。

職業柄ちつとはいけるのか、差さ
れるコップを掴みはせず、目元を
ほんのり染めて——。

「違ふよ、間違つて貰つた方だ
よ」

「間違つて貰わなくとも、さぞ御
不自由はないでしょうに」

「左にあらず。独身だよ、僕は——」

「独身でも、今日び」

「謹厳だよ」

と、女の膝をひねる。

十一時ごろに、目が覚めた。こ
んな山の中では、この時刻になる
と、盛夏の候でも都合の五月の気
候だ。それに、この時刻は、二時
三時の真夜中に当る。

足音をしのばせて誰か廊下に来

たな、と思つていると、するく
入口の戸を開ける。誰かね、と云
おうとしたが、思い返して牛之助
は黙つた。

宵に、すっかり氣脈を通じてお
いたつもりなのだろう、果して、
この間の受持ちの女中であつた。
布団へ入つて来た。——

男から男へ渡り歩いていく肌だ
と思つたが、それならそれで、牛
之助の出方があつた。嫌々応じて
きているわけでもない、多情女
の色好みには、流石の牛之助を心
底から眩惑させるものがあつた。

三

「風呂は——？湯は冷めてない
？」

「冷めてないと思つた。朝でも熱
いくらいだから」

うつとり何かを追憶している風
情で、女は答える。仰向いている
顔に豆球の青い灯が落ちる。

「汗を流してこよう——」

猿又一つに手拭一本持つて、湯
殿へ下りていつた。湯は、女の云
つたように熱かつた。つかつてい
る、又女が入つてきた。

「あたしも流すわ——」

「いゝのかね、人に見つかつたつ
て」

「大丈夫、白河夜舟よ、みな」

そらいつて前湯を流すと、その
まゝ湯槽へ入らずに、手拭を当て

たまゝ外へ出ていつた。そして煙
草とマツチを持つてきて、一本喫
わない？と、湯の中の牛之助に一
本を差出し、自分でもくわえて、
火を擦つた。弱い電光が、ボンヤ
リついている紐を引いて、女は灯
を消した。互いの煙草火が、章魚
の口先のような恰好で、時々、明
るく明滅する。

シガレットを濡らさないように
啜えつきり二人はすばく喫つ
た。炎の落ちるのは仕方がない。
女は、喫いさしを、ベツとタイ
ルの外へ吐いて、ざーッと湯を流
し、いゝものを見せてあげましよ
うか？と云つた。

うん、と牛之助の煙草の火が、
上下に動く。

「マツチ濡れてないか知ら？」

と、しぼりタオルで両手の水気
を試つてから、窓枠へ手を伸し、
足のさきで湯の中の牛之助に触れ
に来ながら、マツチを一寸シユツ
と擦る。

「点くわ——。手品よ。こんな実
験見たことないでしょう」

そう云つて、ウム、力み返る。

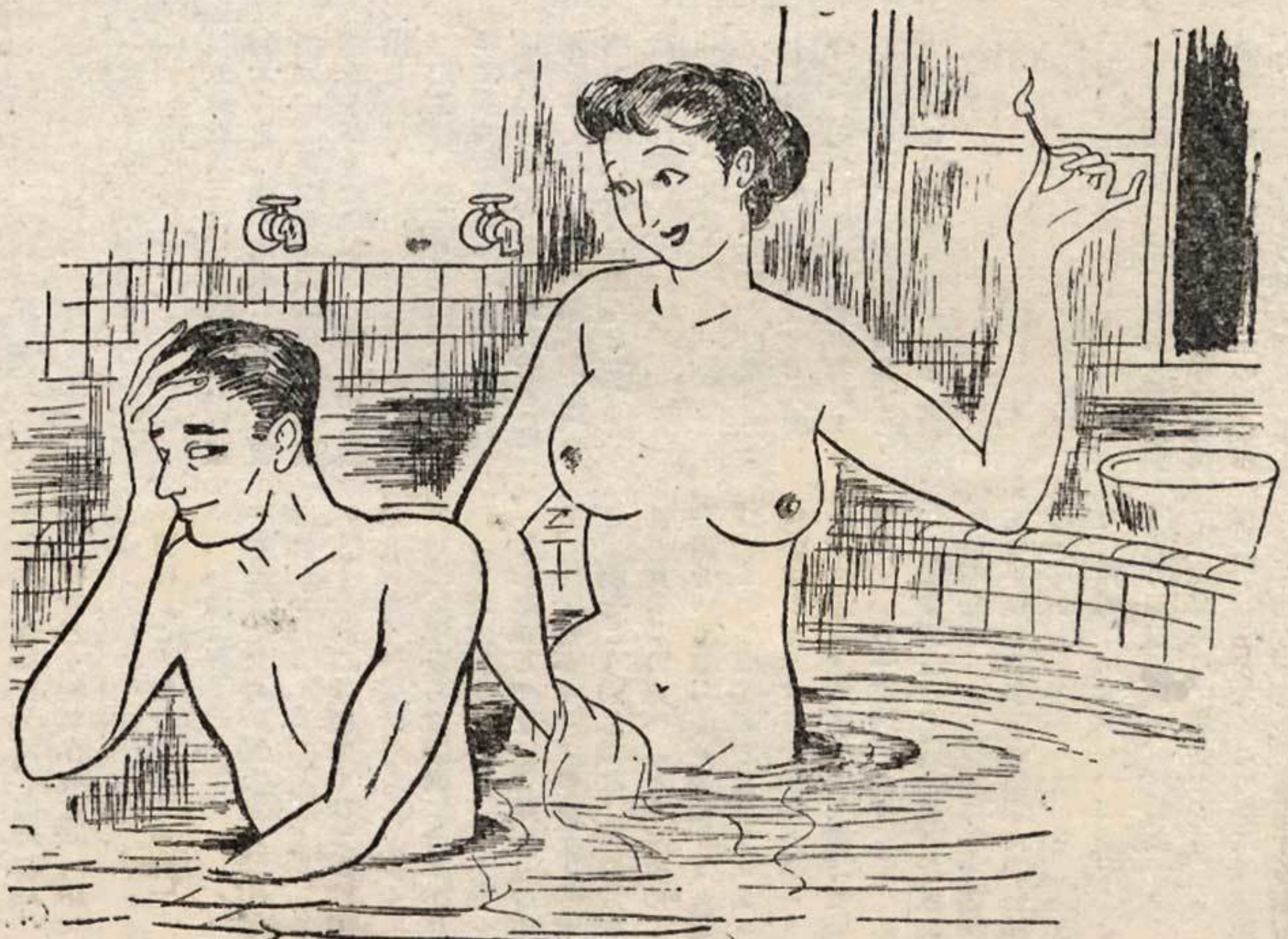
コボコボコボ……と、何か気体
が、女と牛之助の間へ底から浮き
上つてくる。その先が、湯の中か
ら飛び出そうとする出会い頭へ、
燃えつきりかけているマツチの軸を近
づける。

ポーツと、狐火のような青い炎
が湯気立つ水面に燃え上り、つゞ

いてポツ、ポツ、ポーツと切れ切
れに伸び上る。

牛之助は呆れてしまった。如何
さま、前代未聞の実験である。さ
を待たなくなつた。

つぎまで、欲情の限りを尽した相
手の女が、すっかり人間離れして



猫をかぶつた源氏の君

赤 壁 元

(1)

女子大学国文科の少壯教授、巖に似合わず謹厳の異名を取つてゐる樋口謹五先生、訪ねてきた若造の顔を振り返つた。

場所は樋口先生が高級アパート住いの一室、若造は、絵描きか文学青年にふさわしいスタイル、派手な型の上衣に度のきつい眼鏡。

「おー君か」
選りに選つて不愛想な挨拶だ。若造は、そんなあしらいにも腹立せず、何が嬉しいのかニヤニヤしている。

社用でなくて、本日は特に私用で……（お目にかゝりたい）と云つたのが悪かつた。会えん、と謝絶するのを、でも特に、是非とも先生の御意見を伺いたい事項をたずさえて参上いたしましたのでと部屋へ上つて坐つてしまつた。

先生は、その余りな強引さに、にが／＼しくもあるのであろう。或は又、この若造が勤めておる三流新聞に、先日、文化部長とかいう男の直々の依頼によつて、一筆

造詣の深いところを示して「源氏物語」についてのエッセイを寄稿してやつた折角のその名文に、誤植六ヶ所、中に、「五十四帖」とすべきを「五十四帳」などと、よしんば帖が当用漢字にないからと云つて帳にするなんて無茶苦茶な、無学文盲な振舞をされた寝さめの悪さが、なお尾を曳いていたのかも知れない。その時、出来上りの原稿を取りに来たのが、この若造、確か名刺には、東亜新聞文化部員五味貴久三とあつたと記憶する

「いゝかね、五分間だよ」とダメ押す先生は色白く、顔の諸道具ととのつていて、いま散髪屋から出てきたばかりのような男ツぶり、年のころは三十三、しかし先生は笑い顔も見せず、腕時計を外して二人の間へ置いた。

「さあ、どんな御用かね？」
「よほどお忙しいと見えますね、先生。なんなら、そのようにお忙しければ、又出直して来てもよろしんですが……」

「だが、君は帰らなかつたではな

いか。……さああと四分。そんな余計な序の口でうろろしておらずに、いきなり本題に入らなくていいのかね？」

「先生、男つて分らないもんですな、……或は、人間／＼ツて云い直すべきかも知れませんが」

「それが僕とどんな関係があるのかね？」

「先生の御意見は如何でしょう」
「君はわざ／＼、それを云いに僕のとこへ来たのかい？」

「猫と人間にはどんな関係があるでしょうか、先生？」

「さあ帰つた、帰つた、この調子で後三分つづきされるのも惜しいんだ。僕は今晚ひと晩で、三百六十枚の答案を採点しなくちゃならな

いんだよ」
「へー。人間わざ／＼に絶しますなそれは。……では、おいとまするとしましうか、折角写真を携えてきたのに、」

「何、待ち給え。五味君、何を持つて来たツて？」
「写真ですよ」
「何の？」

「きのう写した写真です」
「——見せ給え」

五味貴久三は、白紙に包んだ薬罫大のを、胸の内ポケットから取出し、上目づかいに樋口先生の表情をうかがいながら、膝の前に差出した。

先生は、さらりと白紙を落して手に残つたプロマイド型の表に、目を焼付けた。五味貴久三の目は光を増した。先生の頬は引吊つて色白の顔が余計青白くなつたように思われる。

「おッ、これは！」
かすかに、先生はそう呟いた。

——男と女が立つたまゝで抱擁し合い、男の片手が、女の前の方に差入れられていて、二人共びつくりしてこちらを向いている写真である。

(2)

部員の犬飼保正が、オートプレス写真機を片手にアハ、アハ笑いなから帰つて来た。
「傑作々々、五味、いゝものが撮れたぞ」

「そうかい」と、貴久三は、氣の乗らない返事をして、危地に陥つた王将をどう救おうかと苦吟中である。

「将棋どころでないぞ、五味」
「そうかい」

「いまそこでな、男と女の逢引じや」

「——それに小便でもひつかけてきたんか？」

目は、相変らず鑑面にそゝがれたままだ。

「そんなんじやない。暗がりの中で、男と女がキッスの最中じやよ。腕をこう回してな。男の片手は、女の前の方へ、どうもその、前戯という奴らしい。そーツと近づいていつて、バツとフラッシュを焚いてシャッターを切つた。ハッハ。……ビィツくりして逃げていッきよつた」

五味貴久三は、敗色濃厚な棋戦を放棄して、いつの間にか犬飼保正の手振りおかしい説明に顔を移した。オートプレスは、電気装置で、電池のボタン一つ押すだけで、電池のボタン一つ押すだけで、球内の銀紙が燃え、同時にシャッターが落ちる。相手の爺さんも、年にかゝわりなくこの話には感興を唆られるらしい。酒徳けの赤ら

顔に、目尻のシワをふやしていい。
「なるほど将棋どころでないわ、早よう現像せい」
貴久三は元氣づいてせき立てた。

現像液につけ、水道の水につけて乾くのもどかし氣に交る交る顔を近づける。互の口中の、舌の感觸を味つていた忘我の境に、いたずらにしては罪な囁かしに、瞬間肝を奪われた男女の驚愕の表情がまざ／＼と出ている。しかも男の右手が、女のスカートの横のホックを外して前の方へまわされたまゝなので、大いに想像をそゝつて可笑しいのである。

「えらい見とれとるのう」

余りに熱心な五味貴久三に、撮影者の犬飼保正はひやかした。

「いや、ひよつとするとこの写真高く売れるかも知れんぞ」

「ウブなことを云うな。世はハダカのストリップ時代やで」

「そりやない、この男、知つてらんや」

「ホー、どこのどいつや？」

「それがどうも——。分らんもんやなあ、源氏物語の先生じやよ。

いや、見れば見るほどよく似てる。間違いない。教授や。ホレ、こないだうちの文化欄に乗つた、知らんか？女子大学国文科の樋口教授——。人間して、こんなも

かなあ」

「ホーそりか、これはおもしろい

や。けどお前、下手すると熱帯でやられるぞ」
「無理はせんよ、大丈夫」
——その今日である。

(3)

「わえ先生、お氣に召したようでしたら、差上げてもらいます」
いつしんに見つめていた樋口教授に、かねて用意してきた科目を貴久三は口にのぼせた。

「ウム……」

「何なら、只では先生の方でお氣兼ねのようでしたら、ほんの、紙代だけ頂ければいいんですが……」
「どこで撮つたのかねこれ？」

「……へえ、うちの社の、横の空庭でさあ」

「いつ？」

「いつツて先生、御存じじゃないんですか」

「君が撮つたのかい」

「誰が撮つたにしても先生、そんなことは問題にすることはありません」

「ところが聞きたいんだよ」

「何をです？」

「この男の人、ずいぶん面喰つてるようだけど、何か云わなかつたか」

「え……？」

「実は、君氣付いてい

ないかね？いや、氣付いているからこそ、僕のところへ持つて来て呉れたんだと思うが、他人の空似つてこともあるけど、この人、僕に似てやしない？」

「先生、それは余りな御質問——。そつくりですよ、この人は、先生に瓜二つ、そのものの如くに」

「だろ——。だから、初めに断つたように僕は忙しくてならんのにこゝろして君と話してゐるんだ。——

打明けるとね、僕には、一緒に母のお腹から生れ落ちて来た兄弟があるのだ。ところが、今どこにどうしているやら消息不明なんだ。まあ恥を言わないとわからない

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。

とう／＼それが十九の齡に外地へ行くと言つて家を出たまゝ帰つて来ないんだが、それから直ぐ君も御承知の太平洋戦争だらう。

何処の地の果てでたれ死んでゐる事やら、なにしろ万歳々々で送られた出征兵士ですら生死不明の者が沢山ある中に、勝手に外地へ飛び出して行つた男の消息なん

が、その弟つて言うのが、容貌は僕に瓜二つでありながら、小さい時から僕と違つて札つきの不良で年頃になると今のアブレはだしの放蕩者でね。どうも響にも棒にもかゝらないので両親もホト／＼手を焼いていたのだ。



て誰に聞くといつたつてあてもなし、五里霧中の話さ。

しかし考えてみれば、やはりたつた二人きりの兄弟のことだし、逢いたいのにはやま／＼なのだ。

僕は、その、双子の片割れである弟を、こゝ十年來捜しつゝけるんだけど、どうやらこの写真は、その手掛りを与えてくれるようだ。ねえ、打明けて呉れ給え、ゆりべこいつを撮影したのは、君かね？」

「へえ、……」

「白状し給え、君だらう？ 後でお礼する」

「へえ……」

「へえなんて云つてすにさ。どんな工合だつた？」

貴久三は頭を掻いて弱つた。すつかり当てが外れたのである。

「云えんのかね？云つてもよさそうではないか」

「でも先生……」

「云えんようなら、破つてしまふよ、この写真——」

と両手で破りかけたその時、ノックもなしにつか／＼と入つて来た女。見ると、紛れもなく問題の写真に写つてゐるゆりべの女性ではないか！

ハツと、蒼白いのが、更に蒼白に血の氣の退くのを小氣味よく眺めた五味貴久三、にやりと攻勢を取戻して云つた。

「先生、どうやらこの写真の女の方にも、双子の御姉妹があるよう

ですな！」

——終——

島原女風土記

どぶろく宿

美戸部進
松岡敏一画



お波は三十六。

去年、安藏の七年忌を勤めたのだから、既に八年も後家を押通した事になる。二十九の女盛りで、安藏がサイパンで戦死したそれから間もなく翌年は終戦。抜け切れない軍国主義の残滓と生活の苦痛に歪められて、空ろな数年を経過すると、早いもので子供はその年数なりの成長をして居る。まるで、自分だけが周囲からも、時日からも

もまら／＼な置頓など、はげしく過した商売の閑歴を示して居る。

長男の安人が数里離れたT市の高等学校に入学すると、町からの生活扶助がもらえなくなつた。近所の同業者が民生委員をして居る関係もあつたが、T市の高等学校まで通学させる学費を見積ると誰しも判然とする余裕があることは否定出来ない。

お波は世間を冷たくして、専ら民生委員の角屋の主人を憎んだ。

予定していたものが狂うと他に捻出の方

置き去りにされたかの錯覚にも陥るそれほどお波は無我夢中で働いたことに気付いた。

考えて見れば、終戦後はじめた駄菓子屋も、化粧品や食料品、荒物まで並べ、古い寄集めの陳列や板の肌

法を考えねばならないお波がそれの七年忌の日だから皮肉である。安藏はアンコの好きな男で、体を無理すると床の中でお波に五合程

の小豆でアンコを造らせ、ペロリと平げてノミを搦つた。代々の石屋だつたのだ。お波は安藏が甘党であつたのを身についた感覚で、仏に供えるアンコを造ると、酒好きの坊主に出す酒を近所の按摩からわけて貰つた。

「小売は三百円だけど、あんたには卸の二百円でやろう。そうか、もう七年忌になるか。あんたも酒を売つたらよく売れるがなあ、後家でベツピンさんと来とるし、もつてこいじや」

近頃、お波は自分の容貌など考えたことはなかつたが、二百円と三百円の間に在る一升百円という利潤が強く心を捕えた。「これなら確かにいける。そうすれば看のカマボコも佃煮も売れることは請合だ」こうして彼女のどぶろく屋がはじまつた

一一

成程、お波の計画は適中した。それと一緒に従来の客種がころりと変つた。今迄の客は豆腐やビンや亀の子タワシの女房連中

と、アメ玉や煎餅の子供だつたのが、それに加えて、砂糖にたかる蟻のように、辛党の男達がどぶろくの香に引きつけられて来た。一人が知ればこの党の常として必ず同志を語らい、次から次へと、宣伝も何も必要がなかつた。もつとも公然と売られる性質のものではないし、それかと云つて、その当座は或程度の客引きも考慮せねばならないと思つていたお波の行き渡つた考えも全くの思い過しになつた。

「それ、わしが言つた通りじやつた。やんなされ／＼。世間が何と言おうと、世間の口には戸は立てられん、黙つとつても人は喰わしても呉れん。しらぬ振りして儲けた者が一番利口者じや。大丈夫、兵站部は俺が引受けた」

按摩の力さんは長い顔をなでて、自分の意見が図にあつた事得意がり、利き酒のくさい息を吹きつけた。

「じやがなあ、力さん。酒飲みは座が長うて困りますよ。昨夜も三時迄。朝は五時に起きなきや安人が一番の汽車に間にあわんし、これじや身体が続きませんよ」

「なるほど、それもあろう。然し何はともあれ商売繁昌、有難う思わにやいかんよ。それも誰ゆえなあお波さん、あんたの器量ゆえじや。わしも若かつたら一苦勞して見るが、鯛の刺身よりぼつちりしたそのお尻でもなでて居た方がなんぼ酒の味がえゝかわからんよ、ハハハ……」

力さんは、ソツと平手でお波の背からなで下す。

「まあ／＼力さん、人をひやかすのも大抵にして下さいよ、お神さんに言いつけますよ」

身軽く避けてお波は力さんの手を目元で

おさえる。

「それ／＼、その目が千両」

力さんはへら／＼口を叩くのであつたが、商売の忙しいのにも張があるし、内心、それに比例した身体の動きもお波には楽しく思われた。

二三

しぜんに常連が出来た。

畳屋の才吉、櫛の平作、菓子屋の又しやん、家畜市場の旦那など。中でも、市場の旦那はこの町でも家柄の一統であり、戦前外地を廻り歩き終戦で引揚げて来た人だったので、外の百姓などとは違い垢抜けした所があつた。

特にお波が市場の旦那を大事にし、顧客として喜んだのは外に理由があつた。商売敵である角屋の妹咲子が、市場の旦那が未婚で内地に居るとき親しい間柄であつた事を思い出し、見返してやる気が多分にあつたのである。

もと／＼角屋の者達が、自分達の親が車引き上りであり乍ら、小金を貯めて鳥金でも貸すようになった事を機に上げて、百姓娘のお波をてんで種族でも違う様に軽蔑するのが癖でもあつたし、同じ商売をはじめから尙更、その態度は露骨になつた。

「何さ、いくら貧乏したつて、姉妹で一人の男をつけ廻すような真似はしませんからね」

お波は白けん気になつて、そんな時は嘘くのだった。そして、きりぎりすの様に瘁

せた咲子の身体をボキンと真中からへし折つてやりたい衝動に駆られた。

咲子は四十にもなつて未婚であつた。というのには理由があつた。姉の年代が朝鮮で芸者をして居る時棲主の山川に身受けされて二号になつた。姉の所へ遊びに行つた咲子も山川と関係が出来てその儘の状態が続いて居る。

デブプリとして赤ら顔の山川は七十に手の届きそうな年齢にも拘らず、本妻と二人の妾を繰る精力が何処にあるのかと、山川が来た日などは近所で評判しあうのである時として、後妻などに話のない咲子でもなかつたが、気位が高いと云うのか、今の境遇に甘んじて居るのか、とんと耳を傾ける風もないし、あくまでも娘風な身装りと気持を持つて居る咲子は結局山川のそれに満足なんであらうと言ふことに世間の噂は落付く。

瘁せてヒステリックであるが、「あんなのが案外強いんだよ。さすがの市場の旦那もあれには手こずつたかなあ」

畳屋の才さんは註釈を加えた。「いや、あんなのを泣かすのもいゝもんだて、フフフ……」

平さんは肥つた身体を小刻みにふるわせて思い出し笑ひする。肥つた腹で蟬を泣かせるのが彼の自慢話であつた。

「やはり、俺の見たところホルモン不足さそれじやないとヒステリーになる筈がないよ。女は不足と、満足で米の磨ぎ方まで違ふからな」

又しやんの蘊蓄を傾けた意見になると、

菓子屋らしい入歯の金歯がガク／＼鳴り出す。

「道理でこの頃、また市場の旦那の注射。必要なわけか」

才さんは赤い鼻に小皺を寄せた。

「咲子さんは市場の旦那と又よりでも戻したんですか」

男達の咲子に関する堂々廻りの意見は何ともなく、却つて面白く聞いたが、旦那の注射問題はお波の胸にグサリと来た。

「うむ、ちよい／＼の鴨緑江節だ」

平さんが洒落れる。

「奥さんが可愛いそうにね」

お波はわざと無感動に呟く。

「その奥、可愛いそうなのは波ちゃんじゃないのかい」

又しやんが覗きこんだ。

「まさか……」

お波はだるそうに顔をそむけたが、胸を締めつけるように生唾を飲みこんだ。

四

市場の旦那は引揚げると家のないままに自分の生家の持物である元家畜市場であつた家を修理して住んだ。その為、市場の旦那という通称が生れたわけである。

若い時から別に仕事と言つてはつきりしたものもなく、暢気に地主の二男坊として別家でもすれば好かつたのを、狭い日本にや住みあきた型で、天理教の布教師をしたり、或は外の事業に手を出したりして、臺灣から敗戦の郷土へ帰つた。

今更、百姓も出来ず、保険の外交をやつたり、時には家が高臺にある関係上気儘にどぶろくの製造をして見たりしたが、格別

に生活に苦勞するでもなく、又裕福でもなかつた。

酒好きのその町に一つしかない銀行の支店長を知るに及んで彼は特殊な方法を考へ出した。低利で銀行から金を借り出して外に高利でサイド内の貸付をするという誠に抜目のない利輪轆ぎである。これは當つた旦那は専らこれを生業の主たるものとした

奥さんは臺灣で一緒になつたらしいが、その当座はとも角として現在はんばしくないらしい。たつた二人ぎりです子供もない生活は退屈だらう、元来夫婦仲の悪いのはあの方の問題が第一だという又しやんらしい解釈もあつたが、讀みかたない点もないではなかつた。市場の旦那と又しやんとは小学校時代の同窓で喧嘩もし、酒も飯も、女も共に買つた仲なので、こと二人の事に関しては又しやんの右に出る者はない。

「温泉に二人行つたときさ、時間で揚つて取り換つこしよと言ふことになつてね。こちらはいざこれからというとき、おい又しやんまだか、まだかと市場の旦那さ。早いのなんのつて、お蔭でこちらは待人つきで気がもめたよ。やはり不斷遊んで居る人には負けるよ」

体力の問題で落にしたが、暗に旦那の絶倫さを物語るものであつた。

若い時から相當に浮名を流した人で、咲子との話なんか旦那にすればほんの一事にしかならない。釣竿を手にした二人の肩が葦の中で見えたり隠れたりしたのを噂に聞いたこともお波はあつた。

旦那は男には惜しい程愛嬌がある。女には優しい。あれで女にもてねば嘘だとも思ふ。がつちりした身体つきを考えると、お波は顔の赤らむのを覚えた。才さん達の話

未

亡

人

愛

慾

小

説

が事実とすれば、咲子のやつ、市場の旦那から金でも引き出す魂胆か、それとも山川だけでは喰い足りないのか、商売の邪魔をする気ならこちらもと歯を喰いしばった悩裏に子供達の姿が去来した。

それからのお波は目立つて美しくなつた旦那の来た時など、その嬌声は近所の人達が顔を合わせる程であつた。用もないのに旦那と一緒に咲子の家の前を通つたりしたわざと咲子など意識しない歩き方である。たまには氣付いたように馬鹿丁寧な挨拶などして、キラリと光る咲子の眼を愉しんだ

五

物憂い、春の朝である。日曜日なので久し振りにお波は寝坊した。昨夜はおそくまで才さんが寝させなかつた。

何処で飯んだのかも相当にきけて居たが、お波の家で二三合程飲むと寝込んで動こうともしない。十二時頃まで店の勘定などして戸を閉めるため才さんを起した。

「うむ、うむ」

漸く頭を上げた才さんはだらしなくお波の胸に倒れかゝつた。

「もう閉めますから起きて下さいよ」

「うむ、うむ」

と言い乍ら、才さんの手は酔つた人とも思えない強さでお波を倒しにかゝつた。

二度ほどは、

「何をするんですよ」

と、戯れ加減にお波も言つたが、意外に才さんの強腰なのを知ると無言で反抗しはじめた。彼の息もはげしかつた。もつれもつれてお波の耳に騒いだ。

「市場の旦那には咲子さんがいる、ね、わ

しにもいゝだろう」

「嘘、嘘！」

お波は強く叫んだ。

それと同時に、

「母ちゃん、母ちゃん」

と、隣の部屋から安人の声が叫んだ。

「帰つて下さい」

お波は続けた。

家の事情を安人に言いきかせもした。弱い商売の痛手に喰入る世間の悪さが、余計に自分の弱点を暴露出す気がしてならなかつた。朝飯の後始末などして居る所へ一人の見なれない青年が入つて来た。革の手提と、ぬつと戸を開いた顔付にお波はハツとした。

果してその男は言つた。

「税務署から来ましたが」

現品の封印されたのが七升。押収されたのが掛帳帳面と氷枕。お波は泣いて安藏の戦死や子供の養育など話したが、その男は事務的に仕事を済ますと引きあげた。

お波はすかさず市場の旦那の所へ走つた旦那は直ぐ親類の町長に駆けつけ、共に税務署員の後を追つた。

釀造元の力さんに、菓子屋の又しやんなどが集つた。畳屋の才さんも寝不足の充血した眼をこすり乍ら、ケロリとした顔付で来た。

「困つたことになつたよ」

又しやんの入歯も鳴らない。

「これは察するに恋の鞘当か、投書に間違いない」

力さんの顔も沈痛であつた。

「地獄の沙汰も金次第、町長さんが行けば何とかなるさ」

平さんだけはいやに落付いて居た。二三

愛欲心きざん

つかんだ

女魅



兵庫一平

SAV 平

「げてももの食い」

河内官二はそう呟いた。

中之島のダムの上から、どろどろと流れている土佐堀川を、もう二十分をみつめて見る。

「フ……」

こみあげてくるような、含み笑いをした。四十面の無精髭をざらざらなでながら、上機嫌である。

「ちよつと」

またひとり言をいつて、ダムを北側へとんとんと降りて、そこに坐つている靴磨女の台へ、ちよんと靴をのせた。見上げた女の眼が、生々と輝いた。

「あんたはん、この靴、今朝、磨かしてもろたとこだつせ」

靴磨を手にしばらくためらつた。

「なんべん磨いたつてえゝやないか、あんたは、それが仕事やし、わしは金さえ払うたらよいのや」

「あんたはん、えらい変つてはる、そりや商売やもん、かめへんけど、こんな靴を磨いたて、あんまり磨き甲斐がおまへん」

遠慮のないことを言う四十女の靴磨である。

「戦争前からはいてるんだから」

河内官二もさからわない。

「ほな、磨きまほ」

女は、仕事にかゝると真剣である、熱意がある。

「明日は上等の靴をはいてきて磨いてもらうよ」

河内官二は六千円のチョコレート短靴を明日は、はいてこようと思つた。

「あんたは、主人が病気で、小さい子供



遍路博であげられた経験があるからだろう
「ほんとに、私のいたらぬ為に皆さんに御
迷惑をかけて済みません」

お波は皆に詫びるより外何とも言ふこと
がなかった。その心の底には蔭で嘲笑して
いるであろう咲子の顔が憎らしくチラ／＼
する。

「畜生！ どうして呉れよう」
奥歯をギリギリと噛みしめたい気持であ

をしなきやいけないよ」
「力さん、でも私は一言は去つてやりた
い」

「むりもないよ。力さん。しかし、波ちや
ん、がっかりするんじゃないよ。封印した
のは飲むわけにはいかんし、力さん、二三
本持つてこいよ、俺の家で飲もう。縁起直
しだ」

又しやんの発案に、

「授書する奴の
気が知れないよ
全く。人の繁昌
を羨やむ位なら
自分も勝手に金
儲でもすればい
ゝじやないか。
世の中には随分
いらぬ世話をす
るのが多いよ」
力さんの持論
は依然として変
らぬ。
「ほんとに、
私はあの喉笛に
噛みついてやり
たい」
お波はマナジ
リをつりあげた
「おつとつと、
波ちやん、まだ
そんな事を言う
のは早いよ。人
をうらめばきり
がない。自分の
事は自分で始末

があつて……という訳かな」
「主人があつたら、こんな苦勞なんかし
まへん」
「ほう、じやあ、戦争未亡人？」
「そんなこときいて、どないしやはる気
い」
仕事の手はとめなかつたが、女の激し
い抗議である。
河内官二は本心を見抜かれたように思
つてぎくんとした。
「つい、わしのおせつかいが頭を出して
すまんすまん」
簡単に詫びた、女は汗ばんだ、額にく
つゝいたおくれ毛を、二度あまりかきあ
げて、靴と真剣にとりくんだ。
四十女の汗ばんだ肌に餛飩たような臭
いと、微かに感じられる脂粉の臭いとが
ぶらんと鼻にきて、河内官二の官能を刺
戟した。
この靴磨女に魅力を感じているのだ。
だからさいぜん、ダムの上から「げても
の食い」と呟いたのだつた。
一年前に妻を失つたといつても、こん
な女に惚れるほど、河内官二は女ひでり
はしていない。
四十面に無精髭をのばしていても、北
浜三丁目の村川電機株式会社、販売係長
という地位は、後妻を娶るのに大きなブ
ラスとなつて、縁談は降る如くに踵をせ
つして持ちこまれる、子供のいないことが
初婚とならぬと異ならぬという好条件が、社
内の女事務員の勇敢なウイソクのもとに
さえなつてゐる。
それが、こともあろうに、路傍にちり
あつたのようになぐまづつてゐる靴磨女
に、熱烈なる愛情を抱くなんて、もは
や常人の域を脱している。
河内官二の関心を敏感に嗅ぎとつたか
女は特に念入りに磨いた。ほかに客もな
いせいであらうが、いつまでも片方の靴

を磨ぶよりにかゝりきつてゐる。
さいぜんの女の抗議がきくと胸へき
ているので、河内官二は自重して沈黙を
守つてゐる。
「あんたはん、やもめはんでんな」
女は顔もあげないで言つた。
「ほう、そんなことが判るかいな」
「わて女やもん、かんで判りまつさ」
「そうかいな、一年前からや、やもめは
つまらんなあ」
「そいで、子供はん」
「あらへん」
女は片方をよりより磨き終つた。
「足、かえておくんなはれや」
河内官二は悠々と左足を磨合にのせた
「はよ、えゝ嫁はんもらいなはれ、男や
もめには蛆がわきまつせ」
「未亡人にはなにがわくのやろ」
「さあ」
「頭の黒い虫かなアハ……」
と笑つた。
「あんたはん、わてをからこうてはるの
ん？」
靴を磨いている手がふるえているよう
である。
「わしは、どうやら、あんたに惚れたよ
うに思ふがな」
四十男の図々しさで、河内官二はぬけ
ぬけと言つた。
「阿呆らしい……」
ぽんと靴をたゝいて
「わてのような汚い、お婆あさんに……」
とは言つたが満更でもなさそうな響き
が、その声にもつてゐた、靴をたゝい
たしぐさに女の媚態が現れてゐた。
「変なこと言つてすまんなんだなあ、未亡
人の心のなかに縋む女をかきたてるよう
なことを言つて……」
それが目的だつたのだが、愛慾の駆引
は河内官二も心得てゐる。

「そりやあ仲々いゝ思いつきだ。波ちゃんも来いよ」

平さんは、もう口のあたりがもじ／＼として来た。

「えゝ、私も来ます。力さんたのみますよ」

お波も思ふ存分飲んで見たかつた。

「才さん、それ張切れ、波ちゃんか飲むと言つたぞ。君はお前が買ひ込んだな、平さんよ、うんとうまいのから持つて来い」

「よしきた」

平さんは店を物色しはじめた。

さては又しやん産昨夜の件はどうに御存知だつたかも知れない。

六

「私しやね、咲子のような女とは違ふんですからね。力さん、飲まして下さいよ」

お波はきけて居た。

「わかつたよ」

「ねえ、才さん。後家は後家でも行かず後家ぢやないんですよ。お嬢様ぢやないけどどこが悪いんですか」

「わしに惚れぬが玉にキズさ」

「惚れるとも、惚れるとも。今日は飲むんだから介抱して下さいよ」

お波は肩から才さんの胸になげこんだ。

「いゝとも」

才さんが赤い鼻に皺を刻んでお波の背を叩いたとき、ゲエーワと生ぬるいものが膝にきた。

「ハハハ……とんだ色男だ。連れて行つて寝せるのは色男の役得だよ」

又しやんの入歯がガクガク鳴つた。

夕方、お波は自分の家に帰つた。まだ胸がムカ／＼し、頭のしんが痛む。店を閉め

ると又床に長くなつた。

何時頃だろう、咽喉が猛烈に乾く。しどけなく寝巻を引きずつて裏戸口を開けた。

ほの白い月夜だ。何処かで鶏が啼いたかと思ふと部屋の中から、チーンと時計の音が聞えた。

「一時か」

お波はこうぼつた口の中で呟いた。井戸の釣瓶に口をつけざま仰向いた。咽喉から胸に流れる水が快い。ひんやり下腹にきたとき、お波は胸を押しひろげて拭くと両の乳房が灼けつくように熱い。釣瓶の残り水に手を入れて水を掬いビチャ／＼叩いて見たが疼きは高まるだけである。お波は両手でおさえて大きな呼吸をついた。

「お波じやないか」

「あゝ、旦那」

お波ははづかしさで身をよじつた。それよりも旦那の手が早かつた。煙草のヤニ臭い口で顔を覆われると、顔の髭が痒い所を針でさすように心よい。抱きこまれるとそのまゝ床に運ばれた。

「波、波……」

旦那は熱い鼻でお波の髪から耳に囁いた

「旦那、子供が……」

しかしその口は塞がれた。

「旦那、どうなるんですしやう」

「心配するな。税務署も無事すんだし、私はお前を必ず捨てはしないよ」

捨てられてもよいと、お波は思つた。これだけの喜びを与える旦那となら流される運命に従おう。世間の口にも泣くまい。い

とし。お波は身体の一部で旦那の胸をグイ／＼おすと、柔い指を握つて口に噛んだ

旦那の指からは、どぶろくの香が幽かに漂つた。

(終)

「いゝえ、わても、あんたはんが、行きずりの靴を磨がかした男はんとは、思われんような気がしまつた」

なんと艶のある言葉だろう。

河内官二は、靴磨代を支払うとき、注意に名刺を一枚ばらりとおとした。

そのまゝ、逃げるようにダムをかけあがつた。

二

六千円の靴をはいて、河内官二は子供のように、ダムを一足飛びのような勢で越してきたが、靴磨は店を開いていなかった。

それから毎日、ダム下を訪問したが、靴のかかとを減らしただけで、あの日を最後に女はとうとう姿を見せなかつた。

河内官二の行きずりの、げてももの食い

の慾情が消えたところ、どうしたはずみか風邪をひいて寝込んでしまつた。

おかげで肺炎にはならず、十日目には床をあげ雇いの婆さんも帰してしまつた

久しぶりに会社へ出て、見舞の札を言いつゝ、会計係の席へ行くと、

「河内君、おめでとう」

と同期入社した村岡がにやりと笑つて言つた、それにつれて、二人の会計の女事務員が河内官二の顔を偷見しながら、複雑な笑みをうかべた。

「河内さん、おめでとう」

女事務員も口をそろえて言つた。

「ありがとう」

応揚にうなづいた、こんなあんばいだつたら、たまに病氣するのも悪くないと

河内官二は内心少々得意だつた。

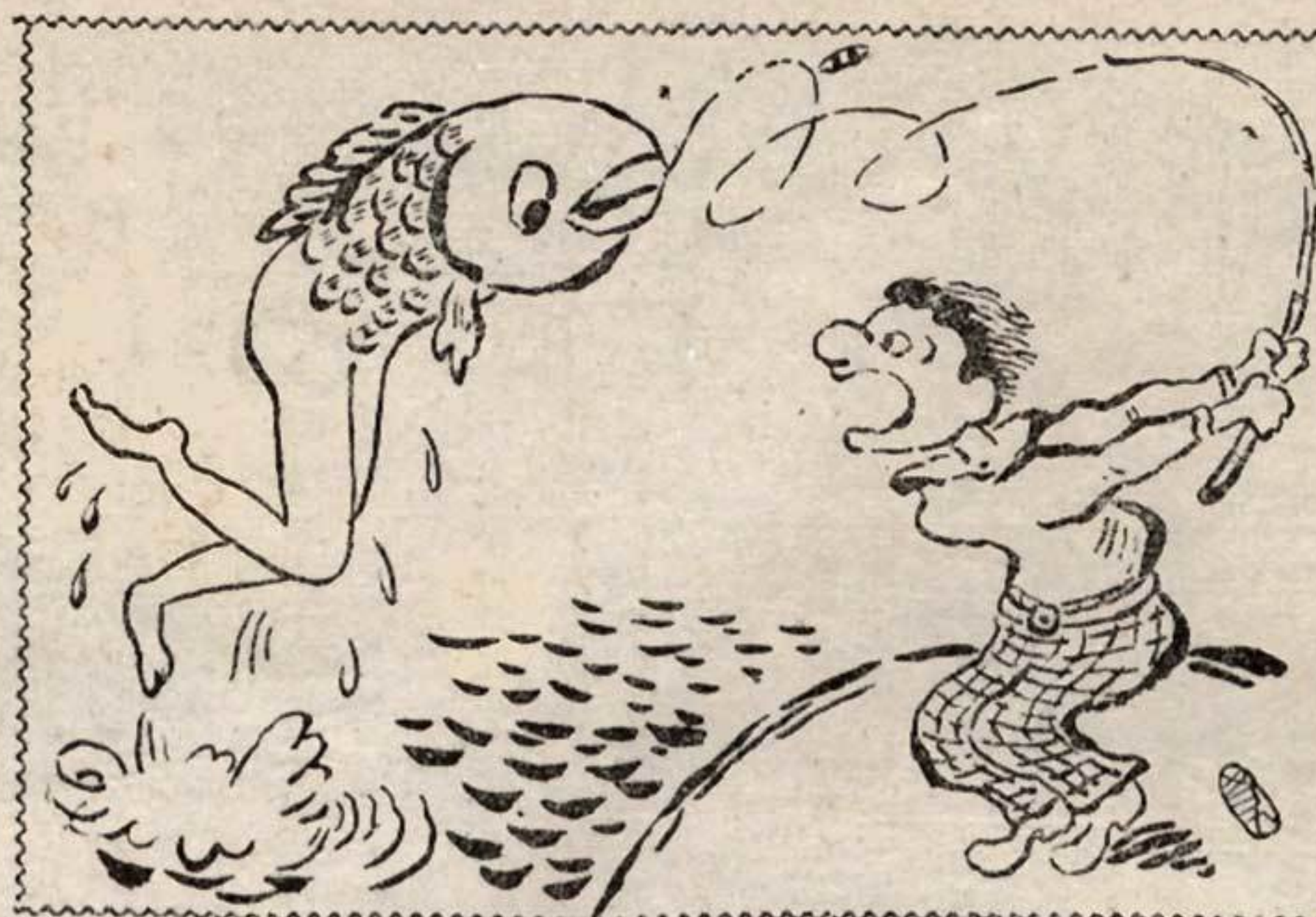
「河内君、そろして、いつ式をあげるつ



(漫画) 人魚

山田 清香

『あッ！ アブレ人魚を釣った。』



◎被害甚大

妻「ねえ、あなた、どうして颯風にあんなに女性の名前ばかりつけるんでしょね？」
夫「夫婦ゲンカをやつてみればわかるさ」

奇譚ちつく・コント

有藻 亞郎

◇天下泰平

A「さすがに女房を持つと違うね。君みたいな無精者でも、キレイなワイシャツを着て来るようになったから」
B「うん、女房つて有難いものだね洗濯の仕方を俺に教えてくれたよ」

◇周到

男「女つて、結婚して子供を生むと魅力がなくなるって言われたけど、君はちつとも変らないね」
女「きつと、結婚する前に子供を生んじやつたからよ」

◇別冊

社員「昨日、銀座で編集長に紹介された奥様つて、この前の女と違っていたですが……」
編集長「うん、あれは別冊だよ」

◇自信家

甲「あなた、泳げもしないくせに、そんな深い所へ行つて危いじゃないの？」
乙「うん、大丈夫だわ、妾、断然スタイルに自信があるんですもの」

◇当り前

母親「あなたの炊く御飯は何時もなま煮えなのね。学校の家政科で教わらないんですか？」
娘「まだ、生かじりなんですの」

「もりなんだい」

「式つて？」

「とほけるなよ、結婚式だよ」

「結婚式、僕は知らないよ」

「隠くすなよ、恥しがる年でもなからう」

村岡は机の抽出から名刺をとり出して「この名刺を持つてね、河内はいま病氣していますので来られませんが、一万円ほど前借りさせていたゞきたいのです、と言つてね、なかなかの麗人じゃないか、若くて美しく……古い女房と別れるのもいゝと、僕さえ思つたほどだよ、ねえ志木さん吉見さん」

村岡は女事務員に同意を求めた。

「ほんとうよ、美しかつたわ、ミス神戸の加藤なんとかさんに似ていらつしやつたわ」

これは志木さん

「わたしたち、やけちやつた」

これは吉見さん。

「うゝむ」

としばらく河内官二は唸つたまゝ唇を結んでいた。

「それで、君は一万円貸したんか」

「貸すよそりや、あんな美人に頼まれちゃ、いやとは言えないよ」

「莫迦、フェミスニストにも限度があるよ」

河内官二は口惜しさに唇をふるわせた

「しかし名刺の裏には依頼が認めてあるし、君の捺印まであるんだから、疑う余地がないよ、むしろ、僕の好意的な処置を感謝してくれてもいいんだ」

村岡は不平そうに言つた。

「いやすまん、僕が蒔いた不覚の種だ、僕が刈るよりほかはない」

あつさり兜をぬいだ。

「すると結婚の相手ではないのか」

「僕の年齢を考えてみてくれ、僕はその

娘の姉と結婚するんだ」
・とつさの氣転で河内官二はぼろを出さずにすんだ。

三

「あれつ」

大劇の前の切符買行列に十六くらいの女の子の手をひいて、靴磨の女がならんでいた。見ちがえるほど若々しく美しかった。あの一万円の金のなかゝら調べたであらうか、子供も、自分も、小ざつぱりしたもの着ていた。子供を勧誘している女の、母性愛の現れを、河内官二はじつとみつめていた。

「これなら許せる」

寛容の氣がよりあがつてきた。去ろろと背を大劇へ向けたとき、

「あなたア、河内さん」

ふり返えると、女の子の手をひいて駆けよつて来た。

「晶子、これがお父さんなのよ、それッ

いつか話したやろ、遠いところへ行つて

はつたお父さんよ、とうとうみつけた」

訴えるような女の眼に、河内官二は子供を引きよせた。

「晶子、大きくなつたなあ」

女は眼に一ぱい涙をためていた。

「許して下さい。里子に出していた晶子を

迎えに行つてきたんです。この子を通して、

今晚お宅へいこうと思つていましたんや」

いつわりのない眼であつた。

「そうか、よかつたなあ」

河内官二は着物の一重下で疼いているであらう、女の媚態を想像しながら、と

うとうとてものを食うかな、と腹のなかで呟いた。

(おわり)

崖の曲愛

がけ



史竜木真
絵 尾村 美濃

一、呪われた 落し子

(お前は本当に邪魔者だよ。実際何て目障りの児なんだろう！)

正木は、その言葉を生長して行く毎に激しく浴びて育つた。彼は連れ娘をして嫁いだ祖母の留守中に、酒に酔った祖父が、妻の連れ娘を犯した為に生れた十七才の母親は、彼を、祖母の子として届

けると、十九才の時、遠国へ呆気なく彼を捨て、嫁いで行つた。間もなく祖母が死ぬと、祖父は又新しい女を迎え、彼は血族の間を転々として生長した。彼が六才の時、遠国へ嫁いだ母親が病死したとの噂を聞いた名ばかりの親族の家で、奉公人同様にコキ使われている内に、徴用令で名古屋の工場へやられ、やつと解放された気持になると間なしに爆撃の為に焼出され、神戸に帰るといふ同僚に連れてもらつて、加茂川べりの町工場で働くことになつた。

終戦になり、正木は果んやりしてしまつた。気がつくと、自分の育つた大阪は焼野原だし、親類縁者達の消息もとぎれ、全くの孤獨者になつてゐた。真面目さと遠慮な処を買われて、建直し後の町工場で事務員に採用された。彼には、他の工員のように、どさくさまぎれの荒仕事も出来ず、又金廻りのいゝ方面へ走るだけの勇氣もなかつた。

神戸へ来て以来の下宿の主婦とは、滅多に口も利かなかつたが、里子という、浅黒い男にも似た膚の四十女で、良人が徴用で九州へ行き、息子は出征中だとは、正木も聞いて知つてはいたが、殆んど世間話さえ交したこともなかつた。

終戦の翌年になつても、良人や息子から便りがないうらしく、里子は闇仕事で稼いだ金で、方々に手を尽して捜している様子だ。

つた。そんな頃から、里子の好意が、自炊している正木へ向けられ、弁当を作つてくれるようになり、やがて、夕食を二人が供にするようになって夏がきた。

三十才を過ぎた正木が、未だに女友達もなく、こつそりと女遊びに行くのを嘆きつけた里子は、永年の寡婦暮らしの淋しさから急速に正木へ接近し始めた。愛の言葉とか将来の設計などという、合の手の入らぬ駄と駄の直接的な結びつきだつた。

正木は四十女が自分を求める気持を、どう解釈していいのかわからなかつた。汗臭い女の床の中で目覚めた昨夜の酒が後頭部に重く残り、里子の言葉や、姿態が、やがて其の煙の中に甦つた時、彼は沁々後悔した。

だが、女との経験の浅い正木は、年上の里子の為に完全に丸められてしまい、新しい生活が始まると、里子は彼を家で遊ばせ闇の稼ぎで面白おかしく暮そうとした。

日が経つにつれて正木は、これではいけないと反省しだした。何の為の生活なのか今迄の生活には仕事があり意義があつた。しかし、今の里子との生活には夜の為の営みが絡んでたと云える。逆境の中で育つた彼には夢があつた。平凡なことだが、真面目な結婚をして平和な家路を持ちたいということだ。

そうした正木の気持を察したのか、一層夫婦にならなかつた。良人も息子の事も諦めた上での話である。正面切つて結婚話を持出され、彼は俄かに責任を感じてうろたえた。如何に何んでも、四十女とは厭な気がしたし、反面、今迄の宿なし同然の自分が、明日から一家のあるじに納るのも、後めいた不安が湧く。彼は困惑して

しまい、その返事を即答し得なかつた。

里子は、一応は男の遊るのを予期していたのか、正木の親心を買ひ、自分の年上としての弱味を補う意味で、苦心して蓄えてきた金を彼の前に積んで見せた。ところが、正木はそのことによつて一層押され氣味となり、返答如何にとみつめる里子の眼の色に或る恐怖をさえ覚えた。彼は永年、自主性を持たずに縋つてが人の云いなりに従つてきた為、貴方次第でという態度をとられると迷ふのだつた。

目の前で泣いている女の姿がいじらしくもあり不思議でもある。芸を仕込まれた犬が飼主に、さあ今度はお前が命令をしてごらんと、まるで逆の立場に廻されたような状態に似ていた。

「俺は、どうして……のか判らん……」

長い沈黙の果に正木は正直に云つた。彼は秘かに、私と一生離れず一緒に暮らすんだ——とドナつてくれる女の声を待った。あれ程積極的に行動した女なら当然煮切らぬ自分に対して立腹し叫ぶものと想つた。

里子は、彼の曖昧な態度を棄てる為のポーズだと誤解してしまつた。小ざつぱりした身成りをさせると、三十の男盛りの正木に未練も出るし弱氣も増した。結婚を同棲ということに置換え、正式の話の方は諦めて二度と口にしなくなつた替りに、浮氣封じに氣を使い、終日家に居る彼をいゝことにして、時を潰さず身を投げかけていつた正木は時間的な戸惑いを見せると、雨戸を締め錠を下しての強引さだつた。

混乱した世相の明け暮れの中で、あわただしい月日が一樣に無反省のまゝ過ぎていつた。人々は喰うのに追われ、金を得ようとして焦つていた。

敗戦後二度目の春がきた。正木も大分退屈し、又何日迄も遊んで居られなくなつた

里子の奨めでブローカーの仕事を手伝つた彼等仲間の事務所の書記であつたが、官庁への文書には、彼の美事な筆跡が役立ち、自然皆から重宝がられると共に、正木も、やつと大人としての眼が徐々に開け始めてきた。

事務所へ働き出して間もなく、正木は、福井市から焼出されてきた身寄のない、見るからに貧相で色艶の乏しい、一見二十才位の無愛想な娘へ秘かな愛情を持ち始めた。最初は同情だつた。年頃の娘らしくもない黒つぽい著物や、白粉も買えない様子が憐れだつた。年甲斐もない里子の濃化粧に比べると、余りにも淡白なその娘、正木はそんな頃から次第に、里子との生活の重圧と、限らない嫌悪に対して抑えきれぬ不満を持つていた。

その頃、里子は妊娠した。里子は子を生むことを悦ばなかつた。男との破局に等しいとさえ考へている。彼女の正木に対する観念は、軀で繋がりを保ち続けること以外にはなかつた。だから次第に腹がせりあがるのも構わずに、相変らぬ頻繁さで正木へ挑みかけるのだつた。彼はそれに堪へず、心の中では、今の逼塞した生活の中から飛出したいと希つた。胎児のことを想ひ、子供の将来を考へる時、愕然としたものを感ぜた。

自分と同じような子供になるのではなからうか……彼は尤も怖れた罪を自ら犯し、その自分の在り方に苦しんだ。素直な生活、その中から新生の芽生えは有り得ないのだと悟つた。生れた子供を俺の手で育てよう。そして女とは別れるのだ。正木は、

立直るべき時期を氣永に待つ量見だつた。

二、中年女の淫慾

淫雨と称される長雨の日々とは云え、里子の情慾のすさまじさが増すことは、もはや正木には我慢がならなかつた。自分の胤が女の胎中にあるという実感が、激しい抵抗となつて彼の嫌悪を昂めた。

或る夜、正木は、そのことで里子と云争つてしまつた。尙も執拗で執念深い里子の振舞に、珍らしくも温和しい彼が本氣で立腹した。口汚く里子のだらしないさを罵倒した。里子は正木の峻烈さに暫く茫然たる顔だつたが、

「判つたよ。女が出来たんだね。お前さんは、私を捨てる氣なんだよ。今更になつてお前は私を見限るんだね——畜生ッ」

じつとりと濕つた壁を叩くと、急にそう泣き喚い。彼は、何カ月か振りで自分の夜具を引出すと、元の二階の自室で久方振りに床を敷いた。単純で、考へを無反省に真ッ向から割切る四十女のドグマが、ふと、三十余年の自分の生きてきた姿とも見える正木は少く共向上したかつた。如何に苦しくとも、今の顛覆した生活の渦みの中から脱出したければならぬ、渺しでも生甲斐のある自分の人生を、彼は痛切にそれを慫慂した。

次の夜、里子が珍らしく家を明けていたので、彼は勝手に夕食を済ますと二階の寢床に転り、途中で買つてきた父母重恩経講話を読んでいた。清らかな救いがほしかつたのである。

夜更けて、里子は乱れた足音をたて乍ら戻つてきた。殆んど餌うようにして二階へ

昇つてくると、しどけなく酔つて醜さを剥出した赫ら顔で、彼の薄薄団をはね除けると暴れ出した。雨の中を傘もささずきたのか、淡い電燈の光の下で、髪に水玉が鈍く揺れた。彼が、仕方なく起上つて鎮めようとすると、觸れた肩も袖も濡れている。「軀の事も考へてくれよ。身重な軀で何んて馬鹿な真似を……さあ、早く著物を脱いで着換えるんだ」

帯を解きだすと急に里子はぐんにやりと身を任せた。下著だけになると、ニヤツとして彼の床の中へ転つた。

「お願いだ。子供のことを……胎の子供に悪いんだ……ねえ、考へてくれよ」

正木の、その哀願は却つて悪い結果を呼んだ。一閃に思いつめている里子には絶望の宣言に等しかつたらしい。

「フン、何んだいこの餓鬼の方が私より大事かい。墮せば元々、出来ぬ昔の私なら、お前さんは私を可愛がつてくれると云うんだね」

「墮せば……そんな無茶を本氣で……」

如何に酔つた上とは云え、それを放言する里子の無教養さ低級さが、も早や正木には耐えられないものだつた。

「別に生みとうて作つた子やなし、こんな餓鬼位、墮せば文句もないやろ——」

今が今まで読んでいた仏の世界、親心の世界とは何という相違なのか、地獄——正にこれは地獄だ——と、正木は思わず頭をかへえた。涙が指の間からこぼれ散つた。

その僅かな一瞬に、ふらつと起つた里子の軀が、ゆらつと前へ泳ぐように踏出した。と思つと、声を立てる間もなく、崩れるように、急な傾斜の段梯子から音すさまじく

転落していた。高所から跳べば子が墮ちる……と信じた里子の浅墓な最後の馬鹿の幕切れだった。

正木は翌朝、警察から戻つてくると、近所の人やつてくれている里子の葬式を、放心して黙つて眺め乍ら、時折り涙かれ者じみた声を震わせて号泣した。自分の正しいと信じた反抗が、人の生命を奪つたのだという恐怖感が、彼を再び元の、日蔭者らしいいいじけた男に引戻し、主を喪した小犬のように尾を垂れた恰好で、雨にじとついた室の片隅にじつと座りこんでしまった。死んだ里子には身寄りとしてないとの話だったのに、何処でどう聴いてきたものか、

里子の伯父に当ると称する、五十年輩の夫婦者が、生前からの約束だからと乗込んできた。正木は別に彼等の身元も認めないまゝに、以前の室借人となつた。家の道具類をその夫婦者は当然のように使用したし正木に無断で二階の表の方の間に、得難の知れぬ老婆が住んだ。間代が急に三倍に跳ね上つたうえに、彼の僅かな室の品々までもが、何日となく姿を消し始めた。人間らしい人間の少ない時代とは云え酷過ぎた。遂に休え兼ねた正木はその家を出た。秋風が朝夕吹き初める頃だった。里子の遺骨は墓所もなく、伯父母と称する彼等も、それは当然そちらの方で逃げたので、今だに

骨函に入つたなり、二冊の経文帖に挟まれ白布で包まれたまゝ、正木の色褪せたトラソクの中にあつた。

ブローカー仲間は、彼の人の良さとおとなしさに呆れ果てたが、やがて、彼の意を掬んで裏長屋だが家を見付けてくれた。心臓脚氣が持病だと云う老人が独り居て、正木は、その家の家賃と電燈代やら、雑費を引受ける約束で話を決めた。その頃すでに傾いた家ですらも滅多にない程だった。老人は六十二才だと云うが、七十才位にも老けた無口な男で、明らかに正木へ肩身の狭い遠慮深さを示した。彼は、生みの親の祖父の面影に、ふと接したような錯覚を時折り感じ、何とも云えぬ気持ちで、その老人に労りの眼を向けた。

と、勿論行く当もないその娘に、仄かな、淡い人生の希望を、そつと賭けてみる気持ちも多分にあつた。

正木としては、珍らしく気負い立つた気分分、娘に、俺の家についてこいと誘つた彼女が女に対して最初に燃した情熱だった。娘は、変な言葉の云い廻しを使わず、お願いますわ、と素直に僅かな包を抱えてついでにきた。

下の表が広い土間で、畳のあるのは四畳半ひと間だが、二階は、表が六畳で、裏に面し四畳半の家だった。中古だが、娘に布団も買つてやり、彼は表の間に、娘を奥の方にと決めた。娘には何一つ打明けてなかつた。いのちから清らかにやりたいと正木は決心した。人間らしく——それが念願だった。

三、平凡な結婚生活

下の老人は、その翌朝、娘に、奥さんと呼んだ。文子は、瘦せた軀から無表情な声で、私は女中のようなものですの……と答えるのを、正木は、顔を洗い乍ら苦笑して聞いていた。結婚問題よりも先づ、文子の衰弱した軀を整えねばならない。東ね髪で秋というに薄着をした文子の姿態は、色気どころか病人めいたものさえ見える程に、全く痛々しい姿であつた。正木自身も、里子との荒淫生活の疲労と、その死から受けたショックの為に、思懸けぬ程に参つてた。彼は文子を妹のように感じる位だった。里子の骨函は、手製の木箱に収められ、毎朝文子が花や水の世話をした。総べてを文子に喋りたい心を抑え乍ら、正木は、里子への責任感が胸に重く、傷ついた良心を



Minomura

独り癒そうとした。文子は相変らず寡黙だつたし、里子の件も深く訊こうとはしなかつた。

やがて次第にうちとけあい、正木が文子の口から知り得たことは、文子が二十五才で女学校を出ているらしいという程度だつた。

文子の瞳に、るみ、加わり、動作に落付きが付き、正木と話す言葉の間投詞や接続詞が消える頃から、ほんの僅かな間に、文子は見違える程の軀つきとなり、如何にも北陸辺りの旧家育ちらしい、躰の良さはしばしば現れだすと、正木は追々と彼女に卑下目を感じるようになりだした。

毎日遊んでいては勿体ないと、彼女は近所のミシン工場へ働きに出た。それに刺戟された彼も、足を洗い兼ねていた仲間との仕事を抛げ、新聞広告を頼りに職を捜してみたが、あれもこれも式の腕では三十四才と云う年令が嫌がられた。取引先の知人が二年程前から復活したN新聞という夕刊社の広告部にいるのを尋ねてみると、都合よく口を利いてくれ、薄給乍らも職を得た。

すでに秋は深く、紅葉した山々が晴れた日には街から望めた。正木は或る曇つた日に文子連れて山に登つた。彼の期待通り人影も少く静かだつた。二人はその日まで常に目に見えぬ間隔を持つてきた。だが、ちよつとした機会さえあれば融合しそうな気配が、お互いの胸には充分に感じられていた。

弁当を拵げた時、文子はそつと用意してきた酒を正木に奨めた。彼は暫く酒を嘖めていたが、微笑を泛べ乍ら黙つて呑んだ。文子も一杯の酒を持てあまし乍らあけると忽ち顔に色が現れて、声に弾みがつき笑

声をたてた。彼は何も話さないで酒を呑んだ。じつと文子に注目されているのに気付くと、

「いゝもんだなア、秋の山、紅葉の色……」
照れくさそうに眼を細めて大きく呼吸した。文子が、爪先立て、紅葉した一葉をちぎると、彼の前に立つて、

「この色よりも赫い顔よ」
彼は、燃えそうに熱い頬に、冷んやりした楓の葉の濡りを感じ、同時に、生暖かい文子の指先を意識した。

文子の体臭と、白粉の香と、むつちりと肉のつきだした胸元に圧迫された。胸へ手を廻すと、擦ばいワ——文子は若やいだ声をあげ、急に、ふゝゝゝと笑い始めたがその笑い方は次第に高潮し、釣りこまれた彼も一緒に笑いつて笑いだすうち、不図、文子が笑いをやめた。彼の破顔も引吊つたまゝこわ張つた。くゝゝゝ……女の泣声を彼は聴いた。

ガクン——と、文子の顔が彼の肩に落ち微かな嗚咽が洩れる。彼は当惑してものも云えず、唯何となく文子の背を撫でていた文子のすゝり泣きが杜切れ、涙に濡れた顔が彼を見た。あまりにも距離が近過ぎて、彼には文子の顔全体は見えなかつたが、ひくつく鼻梁と、淡い紅をつけたやゝ薄肉の唇だけが見えた。そのまゝ顔を重ねて行つた時、彼女が臉を固く瞑じたような気がした。

「ほんとなのね。ねえ、私達……本当なのね……私苦しい位切ないわ——」
文子は、涙を滲ませて彼の耳へそり囁いた。

頷き乍ら彼は胸に女の愛情が浸み透るのを感じていた。

四、情慾のきざし

二年経つて——男の子は順調に育つていゝるし、二人は口喧嘩さえしない。文子は全く申分のない女房ぶりだつた。

処が、最近の正木には、得態の知れぬ不満が湧いてきた。何か、何か、物足りないのである。さて、その、何かを、どう説明し、どう云い表していゝのか彼にも判らない。先づ文子への不満だと、甚だ漠然たる意識はするが、何処が充ち足りぬか——となると確言出来なかつた。明るい路上で急に躓いた、石が見付からぬ時のような不愉快な焦れつたさに追れ乍ら、踰越として日を送っている自分に、正木は次第に我慢が出来なくなり始めていた。

編集部用の便所から正木が、バンドを締め乍ら出ようとすると、古田幸が、バクツを置いて丁度掃除を始める処だつた。自ら戦争未亡人と名乗る、三十五才位で、肥型の丸顔で平凡な女に見えた。彼が手洗場でハンカチをボクツトから出そうとすると、幸が、自分の手拭をハイと差し出し、

「何時見ても正木さんは元気がないね。まだ若いんじゃないの。あんまり奥さんに吸われすぎるんだらうつて、評判だよ」

「俺が……女房に？」
彼は鏡を覗き、乱れた髪を直し乍ら苦笑した。幸は、雑布を絞ると彼へ身を寄せるようにして、にたつと笑つた。

「あんたは、まだ若いんでしょ」
「本人はその心算なんだけど……」
「皆んなは、若年寄つて渾名をつけてますよ。ちいたあ、元氣を出さないよ」

「ちいたあねえ——」彼が、幸の口真似を

すると、

「酒を呑むでなし、麻雀もしない、と云つて女遊びもしない。一体何が愉しみだらうつて人が皆、不思議がるのも当たり前だわ」

正木は、何か胸中を云当てられたような狼狽を隠し乍ら、
「成る程、しかしだね、呑んだつて遊んだつてどうせ無駄だと思ひがなあ——唯その場限りの話じゃないか」

彼はデスクに戻りたくなかつたので、煙草に火をつけて佇んだ。幸は、掃除の手を休めて悪戯っぽく笑うと、

「何だつてその場限りの世の中じゃないの真面目に考えるなんて阿呆らしいていかんわ……この無茶苦茶な時勢に——」

「それでもないさ。その場限りでないものがある筈だと俺は思ふんだ。一つ一つ積み上げていくものが、人間には必要なんだ」
相手が幸なので、つい彼は常にもなく力を入れた。半ば自分に云い聞かせるように幸は、バケツの水を流すと、

「巧く云つてるよ。あたいの尻を撫ぜるのは何なの？ その、一つ、一つを積上げる方の口なの、え、正木さん——」

幸の顔が、ふと、真剣だつた。
「尻を撫ぜる……厭なことを云うなよ。唯何となくなんだ……俺が、君にしていることは……全く意味のない冗談……」

「処が、されている方じや、唯何となくだの、冗談事では済されない場合だつてあるのよ」

正木は、煙をゆつくり吐いて黙つてしまつた。彼は不思議と幸に、うちとけた親しみを初めから持つていた。わざと取澄している癖に、何処か物欲しそうな若い女事務員の顔や、高慢な態度が嫌だつた反動かも

知れない。それと、幸の方も最初から彼へ意識的な好意を示していた。幸が、美人ではなく、人が問題にもしない平凡な中年女であつたことが、彼の場合氣を楽にさせ、無口な彼としては珍らしく冗談を飛ばしたりした。幸には、何処かに、死んだ里子の佛がちらつきそうな氣配がして、幸のずげずげと云う喋り方も、温和しくて従順な上に、断えず受動的で控え目な妻に飽き足らぬ、彼の何か——が、ひよいとバケツに身をかがめる、幸の丸い尻を撫ぜたくなる誘惑を覚えさせた。あくどい意味のものではなく、単に、何気なく橋の樺干を撫ぜるにも似た、無意味な動作に甘える氣持があるだけのものだつた。今迄幸は、平然として彼の悪戯を許していたのに、妙に聞き直つた態度で出られると、正木は微かな恐怖を伴つた後悔を持つた。

幸は、そんな彼の当惑した表情を、面白そうに見乍ら、急に、甘えた科さですつと身を寄せ、

「ねえ、あたいを連れて遊びに行つてよ」

「遊びに？何処へ……」

彼は、野暮を承知で訊きかえした。

「たまには、あたいだつてさ、お酒にも酔いたいし、したいことだつてあるわよ——」

あたいという甘えた、舌足らずな用語が彼を酷く揺すり動かした。

「さあ、これで散髪でもして、男前を上げて頂戴、お仕度金よ。怒らないでね……」

振返ると、幸が、素知らぬ顔でバケツを提げて出て行つた。彼が、バケツに手を入れると細長い紙幣が、煙草のヤニに染つた指先へコッソリとした感じを与えた。鏡の中

の正木の顔が苦痛に歪えて歪んだ時、亡き里子のデスマスクがその上にダブリ、何

処からカラコロとなる骨片の囁い声を彼は聴いた。

× × ×

思いきつた今日の旅立ちも、幸が待合室から飛出した時すでに、哀れな正木の動揺する感情を一層惨めなものにしてしまつた。紫地に赤と緑の荒い格子模様、クリーム色の帯の金銀の繡が、埃っぽい足もとの紙屑を蹴飛ばした瞬間、矢張り来るのではなかつた——と、夜来の不安と焦燥が軀中に散る思いで、ひねくれたカールで飾られた幸の頭髮と、眉墨までつけた白い顔から、ゾツとしたように直ぐ視線を逸らせた。

車中の幸はよく喋つた。重い返事をする正木には関係のない饒舌だつた。

「もう琵琶湖が見えんようになつた……」

幸は鼻を娘のように鳴らした。白粉の泛上つたというよりは、地肌の脂が吹上つた感じの小鼻が、呼吸の毎に脹れ上つた。五月の車中の温度は、むれ過ぎていた。

正木は、ずるずると女に引摺られている自分を見究めようとして苛つていた。浮氣心と呼べる氣持でもなく、幸の女体に挑む程の精力家でもない。俺は今、何でもいから、変つたことがやつてみたいに違いないのだ——遠く離れて眺めているような考え方しか出来なかつた。変化自体への期待でも興味でもなく、その場へ踏込んだ時の自分の姿、行動、情念等の在り方を眺めた——そんな妄念が、まるで局外者にも似た意地悪さで彼の心を捉えていた。

敦賀を過ぎると幸は、窓から外へ身を乗り出し乍ら、

「あんた、日本海よ、ほら、海よ」

と叫んだ。彼は氣怠い眼を蒼い沖に放つた。暫くすると風が激しく吹込み始めたの



早

で、幸は名残惜しそうに窓を閉して溜息をした。

「矢張り北陸ね、風が違つてきたわ」
彼は先刻から、幸の横顔や後ろ姿を眺め

乍ら、ぼんやりと妻の事を想つていたが、北陸、という言葉に直ぐ、福井市、妻の故郷と反射的にギクンと胸が塞がれた。
生毛の光る幸の横顔が、彼の網膜の中で

溶けて、拡大された膚の上に、妻の小さな映像が動くのを観ていた。昔馴染の男の家遊びに行く、丁度月始めの三日の休日を利用する、いゝね……と云つても、一向に不審そうな顔もせず、又行く先は何処かと尋ねもせず、衣類や弁当の用意をした妻——何故訊き糺そうとしないのか？

彼は、妻を裏切る自分を忘れ、妻に宛ら裏切られたような淋しい気がした。

五、温泉宿の一夜

幸の案内してくれた温泉宿に著くと、

「まあ、幸ちゃんじやないか——」

女中頭らしい五十女が、透かすような眼付きで、正木の風態を見据えて云つた。客を迎えた眼でも声でもなかつた。山中、山代、栗津の湯とは、歌の文句でしか知らぬ正木には、通された二階の端の座敷が、案内見渡しのいゝ部屋であつたにしろ、所詮馴れぬ哀しさで落付ける座布団の坐り心地ではなかつた。折柄、雨が降り出したのも一層彼の心を暗くしていつた。

やがて、幸の湯上り姿と向い合つた時、日頃の掃除婦のおぼさんでない、三十年増としての古田幸を生々しく意識した。彼は瞬間、十何年か昔、大阪で初めて女を買つて、狭い座敷で向い合つた一夜を回想し、若者のように肺が固くなつた。

昨夜習うた山中節が、今朝の別れの歌となる……わざと情を置めた幸の歌声に、不倫の場とはこんな雰囲気なのかと考え乍ら正木は平常呑み慣れぬ酒の盃を、うからかと重ねていた。

「さあ……もういゝ加減にして——唯ねんねに來たのじやないわよ。金時の旦那」

云われるまでもなく彼は全身が赫くなる程に廻つていた。しかし、頭の中だけが鋭く研えている心算だつたが——

支度しとくからと、幸に教えられて便所に起つた。廊下に出ると雨の音か、川瀬の音か、坐つてゐる時に感じなかつた醉が、耳の奥で眼の判らぬ音と一緒に、ぐわあつと発してきた。眼の前が薄暗くなるのと同時に便所へ倒れ込んだ。匂消しの薬品の香がとたんに彼の胸を押潰した。壁へ片手をかけ、片手で身を支え、彼は醜い姿勢を更に歪めて喘ぎ乍ら吐き戻した。

鼻の中が塩っぽく、泪が溢れて廊下の燈も瞶だつた。室の前に寝巻姿で突立つた幸は、蒼い顔でよろめく彼を見て駆寄り、まあ、あんたは下戸並だつたのねえと脇から手を廻し、援けるようにして室へ連れこんだ。彼は、苦い唾を呑込み乍ら吐息ばかりの有様で、子供のようになり、幸が、寝巻に替えさすのを任せつ放しだつた。

悪酔は二時間程で癒つたが、彼は床の上に起上る気もせず、单调な夜の雨の音をぼんやりと聴きつゝ煙草を喫つた。

半時間程前に、宿の女中が幸を呼びにきた。幸は、寝ている彼へ、直ぐに帰つてくるからと声をかけたが、わざと睡つたふりをしてゐた。幸が、この場末の宿で、以前仲居か女中をしていたのだからと目当はついていたが、それつきり帰つてこない女のことを、それ以上追求して考える意欲もなかつた。元々、酒に弱い自分を良く識り乍らも何故自分は、今夜に限つて度外れな呑み方をしたのだから——

正木は、行燈型の赤いスタンドの塗りが淡く光る一点を睨めて、自分の心の奥を採るように考え始めた。幸は、夜半も過ぎ、

二時を廻つても下から昇つてこなかつた。玄關の方から、ラジオの音楽が流れてきた。はつきりと目覚めると、口中が不愉快だし頭の重たい朝だつた。まだ降続ける雨で、山蔭の家だけに、室の中は一層昏かつた。七時半頃、幸は、眼を赤くして大儀そうな様子で戻つてきた。昨夜は飲かれて夜通しのハナ遊び……ああ、折角の第一夜が雨に降られ乍ら濡れ損つて流されたわ口惜しいつたらねえ——帯を解くなり床の中に這入つた。

正木は、幸の腕を外すと起上つて了つた冷たい水で顔を洗いたいと思ひ、手拭を肩にして室を出ようとする、

「ねえ……怒つてゐるの……」

幸が、崩れた襟元を直しもせずに半身起上つた。明らかに不満以上の憤りを持つ眼だつた。もう朝だよ——にべもない調子で彼は云捨てた。覚えてなさいよ——幸は、ぶいつと布団を被りそう罵つた。

階段を、一段宛ゆつくり降り乍ら、まるで里子そのまゝだ……と思はず咳やいた。そして、文子は絶対にあんな真似はしやしない……と正木は唇を強く噛んだ。と、彼の心の裏側で、女房を偽り、女と遊びに來てゐるといふ事実、その罪悪感が鋭く胸を撲ち、妻の胸元に丸くなつてゐる子供の寝姿や、初めて良人の居ない夜を経験し、天井を見上げてひっそりとしてゐるかも知れぬ、寂しげな文子の顔も想像され、彼の頭が乱れると、足も乱れて二、三段を、上るように彼は駆降りた。

× × ×

「もう駄目よ。およしなさいつてば……強

くもない癖にさ——」

幸が、真剣な顔になつてゐた。

酔う程に正木は、目の前の幸を意識しよと努力した。昨夜、無理に酔おうとした意図を俺は再び繰返している——それが強く彼を支配してゐた。

△酔つたまぎれに、祖父は、外道な真似をした——V

その一事が、三十年間の咀いにも似た想いが、崩れ落ちそうな彼の頭の中で、堂々巡りをやつてゐるのだつた。彼の視線は熱く濁り、混乱した網膜の中に女を捕えようとして焦つた。

△酔えば、酔えば、良心も道徳もなくなるのだからV

その可能性の限界を彼は確實に把握したかつたのだ。彼を苦しめていた何かが、正体を、やつと彼は発見出来たと信じた。拗ねて寝た幸がやつと目覚め、遅い風食を終えたと湯に行き、帰るなり、所在なく畳に寝転つてゐた正木へ、なだれかゝつてきた。

酔乱に乗じて女に挑もうとしたが、腕は肘を支えることすら困難だつた。一合の酒も碌に呑めぬのに、五本の銃子は重荷でありすぎた。逸り立つだけ却つて逆現象が起つたのは、かれこれ四時間位前のことだつた。

彼は夜になると夢中で酒を呷つた。一層辛苦い酒の味だつた。酔いければ男は野獸だと云う言葉を信じたかつた。

祖父と母の事が依然頭から消えず、果して酒がそれをさせたのか、どうか、をば彼は身を以て実験したかつた。

酔えば親兄弟、妻娘の見境もつかぬ酒乱と云われた祖父、いや父親——

幸の肩に手をかけ、押倒そうとする腕に脆くも自から畳の上へ潰れたように延びて

しまつた指先が畳をきつく搔むしつていた
「嘘だ、うそなんだ、そんな、そんなことはあり得なかつたんだ……」

幸が、そつと彼を膝の上に抱きかゝえると、正木は声をたてずに泣いていた。何も彼も消滅して欲しかつた。自分が誰と誰の間に、どうして生れた人間であつたつて、それがどうしたと云うのだ——俺は、俺つて人間は、その為に一生を支配されねばならぬのか——

「俺は俺なんだ。誰の子でもない……俺は俺なんだ……離してくれ、俺一人にしてくれ親父もお袋も、何も俺には要らない……」
事情が判らぬ乍らも幸は、出来得る限りの優しさで親切で正木を寝させた。間もなく彼は囁言を言い始め、胃の辺りを押えて苦悶しだした。幸は、帳場から薬を持ってきて服せ、医者も呼んで介抱した。急に深酒をした為に、胃が荒れたのだと医者は説明して歸つた。夜が白む頃に、正木は夢を見ていた。

暗い闇の中で、酒に酔つた自分が、俄かの腹痛に歩けなくなり、その場で苦悶を始める。呼んでも叫んでも誰も来てくれないその癖、何んといふことなのか——向うの方に、不意に家の情景が現れ、子供の頭に氷袋らしいものを乗せ、心配げに見守る妻の姿が見えた。しかも、低い、か細い文子の声がよく彼には聴えるのだ。子供が、お父ちゃん……と呼ぶ声もする。まだお歸りにならないのよ、どうしたらいいのだから……妻の泣声だ。おーい、俺だ、俺は此処に居る、此処に居るんだ。あれ程妻子の声が良く聴えるのに、自分の声は届かぬらしく、いくら嗷鳴つても振返りもしなかつた。呼び続け、転げ廻り、子供の容態を知

ろうと焦り、妻の膝へ匍い縋ろうと身もだえする自分の姿——それが、彼にはハッキリと見える。それでいて、苦しみ藻掻く苦痛は、矢張り彼の肉体に充分応えるのだつた。俺は夢を見てゐる——夢の中で彼はそれに氣付き、何とかして夢から醒めようと苦心した。だが、不思議に夢は続き醒められそうもなかつた。やがて彼は、俺はこの夢の中で本当に死んで行くのじやないかという疑問を抱いた。恐怖が、水に追れ、炎に取巻かれたように迫つた。死ぬのは嫌だ！

彼が目覚めた時、じつと見下している幸の眼を最初に見た。彼女は、彼が大きく呼吸し乍ら、弱々しく笑うのを見て、ホツとしたように涙を掌で拭つた。

「いゝ人だなあ……ほんとに君はいゝ人だ……心配かけて……」

彼の言葉が咽喉に絡んだ。

正木は、静かに幸の手を握つた。幸はその時、やゝ首を垂れて羞いを見せた。

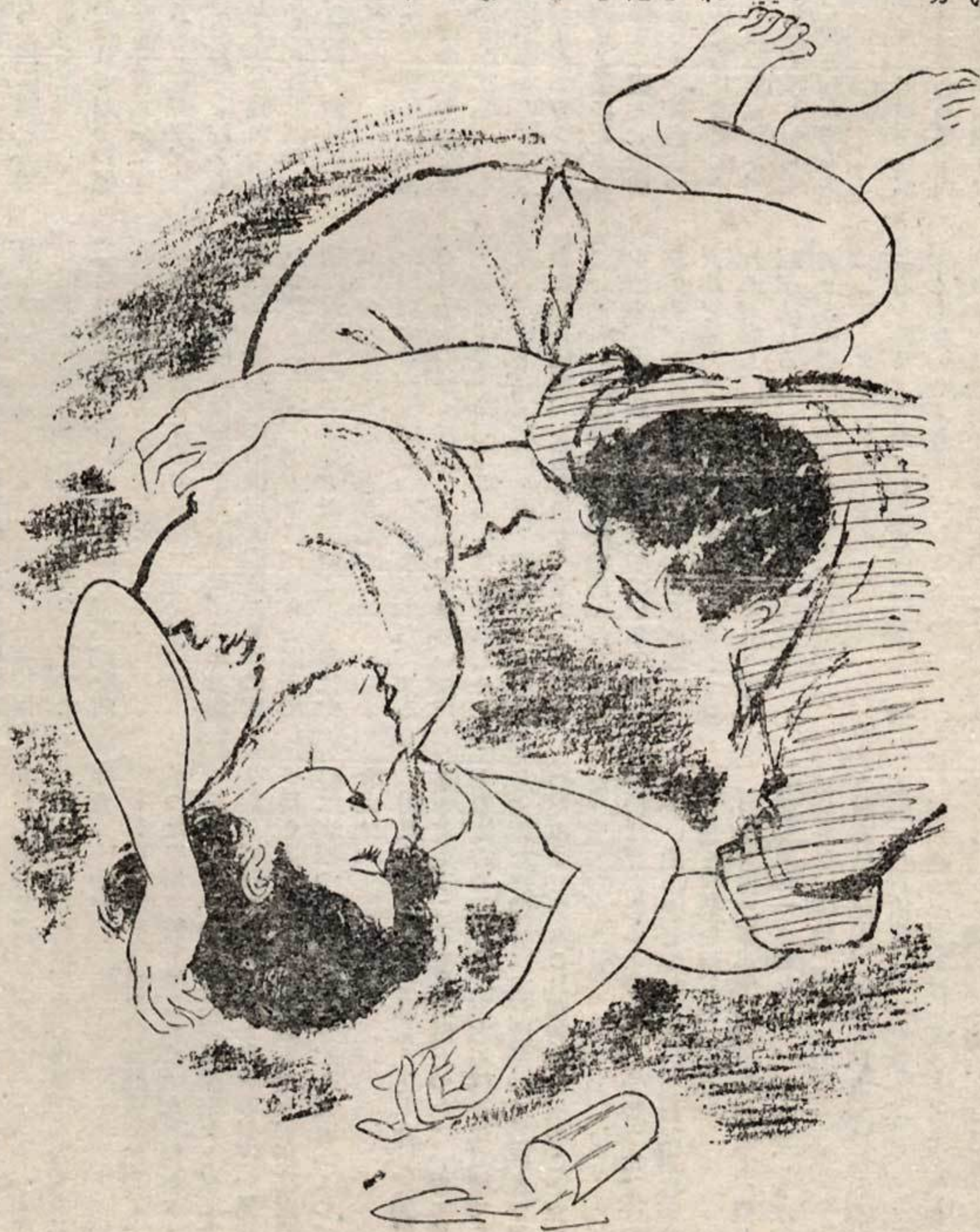
彼は、ゆつくりと起上つて幸を抱寄せた

彼女は又しても羞恥を現わして顔を伏せた

彼は極く自然な力で幸の顔を持ち上げ、暫く眺めてから、静かに唇を近づけた。今幸に

対して持つ愛情には曇りが無いと思えた。

接吻する事に於て、何の情念も動かない。



又、それを受ける幸の方も、軽い感動を指先に示すのみで、それ以上の行為に移ろうとしない。
「これなんだ。真の愛情でものは——」
強く唇を合し乍ら正木は心で叫んだ。

六、朝日は昇つていた

「だから俺は……その女に謝つたんだ。折角の旅も台無しにして相済まん——」

「じゃ、ゆき……さんて方は、その宿で元通り働かれることになりましたの——」
「うん。どうしても帰りたいくないつて言うんだ。あの女の気持が俺には判らんでもないがな。しかし……」

「私にはよく判る氣がしますわ。貴方を愛してられるんです。本心から……」

「そんなことはないと思うが……」

「でも、私は貴方がすっかり打明けて下さった事だけで嬉しいんですの。仮に、その

寸劇 (迷探偵X氏捕物譚)

謎の血痕 伊勢みどり

舞台——アパート内の廊下
一二三号室の扉が正面に見える。

時——或る日の午前六時頃。

人——迷探偵X氏。其他
アパートの住人多勢。

開幕のベル!

三号室の扉をあけて出て来た奥さん、手拭を持つて洗面所へ行こうとし、二号室の前を通りかゝり、廊下を見て愕然、恐怖の眼!

「キヤーツ、ち、血! ひ、人殺しッ——」

叫ぶや其の場にドターンと倒れる。

「何、人殺し?」

「一体何があつたの?」

「人殺しだつて?」

アパートの住人多勢、二号室の前へ飛んで来る。不思議や二号室からは誰も扉を開け

て出て来る気配がない。

「奥さんッ、しつかりなさいッ」

エイツと活を入れられて気がつく、

「一体どうしたんです? 人殺しなんてあまり穩かではありませんよ」

「そら、其処を見て、血が、血がべつとりと……」

指さゝれて廊下を見ると、大量の血が流された跡がべつとりとして、二号室の扉の下へ点々と続きしかも扉の把手の辺りには真赤な手君さえ付着している一同「ブルブルッギョギョッ人殺しのあつたのは事実だッ」

其の時、一号室の部屋が開いて、エンタツ型の口髭、愛用のマドロスパイプをくわえた我が迷探偵X氏の登場。

「あー皆さん、騒いではいけません。此の事件は私が解決しましょう。早速血痕を調べ

ますから、皆さんはスーツと退つて……それでよろしい」

腰に下げたる彼が唯一の科学的犯罪捜査の武器、特大の天眼鏡を取出すや息を吹きかけて洋服の袖で磨く、

「玉も光らずば磨くべし。ウム、正に血だ 人血だ! 味は男か女か?」

血を指先で舐めてみる。

「こりや甘い、女の血だ、女が殺された! 二号室があやしい。開かずの扉、謎は此の中に有る! さて最初に発見された奥さん、隣室のあなたは昨夜中に二号室内で、何か変つた物音を聞きませんでしたか」

「はい、何でも一時頃帰つて来た御主人と、暫く言い争つていたようでしたが、それから少ししたつと、ギシ／＼ドタ／＼と人が倒れるような揺れる音がして、息が絶えそるな苦しい夫人の声で、殺して

殺して、死ぬ／＼と確かに聞えました、それから無言で静かになりましたから、其の時、格闘しながら、夫人が殺されたんでしよう、と思ひます」

「有力な傍証だ、よし、此の扉を開けて犯人を逮捕せん」

其の時、二号室の中から主人が寝巻のまゝ現れて、ヒョソな顔、

「どうしたんです皆さん、何かありましたか?」

探偵「何をとぼけている、君は殺人犯だぞ、見ろ此の血をッ!」

「え、血、ワッハッハッハ、これは赤インキですよ、昨夜買つて来たのを一杯氣味で帰つて其処の柱へぶつつけたんです」

探偵「しかし、妻君は殺せとか死ぬとか叫んだそらだが」

「ハハハ、あれですか、独身のあなたにはわかりませう、夫婦の愛叫です」

探偵「え?」

幕

ゆきさんて方が、貴方を愛してられようとも構わないと思ひます。貴方に、それだけの価値がある以上、私には何とも申せませんもの。でも、もしも貴方が、今度のことを一切何事も仰言らなかつたならば、私はきつと、その方を憎み呪うに違いありません……」

正木は、文子の言う意味がほんやりと判る氣がする。想えば自分の独力だつたかも知れない。文子の愛情自体に何の変化もないものを、自分の眼が戸惑つてそれを見失ひ、ひとりで狼狽し、取亂したに過ぎない。

「済まなかつた。嘘を言つたりして……」

「私は貴方が嘘を言う方と考へたこともなかつたのです。ですから、……私の方こそお詫しなればならない氣がしますわ」

時間を忘れていた。語り明した恰好で四時をうつ時計の音に彼は愕いた。

「文子……」

低く妻の名を呼んだ。無言で妻は身を寄せてきた。彼は脊中に妻の指先が、かつてない力で喰込んでくるのを感じた。薄い泪が彼の眼に湧いた。妻が平凡でも淡々たる態度でもなく、自分の愛情が、文子の心を燃すに足りなかつた事に、その時初めて正木は氣付いた。二人の周囲の時行は逆行して行つた。近所の鶏が鳴き始める頃、二人は睡りにおちた。

(何か、何か足りなかつたんだ。だが足りなかつたのは人生への努力だつた……) その低い呟きは、正木の寢言であつたかも知れない。すでに陽は昇つていた。

かつぎ屋未亡人

桑の實は赤い

尾上六歩

空に白い雲が綿菓子にチギった様に、フワリ／＼と浮いている。

見渡す限り豊かに伸びた稲の波がうねり、カガシのつけた布片が微風に揺らいでいる。人影全く絶えた夏の午後である。

おみのは百姓家で買求めた芋を背負い両手に米を揚げ乍ら、埃っぽい田舎道をまるで仁王の様な顔をしながら歩いていった。

カツと照りつける夏の太陽の直射に、蒸風呂の中でも入った様に感ぜられ、身体中の汗腺からブツ／＼と汗が吹出るのが分り近くの松の木陰を見付けると、ヘナ／＼と座つてしまった。

胸をはだけて帯もゆるめて、涼をとりながら傍らの風呂敷包の米を見て、「もう少しねばつて負けさしやよかつた」と考えた。

何処でも稲の刈入れ前になると、日に日に値段が騰るのが目に見えるのである。

「俺達の喰代から割くでな」とつけ込んで、焦ら立たせ、貪慾な眼で冷たく省みると、腹が立つてくるのをじつとこらえて、笑を浮かべて泣く様にく／＼と繰返すと、三升や四升はやはり出してくるので

ある。

昨日買つて帰つた農家から比べると、十円も高かつたと考えて見ると、随分探して買つた米ながらも、かえすがえすも胸くそが悪くなつて来た。

その上、何処かへ出かけるのか、百姓家の女房が日に灼けた黒い顔に白粉を塗り、年よりもうんと派手な、赤い着物を着て出かける処で、これも皆、都会から来た人達から取り上げ、米と交換したものだと思うと、胸がしめつけられる様な感じがした。

しかし、それも一瞬で「まア／＼奥さんよく御合意で」と云いながら、帯を後から丁度上げてやると赤黒い顔を、ニンマリと得意気にほころばせて、

「お父さん、はいじや行つて来ます。余りもんやけど風御飯を此の人に喰べて貰つて……」

と、バラソルをサツとひろげて田舎道へ消えて行つた。

今日あたりからソロ／＼亮捌くのに一升五円高くしてやろと考えた、それでも五円は損をこうむることになるのである。

一体何時になつたら楽になるのである。喰うだけの生活、こんな生活から派生した自分達の階級が、楽な生活を送れる頃

には、弊履の如く置き去りされる。

人々の話しでは敗戦の日本にそう容易く、食糧の豊富な時代が来そうにない、と云う絶望的な考えが多く、金や物がこうして農村に流れて行く。

薄紅色に黒の御所車の帯も一月程前、松坂の奥で米と交換した錦紗の着物も、浴衣も……買入した。

暗い気持ちになりながら、木陰の涼しさにウト／＼とした。

人の足音と話しに目が覚めた。

目の前を彼女達と同様な「かつぎ屋」が三人、一目で知れるジャガ芋と麦を担いで通りかゝつたのである。

彼女はあわて、はだけた白い胸の襟を合せ、彼等を見上げた。

最後の一人の男とフト視線が合った。

復員姿のまゝの日焼けた男の唇が開き、白いきれいな歯並びが笑つた。

「あつ」

おみのは、はつと一瞬心臓が氷りついた様に感ぜられたが、それも束の間で、年甲斐もなく胸の内がホカ／＼と熱くなり、頬から耳ぶたまで熱くなつて来るのを覚えた。

「やあー久し振りだな、小母さん」

（あの男だ、懐原の宿屋の一夜明かした若い男は……とう／＼又逢えた）

男は先のかつぎ屋達に何か二言三言言葉を交わすと、彼等を行き過ごして引返して来た。

おみのはセットを当て、何カ月になるか

分らぬ様な油切れた髪の毛の埃を掃らい、それでも手で乱れる毛を押え汗臭い手拭で顔を拭つた。

「すい分、お久し振りだんな……」

僅かにそう言つて眩しそくに男の白いシャツからはだけた浅黒い逞しい胸を見上げた。

「ほんとに久し振りだなー、今年の冬以来だから小母さんも相変らず元気かい？」

「相変らず買出しだす、離れも助けてくれる人はなし毎日雨が降ろると槍が降ろると買出しで、ブチ上げ（取締り）を逃げるのに苦勞しますワ……」

「お互いにね、俺は工場通いのタマの休みにこれだから、芯がつかれるさ……」

若い男はポケットから煙草を取り出すと、おみのに一本すすめて火を点じた。

「済んまへん」

一息に吸いこんではき出すと心ゆく迄蕩然とくつろぐのだつた。

「あの時は有難うさんでしたワ、突然朝になつたら、大阪へ貴方帰つた後やし、ワタシ、貴方が怒つてしもうたのかと思ひましたワ」

「怒るもんか、あんたの好え人に悪いと思つて気をきかして帰つたまでだよ……」

「まア、誰が好え人なんか居るもんですか冗談を言つて……好え人が居たら買出しなぞするもんですか……」

「いやあー 案外分らんぜ、好え人の為に伊勢くんだり迄、毎日米を担いでるんだろ……」

「まア」

おみのは手を伸ばして男の二の腕をつねつた。「こんなお婆さんやから、嫌で逃げたんでつしやろ」

男は大袈裟に飛び上つて、紅はけではないだおみの顔を面白そうに笑つた。

彼女は金歯を入れた事を意識すると、ワ

ザとキラ／＼と見せて微笑んだ。

男は突然一寸真剣な顔付をしたかと思ふとおみの肩を後から手を廻して抱いた。

「イヤ・イヤ」

彼女はわざと大きく揺つて、薄い着物越しに男の胸や腕の中でわざと擦りつける様に拒んだ。

「イヤ、イヤ道の真中やないの………てんごうしたらイヤ」

云い乍ら、迫り来る男の唇に自分から重ね左手が乳房の上を這つて行くのを止めようとしなかつた。

（今度こそ逃がすものか、きつと自分のものにしてやる）

おみのは心にそう決意しながら、

「私、貴方……好きよ……」

熱い切ない吐息の合間にやつとこれだけ言えた。

「捨てんといて、捨てんといて……」

蟬の鳴声がだん／＼遠くなり、青い麦畑がグルリと一層開いていった。

そして半年前、榛原駅で初めて逢つて泊つた夜の出来事がチラと再び脳裡にすめた。

二

終戦後、大阪と伊勢中川駅を結ぶ近鉄の参宮線は豊饒な伊勢地方への買出しの唯一つのルートとなつたのである。

毎日々々夥しい「かつぎ

屋」がこの車に、ギツシリとつまり帰りは芋と人がひしめき乍ら、ノロノロと長い

青山トンネルを越えるのである。

おみのは戦争中森の宮の軍需工場の食堂の炊事婦に雇われていたが、終戦と共にオッポリ出されると、喰うために一番手取り

早いかつぎ屋の群に投じたのである。

かつぎ屋も取締りさえなければソロバンの合う仕事ではあるが、第一に米や麦はおろか、芋さえ買うことも出来ない日があつた。

時には農家の庭先で、乞食の様に泣いて拜んで分けて貰ふこともある。

帰りは死物狂いの車内で、取締りの目をくぐり遼々大阪まで逃げ帰つてくるのは並大抵の苦勞ではなかつた。

冷たい空つ風が吹き荒ぶ冬の夕方である

八木駅で取締りを始めたと言ふニュースが、中川駅を出た時、車内にいち早く伝つた。

「ブチ上げや（取締）」

一瞬ざわめいたかつぎ屋達は重くろしい沈痛な表情に変わった。

「バカにするねエ」

「此方とら遅配欠配で、家で喰う米を買い出しに來ているのに……」

人々の動揺を外に青山トンネルを越える頃から鉛色の空から雪が舞い始めた。

やがて榛原駅に電車がすべり込むと、買出しの常習連は此処で一応下車して取締りの引上げの連絡を確めるために待機するのである。冷たい風が冬の空にゴウゴウと音をたて、唸り、ブラットホームの石畳を通して足から腰までゾクゾクと冷えてくるのが感じられる。

青山トンネル附近の積雪は次第に厚さを増し、雪降る宵の冷え込みは容赦なくおそいかるのである。

終電車が近づくとつれて取上げられるのを承知で、万一のこぼれ目を頼んで、悲壮とも投げやりともつかぬ捨鉢な氣持で乗り込む者も増えてくる。

おみのはどうしようか迷つたのである。

随分苦勞して買った米七升を持つと、そんな安易な氣持は起らなかつた、女はこんな時逡巡が多く、結局後生大事にとり、思い切りのよい男が真先に取締りに引つかうり、女の方が無事に持つて帰る率が多いのである。

「小母さん、どうするつもりだね」

不意に傍から声をかけられ振り返ると暗いホームの待合室の電燈に照らされた復員姿の三十前後の若い男であつた。

「さあね、それを思案してまんねんがな、あんたはんこそ、どうなさる積り？」

「こんな寒い晩に駅で夜明しをして風邪でも引いちや馬鹿らしいし、終電で一か八か當つて碎けようと思つてゐるんだがね」

「終は大丈夫だつか、私一週間程前、此んな目に逢つて、終に乘つて根こそぎパッサリやられてね、それがために穴埋めするのに今日こゝ迄やつとこぎつけたんですよつてに……」

「へエーで、小母さんは今晚夜明しするか



い」

と、あきれた様にまじりと見つめた。
ポケットから煙草を出すとおみのに一本
すゝめながら自分も口に咥えた。

マッチの灯で、男の案外に優しい善良
なものを発見した。

「え、安い宿屋にでも泊ろうと思つて
るんですけど……」

「そらだな、風邪でも引いて寝込むことを
思つたら、宿屋も好いけど、二日がかりで
買出しも思いやられるし、と云つて取られ
て買上げられること勘定にすれば安いかも
知れんな……」

かつぎ屋の愚痴がお互いに交わされる
と、見ず知らずの他人同志でも、さながら
十年の知己のように親しくなり、不平不満
をそれに加えてお互いの不遇を語り合うの
である。

おみのは布施市に住んでいたが、事変が
始まつて二年目、近くのゴム工場の職工を
していた気の弱いおとなしい良人が、補充
兵で召集され、彼女は子供のいない処から遊
んでいても仕方はないし、近所の人の世話
で森の宮の軍需工場の炊事婦に就職し、良
人の帰還を待つていたが、永い間便りがな
いと思つていたら、戦死の通報が留守宅に
もたされた。

彼女は優しく減多に怒つた事のない良
人がもう二度と帰つてこないと思つと、嘘
の様な、夢の様な気がして信ずることは出
来なかつた。

買出しに追われた終戦後は、身なりもか
まうことは出来ず、日焼けた顔に埃まみれ
の髪のまま、風呂屋も行く暇もなく、毎日
二里や三里も停留所から奥へ入り、三十八
と云う年がもう四十以上にも見え、年より

も老け込んだ様に思われた。

「お互いに戦争の犠牲者だな——」

終電車迄取締りと云う情報が入つてくる
と、男は立上りながらつぶやいた。

おみのは船木と云うその若い男と二人で
宿屋へ行く事にした。

担ついだ米と芋が急に二倍もの重さで肩
に喰ひ込んだ。

青いシグナルが夜目乍ら冬の空にくつき
りと輝き、凍てついた道が金属の様に堅く
響き風が相交らずゴウ／＼と鳴つていた。

三

宿屋は取締りのために買出し客で満員だ
つた。以前三回程泊つたことのあるおみの
は宿屋のおかみさんに頼んで、無理に三疊
の部屋をあてがつて貰つた。

熱い風呂から出るとやつと生返つた様な
感じがした。

「好え別嬪さんが大阪で待つてゐるのにこ
んなお婆さんと榛原の宿屋で、お気の毒だ
んな……」

「そんな好え人が居たら、プチ上げに逢つ
てもかまわんと帰るが、工場の寄宿舎のセ
ンペイ布団じゃなハハハ……」

「うまいこと言うて……」

「何んせ喰うことが一杯なのに、どうして
女房持てるかい」

山出しの女中が一つ床をサツサと敷くと
部屋を出ようとするのを

「ねえさん、もう一つ寝間を敷いとくはな
れな」

おみのは顔を赭くしながら言つた。

「もう一つ？」

「あの、今晚お客様が大勢で、蒲団がもう

ありませんので……」

と、ブツキラ棒に言い捨て、出ていつ
た。

「まあ、どうしましょう」

「仕方がないよ、それじゃ俺布団一枚呉れ

たら柏餅になつて隅で寝ころぶさ——なあ
に、軍隊生活を思い出しや楽なもんさ……」
「いけまへん、風邪を引きます、私しやあ
んたが迷惑だと思つて言いましたので……」
「俺が迷惑だつて？」



「えい」

「そんな心配はいらんよ、俺は貴女が迷惑と思つて遠慮した迄だよ……なんなら俺が自分の足を縛つて寝ようか？」

「アレ……まア……そんな事せんでも好え……」

おみのは娘の様にもし／＼と身体をくねらして着物を脱ごうか脱ごまいか迷つた。

船木はすつぽりと上衣とズボンを脱ぐとポイト足許に投げて、シャツと白いズボン下のまゝ蒲団の中へ入り込んだ。

おみのも躊躇したが寢間着の設備のない宿屋だけに桃色の湯もじのまゝそろりと船木の横に入つたのである。

「あゝ寒い」

と、口について言葉が出た。

男は瞬間ムツツと口をつむつて、目を閉じた。

何年振りであろう男との同衾は――。

だん／＼とお互いの体温が直接に感ぜられ、不気味な沈黙が二人の意志をお互いに求め合う結果となつたのである。

おみのはハツと身を引こうとした。

船木の手が自分の手を触つたのであるしかしそれも瞬間で彼女も又わざと船木の手を求めて握りしめていた。

最終の電車の警笛が山間をあえく様に冬の夜空に響いてくる。

その翌日、目が覚めると船木の姿は床になく暇もなかつた。

部屋に來た女中は何もかも読みとつて笑いを押しかくす様に、

「二人分の部屋代を払われましたけど」と彼女の胸や腰や足までジロ／＼意地悪く見つめた。

「そらだつか――」

何時の間に積つたのであろう、昨夜半から降り出した雪が既に朝の日の光に眩しく輝き、かすかに解ける音が竹筒を通してヒタヒタと消えて行く。

昨夜の欲情の一夜の優さに似て――

快よい虚脱感と疲労感が伴い窓辺にもたれてかすかに眼を閉じた。

逞しい船木の体が未だ自分の肉体の一部に残つてゐる様に思われる。

自分一人で微笑んでくるのに気が付いた、何番電車であらう。ゴウ／＼と音を立て、走つて行く。

四

偶然と云えば偶然の出来事に過ぎない。

買出し先での未亡人と復員兵のはんの一夜の、たわむれに過ぎない。

恐らく二度と逢うことは出来ない、儚ない夢を抱いて、榛原での思い出の一夜を幾度ともなく繰返し／＼一人寝の淋しさ慰め、果ては空しく両手で乳房を押えて、もだえるのだつた。

ムツチリと盛り上つた乳房、豊かな腹から腋への曲線、一人あわれに思えるのである。

ふうと、音もなく船木が訪れて、力一杯自分を抱擁してくれる錯覚に襲われ、恥しい夢のあと孤獨の寂寥をしみ／＼感じるのであつた。

「逢い度うて……逢いとうて……何べん思ふたか知れまへん、もう逃げんといて……」声も絶え／＼に涙を流し乍ら、彼の頸にかじりついた。

人影ない田舎道に、おみのはグツタリとなつたまゝ眼を閉じた。

肩であえ／＼呼吸し乍ら、心よい陶醉に此のまゝで、何処遠い処へ二人で行つてしまひ度いと思つた。

「おい、結婚したのは一度きりかい……」

煙草を喰わえ、一息にすう――と紫煙をはき出し乍ら、船木が言つた。

「えい」

彼女はバツチリ目を開いて、男を見上げたが、強い眼射しに逢うと、視線を外した

「桑の実があんなに赤い」

おみのは立上ると、小娘の様に道傍に植えられた桑の木の実を、三つ四つ摘むと、男の前に帰つて來た。

そして二つ屏の中へ入れると、黙つて船木に差し出した。

船木は口を開いて、投げこまれた赤い桑の実を噛んだ。

「酸っぱい……」

そしてベツベツと赤い唾を一緒に吐き出すとゴロリと仰向けになつた。

「俺は身寄りなぞ誰も居らないんだ。戦前は猪飼野で親爺が袋物商売をやつていたんだが、話に聞くと空襲で焼死んだらしいお前、俺と一緒にいたいかい……」

木訥な言葉がぶつ／＼と切り出され、船木は言い終ると、目許を赤らめて、おみの言葉等待つた。

船木が工場の寮から布団と毛布を担いで、おみの家へ移転したのは、それから四日目である。

「戦争で若い奇麗な娘が、あり余つてゐるのに、あの船木さんと云う若い人、何処が好うて、あんな饒だらけの後家にくつついたんだしやろ」

「あのおみのはんも喰えたら金輪ざい離さんし、晩のサービスで参つたんやろ」

「案外抱いて寝て見たら若い娘より年期を入れた後家はんの方が好えねんやろ」

「おみのはんも若返えつたもんや、四十面さげて、日焼けした顔にお白粉つけて、髪もセットへ何回も通うて、派手な着物ヒラヒラさせてはんまに梅田のパンパンそつくりや……」

「イチヤイチヤとそら夜晩うまで、私等かないまへん、うちのオッサン迄変になつてしもうて……」

「アハハハ」

「ホホホ」

と、女房連中は、案外真面目な船木と、おみのに対して嫉妬まじりの評判を吹聴するのである。

そんなことを気にする二人ではない。

鳥取の吉岡温泉へ二泊三日の新婚旅行をあてこんで、温泉気分を充分に味わい、帰途は二人で、持てるだけ米と麦を背負い、近所へ少し安価で売つけ、温泉宿の費用も汽車賃もロハにし、その上幾何かの日当も浮かし、

「はんまに好え湯で、のんびりしました、うちの人こんなに着替いたん始めてやと云いはりました」

と、惚氣話を聞かされ、近所のオカミさん連中、開いた口が塞がらなかつた。

おみのは買出しに相変らずせつせと伊勢へ足を運ぶし、船木は工場へ真面目に勤めるし、休日には夫婦で映画どころか、芋と米を買い出しにわきめもふらずだつた。

夫婦の仲は至極円満で、小金もだん／＼と出来る様になると、彼女の腹もだん／＼と大きくせり出し、朝早く七輪を囲炉であおぐ、船木の姿が見受けられる様になつた。

(終)

エトランゼの郷愁をそゝるような、鮮やかな黄浦江の夕映えが、やがて漆黒の夜に移ると、国際都市大上海は忽ち犯罪の坩堝になる。

大陸特有の真紅の斜陽に聳え立つ、キヤセイ・ホテル旧横浜正金銀行など、埠頭屈指の高層建築物が、半ば暮色の中に包まれようとしているのに、まだ波止場の一隅

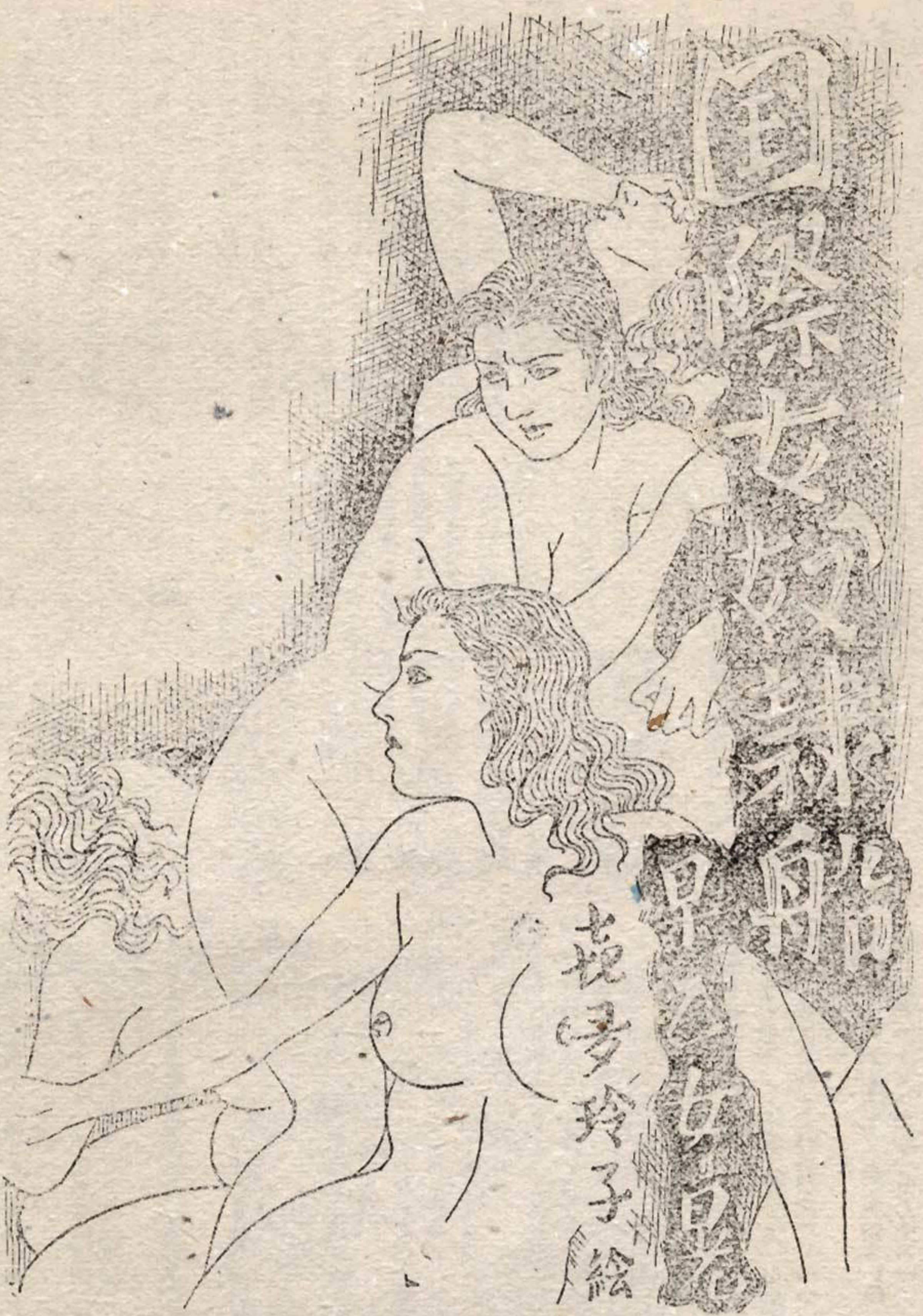
では、戎克の積荷に忙しい苦力達の姿が見える。

積荷は勿論輸出品で、洋箱の両面に擦りこまれた英文は、明らかに日本向の商品である。上半身裸体の苦力達は、其の洋箱を二人で担い、踏板を渡つて、手際よく戎克の中に積み重ねるのだが、黄浦江の兩岸に、恰ら塵芥のように翹集した戎克の群は、夕闇について遡航する大型機帆船のあふりを喰つて、艀をギシギシと軋ませる。

一人の苦力が眼敏く気付いて、怪訝そうに覗き込んだ。其の背にいきなり、監視の男の掌が伸びた。精巧な小型拳銃が掲げられている。

「オイ、何を見ているんだ。下手に喋ると命は無いぞ！」

低く早口に威嚇する男が、何を突きつけて来たかタリは判つた。顔色が変わった。がた／＼と戦慄に軀をわななかせはじめた。然し、積荷に追われている他の苦力達や用便に走つた相棒の苦力に、それを感付かれる余裕も与



其の度にジャンクは左右に傾いて、踏板の上は、ともすると足許を奪れがちである。と思ふ間もなく、新米のクリーがよろめいて積荷もろ共に船底に転んだ。其のはずみで洋箱は激しく舷側にぶつかつた。グラツとジャンクは大きく揺れて、重油の漂う吃水線が、ガツと白い浪を喰んだ。

「馬鹿野郎！ だから気を付けろと言つたじやないか！」

北京訛りの怒声と共に、若い苦力の横面に監視の男の掌が飛んだ。

苦力は頬をおさえて、尻もちをついた。何か謝らうとするのだが、相手の怖い見事に怖氣ついて、息を呑んで立ち上つた。

「いゝか、これからは注意するんだぞ。中味は壊れ易い品物だ。扱いは充分心得えてくれ」

監視の男は、少し語気を柔らげて言い乍ら黒い眼鏡を波止場の往還に移すと、四馬路の方角から来る洋車を、凝つと緊張して見守つた。

えないで、
「密告をするとか知れないぞ！」
と鋭く男は念をおして、苦力の頭を突き離した。

それから、二十分と時間は経つまい。

夕闇に蔽れた黄浦江に、白い一条の航跡を曳いて、軽快につゝ走る一台のモーターボートがあつた。瀟洒なクリム色に、流線形の美しい船体、其の運転台に坐つて黒髪を川風に靡びかせ乍ら、ハンドルを握つた姑娘は速力を落して我克に近付いて来た。

そして、見事に我克の船に横付けにすると、四辺を見廻して、

「王！御苦勞さま」

と、流暢な日本語で、不意に背後から呼び掛けた。監視の男は振り返つた。

「あ、素琴！ 何処からこゝへ？」

王と呼ばれた監視の男も、あざやかな日本語で訊き返しながら、身軽く我克に乗り移つて来た、楚々とした支那服姿の端麗な素琴に、眼を円くして驚いて迎えた。

「びつくりした？ ほゝほゝ、モーターボートよ」

素琴は、耳輪をキラキラと光らせて、微笑の面を、我克の隣にしゃくつて見せた。

「道理で……僕は又、洋車ばかり注意していたんだ。それで税関の方は……？」

「巧くいつたわ。係官は妾の名前を言つただけで、絶対に信用しているんだから」

「それを聞いて安心した。たいしたもんだねえ、流石は中華電影公司の花形女優だ。こつちはそれを知らないもんだから、若しや税関に嗅ぎつけられたんじゃないかと思つて、気が気じゃなかつた。それに、さつきはさつきで、苦力の奴が見付けやがつて……」

「まあ！ それで何うしたの？」

「こつびどく嚇しては置いたんだが、此の調子じゃ出発を急いだ方が身の為だ」

王は用心深く、薄闇の往還に視線を投げて、怪しい人影が無いと確かめると、小型拳銃の安全栓を掌の中で掛け

た。

黄浦江は夜に彩られた。

対岸の灯影が、長い光の尾を曳いているように、何処かで奏る胡弓の音が、颯颯と哀調の余韻をひく。

其の美しい絃の音色に、王は暫く押し黙つて居たが、

「……素琴！」

と、突然顔をあげて、彼女の腕を固く握つた。

「僕は矢ッ張り、君と行動を共にしよう！」

「え！ いけないわ。駄目よ！ あれ程固く約束していたのに。今になつて……」

素琴はかたくなに首を振つた。

「無謀だわ、王。お願いだから止めて頂戴。何度も繰返して言うようだけど、船に乗つたが最後、海では暴風雨

陸では嚴重な官憲に追れる、命知らずの奴隷船よ。貴方なんかが来るところじゃないわ」

「いや、それだからこそ言つてゐるんだ。若し二カ月待つてみて、素琴が帰らなかつたら何うするんだ！ 結婚の約束は何うなるんだ！ 僕の妻には誰がなるんだ！ 譬え、奴隷船であらうと、何んでもあらうと、素琴と一緒に運命を共にするのなら、万一海の藻屑にならうと、僕はそれで本望なんだ」

「……其の気持は嬉しいけど。王、妾を困らせないで中間に入れば、秘密の漏洩を防ぐために、嚴しい掟があるのよ。裏切者には死の宣告が言い渡される……きびしい私刑よ」

「それも知つてゐる」

「じゃ、何も彼も覚悟の上で……」

「勿論だ。私刑や掟を怖れるようだったら、あの魔の東支那海を横断してまで、何うして日本に密航できるんだ！」

「……」

「素琴！ 僕は君の奴隷なんだ。君なしでは一日も生きてゆけない……」

「あ、駄目！」
熱い大慕臭い王の唇を、咄嗟に素琴は軽く避けて、一歩冷たく身を退いた。

「王、貴男の真心は感謝するわ。でも、恋は恋、掟は掟よ。それ程堅い決心の上なら、今更とめはしないけれど奴隷船の一員に加わるからには、掟の東洋鬼の洗礼を受けて頂戴」

「何？ 東洋鬼の洗礼！」

王は思わず、素琴を見据えた。

「そうよ。いくら貴男と妾が許婚者の間柄であらうと、私情で掟を曲げることは出来ないわ。首領の妾が命令します。潔く洗礼をお受けなさい」

素琴は嚴肅に言い放つと、最後の決意を促すように、静かに王の背後へ廻つて行つた。

王は石像のように、動かなかつた。

何んな洗礼を受けようと、愛する素琴の処置であれば従容と服従できる喜びが湧いた。

「王、上衣をお脱ぎなさい」

素琴は支那語で、命令した。

王は、言われる儘に諸肌となり、胡坐をかいて両眼を閉じた。其の左の耳朶を、華奢な素琴の指先がつまんだ腰かと思つと、途端に王は骨を海老のように曲げて、「ウゝゝゝ！」と呻めき、切り裂かれてゆく肉の痛さと頸筋に迷り落ちる腥い鮮血を、四ッん這いとなつて泳いでいた。

2

其の夜、素琴の命に服従して、船倉の片隅で夜を明かすことゝなつた王は、ズキズキと激しく疼く耳朶を抑えて、長い忍耐とたゝかわねばならなかつた。

奴隷船の一員として、又素琴の配下となつて、忠実を誓う掟の洗礼は、誰もが経験した試験であるが、王は激痛に堪えかねて、不覚に呻吟の声を上げた。それでも、一刻はとろ／＼とまどろんだのか、ふと細眼を開けて四辺の様子を見廻すと、積荷の洋箱は何時の間にか空っぽとなつて、無造作に隅に積み上げられている。

表向は輸出品と見せかけて、巧妙に税吏の眼を潜つて来た彼等は、既にそれぞれの部署に就いているらしい。船尾を震わせる、スクリーユの音。

舷側に碎ける、東支那海の波濤と飛沫。

二百噸の大型機帆船は、航海の針路を北東にとつて、絶え間ないピツナングに船倉を揺りたてた。……

「王……」

何処かで自分の名を呼ぶ者がいる。

機関室の騒音に打消されて、空耳かと疑つた王の傍へ原色に花鳥の刺繍を大柄に散らした、縞子のナイト・ガウンを肩先に羽織つて、素琴がくわえ煙草で近づいて来た。

「耳は痛んで……?」

「いや」

王は首を振つて瘦我慢を張つた。

「嘘! 妾をきつと恨んでるでしよ」

「……」

「恨むのが当然だわ。妾は貴男に愛情を無視した、酷い仕打ちをしたんだもの……」

「……」

「許してね、王。今でこそ言うんだけど、康が隣の戎克に隠れて、ジツと様子を見て居たのよ。若しあの場合に銃の洗礼に手加減していたら、それこそ貴男は、康の短銃に射たれていたわ。そして妾達を裏切つて、税関に密告したかもしれないわ。康は妾に言寄つていたのよ」

素琴は、まだ生々しい血の膠着を見せている、王の耳に胸を痛め乍ら、切なく打明けた。そう言えばあの時の素琴の素振りには、残忍な妖婦に一変していた。邪惡に鉄む康の兇弾から救う為めの、咄嗟の場合の機智だったのだらうが、其の可憐な思い遣りも、王には却つて割りきれぬ淋しさが増して行つた。

（水臭い許婚者……）

それが二人の愛情に蟠る、王の重苦しい懷疑であつた互に熱愛し乍らも、接吻ひとつ許そうとしない愛人の態度に、解しきれない失望と不満をいだいていた王は、身の危急を救つてくれた素琴の仕草さえも、何故か芝居がかつた腹芸に見えて仕方がなかつた。

（康と素琴は何かある……?）

の影がチラついて離れなかつた。

もと／＼王は、此の奴隷船の真の目的を知つていないし、康と素琴を主謀者とする、密な計画にも触れていないのである。たゞ素琴の愛着に惹かれて、ずる／＼と盲目的に隠密行動を援助したに過ぎなかつた。

然し、奴隷船の目的が遂げられたあかつきは、必ず結婚するといふ、素琴の言葉に誠実があれば、日本へ密航の詳しい理由を、一応洩すべきが筋道なのだ。それに康と素琴は、共に中華電影会社の映画人同志で、素琴が今の名声を勝ち得た際には、康の並々ならぬ援助があつたからだつた。あたら天稟の容姿に恵れ乍ら大部屋女優に埋れて居た彼女を、一躍主役に拔擢して花々しく銀幕に登場させたのは、康の推薦が幸運への契機となつたのである。従つて素琴と康の間には、王の関与すべからざる、義理が二人を結びつけていたのだつた。

其の康が、王を恋仇とつけ狙つて、素琴との接触を妨害して彼女を我がものにしようとしている——薄々そうだと感付いてはいたが

刺のある毒花

春 山 耀 子
志乃田よしろう画

悲 願

「老いらくの恋」が世間の話題をさらつていたころ、大学教授の小柴先生が、ふと何かの会合で「わたくしも老いらくの恋を試してみたいね」

とつぶやいたのが専らの評判になつたものだが、それからひきつゞき、小柴先生のその悲願は絶えないとみえて、知つた人の顔さえみれば「君、若くて、綺麗な女の子はいないかね」と、いうのが、先生の癖みたいになつてしまつた。

初対面の人は先生にそういわれると、さしては先生には適齢期の息子があつて、そのお嬢さんを物色しているのだなと感違ひするのだが、之は感違ひしない方が無理というもの。何故なら小柴先生、当年とつて五十四才、びんの毛も白いものゝ方が多い上に、謹厳であるべき大学教授の肩書きを持つてゐる。

最も大学で講義しているのは、専ら文学しかも近代文学史であつてみれば、自由恋愛をおう歌した種々さまざま大文学者達の遺髪をついで大いに民主主義ぶりを発揮したとしても之また小柴先生の尊厳を傷つ

けるものにはならないであらう。

ことに先生は自らを、ネロ時代の評判官ベトロニウスをもつて任じているほどの粹人なのである。

ところで先生の

「君、若くつて綺麗な女の子はいないかね」という言葉を真に受けた社会事業家のさる謹厳女史が、

「先生、どうなさるおつもりです。場合によつてはひとりお世話してもいいのですか」と、申入れると

「それは大変恐縮です。実は一緒にお茶を飲んだり、映画や展覧会をみたりするのにならぬ、若い美しい同伴者が欲しいというわけ……、若い娘はい、ですわね、花です。そしてもしその美しい花とお互に理解がうまく、恋愛ということになつたらどんなものでしょう」

「まあ、先生……」女史は真つ赤になつて、しげ／＼と小柴先生の白いびんのあたりを眺めた。

「お年甲斐もなく、何てことをおつしやるのでせう。われ／＼女性を侮辱するにも程があります。目を楽しませる花が御入用だつたら花屋へおいで遊ばせよ。私には先生の心理わかりません」

それを警告する素琴自身が、何故危険な密航を共にするののか。

「素琴、僕は此の際、君に訊いて置きたいことがあるんだ」

「何んなこと？」

「僕が最も気懸りにして居た事なんだ。真実隠くさずに言ってくれるだろうね」

「まあ、改つて……一体何んなの？ 妾、貴男に隠しだてなんかした覚えはないわ」

素琴は神妙に、だが怒るような眼差しで言つた。王は固い生唾を呑んだ。

「じゃ訊こう。僕にはどうしても、納得のゆかない点があるんだ。君は今人気の絶頂にある花形女優だが、それが何故地位や名声をふり捨て、まで、奴隷船の首領になつたんだ？」

何故に日本娘を誘拐して、上海の魔窟に売り飛ばそうと企んだんだ？ 僕はそんな不浄な金で、結婚生活を設計したいとは考えない」

「王、貴男はそれを、妾の口から訊こうとなさるの？」

素琴の顔に、暗い苦悩の翳が宿つた。

王に文は知られたくない、彼女の怯えた秘密の影が、二ツの円い胸のふらかみを、あからさまにはずませて居た。

然し、所詮は素琴の胸に秘めて、永久に葬り去られる事柄ではなかつた。黒いつぶらな彼女の瞳に、白い泪が湧きあがつた。

3

それは今から十年前。

日本軍は支那大陸を、席卷していた。

其の頃、揚子江の沿岸部落を流れて行く、しがない旅役者の一座の中に、素琴と麗花の可憐な姉妹が混つてゐた。

麗花は二十、素琴は十四、一座の女役者達の中でも、二人の姉妹はきわだつて美しく、殊に素琴のあどけない可愛さは、座頭を始め一座の愛撫を一身に受けて、流転

のつれづれを慰めるのだつた。

其の日は丁度演無の「木蘭征軍」が大好評で部落の観衆が詰めこんでいた。そして二幕目が終つた時、突然、木戸口のあたりで、たゞ事でない女の叫びが聞えて来た。

「日本兵だ！」

「早く逃げないと、連れて行かれるぞ！」

女子供の叫び合ふ悲鳴。物の倒れ落ちる音。小屋の中を逃げ惑う驚きの喚声に舞台の素琴は芝居どころの騒ぎではなかつた。

「姉さん、大変よ！ 今、小屋に日本兵が……」

素琴は艶やかな舞台衣裳を曳きづつて、楽屋に番番を待つて居る。麗花の胸にしがみ附いて泣き声をあげた。

「えッ！ 日本兵が！」

麗花はハッと軀をすくめて、騒々しい舞台の叫喚に思はず妹を抱き締めた。

いけない！

愚図くして居たら、連れて行かれる！

麗花は素琴の軀を庇うようにして慌だしく四辺の隠れ場所を見廻した。が、其の時は既に遅く、敗残の便衣隊の抗日軍を掃蕩すべく

自分が侮辱された様に、女史はぶん／＼して出て行つたが先生も人が悪い。以来小柴先生は、人に会うたびに、

「美しい花は、まだみつきりませんか」と冷かされる。

その先生が近ごろ、若い娘を帯同して、あちこちに現われるという情報が入つて、先生を知るものは、さてこそと異状に緊張したものだった。

現われた花



小柴先生は、若い背広を着て、愛用の山簾のステッキをついて、この町の文化人を持つて任じている喫茶店「ボニート」のドアを開けた。

ボニートとはフランス語で、美しい魚という意味で、醜をさしているということだところ、年こそとつてゐるが、小柴先生は非常にノールブルな風貌と、均整のとれた姿態の持ち主なので、所謂文化人を持つて任じている「ボニート」の常連の中では、一きわ光つた存在だった。

その小柴先生が、真つ白なドレスを着た

光る様に美しい少女と同伴で、そこに現われたのだから一同は眼をみはつた。

先生の日常の言葉からおして、その少女が先生の花であることは、もはや説明を待たない。

いつもの様な軽妙なしやれも飛ばさず、連中は至つて神妙に、この花を鑑賞し初めた。

「どうしたね。いやに静まり返つてゐるじゃないか、まるでお通夜の様だ」

先生ひとり浮き浮きとして、もうもうと立つてゐる煙渦の中へ溶けこみ乍ら、空いている椅子に座り傍の少女にも椅子を示す。

「そこへおかけなさい。飲み物は何がいい？ 僕はコーヒード」

「わたしレモネード」

少女ははつきりと思ひ表

銃剣を構えた日本兵の軍靴の音が二人の姉妹を取囲んでいた。

「……姉の麗花は其の翌日、妾を残して自殺したのです……凌辱された為に——」

總てを物語る素琴の頬に、新たな屈辱の泪が糸を引いて、流れ落ちた。素琴は尙も続けた。

「妾が日本人に復讐しようとしたのは、姉が非業な最後を遂げた、其の日からでした。たつた一人の姉を、醜い戦火の犠にした憎い彼等への報復手段を、妾は彼等が執つた行為と同じ方法を選んだのです。幸い妾は康のお蔭で、映画女優として地位とお金を得たので、慙々、復讐の隠密工作に取り掛つたのです。其の手段と言ひの……」

素琴は怖るべき、上海露窟の裏面史を暴露した。

つまり、国際女奴隷船——それは上海の暗黒街に蜘蛛の巣の如く張りめぐられた、ユダヤ人ウィリアムを首魁とする、一大女貿易団なのである。

彼等のあやつる十数隻の機帆船は、夜の黄浦江を中心として、遠くビルマ、ジャワ島にも及び、仏領印度支那、フィリピン朝鮮、台湾等、文字通りアジア各国の婦女子を誘拐又は売買して、上海の裏町に叩き売り、永久に陽の目もあたらぬ売笑婦として、不潔な地下室につながられるのである。

素琴は康と共に謀して、首魁のウィリアムと接近した。勿論彼等が「ノー」と首をふる訳もなく、彼女が日本娘の貿易に、ウィリアムは算盤高い色よい返事をした。

素琴は復讐の第一段階ともいふべき、ウィリアム所有の大型機帆船の借用に、映画に依つて得た収入の大半を保証金として手渡し、尙彼等の手先十数名を、輸出品と見せかけて、計画通りに洋箱に潜ませ、沖の機帆船に移したのだつた。——

「王、判つたでしよ？、妾が何故にこんな冒険を敢えてしなければならなかつたか……姉が犯されたあの時の悲劇は、妾の生涯を賭けた肉親の復讐へかりたてたんだわ」

「……………」

「妾はその為には、何も彼も犠牲にする心算りよ。たとえば貴男との間柄も、船の操にしたがつて、飽迄も首領と、部下の貴男。若し万一控を無視して、妾の寢室に忍び込こんだ者は、発見次第処刑されるんです。勿論接吻も恋を語ることも……………」

素琴の言葉は無慈悲なくらい冷たいひびきをこめて、王の胸に鞭を打つように、びしりと厳しい宣言をした。

それから×日——

長崎島の東端、島原半島の沖合へ、静かに碇泊した一雙の大型機帆船があつた。

暮れて間もない有明海の波間には、海面を彩る夜光虫の群が、不意の投錨に驚いたのか、一段と美しい、不知火を描いて、遠い蠻仙の温泉ホテルの灯影を想わせた。

機帆船からボートが降ろされた。

間もなく、黒い魔物のような舷側に、繩梯子を伝つて降りて行く数人の影。

其の中に、夜目にもあざやかな白い洋装で、ボートの中に乗り移つた女があつた。

示をして審れる女王の様にあたりをみ廻すきれいだつた。それにあの広い額が蒼味が

日頃わたしと発音する小柴先生が僕、といつたのにも、みなは度胆をぬかれた。一同は小柴先生の演出を、手も足も出ない気持で眺めているより他に仕方がなかつた。

二人は運ばれた飲物を飲むと

「じゃあ、今日はこんで失敬、之からちよつと廻る所があるんでねえ……」

驚くべき事には、小柴先生は、少女の腕を取つてわが腕に組み縋望としつとのまなざしにもひるむ色もなく、青年の様な足取りでボートの扉の外に消えて行つたのだつた。

あとには喧々ごうごう……

「畜生、うまくやつてやがら……」

それが口癖のどもりの青年の発言につづいて

「驚ろいたねえ、全く。先生、相当な心臓の持主だ、とうとう花をみつけてしまつたよ」

「しかもあの花、なかなか優秀じゃあいかその辺じゃちよつと手に入らない様な代物だ」

「先生も出し惜しみしていたね、お前らの眼にさらしたら危険だつて風に。いくつだろう一体、十九か二十かな？」

「とみえるでしよ？、あれでもう相当の年かも知れないわ。少女みたいな固い顔をしていたけど、身体は線には崩れがみえてわた。案外あれで食わせものかも知れなかつてよ」

女流画家だけに、Y女史が細い欲察を働かせる。

「いや、それはYさんのお目違いだ。僕は絶対にヴァジンだと主張するね。眼が突に

きれてしまつた。それにあの広い額が蒼味が

「とにかく小柴先生、大した逸品をみつけたものだ。彼一人に人生をおろかして置くつて手はないね。我々もどこかへ出動しよう」

黄昏時の憂うつなせいもあるかも知れない。

小柴先生がまきちらして行つた雰囲気がこの気まぐな文化人達を刺激して、各々その求める所へ行動を開始した頃、小柴先生は、彼の眉目美しき少女と川魚料理で有名なさる料理の二室から黄昏こめた川面を眺めていたのであつた。

花散りぬ

「あゝ驚ろいた。私どうなるかと思つたわ先生も人が悪いのね、みんな一癖ありそうに願して、何だか私壽命がぢまつたみたい……」

チャブ台の前に横座りに座つた少女は、媚びる様な目をして、小柴先生をみあげた「愉快だつたよ。いまごろは大騒動してるだろ。勿論君の下馬評さ。君はきつと連中から大家の令嬢か、少くとも芸術家の卵ぐらいには踏まれているだろ」

小柴先生は、ビールのコップを高くあげた先生はうれしくて仕様がなかつた。

偶然の機会から、かねての念願の様に美しい花を、しかも生きた花を知る様になつて、あゝして町を一緒に歩き、友人を誘ませ、夢ではなく、その花と一しよに、人目をさけて、ビールのコップをあびている。人生の快楽を、この一瞬にあつめた様な

た。短かいバラソルにシヨルダーバック。一通りの女の持物を身辺に携えた女こそ、すつかり日本娘に交装した密入国の素琴であつた。

素琴は懐中電燈を点滅した。

(準備完了!.....)

ボートの合図で、機帆船の錨がガラ／＼と捲き上げられた。

4

第三国人が組織する、婦女誘拐団大阪に現わる。

昨夕五名行方不明――

初夏の大会を戦慄に捲き込んだ。婦女誘拐団の新聞記事が載つた其の夜、友人に誘われるが儘に、酒場でかなりメートルをあげた筒井六郎は、停留所から自宅へ向う、明るい商店街を通り抜けると、上着を脱いでネクタイの結び目を緩めて歩きだした。

六郎の家は停留所から約四丁ほどだが、商店街を抜けてしまふと、急に飲み過ぎた胸苦しさが咽喉元につき上げた。ビールだけで止めておけばよかつたのだが、後から無理にすゝめられたウイスキーがこたえたのだらう。頃からあまり酒盃に親しんで居ない胃袋は、後二丁ほどの自宅まで、とても持ちこたえられそうにもない。

醜態だ……とは思つたが仕方なく指を咽喉の奥に突つこんで、道端の草の根っこに蹲んでしまつた。丁度通り掛つた人も居ないのを見澄まして、六郎は洗った指を洗う心算で、近くの小川に歩み寄つた。

何日も附近の子供達が、網を提げて小魚を捕つてゐる美しい流れは、小川に沿うて鉄道線路が光つてゐる遮断機が降りて、列車の汽笛が近づいてゐた。

「あ……？」六郎ハンケチで指を拭いたが、遮断機の降りた線路に、人間が佇んで居るので愕いた。

列車の距離は、あと百米! (危い!) 六郎は我れを忘れて走つて行つた。

僅か一年あまりの間に、三人の犠死者を出した此の附近は、警察もほとほと手を焼いている。飛込自殺でいや

がられている、魔の踏切なのだ。

六郎の走つて来る足音で線路に佇んで居た若い女が振り返つた。

列車の轟音はすぐ眼の前に迫つてゐた。

女は六郎を邪視者とみて還がれようとしたが組み付かれた。

「は、離してください! かまわないで頂戴!」

身を悶えて絶句した。

「莫迦な真似をするんじゃない!」

六郎も懸命で抱きすくめた。後から上体を強く抱かれた女は、覚悟の自殺を激しい抵抗にあらわして、温しい六郎を何度も跟めさせた。ハイヒールの片ッ方がレールの中に転んで行つた六郎もシャツの釦が二ツ三ツ飛んだ。下着のランニングシャツへ、抱き締めた女の薄もの、肌、争いの呼吸を荒々しく震わせてすれ合つた。其の間に列車は呆々気なく通過して、一陣の旋風をふたりに残し、見る／＼尾燈が遠ざかつて行つた。

女はがつくりと力を抜いて、よろめくように六郎の腕の中から二三歩還がれた両手で顔を蔽つた。肩が小



り金のかゝらない時間をつぶして、人混みの通りを抜けて、暗い道にかゝつたと、彼は後から呼びとめられた。

「もしもし……」

あつと、声をあげたい様な彼このみの、美貌の少女なのに、度胆を抜かれてい

ると、

「これ、小父さんのじやありませんか?」

みると上着のポケットに入れて置いた管の、さつき古本屋で求めた小冊子を、いつのまにか、この少女が手に移つてゐるのだ。

「お落しになつたんです。であとを、追つかけてきましたの!」

「そりやあ済みません、わざと!」

小柴先生は少女のいう言葉を信じて、お礼にコーヒーでも飲みましようといつて、近くの喫茶店に少女を誘つた。

少女の名前が、三木ノリ子であること、病む父親をかゝえた貧しい家庭の彼女は、特殊喫茶店で働いてゐること、そこで客を取る様に強要されてゐることなどを、彼女は話した。

「親戚のひとがきたので、今そこまで送つてきた所なんです。帰るとまたいやなお客から、淫らな言葉をきかされると思うと、生きてゐるのがいやになるわ!」

感激家の小柴先生は、すつかりノリ子の

数日前、小柴先生は、ひとりで凛然と町を歩いていて、この少女と知りあつたのである。

先生の一人歩きも有名で、之は先生の不幸な家庭生活に由来するものとみられる。

小柴先生の夫人は、早発性痴呆症という病名で、殆ど盲人同様であつた。

随つて、先生は家庭生活から何物を望むことも出来なかつた。

先生が楽しみを外に求めるのは、そりいう不幸が根ざしてゐるからであつた。

本屋をのぞいたり、映画の看板をみたり小さな喫茶店でコーヒーをすゝつたり、余



5

刻みに震えて居る。折角機会を邪魔立てされて、死より他に解決のしようもない、弱い女の正気に還つたすゝり泣きを、六郎はぼそんとつつ立つた儘で、慰めてやるにも適当な言葉が見当らなかつた。ふと彼は、列車の車輪に無惨に轢き裂かれた、女の片ッ方のハイヒールを見た。「貴女は此の附近じやないね？靴が片ッ方じや仕方がない。何うする心算なんです？」

「……」

「僕の家はすぐそこなんです、どうです？気の鎮まるまでやすんでいらつしやい」

六郎は女に自殺を断念させるのには、一応此の場から連れて行かねばならないと思つた。今は相当亢奮もして居るし、おそらく事情を打明けはすまい。それより静かにほとぼりの醒めるのを待つた上で、場合に依れば相談に乗つてやつてもいい、と考へた。

「さあ、遺體はいらない、行きましよう」

六郎はきまり悪そうに肩をすぼめる女の決心を促すように言つた。

女の名前は翠路と言つた。戦災で両親を喪ひ、たゞ一人の叔父を尋ねて故郷を出た彼女は、叔父の甘言に欺されて、街の或る店に就職は出来たが、其処は醜態屋だつたのである。けれど叔父は既に身売金を受取つてゐる為、どうすることも出来ず、いつたんは身を洗めようと諦めたものの、愈々お客を取るようになると恐しさのあまり逃げ出して来たのだという。

「ウム、それで身寄りも無くなり、遂に自殺する決心になつたのだね」

言葉を通じて、同情してしまつた。

先生の目には、この少女が古い言葉でいへば、泥中の蓮の花の様にうつつた。

先生は兼ねての理想にかなつた、こんな美しい少女が、無難作に自分の前へ投げ出された偶然の機会を、神に感謝した。

先生は、別れるとき、ノリ子の手の中に若干の金を落し、

「わたしはきつといふようにするからね。決して誘惑にのつたりしちやあ駄目だよ」といふきかした。

その翌日から、先生はまるで青年の様にノリ子のいる喫茶店「ナナ」に通ひ初めた。ノリ子は無智な少女だつたが、不思議に香氣のある氣高い容貌をそなへていた。

小柴先生は得意になつて、ノリ子を伴同して歩く様になつた。

一度ノリ子の家庭をも訪問してやろう、出来たら自分の養女ということにして、家に引き取つてみたい。

何の教養もないあけずりの少女に、自分の持つてゐる教養のすべてをそゝぎこんだらどんなに素晴らしい女になるだろう。

小柴先生の夢は大きくふくらみ、そうした未来を考へることで、幸福にはち切れそふな氣持になるのだつた。前から打ちあわせていたので、今日は、ポニートの常連を羨しがらせて、川魚料理でも食べよう、とノリ子を誘ひ出した。

ところが、小柴先生は、この料亭で思ひがけないことにぶつかつてしまつたのだ。先生は、まだ別にノリ子の肉体に何らの野心があるわけではなかつた。

いづれはそうなるにしても、それはもつとさきのこと、当分は雰囲気浸つていたという、先生の夢をいへんにさましてし

まう様な言葉を、こともあろうにノリ子の方から持ち出したのだ。

一つには相當に飲んだビールの酔がさういうことをいわせたのだらう、と先生は善意に解しやくして、自分の膝の上に、しどけなく凭れかゝつてくるノリ子の身体を愛撫してゐるうちに、先生も何だか妙な氣分に襲われ初めた。

「困つたわねえ。私は当分ノリ子のババさんになつてあげるつもりだつたのに――」

「いや、そんなのいや。私、初めて先生をみたときから、もう夢中だつたの。それでわざと先生がうつかりしてゐるとき、ボケツトの御本、失敬しちやつたの。だつてそうしなければ、とても先生みたいな人とお近づきになれないんだもの……」

ひたむきに、ぐいぐい押してくる若い肉体に負けて、ついに小柴先生は、大学教授の威厳を地におとさなければならなかつた。ベトロニウスをもつて任じてゐる小柴先生は之また止むを得ぬ、自然の法則だと案外早く、自分の行為を是認し、それにしても、ノリ子のあのか細い肉体の何処に、あれ程の魔性がひそんでいたのか、と今更の様に驚異の念にうたれてゐると、

「御めん――」といつて、その場にちん入してきたものがあつた。

一見して街の兄ちゃん型、小柴先生が座り直す隙もあたえず、

「へ、へ、へ……老いらくの恋のお楽しみ最中、無粋な客で申しわけありません」

一応の仁義を切つて、隅の方に小さくなつてゐるノリ子にじろりと目をやり、

「おい、ノリ公、俺の体面をどうしてくれ。自分一人、いふことをやりやがつて、お前の亭主のこの俺をどうしてくれるか



六郎はだんぐと、同情的に頷くのだった。琴路を救った夜から二日目。

歐風の粋を取り入れた、パンガロー式の広大な邸内は庭園ゴルフ場の設計まで備えていて、書生を相手にクラブをふるう父の姿が、応接室の開放された窓辺から、六郎と多津子の兄妹の眼に映った。

妹の多津子は、琴路の話を聴

いている中に、しばしばハンケチを眼頭にあてていた。

「ほんとにお気遣いですわ。……それに比べると私達は幸福すぎましたわ」

多津子は哀れな境遇に声をつまらせていた。

「ねえ多津子、僕は此のまゝ琴路さんにうちに居て貰おうと思うんだが、お前どう思う？」

「ええ、よろこんで居て戴きますわ。丁度、私お友達が欲しいと思つて居たところだし、それに琴路さんだつてお厭じやないと思いますけど」

そう言われて、琴路は一寸躊躇らんだ。

「ね？ そうなさない？」

「……はい」

琴路はうな垂れた儘で、静かに答えた。

其の翌日から琴路は家族の一員として迎えられた。一ツ年下の多津子は、琴路を姉のように慕い、日が経つにしたがつて、兄の六郎と琴路が結婚するのではあるまいかと考え、又それを希う気持ちになつて居た。

或る日琴路は、夕食後の散歩に出ようとして、玄関の前まで来かつたが、突然、ビーツと鳴つた口笛に、何気なく振り返つて見ると、表に二人の男が立つて居た。

鳥打帽に黒い眼鏡をかけた。相手の男は、喰えた煙草を吐き捨て、ツカソカと玄関に這入ろうとした。

（あ……）琴路は声に出さなかつたが、あり／＼と狼狽をあらわした。

男は琴路に立塞がれて、眼鏡の底から睨みすえた。

「素琴！ 人をやきもきさせるにも、ほどがあるぜ！」

今日で一体何日になるんだ

頭から噴付くような、激しい見舞である。琴路は蒼ざめて、樹蔭の方へ二人を促した。今こそ日本人になり澄ましては居るが正体を洗えば中国人の素琴なのである。

姉の麗花の復讐を誓つて、日本密航に成功した彼等は、母船を瀬戸内海に近ずけて、京阪神の婦女誘拐に魔手を伸したのである。

中でも首領の役目は、配下との連絡を保つ上に於いて行動の敏速と果敢に重点を置かなければならないのだ。

「あッ」と小柴先生が驚くひまもなく、男の手はノリ子の身体を引き据えていた。

「怪しい／＼とにらんでいたんだ。こんな所へ、しかもこんな立派な紳士をくわえこむとはお前も相当な腕になつたもんだ。

ねえ、そちらの先生、身許もちゃんと調べてあるんですぜ、大学の先生とは大したもんじやあねえか、お望み通りの老いらくの恋の味は、どんなもんでござんすかい。一つ如何でしょう。新聞社にでも売りこんでみますかね」

小柴先生は、すっかりあおくなつてふるえていた。

何といわれても、頭が上らない。

平身低頭、ひたすら事を穏びんに済してくる様に、詫びた。謝罪文と同時に、相当の金額を、相手にあたえることで、漸く話のけりはついたが、さすがの判判官も、川魚料亭の門を出るときには、あれやこれやで、二三年一べんに年を取つた様に老けた足取りであつた。

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

上

「あッ」と小柴先生が驚くひまもなく、男の手はノリ子の身体を引き据えていた。

「怪しい／＼とにらんでいたんだ。こんな所へ、しかもこんな立派な紳士をくわえこむとはお前も相当な腕になつたもんだ。

ねえ、そちらの先生、身許もちゃんと調べてあるんですぜ、大学の先生とは大したもんじやあねえか、お望み通りの老いらくの恋の味は、どんなもんでござんすかい。一つ如何でしょう。新聞社にでも売りこんでみますかね」

小柴先生は、すっかりあおくなつてふるえていた。

何といわれても、頭が上らない。

平身低頭、ひたすら事を穏びんに済してくる様に、詫びた。謝罪文と同時に、相当の金額を、相手にあたえることで、漸く話のけりはついたが、さすがの判判官も、川魚料亭の門を出るときには、あれやこれやで、二三年一べんに年を取つた様に老けた足取りであつた。

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

小柴先生、ひとりとみてとつて、ポニットの常連、気がつよい。

「あッ」と小柴先生が驚くひまもなく、男の手はノリ子の身体を引き据えていた。

「怪しい／＼とにらんでいたんだ。こんな所へ、しかもこんな立派な紳士をくわえこむとはお前も相当な腕になつたもんだ。

ねえ、そちらの先生、身許もちゃんと調べてあるんですぜ、大学の先生とは大したもんじやあねえか、お望み通りの老いらくの恋の味は、どんなもんでござんすかい。一つ如何でしょう。新聞社にでも売りこんでみますかね」

小柴先生は、すっかりあおくなつてふるえていた。

何といわれても、頭が上らない。

平身低頭、ひたすら事を穏びんに済してくる様に、詫びた。謝罪文と同時に、相当の金額を、相手にあたえることで、漸く話のけりはついたが、さすがの判判官も、川魚料亭の門を出るときには、あれやこれやで、二三年一べんに年を取つた様に老けた足取りであつた。

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

「先生、花はどうしました。みんなを囮らせて置いて、ひとりで鑑賞するなんて、先生らしくない趣味ですよ」

うと、首を長くして待つてゐるのに、お前の呑気さ加減も呆れたものだ」

康は自棄に四辺はゞからぬ大声で言う。素琴は怯えて取縮つた。

「大きな声を出さないで、おねがいだわ、康妾だつて機会は狙つて居るんだよ」

「冗談じゃねえ！これ以上引ッ張られた日にや、船諸共にじゅずつなぎだ」

素琴に何か後暗いものがあると察したのか康は凶に乗つた悪玉ぶりに濃味を利かせて

「それ共、素琴、お前まさか此処の青二才に浮気心を出したんじやあるめえな？若しそうだとすりやあ、俺はたゞじや置かねえぞ」

「まあ！何を言うのよ。やきもちなんか、みつともないわよ」

「ところが、どつこいそらは言わせねえ、始めの芝居がほんごとにならねえとは、保証出来るもんじやねえ」

「……………」

「いゝか素琴？俺はもう一日だけ待つとしよう。それでお前が帰らなかつたら、お前の素性を暴露してしまふぜ。覚悟はいゝか？」

「え！妾の素性を暴露すつて！」

素琴の顔色に恐怖が走つた。
「ふん、それ見ろ、惚れてねえのに何故あわてるんだ？まいゝ、後二十四時間の自由だけはやろう」
捨台詞を残して、康は配下へ眼配せして去つた。後に

しよんぼりと佇んで、素琴はしばらくは、何事も手につかない絶望的な細い溜息を吐いた。康の捨台詞が耳朶にこびりついて離れようとしなないのは、正しく彼の図星通り、ミイヲ取りがミイヲになつた、六郎に対する密かな思慕を悪眼に仲間へ悟られたからであつた。

絶体絶命！……………ピリピリと唇が戦いた。

「——琴路さん」

素琴は二度目に始めて判つた。一間と離れない樹蔭に立つて、六郎が犬のくさりだけを携げて見守つて居た。

「あ……………」

素琴は其の場から動かれなくなつた。
邸の人には誰も感付かれなくてよかつたと、ほつと安堵した胸が、逆に激しく血の音をたてゝいつた。六郎は犬を連れて此の附近に來たのだらうが、時ならぬ話声にきゝ耳をたてゝ、犬を放つて盗聴して居たらしい。

「——悪いとは思つたのだが、みんな聴いてしまひました。しかし、僕は貴女が悪人とは思われない。何か深い事情があつたのだらうと、寧ろ同情しているくらいです」

「……………」

素琴は顔があげられなかつた。
罵られるべき自分に、思いがけぬ六郎のいたわりの言葉は、一言一句、素琴の良心を貫いていつた。六郎は更に穩かに訊いた。

「さつき確かに、貴女を素琴と呼びましたねえ？貴女は日本人じやなかつたんですか？……………」

「……………はい」

いじらしい程殊勝な素琴の領き方だつた。

「それが何故？……………いや、もう何もきくまい」

俄かに六郎は問いを馳せして、断念したように俯向いた。素琴の眼頭にチカツと白い露を見たからである。……瞬間、六郎の脳裡に数日前の新聞記事が生々しく蘇えつた。

第三国人……………婦女誘拐団……………素琴？……………

だがそう考えるには、あまりにも惨酷な可憐な素琴だつた。なまじ彼女が其の一味であらうと、罪に責めさい

ひまれてゐる慚愧の泪は、真人間の美しい姿に還らうと

……



している、素琴の偽らぬ心境を透らしていた。

六郎は此の情景を、誰にも見せまいとしてうな垂れた素琴を邸の方へ促した。

「……おかまいにならないで。妾、二度とお邸へ這入れる人間ではありません」

「バカなことを。兎にかくもう一度……」

二人の身体がもみ合つて居る好機を捉えて、六郎は素琴の脇から背へ、片手を廻した。

「素琴さん」腕にグツと力をこめた。

「僕……は」

顔と顔が触れ合うような位置だった。

「……貴女を二度と危険なところへ帰したくはない」素琴は息をはずませるばかりで声が出ない。六郎は、残っている片腕を、素琴の腰に廻した。六郎の息が素琴の唇へ触れるのだ。犬の鎖が素琴の背中で、カチカチと鳴った。

6

二人の抱擁が、濡れた唇をどちらともなく離した時、玄關の方で慌だしい女中の声が出た。素琴は六郎の胸を押して、樹蔭へひらりと身を隠した。

女中は六郎を探し廻つて呼んでいるのだ。

「何うしたんだ？、騒々しい！」

「あ！ 若旦那さま！ 大変でございます。お嬢さまが街からお帰りになる途中、誘拐団のために……」

女中は六郎を見ると、馳け寄つて叫んだ。

「何！ 多津子が……」

「はい、先程何処から電話がかゝりまして、お嬢さまを預載すると気味の悪い事を言つて来たのでございますが、今だに自動車は帰らないところを思いますと、きつとあの新聞に載つて居る、誘拐団の仕業と存じます」

「しまつた！」

六郎が唸ると同時に、素琴は樹蔭から飛び出した。六郎の胸にひしと纏つた。

「妾を行かせてください！ 妾の責任なのです」

「しかし、君……」

六郎は暗然として、素琴の哀願に口籠つたが素琴は駄々ッ児のように首を振つて、

「いえ、一刻一秒を争う今の場合に、妾が行かなくて何をするのです？ きつと多津子さんはお救いいたします。それがせめて、妾の罪滅しだと思います」

「じやどうしても……」

「これが最後のお別れになります」

六郎は引止めるすべもなかつた。腕から緩んで落ちる素琴の手首を、言葉で言えない力に籠めて、握り締めるのが精一杯だった。

「……あ、素琴！……」

軀ごと追つて行きたい強い衝動をやつと忪えて、六郎は虚ろに見送るのだった。

7

其の頃、瀬戸内海に臨んだM市に近い国道を、制限時速を突破して、砂塵をあげて疾駆して行く高級自家用車がある。運転合には二人の男が見える。

一人は実直そうな若い青年。ハンドルを握つて水際立つた運転ぶりだが、顔は蒼ざめ、髪は乱れ、激しい格闘のあとをその儘に、ワイシャツは乱暴に引き裂れている

「オイ！ もつと速度を出せねえか！」

傍の黒眼鏡が命令する。

「出ません。これが此の自動車の最大時速なんです」

「莫迦言え！ 速度計はまだ其処まで廻つちやねえぞ。手前は手加減してやがるな！」

「そう言われても仕方がないです。まだ故障の箇所が充分なおつていないんですから」

「ふーん、出さなきやア、出さねえでい」

運転手の脇腹に拳銃が突付けられた。

「は！ は！、もういゝ加減にしてやれ、どつちみち此の車に追付かれる心配はねえ、ところで今頃素琴の奴ア、地団太ふんで口惜しがつて居るぜ。居所は密告されるわ、

娘は此の通りこつちの待伏せにさらわれるわ。ザアア見ろ！ 俺の言うことをきかねえとこれだ」

後の座席から嘲笑つた康は、肩にぐつたりと凭れ掛つて、正体なく眼を閉じて居る昏睡状態の多津子を振り返つて、ニヤリと好色的に覗きこんだ。

其の刹那！ 自動車は夕暮の国道上に、キーツとブレーキを掛けて急停車した。

「何うしたんだ！ 運転手！」

康が舌打ちをして、腰を浮かした。そして道路上の前方に立塞つて居る、一人の女を目撃した時、

「あ！ 素、素琴じゃねえか！」

康の驚愕も道理。二十米ほど前方の路上に、自動車の行手を遮えぎつて、素琴が待ち構えて立ちはだかつて居るのだ。

「素琴、除かねえか！ 道を開けろ！」

「厭よ！ 車の中のお嬢さんを渡してくれたら、道は開けてあげるよ」

「何だつて！」

康は押問答もどかしげに、素琴の方へ走つて来た。素琴はその場から動かなかつた。

「康、おねがいだからあのお嬢さんを、妾に渡して頂戴。貴男の習うことは、何んだつてきいてあげるわ」

康は薄笑いを浮べた。

「は！ は！、とう／＼折れて出たな。よし、渡してやろ。だが今言つた言葉に間違いはあるめえな？」

「疑い深い男ね。自動車の儘お嬢さんを帰してくれたら今すぐにだつて、妾は康のものになつてあげるわ」

素琴は艶めかしい媚態を送つて、配下を自動車から降りしている、康の指図を見守つた。やがて、自動車は、元の道へ引き返しはじめた。康は配下を一足先に帰らせて、素琴を近くの戦災にかゝつた焼跡の中へ軀を押した。半倒潰の家に這入つて、康は素琴の豊かな肉体を眺め廻した。

「素琴、約束だ判つて居るだらうな？」

「……」

素琴はたゞ黙つて頷き返し、素直に男の要求を容れる

「ウッ！」呻いて康は朽木の如く、弓なりになつてどつと斃れた。

8

ように、康の軀にしまだれ掛つて、彼の挑んで来る儘に肉体を与えようと顔をそむけた。康の手が腰に廻つて来た。此処で押し倒され、ば最早康の言ひ通りになつてしまふ。素琴は腰から脱がされて行く、最後のものを知り乍ら、右手は男に寄添うように見せかけて、康のポケットに伺つていた。冷めたい拳銃が指に触れた。

然し康はうわづつした声で、素琴の唇を奪おうとした。「素琴、お前はもう俺のものだ……此の可愛い唇……此の軀も……」

上から今にも康の唇が降り、其の儘素琴の軀が重心を失つて倒れようとした。

「康！穢らしい！」

矢艇に素琴が軀を引いた。二三歩退つて拳銃を振した。康はギョツとなつてたじろいた。

「あ！何、何をする！危い！」
が、轟然一発！拳銃の銃口が火を吹いた。

素琴は其の足でM市の公衆電話に飛びこんだ。康を射殺した事、婦女誘拐団の一味の隠れ家等、奴隷船の陰謀を残さず警察に電話をすると、夕闇の海上遙かに出帆の準備を整え終つた、機帆船へ小舟を漕ぎつけた。

船には康の配下の者も、ウイリアムの配下の者も、酒い酔い痴れて正体なく眠つてゐる。たゞ王が一人、日本娘の収容された船倉を見張つて、康の帰りを待ちあぐんで居るところだつた。

王は思いがけぬ素琴の姿に驚いて、

「どうだつた？首尾は……」
素琴は重く首を振つた。

「王、妾は仕事を終つて来たのよ。約束通り貴男の妻にして頂きます」
あまりにも突然な素琴の言葉に、王はしばらく理解に困つた。だが素琴は急ぎたてた。

「妾と二人で上海に発ちましょう」
「康達は何？」

「いゝのよ、誰も船に帰つては来ないわ。それより船倉の娘さん達を、皆んなボートに乗せて頂戴。早く早く……」

王は狐につまゝれたように突つ立つて居たが、やがて言われる通り船倉に降りて、一人ひとり軀の縄を解いていつた。縄を解かれると繩梯子を伝つて、十数人の日本娘は、ワーツと泣き声を上げてボートに移り移つた。

（これでいゝのだ——）

素琴は機帆船を遠ざかつて行く日本娘達のボートの影を、黄昏の甲板からいつまでも見送つていた。（終）

採訪読物

援助を求めらるる紳士たち

紀市郁栄

え 秋田冷光

紳士の求めに應じた
ステツキ・ガールが
闊歩する都會の裏を
探る

賣淫の都

敗戦後の混濁した社会風潮の一面に、いわゆる戦後派の、若い人達の無軌道な行動がある。

殊に性問題に関しては、ある漫画に、処女を妻にするには生れたての赤ちやんを貰うより外ない、というのがあつたが、それは極端な例としても、確かに性道徳の低下は乱脈という外はない。



こうした世相は、新聞や雑誌や映画にしばしば取り上げられて喧伝され、いろいろに批判されてきた。

記者が二日ばかりで探訪したメモを資料として、ここに綴ろうとするステッキガール、援助を求める女性たちの生懸と、それを斡旋する結婚相談所の実態も、デカタンの戦後の都会風俗を物語る一断面である。

一、夕刊紙に現れる三行廣告

ステッキガール 青年紳士の要望に
えて淑女の御同伴を
即時斡旋致します ○○クラブ

記者は手始めにこれを探つてみた。

新聞広告の道順をたよりに訪ねた、大阪市内福島区の○○クラブは、人通りの少ない商店街の裏通りにあった。表札のような小さなクラブの看板が、柱にかかっていた。

案内を乞うて玄関にはいると、すぐ左が三坪ほどの土間で応接室になつてゐる。隅に机と椅子があり、粗末な応接セットが、然しきちんと並んでいた。

「結婚ですか？」

出てきた四十恰好の品のあまりよくない女が、椅子をすすめて運ツ葉な調子でいきなり訊いた。

「結婚も世話されるんですか？」

「結婚も交際援助もやつています」

「新聞を見てきたんですが、同伴の方なんですけど」

「あ、ステッキですか」

女はまるで道具みたいに、ぞんざいな口でうなずいた。それ等の容子から、店の経営を率領していると察せられた。おかみではおかしい。マダムとでも言おうか。「はじめてで分らないんですが、どんな風になつてゐるんですか？」

一本つまみ出した「光」に火を点けて、馴れた手つきで煙を吐きながら、マダムが説明してくれ内容は次のようである。

男女ともすべて会員制度になつてゐる。

これは税金対策で、つまりクラブは会員に依つて運営され、通信費や雑費として、小額の手数料を徴集してゐるということになつてゐるわけだ。入会には申込用紙があつて、それに記入すればよい。マダムが見せてくれたその用紙には、私儀知人の紹介に依り貴会の趣旨に賛同し入会申込致しますとあり其の他、住所氏名、年齢、学歴、職業、収入等の項目がある。

「結婚じゃないんですからね、形式でいいんですよ」

というマダムの口吻からすると、でたらめな住所氏名かも知れない。

申込と同時に、入会金五百円を支払わねばならない。それで永久に会員として登録されるわけで、あとは同伴料だけでよい。同伴料は千円、等分した五百円づつが店とステッキガールの収入になる。平日でも休日でもこの額は同じ。それで彼女たちの月収は、だいたい二、三千円から五、六千円程度だという。同伴時間の制限は、平日は午後六時ごろから五時間、休日は朝九時ごろから、夜十時ごろまでと一応の規定がある。

彼女たちは、平日は午後六時ごろになれば、一人二人とクラブに集る。客の方はその場で女を見て気に入つたら、同伴料を支払つて直ぐに連れて出るのであるが、二人切りで面接することは許されない。必ずマダムが同席する。ひそかにしめし合わすことを防ぐためであらう。若し五人十人とか纏まつて必要なときは、前日の午前中にさえ連絡すれば、いくらでも揃える由。女の方には電話で、すぐに連絡出来るそうである。そしてそんな場合には、料金も若干割

引するといふ話であつた。

そうして契約が成立すれば、編劇でもダンスでも酒席へでも、休日ならピクニック、小旅行など、行動は一切自由であることはいうまでもなく、それ等の費用のすべては、男の負担であると述べることは蛇足であろう。

「客と一緒に泊るようなことはないんですか？」

それはさつきから、しきりに記者の頭に浮んでいた好奇な疑問であつた。

「そんなことありませんよ」

「でも泊つたかどうか、こちらでは判らないでしよう」

「帰るときは連絡することになつていますから、必ず電話かけてきますよ。でも、本人が承知で泊るのだつたらネ……」

そう言つて、マダムは少し淫らな薄笑いを泛べた。それというのも男の少ないアンバランスから、お茶を引く（という）ことばをマダムは使つた。こともたび／＼

あり、大事な客だから気の合つた相手ならそうしたことになりかねない様子なのである。容貌の優れているのは当然のようによく売れるし（月に十回位）前日から連絡して、留めて置くように指名する客もあるという。売れない娘はさつぱり売れず（月に二、三回）それでは可愛想だといふので、クラブへ来さえすれば売れない娘には二百円宛、以前は払つていたそうである。が、そうなる必要に集つて、店の経営が維持できないので、現在では平均に出るようになりつてゐるとマダムの話だつた。

然しその措置には法的な含みもあるのである。つまり同一人に頻繁に斡旋することになると、法の解釈から職業と看做されて



も足りないといふ。年齢では三十五、六才から五十五、六才位まである由。「女の人の名簿見せてくれませんか？」

記者は物を置く者の押しの強い持前で、鋭い職業意識を働せて、さりげない風に訊いた。

すると、マダムはとんでもない、といった顔になつて首を振つた。

「それは見せられませんが、極秘になつてますからね。二人で行つても、住所なんかなかなか言いませんよ。二、三回もつきあつて気がわかつたら話すでしようけれどね」

そこでマダムは起ち上つて奥へ還入つた。低い話声が暫く聞えていたが、やがて戻つてくると、しきりに勧めるのであつた。

「奥に今一人いますかね。どうです、連れてみませんか？きれいな顔してますよ、なか／＼朗かない娘ですよ」

間もなく、女が盆に茶を二つ運んで出てきた。ピンクのセーターを着て、肉づきの豊かなからだつき。ちよつと調つた顔で、口元の小さいのが可愛い。眉毛の濃いのが印象的だつた。

口が乾いていたので茶はのどに美味く泌みて流れた。女の顔をみつめながら、不意に、甘い感情が胸に湧いた。

二、ステツキガールの

殆どは妾希望者である

それではステツキガールとは、一体どのような女性たちなのであろうか。この疑問は、マダムの次の言葉で明瞭であらう。

「歳もいろいろですが、まあ二十から二十五、六才の女性が多いですね。未亡人もいますが殆ど娘さんですよ。みんな会社に勤めていてアルバイトなんです。家の人には内緒でね」

だから、会社へ電話をして直ぐに連絡できるものであり、そしてだから、彼女たちは午後六時頃になつて集つてくるのである。約束のある日は夕食を構つてくる必要がないし、約束がなくても、クラブへ来るまでは何も食べてこない。どんな契約が待つてゐるか判らないからである。取引はすべてクラブで行うことが固く守られてゐるから兎に角、彼女たちはクラブへ集ることになる。

家の者に内密にするには、いきおい行動にも制肘を受けるわけで、秘密がばれないように心掛ける必要もあるのであらうが、いつそ、下宿とかアパートなどに一人で住んでおれば、自由に振舞えるのではないか。これについて、

「一人で下宿したり、アパートに住んでゐる女性の中にはありますがね。そんな女性には感心しませんよ、たいていヒモツキですからね」と吐き出すようにマダムは言う。

一、二回同伴で行つてゐるうちに、相手の氣に入つて援助に進む女性が多いといふ。連れ出したその日に、援助に話を進めてくれという電話もかかるのである。交際援助——なんと体裁いい、都合のよいことばであらう。援助とは妾に外ならない。「じゃステツキガールの女性達は、殆ど援助を希望してゐるんですか？」

「そうですよ。援助が決まるまでのつなぎなんです」

同伴——交際——援助、そんな氣まぐれ

なりうちにも、純な気持ちになつて結婚する人もたまにはあると、マダムはつけ加えた。

だが、それにしても、彼女たちは勤めを持つていて一緒に住んでいる両親や家族には秘密で、殆ど例外なしに援助を求めているというのには、良識をもつてしては、理解できない事実だと考へるのである。が、今ここでこれを批判したり、記者の主観を加へることは残酷であるかも知れない。彼女たちの言い分を聞いてみよう。

記者である自分を明かして、おどろいてゐるマダムにインガを含めた。はなしてゐるうちにはいつてきた女性と、奥にいる女と二人に話をさせてくれというのである。マダムにも女にもそれ／＼掘らせて承知させた。記者の質問に、なか／＼素直には答えてくれない彼女たちの、語つたのはこうである。

1 女にだけ貞淑を要求する

なんて不合理よ

茶を運んできた女。二十三才、眉毛の濃いちよつと可愛い顔立ちには前に述べた通り。素直な表情で、感じではそれほど軽薄には見えない。

「わたし眉毛濃いでしやう。はじめての人はさわつてみたりするけど純毛よ。眉墨なんか使つたこともないわ。」

わたしね、よそで聲旋してもらつて援助受けていたのよ。縁が切れてからここへ来るようになったの。ある同業組合の事務所へ勤めてるんだけど、給料とても安いの上。三千五百円なの。給料ではスカート一枚だつて満足に買えないわ。それにわたし家計も援助してるのよ。母と姉がいるの。

姉もつとめてるけど、どうせ安いんだものね。毎月三千円位入れてるわ。事務所でたくさん貰つてるように言つてるけど、うす／＼感づいてるらしいわ。でも誰も何も言わないわ。

この収入？そうね、六千円位が知ら。たまに泊ることもあるからよ。同伴だけじゃちよつと無理ね。だつてわたしなんか、出ることもあまりないんだもの。泊つたら別にもらえるからいい収入になるわね。でも泊つてもいいと思ふやうな人はないわ、たいてい嘘つきで女蕩しなんだもの。こんなところへ来る男の人はみんなそうね。それでホテルへなんか行くまでは、紳士ぶつてすましてるのよ。

わたし前にね、一回妊娠したことあるのよ。直ぐに墮ろして貰つたけど。その相手が典型的な女好きだつたわ、四十七、八の男、会社の重役だと言つてたけど、どうせいいかげんな会社じやないか知ら。その人には援助を受けていたんだけど、それはとつてもしつこいの、真裸にさせて……いやアね、恥しくてはなし出来ないわ。それより、映画館なんか暗がりて手を握つたり、いたずらしたりする人に却つて初心な人がいるわ。そんな人は馴染みになつたら物買つてくれたりするわ。

ええ、援助を望んでるわ、いつも違つた人で氣をつかうより、決まつた人の方が氣が楽だし安心なもの。でも、援助してくれる相手に、あまり氣のすすまないときはちよつと辛いわ。

結婚なんか考へるの面倒くさいわ。それにわたしもうこんな体でしよ。男の人ッて、自分はさんざん女遊びしても、処

女でないと承知しないんだものね、随分勝手だと思ふわ。だから、わたし幸福な結婚なんかせんせん希望持つてないの。自分で稼いで誰に氣兼ねなしにジャン／＼遊ぶの。男の人だつて金を持つてただけで、さん／＼いいことしてるんだもの。女にだけ貞淑を要求するなんて不合理よ」

2 お金のない青春なんて

みじめだわ

表情の多い顔、口紅が濃い。眼の下のソバカスも氣になる。こういう場所にまだなじみ薄い容子、二十才。



「わたし北浜の会社につとめてるんだけどお友達に教えられたの。そのお友達、いつもきれいな服装をしてとても派手よ。高い服なんか平気で新調したりね。お小遣だつて不自由しないで、映画や中華そばなんにおごつてくれたわ。わたし羨しくなつたの。それで感づいたの、何かあるツていうこと。はじめは訊いても、フンと笑うだけで言わなかつたわ。」

ここへはそのお友達と一緒に、半月ほど前に始めて来たの。だから、同伴で行つたのはまだ三回しかないわ。このあいだ、男の人三人とわたしたち三人、六人で出たんだけど料理屋へ連れて行かれてこわかつたわ、だつて、お酒無理に飲ますんだもの。わたし御不浄へ起つて苦しくなつたので、廊下でちよつとろくまつていたら不意に抱きつかれたの。キッスさせツてとても乱暴されたわ、いいえ許さないわ、突きつけてやつたの。泊れつて言われたけど逃げて帰つたの。だつてわたし、泊つたりなんかできないのよ。今まで外泊なんかしたことになるんだもの、家へ言い訳に困るわ。

援助のことはまだハッキリ考へてないんだけど、どうか知ら、病氣のこと考へたら迷うわ。お友達は病氣になんかなつたこと無いツていうんだけど。ええ、恋人あつたわ、今はもう別れてるわ。十八の時よ、その恋人で処女を失つたの、ちよつと後悔してるけどでもたのしかつたわ。わたしも恋人もまだ学生だつたので親に叱られたの。兄さんがとてもやかましいのよ、お父さんより兄さんの方がこわいわ。給料もらつても半分貯金よ。だからよけ

いとお小遣不自由になるの。

わたしお金ができたらまつさきにツーピ
ース作りたい、靴も新しいの欲しいけど、
そんなに貰えるか知ら。だつて薄汚ない青
春なんてみじめだわ」

三、結婚相談所の實態

天王寺区のY結婚相談所は、〇〇神社前
の人通りの多い表通りである。結婚、交際
援助の太要を書いた大きな看板が、通る人
の誰の目にもついて、気がひけてはいり難
い。探訪の目的の記者でこの感じなんだか
ら、一般のはじめての人は尙更、いやだろ
うと思つていたら案の定である。

「お寺もこちらにありますので、二、三回
表を通つたんですが入り難くて……今日は
思い切つて参りました」

店の主と面談しているとき、静かな声で
訪ねてきた、中年婦人の第一声である。

年輩から想像して、娘が息子の結婚のこ
とで来たのかと思つていたら、妾の希望者
であつた。天下茶屋に家があつて実母と二
人切りのくらし、心齋橋筋に思を出してい
たが、空襲で罹災して、店員だつたのを養
子にした主人は防空壕で息絶えたという。
「母のへそくりも少しありましたし、今ま
ではどうにかやつてきたんですけど……わ
たし茶と華を教えているんですが、それだ
けでは足りませんので、少し援助してい
ただけたらと思ひまして」

「それでは、男の方にお家へ行つてもらつ
ていいんですか？」

「は、母にはまだ話していませんが納得さ
せるつもりですの」

三十九という歳を聞いて、難色を示して

いた主が急に膝をのりだした。

「それでしたら案外早くまとまりますよ。
お歳を召した方でも、女の家へ行くのだつ
たら世話するといふ人もありますからね。
男はその方が喜ぶんですよ、安心するん
ですわ」

それを聞いた婦人の顔に、ホッと安堵の
色が泛んだ。

申込者の男女とも会員制度になつてい
ることは、ステッキガールの組織内容と同
様。会員数はY相談所の場合、男女あわせ
て凡そ四百名、もつとも実際の動きはずつ
と少く、結婚希望者で一年、援助希望者で
せいぜい三カ月が有効期間である由。年令
では十七、八才から六十才位まであるとい
う。それらの男女の比率は、およそ男三十
五パーセントに対して女六十五パーセント
と、圧倒的に女性が多い。

そうして店の収入になる斡旋料は、成立
額の三割であつて結婚の場合の成立額は結
納金額、援助の場合は一カ月の援助額が成
立額である。然しこの額は、相談所に依つ
て違ふのかも知れない。先に、〇〇クラブ
の入会金は五百円であつたが、このY相談
所では三百円しか取らなかつた。その斡旋
料の支払方法は結婚と援助で、又区別があ
る。援助の場合は全額男の負担であるに対
して、結婚のときは男女等分、或は六分四
分によつてゐる。

四、妾とは街娼の

延長なり

入会さえすれば、氣に入る女があるまで
直ぐに会わせるといふので、申込用紙をも
らつて記入し、入会金三百円を払つた。用

紙はステッキガールの〇〇クラブの
内容と大同小異で、粗末な謄写版刷
りのものである。

ちよつと眼を通して見た主が、顔
を上げて言つた。

「三十三ですか、若いんですね」

その言い方が、いかにも感嘆した
口吻だつたので不審に思つた。

「若い？どうしてですか？」

「援助する人で三十二、三なんて稀
ですよ。いや殆どありませんな。若
くても四十前後ですよ、四十前後か
ら五十以上ですよ」

「そんなに年輩の人ばかりですか
？」

「そりやそうですよ、三十位の若い
人に女と遊ぶ甲斐性なんかありません
よ。安い女で、辛抱しても月に一
万五千円は要るんですからね、普通
の月給取りには出来ん儲当ですよ」
そういつて、ジロジロと記者をみ
つめた。ここで見破れてはまずいと
思い、風呂敷をひろげた。

ところで援助希望者に依つて、維持され
ている。援助を求める女たちは大抵は屋は
オフィスにつとめており、年令もいろいろ
職業もあらゆる面にわたつてゐる。事務員
にも種々あり、女教師あり、人妻あり、学
生あり、無職あり、踊り子あり、婦人記者
あり、バスガールありなのである。

そして彼女たちの収入、つまり援助額は
一カ月、最低五千円から一万円が普通にな
つてゐる。特別な例として、二万円、三万
円というのもある由。この特種な例として
記者の職業意識を大いに刺戟した実例があ
るが、これについてはあとに述べよう。



彼女達たちは社の婦りに会員になつてい
る相談所へ寄つてゐる。だから六時頃ごろ
にはどこの相談所にも、援助を求める女の
一人や二人はゐるわけである。週間で土曜
日が一番多い。そのわけは、彼女たちの言
葉が解答を与えてくれよう。

「何かしら、一週間のけじめみたいな期待
がありますのね。事実、契約が成立するの
は土曜日に多いんですわ。それは、週末で
男の方の仕事が暇になるからだと思ひます
の。そして翌日は日曜日ですから、泊つて
もゆつくりできるからですわ」(二十四才
洋裁教師)

「土曜日だと外泊しても、お友達の家で泊
つたとか家へ言い訳し易いからよ。だつて

男の人つて話が決まつた日はたいてい泊ることを要求するんだもの。だから土曜日にはそのつもりで準備してくるわ」(二十二才、事務員)

だが実際には、泊ることをいやがるのが多いのである。月に一、二回程度だと外泊の口実もなんとか作れるが、頻繁になると疑惑を招くおそれがあるからなのだ。だから成立したし組は、待合や旅館やホテルで終電に間に合うように遊んで別れる。又、下宿している者でも、女の住居へ男が行くのはいやがる。近所の眼をはばかりなのだ。週に一回乃至二回、月にだいたい六、七回彼等の肉体の交渉は専ら旅館の休憩ということになつてゐる。

ここで又、記者は疑問をいだいた。それは性病の感染や妊娠の有無についてである。ところが病氣を持つてゐるような女は殆どないという。寧ろ男の方を心配する。それが素人娘のいいところで、安心して遊べるから、藝者などに食傷した客にはうけがよい。妊娠したことも長年やつていて聞いたことがないという。尤も一々報告するわけではないし、仮りに妊娠しても密に処置するのだからから判る筈もないのである。

話は前後するが、相談所で面接——見合ひして(この見合も十分、二十分で簡単に終る由)氣に入つたら、その場で一カ月の援助金と養料を払えば万事OKあとは一切男の自由である。一カ月が経過して引きつづいて援助しようが、縁を切ろうが相談所の関知するところではない。が、まず一ト月で解消するのが殆どの場合で、二カ月になることは珍しく、三カ月となると稀だという。この事

実を主はこう説明する。

「五、六回接触したらイヤになるんですな大体、こんなところへ来る人は浮気者ですからね、次々に変つた女が欲しいんですよ。その方がウチも商売になるわけね、藝者するたびに手数料もらうんですから」

「じゃ一ト月経てば又来るんですね」

「え、男はね。だから男の人は常連が多いですよ」

「女は来ないんですか？」

「不思議に女は来ませんな。テレクサイのと恥しいのと違いますか。どうせ、よその相談所へ行くんでしよう」

「女が来ないでは商売にならんじやないですか？」

「いやアあんた、女は不自由しまんよ。いくらでも余つてますよ、男は少いですがねだから男の人は大切なお客ですよ」

以上の話で読者は、どのような感想を持たれたであらうか。

戦前、妾というものは経済力の逞しい財界人の囲い女として、住居もちやんと与えられた。そして三年でも五年でも世話を受け、若し年の切れることがあれば、その時はなにがしの手切金は貰つて別れる。そういうあり方が、妾に対するわれ／＼の觀念であつた。たとえ囲い女であつても、主人に対しては愛情も持つただろうし、親密感もあつた筈である。思想的にも日蔭の女として、旧い封鎖的思想の中におかれていた。現今の相談所に現れる妾の姿には、暗い隸屬的な感じは見られない。自由奔放、享樂的な印象が強く目立つ、ここに戦後派性風俗の無軌道がある。なんのことはない、彼女たちは一カ契約の街娼ではないか。

◇二万円で身を許す女医

説明を一通り聞いた中に、女医とズカガールの妾希望者があつた。女医は一カ月二万円、ズカガールは三万円だという。記者は激しく心が動いて熱心にせんさくするのであつた。二、三日余裕を持つてくれたら、面接できるように連絡するといったが、本当にその氣があるのか疑つてゐる容子で、主は氣のりしない返事であつた。

女医は二十四才、この春学校を卒業して、京都に住んで大阪の病院に通つてゐる。国家試験を受けるまでの見習なのであらう。インターン(実習

でまだ医師ではないから収入はないわけである。学生時代の苦学など想像され、なんとなくシャキ／＼した男まさりの女性を頭に描いた。眼鏡をかけてゐるが、とても美人だとのこと。八十点位?と訊いたら、なかなかどうして、九十点以上ですよ。しかしやつぱりツンとしてますな、愛嬌がありませんよ、冷たい感じですよ、と彼女の印象を主は話してくれる。

電話で連絡して病院の都合がよければ、来ることになつてゐるが、ここ(相談所)へは来ない。どこか静かな茶房か、人眼のつかない場所であつてくれというのだ。それは援助額は女の言い値で少しは値切れるそうだけど、彼女は二万円以下だつたら絶対応じない由。逢ひきも週一回。それも場末などの安宿ではいやで、泊る事は出来ない。家の状況や経歴や、なるべくなら名前も訊かないでほしいという。果してどんな女性であらうか。そして果してどんな男が、この伶俐な美貌の女医を愛慾のいけにえにするであらうか。

◇踊り子の悲劇

三万円で援助を求めゐるズカガールは処女であることを保証すると、主はくりかえすのであつた。既に舞台に出てゐるが、何しろ衣裳代がたいへんで、五千円足らずの会社の手当てではとてもやれない。一流のスターになるためには、身装いも飾らねばならないのだ、難関と言われる宝塚の試験に、多くの競争者から選ばれたという自覚が、不幸にして実質以上の自信を与えた。その自惚は実は然し、本人よりも彼女の叔母さんなのである。多くのとりまきにさわがれて、有名になる日を夢見ている。少々



の犠牲を払つても、その夢を実現させねばならない。

これを聞いて高峰秀子の方が記者の頭に泛んだ。彼女が義母に育てられたことは世間周知の事実で、その義母との間に最近あつれきが生じた。今まで育ててきた報酬に対して、若いさを金に換算しようとする義母の意志からであると、映画雑誌は報じている。女優に限らず、有名人の義母はこうした例が少なくない、記者はそれを出したのだ。

だから、最初はなしを持つて来たのは叔母さんで、ハッキリしなかつた本人を説き伏せたのだという。話が決まればその叔母の家を提供するけれど、稽古がはじまれば一ヶ月位暇がなくなることもあるから承知してほしい。又、東京へ行くことがあつてやはり一ヶ月位こちらは留守になるが、そのときは東京で交渉を持つてもいいという条件であつた。

十九才、×組の踊り子の場合である。歌の花園と言われるはなやかな館台の蔭にはこんな悲劇もひそんでいることを、宝塚少女歌劇にあこがれる若い乙女たちは知っているのだろうか。

五、媚薬を売る

女學生

案内されたのは二階の六畳であつた。真ん中に座敷机が置いてあり、向い合つて座布団が二つ並んでいる。そこで見合い(面接)した妾希望の数名の女性のうちで、印象の深つた一女學生との対談を発表しよう。何人目かにはいつて来たその女は、一ト目で女學生と分る、ヒダの付いた制服のス

カートをはいいている。上は長袖のブラウスにベースト。長いオサゲ、どちらかという丸顔で色は白い。素足である。両の乳房が盛り上つて肉感的だが、さすがに子供っぽい。

「おはいり」
敷居ぎわで、もじく／＼しているので座布団を蹴める。すわつたが横を向いてうつぶいてしまふ。

「学校へ行つてゐるの?」
「ええ」

「学校どこ?」
「……………」言わない。素早く手を伸ばしてベーストのバッヂを読む。○高とある。

「学校知れたらイヤよ」
「○○○高校だね、何年生?」

「三年生——」
「いくつ?」

「十九、満十八だわ」
「お家どこ?」

「住吉——」
「お父さんやお母さんと一緒?」

「おばさんとこなの。わたし家は四国なんだけど、学校へ行くやうになつてから世話になつてゐるの」

「ここへ来たこと、おばさんは、知つてゐるの?」

「知らないわ」

「わかつてもかまわないの?」
「知れたら困るわ、内緒なんだから。だつてわからないやうにできるでしう」

「どうしてこんなところへ来たの?、誰かに教えてもらつた?」

「お友達でやつてゐるひとに聞いたの。わたし、おばさんだからあまりお小遣もらえない



いのよ」
「どんなことするのか知いつてゐるの?」
「お友達にだいたい聞いたわ」

「じゃ泊つてもいいんだね」
「……………旅館へ行くの?」

「そらだよ」ふつと口をつぐんで記者の視線を避ける。不安な容子で、低いつぶやくような声で言つた。

「一週間に何回位とまるの?」
「一回か二回、どんなときもあるけどね」

「かまわないけど……………でも、たびたびだつたら困るわ。言い訳できないもの」

「そら。……………今まで男の人と関係したことあるの?」

「……………」首を振るだけで答えない。

「ホント?、じゃ君処女?」うなずく。
(あとで処女だといつてましたよ、と主に話したら一笑に附した。若し本当に処女だつたら拾ひ物ですよ。一万円以下で処女などメツタにありませんよ。そういつて彼は笑つた)

「ホントに男の人と関係したことないの?、恋人なんかなかつたの?、処女ツてホント?」
殊更、処女ということばを重ねて執拗に訊く。

「処女ツて……………いや?、わたし男の人なんか知らないわ、学校で男の子と話したりするくらいだわ」
「それで後悔しない?こんなことで純潔を失つてもいいの?」

「仕方ないわ。わたしなん日も考えた挙句なんなんもの、後悔しないと思つたわ」
「じゃ泊つてどんなことをしてもいいんだね。お風呂へ一緒にはいつたりできる?」

「……………どんなことするの?、ジロジロ眺めるの?」
思わず記者は苦笑する。

「そりや君、そのときの雰囲気や気が昂ぶつてくれればね。男ツてけだものみたいなもんだから、どんなことになるか分らないよ」

「……………あたし……………考え直そうか知ら」
「それなら、覚悟できてないんだらう」
「だつてお風呂へ一緒にはいることなんか考えなかつたわ」

「同じことじゃないの。泊つたら裸になるんだよ。ズロースはいたままでは関係できないだらう」
黙つて、又うつぶいてしまふ。暫く沈黙

つづく。

「どう、考え直す？」

「身をまかせだと思つたんだけど……いいわ、処女とかなんとか言わないでね」

「あ、分つたよ。それで赤チャンできたらどうする？」

「どうしましょう」

「どうしましょうって、赤チャンできること考えなかつたの？」

「できないようにしたらいいわ。いろいろあるんでしよう」

「器具を使つたりすること？そんなこと僕

がいやだと言つたら？」

「若しできたら隠したらいいって、お友達言つてたけど」



さつきからしきりに、両手で定期券入りをいじっている。彼女の持物は最初からそれだけで、他には何もない

「見せて御覧」

言うより早く奪うように取り上げる。金も少し入っているらしい。定期は二枚はさである。

「これは学校のだね、こつちの〇〇というの」

「それも学校、音楽学校なの」

「ほオ、音楽学校へも行っているの」

「週に二回、火曜日、金曜日なの」

「音楽は何やつてゐるの？、声楽？」

「ええ」

「上手い？」

「上手でないんだけど、好きで習つてゐるの」

顔を上げてちよつと笑う。

「それで君は、一カ月八千円欲しいんだね」

「ええ、おじさん（主のこと）にま

かしてあるんだけど」

「お友達と映画を観たりおソバ食べたりするわ。音楽学校の方もいろいろものにたくさんいるのよ。そんなお

金おばさんにとっても貰えないわ」

記者は短くなつたタバコをもみ消して、しげ／＼と彼女をみつめた。

もう十分成熟したふくよかな胸に、

さすがに少女らしいほのかな羞恥が匂うている。ふつと誘惑を覚えるのであつた。

× ×

ここで記者は探訪の結論を見出そうと思う。以上述べたように、援助

を求める若い女性の多くは、売春行為に平然として恥じない軽薄な女たちである。それらは、非難されるに十分であらう。然し生きたがために、他に何の能力も持たず、女の最後のものを犠牲にする例もあるのである。

たとえば病院の掃除婦だという、或る若い未亡人の如く、

「主人は戦死ですの。子供は男の子一人ですのが、歳とつたお姑さんもいますし、わたし給料だけではとても足りませんわ。坊やだけは人並に育てたいと思います。わたしはもう不幸に馴れましたわ、いろいろ考えた末、自分の体を売るより仕方ないと諦めましたの」

こんな実例も記者は経験したのである。けれど、操を売つてまで贅飾りたいという浅薄さや、小遣をたくさん儲けて思うままに愉しむのだという、享樂的な女性の行状は、如何に解釈すべきであらうか。それは、敗戦国の常の姿であるに違いない。その悲劇を宿命と受けとる弱い女のあきらめなのだ。そして、殆どが夢多い乙女時代を空襲と飢饉の中にあつた彼女たちの、冷酷な社会への反響であるかも知れないのだ。大人たちの無反省に対して、無言の抗議であるという、批判出来る記者は考えるのである。

ともあれ、援助を求める女性たちの生態こそ、類路的なアプレゲール性道徳の特徴だと言えよう。自覚する女性があつても、次から次へ新しい女たちが、当分はこのけがれたいまわしい売春をつづけることであらう。

— 完 —

噛みつく女

赤野夢比古

パンパンがたまらずよがり声をあげて「あんた、あんたッ、てばようッ」と言つて我輩の肩や腕に噛じりついたのではない。平家ガニのような梅干婆が「この道楽亭主め……」

と突然我輩の腕に噛みついてきたのだ。我輩が女房をなぐりとばしたので、女房のお袋が肉親愛から我輩に飛びついてきたので野獸の争闘みたいな浅ましいことになった。

我輩が或る喫茶ガールに手をつけた。それを女房は友人の勤め先へ乗込んで友人をとつちめて場所を白状さし、喫茶店へなぐり込んで女をひつばしたのだ。

女も気の毒だったが、我輩はこの始末ぐらい閉口した事はない。友人にはばやかれ

るし、第一喫茶店の人達に対して全く穴があれば逃げ込みたかつた。陳謝に陳謝してようやく帰宅しての騒動だった。

誰しも自分の行為はタナにあげて相手をヒナシ水掛論だ。然し我輩の非は非としても、女房のとつた行動は非法法である。

この点我輩は叱責し彼女の反省を期待したが、女房とお袋はあくまで我輩の非のみを攻め立て、喫茶店のなぐり込みなど、自然の成行だと輕視している。

我輩は女房をなぐつた。暴には暴だと瞬間思つたからである。我輩は女房に暴に振

りと女房のお袋は直ちに我輩に噛みついてきた。我輩は早速梅干婆を国へ追い返えし

以後、意地になつて女房へのそくりを嚴重に警戒して僅かばかりの胸をはらした。

か い ひ ん じ ょ う ち ゅ う 海濱の情痴



三宅リラ子

今 幾久 藏 倫

忘れ得ぬ人

「駄目なの。あたくし、行けないわ」

海へ行きましようかと誘う敏子（みこ）を、三千代は断らねばならなかった

「どうして？」

「だって、泳げないんですもの」

三千代はちよつと赤くなる。泳げないということは何時の場合でも自慢にならないのだ。

「ホホホ……」

と敏子が笑った。そして三千代は益々赤くなるのだが、敏子が笑ったのは三千代の予想とは違った意味でだった。

「そんなこと、海へ行けない理由になんかならないことよ」

敏子は大きな身体を横坐りにしたまま、器用に煙草を吹かせたが、

「あたしだって泳げないわ」

「えッ？」

と三千代はあきれたように敏子を見た。

「ミツちゃんつたら古いわね」

おかしそうに敏子は笑い転げるのだった。敏子によれば、泳げるなんてことはいさゝかも名譽になることではなく、かえつて不名譽になると云うのだ。

「どうしてなの？」

「だってそうよ。科学は異常な進歩をとげているのよ。そりや昔の人は泳げなかったら恥だったかも知れないわ。何故つて、橋もない時代だもの、泳ぎを知らないと川を渡ることも出来なかつた筈……でも今は

そうじゃないわ。あたしたちは船に乗つて大洋をも横断出来るのよ。船どころか飛行機もあるわ。人間がバタ／＼手足を動かして泳いでるよりずっと早く行けるわ。要するに泳ぎを一生懸命に覚えたりする人は船に乗るお金がないつてことになるのよ。どう？ そんなにまでお金に不自由してるつてことは名譽じゃないわね？」

自分の泳げないことを恥じるどころか、かえつてそれを自慢しようとしているのだ。妙な意見だった。こじつけだと思ふ。だが面白い意見であることはたしかだ。

「それにね」
と敏子は他人が立ち聞きでもしているかのように声をひそめ、

「女は泳げない方が本当はいゝのよ。泳いだりしたら、陽は焼けて仕様がないわ。南洋の土人みたいになつちやうよ」

「じゃあ」

と三千代が不思議そうに聞いた。

「何のために海へなんか行くの？ 泳ぎもしないで？」

「うん、それには訳があるの。ウッフ」

敏子はこらえられないように含み笑い、

「あたしと一緒に رفتら教えて上げるわ。海つて実にいゝわよ。夏の魅力は海に限るわ。さあ、行きましよう」

敏子は無理矢理に腰の重い三千代を誘い出すのだった。

「でも、泳がないにしても水着はいるでしょ？ あたくし、何にも持つてないのよ」

「あーあ、判らない人ね」

敏子は溜息をついた。

「ミツちゃんはおあたしの云う通りについてくればいゝのよ。あたしと歩いてると利巧になるわよ。人生の色んな面を見せたいわ……」

敏子は黙然と笑うのである。
そこへ三千代の母が冷えたレモンジュース

スを持つて来た。

「あーら、おばさま、すみません」

「敏子さんは何時もおにぎやかでようございますわ。三千代も少しはあなたを見習つてくれるといふんでございますけれど」

「まあ、おばさま、それなら丁度ようございますわ」

甘えるように敏子が身をよじつた。

「あたしたち、十日ばかり避暑に行こうと思ひますの、二人切りで。あたしと一緒に生活したら、ミツちゃんもきつとあたしみたいになると思ひますわ。ですから今ミツちゃんを誘つてますの。それなのに、ミツちゃんつたらちつとも行こうつて云つてくれないんですよ。ねえ、おばさま。あばさまからもおつしやつてよ」

スパルと人前もはぐからず煙草を吹かし、変なしなを作る敏子を、三千代の母は心よからず思つていた。だがこの計画については二つ返事で賛成する。

「三千代、あゝ云つて下さるんだから」

そう云つてすゝめるのだ。

常々三千代の母は何とかして娘を人前に出したいと思つていたのである。二十八にもなりながら、縁談はことごとくはねつけ娘に手を焼いているのだ。だが、縁談をはねつける三千代にも三千代なりの理由がある。それを知っているから、母は無理強いも出来ないのだ。

「健一さんさえちやんとして下すつたら」

とそれ母の口癖だつた。三千代が十九才の春だつたから、もうおつつけ十年になる。許婚の健一は赤い紙と共に大陸を渡つた。敗戦後、復員はして来たが三千代の前に姿を現わさないばかりか、自分の生家に

も立ち寄らない。どんな生活をしているのか、誰にもとんで判らない。それでも風の便りによる派手な模様のアロハシャツを着て、髪を異人まがいに赤く染めた女の手を組んで歩いていたとか、ろくな噂ではない。

縁談をはねつける三千代の胸に、未だに健一の面影が残つていらしいことで、母は三千代が不便で仕様がなないのだ。

世間一般の母親なら、娘にあやまちのないことを望むのが当然だが、このような事情から、三千代の母は娘があやまちを犯してくれぬことを望んでいる。他の男を知れば、また気も変わるだらうと思ふのだ。

こんな具合だから、苦々しく思ふ敏子も救いの神に見えたりする。発展家の敏子と一緒にならいゝ男が出来るかも知れないと考へる。

「十日なんておつしやらないで、二十日も一月でも」

そう云つて敏子にしきりに頼むのである。

同性愛

敏子は転々と男を変えて行くことが有名な女だつた。一人の男と一週間続いたゝめしがない。そしてそれは女学校時代からの習慣だ。一体敏子のどんな点に男は魅力を感じるのか、一人と別れるとまた新しい一人が出来る。ブヨブヨにふくれた肉体の何所に男の気を引き立たせるものがあるかというところは、三千代たち、女学校時代の同級生の間でも問題になつてゐる。三千代は敏子に就て、色々と言ふ噂を聞いていた。噂の主なものには敏子が男と遊ぶより実は女と一緒にゐるのが好きな、変態的な同

性愛の愛好者だということだ。

同性愛——美しい友情なら話が判るが女同志が一つ夜具の中に寝て抱き合つたりする同性愛は、三千代など考へるだけで不潔なような気がする。敏子と親しくつき合ふ気になれなかつた。女学校時代から、三千代は敏子と親しくした覚えがない。同じ教室で勉強している間柄ではあつても、顔を見合せれば黙礼し、ちよつとはゝ笑んで見せる程度だつた。

それなのに、このところ急に親しくなつてしまつた。どういふ気持で敏子が遊びにくるのかは知らないが、とつてもしばしば三千代の家を訪問する。二人で外出し、お茶を飲んだり映画を見たり……。

始めの内、三千代は敏子に就ての例の噂を考へ合せなるべくさけるように努力してゐた。もしも自分が敏子の同性愛の対称として白羽の矢が立てられてゐるとしたらたまらないと思つたのだ。だが、敏子をさけるように努力してゐるとは云つても、居留守なんて、良心的に恥じてどうしても使えない三千代のことだから、敏子がくれば会つてしまふ。外へ出ようと云われれば、ついでに嫌な時でもつき合わないではいられない。それほど三千代は敏子の弱いななのだ。

そして近頃、三千代は敏子に関する噂をデマだつたんじゃないかなと思ふようになってゐる。何か生理的に妙なものを感ずることはたしかだが、話題は豊富だし、喋り方も面白い。一緒にゐると退屈することはない。それに、たゞの一度も、手を握つたり、そんな同性愛に見まがうようなことをしないのだ。

「あんな噂、嘘だつたのだわ」と三千代は考へるようになってゐた。同性愛なんて、そんなことが本当に行なわれると思つた過去の自分がバカバカしかつた。あり得る筈のないことだ。

だから何時の間にか敏子の訪問を待ち受けるようになってゐる近頃の三千代である。

敏子の云う通り、彼女と一緒に海へ行けば、お嬢さん育ちの三千代など、てんで想像も出来ない人世の色んな面を見せてくれるに違いない。

三千代とても、初恋の人、健一の面影を出来ればきれいにさつぱり拭き去つてしまいたかつた。帰つてくれない人ならば、その人のことなんぞ忘れ去つて新しい生き方をして見たい。ほつそりと小柄でスタイルのいい、三千代は、美貌の故もあつて二十才くらいに見えるが、やはり二十八という年齢は彼女の生理に一つの変化をもたらしつた。眠れない床にもんもんと身もだえする夜もあるのだ。

都会の暑苦しさも耐え難かつた。泳げないから海とは縁がないと諦めていたのだが敏子も泳げないなら丁度いい仲間だ。母の熱心なすゝめもあつて、彼女はとうとう海へ行こうと決心するのだつた。

話がきまれば実行は早い。

「善は急げつて云うじやないの」

三千代と一緒に海へ行けることで、敏子は素晴らしく嬉しらしい。眼をギラギラと輝かせ、美しい三千代の胸の隆起や、ふつくり丸い腰の線を見つめたりしていたがゴクツと唾を飲むと三千代の背中をポンと叩いて急がせるのだ。そして三千代はチラツと不吉な予感に胸をはずませる。だがこゝとさらにそんな予感に押し寄せ、彼女はスリッパに蕭々えをつめた。

「和服の方がいいわ」

嫌がつてこぼむのに、無理に敏子は三千代の寢室にまで侵入する。甲斐々々しく仕度を手伝ってくれるのだ。

暑さの加減だろうと思うが、敏子の頬は上気したように赤かった。

このようにして、二人はその日の内に列車の窓によりそふことになる。気持のいい風が、開いた窓から吹き込んで三千代の艶やかな黒髪をなびかせるのだった。

始めから終りまで敏子はクツクツと笑っている。この旅を一層楽しいものにするために、三千代に色々面白い話をしてくれるのであつた。

崩れ行く夢

目指す海浜に二人が着いたのは、激しい夏の太陽も既に水平線の彼方に沈んでからのことだ。

プラットホームに降り立つと潮の匂いが胸一杯に満ちあふれる。

「ね、いいでしょう？」

「ええ、楽しいわ」

三千代の頬がほころびた。久しく見なかつた海は、胸のつかえを吐き出し、何とも云えない幸福感到全身がふるえる。

すぐに旅館の一室を借りた。

散歩して、帰つて見ると蚊帳が釣つてあつた。

「さあ、寝ましよう」

いち早く敏子は宿のユカタと着換える。

「電燈消すわよ」

「ええ」

月がほんのりと光をまいている。敏子は廊下に面した障子をピシヤンと閉めた。

並べて敷いた夜具に二人は寝そべる。

電燈を消した部屋で、女が二人寝れば話題は何時の場合でも決つてゐるものだ。

「初恋の話するわ、あたし」

寝返りをうつて敏子が三千代の方を向いた。

十三の年に大学生を好きになつたのだと語る。その時、敏子は既に初潮を見ていた

「あたしの母は妾だつたのよ。六十過ぎのおじいさんが通つて来ていたわ。環境が環境だから早いね」

大学生の後をつけ廻したそうさ。だが想う男と幸福な結果を見る前に、意外な事件が起つた。

その日、母の旦那は来ない筈だつた。たまには骨安めしなくちやあ、という訳で母は一人で外出した。敏子が留守番だつた訳だ。そこへ旦那が来た。

「あたしが一人でゐるのを見たら、彼、どうしたと思う？ 助平じじいつたら仕様がないうわ」

寝そべつて本を読んでいる敏子の背後から、音も立てずに入つて来た旦那は不意に武者振りついたのだそうさ。そのところの描写を、敏子は丹念に、飽かずに、露骨に喋るのである。どこをどうして、こゝをこゝらという按配だ。

暗い中で、三千代は頬が赤くなつた。胸が怪しくふるえるのだ。

「さつとこんな具合よ。初恋の大学生とはどうなることもなしに終つちやつた。でも初恋つて皆そんなものなのね」

ふと淋しそうな声で敏子が云つた。そして想わないうえいようとしても三千代の頭に浮かぶのは健一のことだつた。

その時、

「さあ、今度はミツちゃんの番よ」

と敏子が肩をゆすぶつた。

「あら、何に？」

「とほけちやいけないうわ。あんたの初恋もさつくばらんに云つちやうのよ」

「えッ」

と三千代は身じろぎする敏子にだけ喋らせておいて、自分の方は何も打ち開けないのは卑怯のことのように思えた。だが、だからと云つて内気な三千代に何が語れよう。黙つてもじ／＼していると敏子がせきたてる。

「早く早く」

敏子は自分の夜具から乗り出して三千代の布団の中へ入つて来た。手を握つて、

「お互いに何もかも打ち開け合うのが親友よ」

それでも三千代が黙つてゐると、敏子は三千代の耳にそつと息を吹きかける。

「まだあの人のこと想つてゐるの？」

激しい驚きは往々にして言葉を忘れさせるものだ。健一のことを、敏子が知つてゐる筈はないと思う。だが、どうした訳か、敏子はちやんと知つてゐるのだつた。

「ほんとに健一つてひどい奴ね。こんな可愛いミツちゃんを捨てるなんて。でもね、初恋というものは誰でもそんなものらしいわ。その悲しみが人間の成長のためには必要なのね。ミツちゃんも早くあんな男のことは忘れちまわなくてはいいわ。あんた、健一がどんな生活してゐるか知らないでしよ。ミツちゃんが一日も早く生れ変わるために、あたし健一がどんなことしてゐるか教えたげるわ。それを知つたら、百年の恋もさめる筈よ」

敏子はすぐ立派な情報網を持つてゐるのだそうさ。誰が何時、何所で何をしたか

調べようとさえ思えば即座に判明すると云う。

髪の毛を赤く染めたパンパンと、健一は同様に、しかも、その女に商売させて、それで食つてゐるのだそうさ。

「あきれろわね。もしミツちゃんがあいつと結婚してゐたら、ミツちゃんがパンパンしなくちやならない所よ。女の生血を吸うまるでダニだわ」

「本当？」

と思わず三千代は尋ねた。

「残念ながら本当なの。あたしもまさかと思つたわ。情報網だけでは信用出来ない気が持したので。それで、あたし、自分で探つて見たわ。結果は情報網の正しいことが判つただけ。ゴミ／＼した盛り場の裏通り、おしどりアパートつて云うのよ。鍵穴から部屋をのぞいて見たの。音も聞えたわ。

三千代はす／＼泣く。髪の毛を赤く染めた女の手を組んで歩いてゐたとか、健一の噂は聞いていたが、まさかと思つた。それなのに、やつぱり本当だつたのだ。永い永い時間をかけて、築きあげた夢が一瞬に崩れて行かない響き……。

敏子は泣きやめる三千代の背をす／＼やさしくなぐさめてくれるのだつた。

ところが、その内に三千代は何か妙な敏子の指の動きに氣附く

「あら、くすぐつたい！」

彼女自身をもむのだつた。

「ね、いいこと教えたげる。あたし、ミツちゃん大好きなの」

むせぶような激しい息使いで、敏子は三千代の身体がギューツと抱きしめる。何時の間にか三千代の腰紐を解けていた。

今はもう泣いてゐる場合ではない。敏子

が同性愛を好むというあの噂は嘘ではなかったのだ。

「止して！ 敏子さん、敏子さんつてば」

あわてる三千代の唇を敏子の唇がおくつた。

「なんて、みんな詰らないわ。可愛がつた

げる。ミツちゃん、あたし、もうたまらない！」

「敏子さん、駄目よ。声を立てるわ」

だがそれは言葉だけのおどしだった敏子はユカタを脱いでいる。そして三千代も、敏子から逃がれようと身動きする度に肌が

あらわに現れる。争っているこんな場面を他人に見せることは金輪際出来はしない。そのことを敏子はちゃんと計算しているのだらう。

寝呆けたらしい鳥が大きな羽音を立て、窓の外を飛び過ぎた。

美しき

惨虐

ものうい朝が来た。悪夢のような一夜が明ける。

三千代は枕にうつぶして泣いていた。大きな口を開け、全身に一丝もまとわな

いあらわな恰好で敏子は

大の字なりに寝そべつてい

る。時々むにや／＼と口を

動かす。その不潔さは何と

も形容のしようがなかつた

こんな女と一夜を抱き合つ

て眠り、あの

ような醜いことをされたか

れだけで三千代は我れと我が身がたまらなく汚く思えてくる。健一に裏切られたと判つたなら、即座に死ねばよかつたのだ。彼女はおそまきながら死を決意した。はかない女の身に残されているたつた一つの逃避の道は、何時でも死以外にはないのだ。そつと三千代は蚊帳を抜け出す。音のないように部屋の隅で着物を着た。腰紐をきゆうつと締める。昨夜の不気味な感触が未だに残っている。洗いたい。だがそんなことをしている間に、敏子が眼覚めるかも知れないという恐怖が後から追いかけてくる。見つかつたら最後だ。力の強い敏子のことだから三千代を小鳥位に思うだらう。三千代は急いで帯を巻いた。だが、その手が途中でたたと止まる。帯の端が何所かで押えられているらしい。

ふと、三千代は後を見た。そしてたちまちの内に真青になるのだ。

今の今まで眠っていた敏子がラン／＼と眼を光らしている。帯の端を、しつかりと握っているのだ。

「逃げようつて云うのかい」

まるで男みたいな口調で、敏子は帯をぐいと引いた。思わずよろけ、その場に膝をつく。蚊帳の釣手が外れた。頬がピシッと鳴る。所きらわぬ打撃が続いた。

昨夜のやさしさはどこへ行つたというのだらう！

三千代は裸にされ、両手を細紐でしばられてしまふ。敏子に身振り、彼女がこの新しい刺戟に恍惚としていることが三千代にも判つた。

押えようとして押え切れない肉体の加虐に身もたえする三千代の姿も見飽きないが全身のはげしい苦痛に身をよじる姿は、ま

た好ましいと云つた眼附きで、敏子は舌をなめずるのである。

みだらな笑いが敏子の頬をかすめた。彼女は犬みたいに四つんばいになると、押しころがされている三千代の顔の上にまたがるのだ。

「舌をお出し！ 舌を！」

堅く眼をつぶっている三千代にも、ちかく自分の顔に近附いているものが何なのかは判る。

「お出しつたら！ さ、早く！」

敏子は思い切り三千代の髪を引つ張つた頭ごと抜けてしまひそうな激しい痛み。

「何んて強情なんだらう！」

邪剣な声で、敏子はその姿勢のまゝ三千代の顔の上へ坐り込んだ。ぶよ／＼にふくれた肌がそのまゝ三千代の頬にふれる。それは三千代の口と鼻を完全におゝいかくしてしまつた。

十秒経つた。二十秒、三十秒……。

三千代にとつて、その時間は何と永く思ふたことだらう！ 呼吸の出来ない苦しさに彼女は全身をもみしほり、首を横向こうと努力するのだが、いつか敏子は動きそふにない。

「苦しいだらう？ うん、苦しい筈さ。フフ……。あたしの云いつけを守らないとこんなことになるんだよ。さあ、舌をお出し！ 承知かい？ 承知なら右の脚を高く上げるんだ」

三千代の意識と、彼女の行動は全く正反対だつた。意識の方はこのまゝ窒息して死のうと思つてゐる。それなのに、右脚は彼女の意志とは別に高く上つてしまふのだ。「そうそう、そういう風に素直にならなくつちやあ」

三千代は赤いきれいな舌を出した。

それからしばらく経つた。宿の女中が朝食の準備が出来たことを報せに来た。廊下を通る足音もしげくなる。真夏に、何時までも障子を閉め切つておく訳にはいかな

い。いまいしそりに敏子は舌打ちした。

朝食を喰べると、三千代の手首をギョツリ握りしめたまゝ外へ出た。こうして始めて三千代は敏子が水着も何もいらないと云つた理由に思い当るのだが、二人は足早に海水浴場を抜け、岩かげ、人目につかない場所へと急ぐのである。

海の色……、そんなものはいさゝかも返り見る余裕がなかつた。

着くと同時に三千代は着物をはぎ取られる。どうしてこんなにまでいぢめぬくのだらうと思ふ。何時までも敏子は飽きることを知らないのだ。

白い帆を張つたヨットが眼の前をかすめただけ。誰一人、二人のこのようなたわむれに氣附く者もなかつた。

死への決意

敏子は三千代の逃げることを恐れた。お祭り騒ぎが終ると、細紐で三千代の両手両足を縛り上げ、それから眠るのだ。その紐を何とかして解こうと三千代は身もたえす。寝息をうかがいながら、背後にゆわえつけられた手首を動かして見る。紐は堅く結ばれていた。手首の方が引きちぎれるほどの痛みだ。だが幸いなことに、紐は人絹だつたから、ゆさゆさと揺すつてゐる内に手を抜くことが出来た。

で、今度はうまく脱出に成功する。

夜は更けていた。

宿の裏口から、彼女はそつとしのび出る丸い月が西の空にかゝつていた。

海浜はもう人つ子一人いない。それなのに、まるで人眼をさけるように自分の影を踏み三千代だつた。

歩む道は死への門に通じている。

「お父さま、お母さま」

ハラハラと涙がこぼれた。だが今更になつて何を思い残すことがあろう。

「三千代は生れて来なかつたものとお思ひ下さいまし」

そして、つれなかつた健一にも、彼女は最後の別れの言葉を述べるのだ。もう怨みはなかつた。結ばれぬ運命の星の下に生れた二人だつたのであろう。

押し寄せては引いて行く波頭は、月光に輝いて白い牙に見えた。

風が激しい。風が、真一文字に海へ近附く三千代の袖をなびかせ、また裾を乱すのである。

泳げないということが、三千代を氣易いものにした。失敗するうれいが無い。彼女は砂浜に下駄を脱いだ。足の裏がしめつぽい。

ザザツ、ザザツ……。

寄つてくる波の引き際に、いち早く駆け込もうというのだ。

三千代は肩で大きく息を吸つた。この一息、この一息が空気を肺が吸う最後ののだ。

くらくらと倒れそうになる我が身をやつと支え、三千代は思い切つて駆けつけた。眼はしつかりとつぶつてゐる。閉じた瞼に父や母、いや、それよりもつとはつきり健一

の顔が浮かぶ。

「さようなら、さようなら」

三千代の頬に波のしぶきがかゝつた。だがその時、三千代は力強い腕にがつきと抱き止められてしまふのだ。

「やれやれ、こんなことだと思つた」

抵抗するわづかのいとまもなく、彼女は男の胸に軽々と抱き上げられてしまふ。

「命を粗末にするもんじやないよ。生きていたいばかりにシベリヤでの苦勞に耐えて来た俺が云うんだからこれはたしかな話だ」

言葉使いはぞんざいだが、その底にしみじみしたものゝが流れていた。太い指は永い軍隊生活の名残りなのであろう。

「月並な質問だが、どうして死ぬ氣になんかなつたんだね？ 若い身空で……」

男は海からずつと離れた松林に、三千代の身体をどきりと降すと煙草に火をつけた。しかしこんな問いに、元より答える三千代ではない。死なねばならない事情、あの恥ずかしい話が見知らぬ男に語れようか！

「チョツ！ ひどい蚊だ」

男、江村信夫は頬をピシヤンと叩いた。そしておもむろに口を閉くのである。

「大体のわけは知つてるよ。あの変態女から逃げたいんだらう？」

「えッ？」

うつ向いてゐた三千代は思わず顔を上げた。

「ど、どうしてそんなことを？」

江村は白い歯を見せる。陽焼けた顔に白い歯が清潔だつた。

「風間、あすこの岩影で」

と江村信夫は遠くを指さしたが、

「飛んでもないことをしてゐるのを見ちやつたんだヨットであの沖合を通つたからね」

自殺でもしかねないと思ひ、それとなく注意していたと云う。三千代はベタンと砂浜に坐つた。全身の力がスウィツと抜ける。空気の抜けたゴム風船のような氣持……。不思議に涙は出なかつた。そして意外なことに、彼女は恥かしさもほとんど感じないのである。相手はもう全てを知つてゐるのだという諦めから、急に親近感が目ざめるのだ。一度でも裸体を見られた女はもう裸になることを何とも思わないのであらう。

「だからさ」

と江村信夫は続ける。

「理由は判つてゐるさ。たゞ、俺にはあんたが誰一人相談する人を持つてないつて云うのが妙なんだ。なるほど、おやじやおふくろには打ち明け難いだらう。しかし、見れば仲々別嬪じゃないか。男はいないのかい？こちうの場合、ちやんと相談に乗つてあんたのためだけを考へてくれる、力になる男を持つてないのかねエ」

空しき花束

朝一番の列車に、三千代は江村信夫と連れ立つて乗り込んだ。



健一が髪を赤く染めたパンペンと同棲しているというアパートに辿りついたのは、午後三時を過ぎてからだ。真夏の太陽がカツカと照りつけてゐる。やゝもすると立ち止る三千代の腕を、江村信夫は支えてくれるのだ。

「大丈夫。心配することはない。俺が丸く収めてやるよ。それに、死のうとまで決心した身体だ。うまく行かなくなつたつて元々じゃないか」

江村信夫はそう云つてはげましてくれるのだ。

おしどりアパートは、成る程敏子の云つ

た通り俗悪な建物だつた。三千代のようないちやんとしたお嬢さんが入るのも気が引ける。三千代を表に待たせておいて、江村は暗い階段を上つて行つた。

盛り場の裏通りだ。軽薄なジャズが聞えてくる。表はケバ／＼しく飾り立てゝあるのに、裏から見ると映画館も寄席もハリボテみたいな感じである。こんな通りを通つたことのない三千代には物珍らしかつたが今はそれどころではない。しきりに腕時計の針を見つめるのだ。

後頭部が痛かつた。丸一日と一晚、敏子のためにもあそばされた肉体はめちやくち

やに疲れている。恥も外聞もなく、彼女はアパートの石段に腰かけ眼を閉じた。三千代の疾走を知つて敏子はどんなに驚ろいてゐることだろう？ そんなことを思う。十五分ばかり経つて、江村信夫が歸つて来た。

「アツハツハ……」

何がおかしいのか、大口開けて笑うのだ。三千代の肩を強い力でつかんだ。

「面白い。こりやあ傑作だよ」

笑つて笑つて仲々うまく話してくれなかつたが、それでもやつと打ち開けてくれたところを聞き、三千代は、

「あッ」と驚ろいてしまふのである。

健一が普通よりもずつとおくれて南方から復員して来た、あれは一年前だつたけれど、そのことを何所で知つたのか、港まで出迎えたのは敏子だつた。敏子は三千代が他の男と恋愛していると健一に語つた。

「もしもあなたが三千代さんの幸福を本当に望んでらつしやるのなら、三千代さんにお会いにならない方がいゝと思ひますわ。これは三千代さんの親友として、あたしに出来るたつた一つの忠告です。十年近くも離れていて、また以前と同じように愛し合ふなんてこと絶対に出来ませんもの。あなたが三千代さんにお会いになつたところでそれはたゞ三千代さんを苦しませるだけですよ」

心交りのした三千代を健一は怨んだ。苦しい軍隊生活の間中、しよつちゆう心に抱いていたのは三千代の面影だつた。それがあるがために、やつと生きのびて来られたとも云えるのだ。

だが健一は三千代の年令を思ふと、何時までも自分一人を待つていられるものでは

ないと淋しく諦めねばならなかった。

報せてくれた敏子の好意を感謝し、一生涯、三千代のことは思い出すまいと誓い、自分の心にも云い聞かせた。

「まあ、何んてひどい敏子さんなんですよ！」

三千代は思わず叫ぶのである。

「あんたを物にしようよ、その当時から計画していたんだな」

と江村も舌を巻いている口調だ。

「だが、何はともあれよかつたよ。あんたが昨夜、海へ飛び込んでいたら、全ては誤解のまま残されることになるんだからな。俺がとめてよかつただろう？」

何と云つて、三千代はこの恩人にお礼を云つたらいいのか判らない。

「さあ、早く行つといで。二階の二十四号室。あんたのいゝ人は腕をひろげて待つてるよ」

やさしく江村信夫は三千代の背中をたゝいた。

「ええ」

と恥かしそうにうなづいて、しかし三千代はためらう。髪を赤く染めた女のこと、気になるのだ。そうした三千代の心を早くも江村は見抜いたらしい。

「赤い髪の女。あれもデマさ。もつとも健一君は劇場で働いてるから、赤い髪のカツラをかぶつた舞台衣裳の女と街をちよつと歩いたことはあるさうだが、それ以上は何にもない。彼はずうつとつれなかつた人のことばかり思い通していったんだ。」

さあ、待ちかねてるよ、早く早く」

江村信夫は三千代の背中を押して階段を突上げる。もじ／＼しながら、それでも嬉しそうに三千代が笑つた。

「こゝだよ」

と江村が二十四号室のドアを開ける。無理矢理、三千代を部屋の中に押し込んで扉をびつたり閉めた。

「アラツ」とか「キヤー」とか、すさまじい叫び声が出る。

十年間、愛し合いながら離れ／＼になっていた男女が、やつと二人だけの部屋で会うことが出来たのだ。

江村信夫はほゝ笑んだ。この後は見たり聞いたりしないのがエチケットであらう。彼はそつと引き返す。いゝことをしたといふ満足気な表情だつた。だが、その表情の奥がそつとうづく。江村信夫の恋人は彼がシベリヤに抑留されている間に死んでしまつたのである。

生きて再び帰ることのないひと。そのいとしいひとの思い出の中に、しばし江村はしたるのだ。

せめてむなし誤解のために、別れ／＼になつてゐる男女を結びつけることが、彼の悲しい願ひなのである。江村にとつては死んで行つた恋人にたむけるそれが唯一の花束なのであらう。澄んだ空には入道雲がむく／＼と湧き上つていた。

(終)

艶笑漫才

港が見える丘

○風流ジロー

△風流エミー

△「私は脚を上げますわ」

○「え？脚を上げる？ 家計はいつも足を出してるくせに」

△「ストリッパーですもの脚を出して上げるのが商売」

○「え、誰が？」

△「私がよ、今売出しの風流エミーつたら私のことよ」

○「あ、此の間ワイセツ物陳列罪で捕獲された——」

△「風みたいに言わないでよ」

○「だつて君、接吻する時はチューツと鳴くでしょう」

(奇譚笑話)——映画館にて

(風流太郎)

うわの空

女「とても素晴らしい映画だつたわね。

あの若い相愛の二人が霧の夜の街角で接吻する時なんか、とても堪らなかつたわ。あなたは、どんな時が一番よかつたの？」

男「うん、僕の隣りの席に京マチ子みたいポチャ／＼つとした娘が座つた時が一番よかつたよ」

奇蹟

強盗「おい、金を出せ」

主人「金なんか一文もないヨ」

強盗「家探しして、若し出て来たらどうする？」

主人「俺に半分くれ」

錯覚

甲「彼女はどうしても本当の年齢を言わないんだ。それにしても何時までも相変らず若くて美しいね」

乙「全くだ。僕と小学校時代同級だつたんだが、一体、彼女は本当はいくつになつたんだろうな」

お角違い

求職者「この右足を失いましたからずつと探しているんですが」

署員「紛失物なら、警察の方へ行つて下さい」

— 107 —

死の汗恩害威

奇譚
歴史

ている金銀財宝を一つ残らずかすめ取った上、その王族どもを全部とりこにして、彼等が声をあげて泣き悲しんでいる眼の前で未亡人となった敵の王妃たちを素裸にし、その紅い唇を吸い、その柔い乳房をしやぶ

七十三歳
で精力絶
倫

「人生の最大の楽しみは、長年の敵であつた国を征服して、その国王の首を、木の根っこを引きぬくようにもぎり取り、彼の宮殿に満ち満ちた黄金財宝を一つ残らずかすめ取った上、その王族どもを全部とりこにして、彼等が声をあげて泣き悲しんでいる眼の前で未亡人となった敵の王妃たちを素裸にし、その紅い唇を吸い、その柔い乳房をしやぶ



き、ゆつくりとミズ（馬乳酒）の杯を挙げることである！」

七十三歳にもなつて美人狩りでもあるまい、と思う人があるかも知れないが、遠征からかえつて来た彼の遺骸を、眼を泣きはらしながら迎えた妃や妾の数はざつと五百人もあつたのである。インドのヨギ（仙人）に頼んで、硫黄と水銀との混合物から造つてもらつた不老長生の秘薬を、月に二度ずつ、こつそり飲んでいた、などという説もある。

中澤公平
絵 箕田京二

攻囲軍側も、食糧の足しにするために、捕虜になつた城兵や、戦死した奴隷兵などの肉を、どしどし食うという惨状である。

この修羅場にあつても、精悍無比なモンゴル兵たちは、溜りに溜つた情慾をもてあましていた。城が落ちれば、城内に居残つてゐる者であらうと、すでに城外へ出て投降した者であらうと、いやしくも夏王国の人民である限り、ことごとく城外の広場に集め、その大きな目標にむかつて、「剥ぎ取り開始！」とか、「手込め開始！」

とかいう、モンゴル軍独特の珍命令にしたがつて、一斉に、それこそ掠奪、暴行の限りをつくすことが出来るのだが、城はなかなか落ちるやうにもない。怒りつぽくなつたモンゴル兵たちは些細な事から、奴隷兵を蹴殺したりする。仕方がないので、チンギス・ハーンは取つて置き切札である「軍律による集団遂行」を許可した。

それは、生きてゐる若い牝山羊を幾百頭となく、土中へうつ伏せに堀め、臀部を斜め上方へ向けて地上に露出させ、それにむかつて順々に、「四足獄風」をやらせるのである。

ところが、兵たちの中には、癡病をわずらつてゐる者がいたので、この恐るべき病氣は、哀れな牝山羊を通じて、たちまち全軍にひろまり、肝心なところで、戦闘力に差しかえを生じるまでになつてしまつた。チンギス・ハーンはあわてて、その野蠻行為に対する許可を取り消した。モンゴル軍は、行進する際、おびただしい山羊や牛の

群を、食糧として連れて歩き、それを「移動する食糧」と呼んでいたが、これは正しく「移動する性器」である。敵を殺すためにも、部下を使うためにも、チンギス・ハーンは、手段方法を選ばなかつたのである。しかし、城壁にむかつて、絶え間なく、大弩で石や材木（水につけて重くしたもの）を雨あられと飛ばしたので、とうとう、所々に突破口が出来た。モンゴル兵は、無数の奴隷兵をむち打つて、この突破口から突入させ、死物狂いの城兵と戦わせ、負傷などして後退する者があれば、即座に突き殺した。「督戦戦術」や「人海戦術」の元祖がチンギス・ハーンであつたことは、隠れなき事実である。

半年もの間、ひつきりなしに攻め立てられて、やつれきつていた寧夏（しんぎや）の市民たちは城壁の割れ目から怒濤のようになだれ込んで来る敵兵の姿を見た時、もうそれ以上、城兵に協力する勇気を失つてしまつた。一廓、また一廓と陥落する毎に、幾千、また幾千と、年寄りや女子供などの非戦闘員が集団で降伏した。惨烈な市街戦は、それから幾日となくつづいた。

その日も、この阿鼻叫喚の光景を、対壘の上から満足そうに眺めていたチンギス・ハーンは、ふと、激しい歯の痛みをおぼえた。それが、だんだんひどくなつて、もう居ても立つてもいらなくなつた。オルド（皇帝の寝足きする帳舎）へ戻つた彼は、本国から連れて来た侍医にいろいろ手当をさせてみたが、更にききめがない。

ありとあらゆる奸智と頓智とをいつでも用意していたチンギス・ハーンは、さつそく、ボゴルドチンという氣に入りの侍従にむかつて、言いつけた。

「降参した幾万の市民どもの中に、きつと歯の療治の出来る医者がいるにちがいない。大急ぎで、探し出してつれて来い！」

この命令は、忽ち実行された。

一人の名医が、罪人のように引つ立てられて来た。が、彼は、頼として、チンギス・ハーンの歯の手当をすることを拒んだ。「ハーン（皇帝）よ、たかが歯の痛みくらい、何ですか！ あなたは、われわれ幾十万の非戦闘員まで殺すつもりでしょう。今までのあなたのやり口で、ちやんと分つていゝのです。殺される者の身になつて、考えて見なさい。少くとも、わたしの住んでゐた区の住民を助けて下さらない限り、わたしは、どんなことがあつても、あなたの歯痛みを治してあげるわけにはいきません！」

医者は、眼尻をつりあげて叫んだ。

チンギス・ハーンは、仕方なしに、その医者といつしよに降伏した二千人ばかりの市民をゆるしてやり、やつと歯の痛みを止めてもらつた。

女なしには半日もいられないハーンは、コスイ・ハトンという若い妃のほかに、数

十名の妾をつれて来ていたが、彼女たちの体には、もうすつかり倦きていた。何の感興も足きなかつた。

夜となく風となく、続続投降してくる幾万の市民たちの中には花恥かしい良家の娘が沢山いた。その中から、選りに選つて三百人ほどの生娘をオルドへつれて来させた。彼は、眼を細くして、彼女たちの肉体を順順審査した。ちやうど八月の暑い盛りだつたので、裸体の審査には、あつらえ向きであつた。自家用として八十一人を選り抜いた。彼は、残りを、皇子たちや、皇弟たちや、親兵隊長や、軍司令官たちや、高級将校たちや、侍従のボゴルバチンなどに、引出物として分配した。八十一という数は、九を九倍した数で、センゴルでは最も縁喜のよい数だと言われている。

毒蛇の棲んでゐる女陰

本丸に立てこもつていたシズルク・ハーンは、ある日、愛妃のグルベルジン・ゴワ・ハトンに向つて言つた。

「都城の陥落もいよいよ眼の前に迫つて来た。わしは、チンギス・ハーンの軍門に降る考えだから、ハトン（妃）よ、お前は、このどさくさに紛れて、乞食女に扮し、実家の者たちといつしよに、遠くへ逃げのびなさい！」

それを聞くなり、グルベルジン・ゴワ・ハトンは、夫の胸にすがつて、烈しく泣きさげんだ。

「意気地なしのハン（王）！ あなたは、今になつて命が惜しいのですか！ 国民を捨て城を捨てて、自分だけ助かりたいのですか！ ああ、わたしは悔しい！ 国民や城を捨て



でも、このグルベルジンだけは、最後までお捨てにならないと、信じていたのに！」
シズルク・ハンは、逞しい腕に、最愛の妻をひしと抱きしめた。そして、涙にぬれた彼女の白晰の面に、つづけさまに熱い接吻をした。

その面は白蓮
その瞳は宝珠
その膚はヒマラヤの雪
その体臭は青蓮華の香

その声はカウジンカ（妙音鳥）の音
しかも、その女陰には
一匹の毒蛇蟠まう！

一匹の毒蛇——それは、かねてから彼女を狙っている「モンゴルの皇帝」の野望を遠廻しに諷刺したものであった。シズルク・ハン以外の者が、もし彼女の膚に手を触れたら、即座に命を失うぞ！という敵意に満ちた諷刺であつた。

今度は、シズルク・ハンの眼から大粒の涙がこぼれ落ちた。
「ハトンよ、グルベルジンよ！何で、わしがお前を捨てることが出来よう！ただ、一時の別れなのだ。このけがらわしい娼界



を去つて、アヴァロキチシワラ（観世音）のお導きによつて、あの清らかなスカリアヴァティ（極楽）へ参れる日が、とうとうやつて来たのだ。わしは、そこへ先に行つて、やがてお前が来るのを待つことにしたのだ」

その言葉に、ハトンの顔からは、ぼつと後光に似た強い光が輝いた。人一倍敏感な彼女は、すぐ夫の言葉の意味をさとつたのだつた。

「おお、雄々しいハン！あなたは、死ぬ覚悟をしていらつしやるのね！命を投げ出して、あの憎い憎い白髪の獅獅を退治しようとしていらつしやるのね！」

「何で、退治せずに置くものか！父祖代々の敵を倒さずに、何で、おめおめ死ぬるものか！降参すると見せて、きやつたのオールドに近ずき、日頃身に修めてある変化の術をもちいて、警護の者どもをたぶらかし、一氣に、あの白髪首に止めをさす覚悟だ！……」

ハトンは、快い音楽にでも聞き入つてゐるように、うつとりと夫の言葉を聞いていたが、やがて、曰くありげに、につこりと微笑んだ。

「もしも、仕損じた時には、ハンよ、どうなさいます？」

ハンは、ぐつと言葉に詰つたように見えたが悲痛な声でこたえた。

「運命だ！何も怨まぬ！」

ハトンは、夫の耳元へ唇をよせた。

「その時には、このグルベルジンを、あの獅獅にくれてやりなさい！いいえ、わたしの方から、あの獅獅のもとへ参りますわ！そして……」

「おお、それから、どうするのだ！」

ハンは、急ぎ込んでたずねた。
ハトンの美しい唇からは、凄くほど落ちつきはらつた言葉が洩れた。

「あの獅獅に身をまかすのですわ！そして……」

最後の句は、聞きとれないほど低かつた「うーむ！」

ハンは、一声、黙めいた呻きをもらすと愛妃を抱きしめていた腕をはなした。

シズルク・ハンの最期

シズルク・ハンから降参の申入れを受けたチンギス・ハンは、不審そうに首をひねつた。

「シズルクが降参するとな！はて、面妖な！わしは、今までに、百種に近い種族を征服し四十箇国に及ぶ国を亡ぼしたが、それらの種族や国の頭で、わしに命を助けてもらつた者は、まずあるまいな！まして、シズルクは、奴の親父や祖父の代から三代にわたつて、今度で五度までわしの征伐をうけた身だ。降参したら助けてもらえる、などとは、よもや、夢にも考えてはいまい。……」

ハンは、そう独り言のように言いながら、脇に侍っているボゴルバチンのみやびやかな顔と、玉座の真前に手をついている参謀総長のスベディ・バートルの獅猛な顔とを見くらべた。

スベディ・バートルは、数年前に同僚がチンベと共に、ハーンの先鋒として南ロシアまで攻め入り、幾百万の異民族の命を塵芥のように散らせた、兇悪無比な將軍である。



その猛悪な部下の顔を見ているうちに、白髪の老帝の胸には、ふと、持前の嗜虐性がむらむらと頭をもたげたのだった。本城が陥落すれば、どの道、自分の手にころげ込んで来るはずになつてゐる絶世の美人、グルベルジン・ゴワ・ハトンの亭主の顔が一目見たくて堪らなくなつたのである。

「スベディ、わしは、シズルクに会つて見ようと思う。これほどまでにわしに手を縛かせた奴だ。一目見た上で、死なしても遅くはあるまい！」

スベディ・バートルは、にやりと残忍な笑いをもらした。

「生きた首実検！ なかなかの御趣向でございますな！ では、その旨をすぐ、先方へ伝えましよう！」

バートルとは、「勇士」とか「英雄」とかいふ意味で、名前の下へつく名譽の稱号である。人間をよほど沢山殺した者でなければ、この称号はもらえない。

翌日、シズルク・ハンは、黄金仏像の九つ、黄金の器九つ、銀の器九つ、美しい男の児九人、美しい女の児九人、名馬九匹、略略九匹、その他おびただしい贈り物を、それぞれ九つずつ携えてやつて来た。

チンギス・ハーンは、オールドの帳をかかげさせて、外へ出ると、その帳を背にして豪華なタンクトウ王の贈り物を一観した。頃をはかつて、後ろ手にしぼられたシズルク・ハンが、ハーンの眼の前に引き摺えられた。

隊長チャガン・フヤンの指揮するケシク

テン（親兵）たちが、ハーンの左右を護衛し、シズルク・ハンのすぐ後ろには、スベディ・バートル麾下の將校たちがそれ々と言えば直ぐこの大事な捕虜の襟首をひつ掴める姿勢で控えていた。

後ろ手にしぼられたまま、大地に額をうちつけて三拜九拜したシズルク・ハーンに向つて、チンギス・ハーンはおだやかに言つた。

「シズルクか。顔をよく見せろ」

シズルク・ハンは、最初のうちは恐る恐る、やがて平然と、最後には猛猛しい面構で、敵を見やつた。

チンギス・ハーンは、相手の不敵な眼差しを、憎々しげにじつと睨み返していたが白けきつた表情でたずねた。

「シズルク、お前の家は代々、ラマ教の信者だといふことだな。ついでには、尋ねることがある。信心深いラマ教の信者が、なぜ信仰の本尊である仏像を、たわいもない土産物などにするのだ？ 九つの像のうち六つまでは、ラマ教徒の守り本尊である観音の像ではないか？」

シズルク・ハンは、音吐朗朗と答えた。

「阿修羅にも、餓鬼にも、畜生にも劣るムチン（チンギス・ハーンの本名）が、この上、迷い迷つて六道をうろつかぬようにと聖なる大観音に、御慈悲と御引導とお願ひ申したのだ！ 有り難く礼拝したがよいぞ！」

思いも寄らぬ言葉に、一座は、一瞬、しんととなつたが、その静けさは、忽ち耳をつんざく怒号叫喚に変わってしまった。

どこから現れたか、一匹のみずみずしい黒い花蛇が、今しも、ずるずるとハーンの頸に巻きついて、立ち騒ぐ警護の兵たちを

尻目に、血のような赤い舌で、彼の眼、鼻口をべろべろなめ廻してゐるところだつた。「何をぐずぐずしているのだ！ 早く、その蛇を殺せ！」

スベディ・バートルは、そう喚きながら意気地なくただひしめき合つてゐる兵たちを押しのけ、手ずからその毒蛇を掴もうとした。

その途端に、オールドの帳が内側からさつとはねのけられ、古銅色をした一匹の老虎が、「うおーッ！」という物凄い咆哮と共に、蛇に巻きつかれて苦しんでいるハーンの肩先へ、ぱつと飛びかかつた。

混乱は頂点に達した。あまりに押し合いへし合いしてゐるので、てんでに腰の剣をぬく余裕もない。老帝は、ハーンをくわえて、ひよいと肩にかけ、一躍りしたと見る間に、もうオールドの円屋根のてつぺんへ這い上つてゐた。

スベディ・バートル以下の將兵は、その場へ凍りついたように立ちすくんだ。が、その状態も、ほんの瞬間しかつづかなかつた。突然、ごろごろごろと、天地にとどろく雷鳴がきこえ出し、あたりが暗くなつて来たかと思ふと、空の一角から、百疊敷きもありそうな羽をひろげた大鷲が、ささ、さーッと逆落しに舞いさがつて来て、いきなり、ハーンをくわえてゐる虎の背中を、文字通り鷲掴みにするが早い、また一直線に舞いあがつた。そして、「あれよあれよ！」と喚き叫んでゐる人間の群など眼中にないかのうちに、悠々と、北の方角へと遠のいて行くのだつた。

「出会え、出会え！」

出しぬけに起つた、けたたましい叫び声に、空の光景にばかり氣をとられていた人

々は、はッとわれに返つた。見れば、いつの間にか瞼目をといて、短剣を逆手に握つたシズルク・ハーンが、オルドの護衛に當つてゐる名うての妖術師トルンチエルビに、羽交ひ締めにされてゐるところだつた。鮮かな変化の術にかけられて、一座の者たちが夢うつつになつてゐる隙に、幻術をもちいて手早く縄の結び目をとき、靴の底の内側に隠してあつた「ミサリ」と呼ばれる宝剣をとり出したシズルク・ハーンは、空に氣をとられてゐる将兵たちの間をすり抜けて首尾よくハーンの手へ一撃加えようとした瀬戸際に、運つたなくトルンチエルビに見破られたのである。

不覚千万にも、シズルク・ハーンの幻術にかけられていたのだと、人々が悟つた途端に、雷鳴はばつたりと止み、大鷲の姿も跡形なく消え、ハーンは、無事にオルドの帳の前に立つてゐた。怒り狂つた兵たちは、十重二十重に、シズルク・ハーンの上に折り重なつた。

雁字がらみにされて、死んだように地べたにころがつてゐるシズルク・ハーンの頬を、二、三回、はげしく蹴つたチンギス・ハーンは、恐縮しきつてゐる視兵隊長チャガン・ノヤンを振りかへつた。

「チャガン、こやつを面皮を剥ぎとつて、記念に保存して置け！今、すぐ剥ぎとれ！」

「心得ました」

チャガン・ノヤンは、即座に数名の部下に言いつけて、樹の皮でも剥ぐように、秀麗なシズルク・ハーン的面皮を、びりびりと剥ぎとらせた。

チンギス・ハーンの妃 となつて

「すぐ御用意を！」

モンゴル軍の本営から来た出迎えの使者に、こう急ぎ立てられた時、グルベルジン・ゴワ・ハトンは、壁に向つてしきりに泣いていたが、ようやく氣をとり直すと、敵から差し廻された輿に乗つた。忍びの者たちの報告によつて、昨日の出来事——夫の雄々しい最期の模様を、たつた今知つた彼

女であつた。

ハトンは仕えていた多くの腰元たちや下部たちが、そろそろと、彼女の乗物の後からついて行つた。

ハトンの輿が、チンギス・ハーンのオルドに近づく、戦鬪を終つたモンゴル軍の司令官たちや高級將校たちが、下から呻き声のもれる板敷の上で羊の焼肉をさかんにクミズを飲んでゐた。投降した敵の將軍たちを裸にして地べたへ寝かし、その上に板をのせて、その板の上で戦勝の祝杯をあげるの、陣中に於けるモンゴル人のならわ

しである。

オルドの背後には、あちこちに、百人、二百人と群をなして、タングイトの娘たちがたたずんでいた。残らず投降した幾十万の市民の中から、新規に選び出された者たちで、みなハーンの審査を受けるために、順番の来るのを待つてゐるのだつた。

チンギス・ハーンは、自身、入口まで出て来た。そして、ハトンが輿から下り立つのを見ていたが、聞きしにまさる美貌に、思わず相好を崩した。

東京

「おお、ハトンよ。よく来てくれた！さぞ疲れたであらう！さぞ暑かつたであらう！さあ、遠慮なくお入り」

手をとつてオルドの中へ引き入れようとするハーンの手を、ハトンは軽く振りはらつた。そして、につこりと艶やかに笑うと、甘えるように言つた

「戦争騒ぎで、沐浴も出来ずに居りましたの！ハラ・ムレンへ行つて、膚の汚れを流して来たいと思ひますわ！お宜しいでしうか？」

チンギス・ハーンは、悦に入つてうなづいた。

「よいとも、よいとも！結構な心掛けだな」

ハラ・ムレン（黒河）

——出水の度毎に赤黒い濁流の渦巻く黄河を、モンゴル人はそう呼んで

いた。



河岸の近くへ来た時、ハートンは興から下りて、つき従つて来た腰元や下部たちや、警護のモンゴル兵たちに向つて、言つた。お前たちがいつしよでは、恥かしいのよ！みな、ここで待つていて頂戴」

一人で河岸へ行つた彼女が、まさに帯を解こうとした時、さつきから虚空に輪を描きながらついて来た一羽の美しい鳥が、さつきと舞い下つて、彼女の肩にとまつた。

「おお、カウシカ！見送りに来てくれたの？お家をうしなつて、お前も、これから苦労するのね。また、スカイヴァティ（極楽）でいつしよになりましょう。ハートンもわたしも、先に行つて、お前の来るのを待つてあげますわ！」

人間に向つて話すように、そう言いながら、ハートンは、手にとまらせたその美しい鳥を愛撫した。それは、彼女が今日まで飼つていた愛鳥で、彼女がシズルク・ハートンのもとへ興入れする時に、彼女の父ジャオ氏が持たしてよこしたものだつた。

鳥が飛び去るのを待つて、彼女は、やつと衣服をぬぎ、その光りかがやく白玉のような膚を、徐々に河水につけた。

その夜、チンギス・ハートンは、彼女を正式にハートンの列に加えたしるしに、無数のダイヤモンドをちりばめたヌーブラ（裸環）を、手ずから彼女の足首にはめてやつたのち、彼女のために豪華な賜宴を催した。

ハートンの求めるままに、彼女は、立ち上つて舞つた。それは、古くからチベットに伝わっている、宗教的な神秘的舞いであつた。タングート人はチベット族で、彼女も純粹なチベット人であつた。

ハートンは、彼女に唄を所望した。彼女はそれにも応じた。聖者ミラルバの作になる

優雅な讃歌であつた。

舞いを見ながら、唄を聞きながら、ハートンは、ただうつとりと酔つたようになつて思はずクミズの杯を過した。「チンギス・ハートンの猫の眼」として、遠くヨーロッパ人の間にまで知れ渡つていたその恐ろしい瞳も、今宵ばかりは、たわいもない遊治郎のそれに変つていた。

妃の河

夜半と夜明け前との中間と覺しい頃、陰沈とした静けさの中で、オルドを遠巻きにして警邏していたケシクテンたちは、ふと異様な呻き声が、オルドの方から洩れて来るのに気づいた。

ハートンの安眠を妨げまいとして、警邏の足音を忍ばせるようにしていた彼等も、思はず荒々しい叫び声をあげてしまつた。モンゴルのしきたりでは、ハートンが寢床に入ると同時に、すべての召使たちはオルドから出て別の帳舎へゆき、オルドの中には、ハートンの相手をする婦人だけが残ることにきまつていたからである。それが女の声でなければ、まさしくハートンの声に違いない。

「それッ！」

当番の士官を先頭に、どた／＼と駆けつけた彼等は、帳の外から、

「ハートンよ、どうなさいました？」

「ハートンよ、どうなさいました？」と、つづけざまに声をかけたが、ハートンの呻き声は一層高くなるばかりであつた。

許しを得ずに帳をかかげることは、規則違反ではあつたが、もう一刻も猶予がなら

ないので、士官は、思いきつて帳をかかげると、きつとオルドの内部を見やつた。途端に、彼は、「あッ！」と言つたまま、そこに立ちすくんでしまつた。

金色燦爛たる天蓋の下にしつらえてある寢合から、血まみれになつて転げ落ちたらしいハートンは、今しも、頻死の態に似たしぐさで、虎の皮や豹の皮や黒貂の皮などを敷きつめた床の上を、這いかけでは俯伏し這いかけては俯伏ししているところであつた。幾対かの巨大な黄金の燭台に明々とゆらいでいる蠟燭の光が、苦悶にゆがんだ彼の彫りの深い老顔を、半ば蒼白く半ばどす黒く隈取つてゐる。それは、まさに鬼氣人に迫る光景であつた。

土足のまま駆け込んだ士官が、

「ハートンよ、しつかりなさいませ！」

と声をかけると、ハートンは、苦しい息の下から、わずかに、

「グ、グ、グルベルジン……」

と洩らした。

はつとした士官は、血眼で、オルドの内を見まわしたが、彼女の姿はない。

その時つと寢合へ走りよつた一人の下士官が、夜具をめくるなり、何とも言いようのない叫びをあげた。血のよどんだ寢床の敷布の上に、びか／＼光る一挺の大きな鉄が捨ててあり、そのそばには、根元から切り取られた年寄りらしい黒い××が、切り口をくつきりと見せて、転がつていた。兇行者が何人であるかは、もう一点の疑いもなかつた。

「ハートンを迷がすな！」

士官は、狂氣のように、オルドの外へ走り出た。非常呼集の法螺貝や鉦が鳴らされ急使が八方へ飛んだ。

かねてからハートンの「世嗣ぎの君」に内定していた第三皇子エゲデイヤ、ハートンの生写しと言われている第四皇子トルイをはじめ、各所に駐營していた幾十名の皇族が陸續、馬を飛ばせて馳せつけて来た。

「四、五日は、まだお命があまりましう。その間に早く、御遺言を……」

氣附けの靈薬をのませ、応急手当をすませた侍医たちは、言葉少にそう言つた。

その四、五日の間、もがきにもがいたチンギス・ハートンは、息がまさに絶えようとする時、エゲデイヤ以下の皇族や、スベデイ・バートル以下の將軍たちを前にして、長年の敵である支那の金帝国を打ち亡ぼす手だてを、言葉短かに教えた後、声も途切れ勝ちに、こんな遺言をした

「わしの後は、エゲデイヤが継げ！

……タングートの奴ばらを、一人のこらず殺せ！……」

モンゴルの將兵たちは、グルベルジン・ゴワ・ハートンの行方を隈なく探したが、皆目知れなかつた。ただ、オルドから程遠からぬハラ・ムレンの岸辺に、真珠の飾りのついた彼女の絹靴が片方、落ちていただけだつた。「河に聞け！」と言わぬばかりに、ハートンの遺言により、タンケート人は、軍人といわず市民といわず、みな殺しにされたと伝えられているが、難をのがれた者も相当にあつたらしい。

今、寧夏（シナ）の近くにある「テムール・オルフ」と呼ばれる丘は、この片方の絹靴を埋めた所だという。タングート人は、今でもハラ・ムレンを「ハートン・ムレン」（妃の河）と呼んでいる。

（終）

不良少女マリ

愛 山 久

志乃田よしる画

死んで 私と一緒に……怒濤に揺れるヨットの中で、不良少女マリは、帆綱を操る男友達の胸へ飛びついて行つた。三年後、ネオンまたたく戎橋の上で再び邂逅したときのマリはやはり愛慾の道をよるめき歩いていた……

一

私はなぜ、あんなに激しい情熱を捧げて江川マリに心を惹かれていたのであろうか。マリの評判は、私の友達の間では、極めてわるかつたのに……。忠告を聞かない私から、親友はどんどん離れてゆくばかりだつた。

「だめだぞ、坂田君、こんな悪い成績では来春の卒業も難しい、いつたいていどうしたんだ、この頃の君は、まるでひどい熱病にでも冒されているように落ちつきがないね」

主任の吉田教授の示してくれた試験成績簿では、なるほど、私はクラスの順位のどんじりであつた。

さすがに生きた証拠をつきつけられるとどきつと胸がさわいだ。自慢ではないが、いつでも首席から三番と下つたことのない私なのである。勉強しなければいけない、とあせりながら、下宿へ帰ると、やつぱり、マリのことばかりを悶々とおもいつめていた。自分でも半狂人に近かつたとおも

う。

「おばさん、僕に手紙は来ていないかい」

一日に何回段梯子を降りて、管理室のおばさんにたづねたことだらう。

「あいよ、さあて……」

老眼鏡をかけて、東にして配達された封筒やハカキを一枚づつ調べるおばさんの手もとを、私は食いつくように眺めていた。

「来とりますぞな、えい」と、こりや故郷のお母さんからじやがな、いつもあんたの身体を案じてなさるけん、たまには返事を出したげなされや、なあ」

だが、私の待つてゐるのは、鉛筆で書かれた、たど／＼しい母のハガキではなかつた。

「あの人からのではありませんか」

「あの人つて……あゝ、江川さんとかいうお嬢さんからかね、いつか訪ねて来なすつた」

私はいら／＼すると、おばさんの手から封書の束をとりあげた。生命を賭けて欲しいのは、あの人からの一通だけなのであ

る。私は立つたまゝ、他の手紙やハカキをばら／＼と畳の上へ落して行つた。

「あつた、あつた、おばさん、あるじやないか」

マリは決して少女の好きな小型のなまめかしい色封筒を使わない習慣であつた。男が事務用に使う純白の大型角封筒に、太い万年筆の字を走らせていた。

「あれまあ、このごろの娘さんは男の子みたいに乱暴な字を書くんじやなあ、へえ、これがあの江川さんかねえ」

おばあさんはあきれたように眼をしよぼ／＼させた。私は自分の部屋へ帰る足が宙に浮いた。次の日曜の朝八時。香炉園浜。ヨットに乗ります。

封筒を破ると、たゞそれだけを書いた一枚の便箋が出てきた。季節の挨拶もなく、お待ちします、と愛情の滲む一句もなくぶつぎらばうに認められたたつた二行の手紙

不良少女のマリ。

男のように乱暴な字を書くマリ。自分のしたいときにしたいことをするマ

リ。

そんなマリを私は火のように愛しているのだ。

故郷の母へは一枚のハガキも出さなくせに、マリへは一日も欠かさずに、手紙を書きつけている二十一才の学生の私。師に叱られても、親友に愛想をつかされてもかまわなかつた。落第しても痛くも痒くもなかつた。

たゞ一途にマリに逢いたかつた。

逢つてみたとして、接吻と握手の他に、愛の技巧はなんにも知らなかつた。まだ童貞の私には、マリの女体を抱く痺るような夢をたゞ／＼見て、われ知らず布団の白いシートに、汚点をしるしていることはあつた。けれど、現実のマリを征服する術は全く知らなかつた。

だから、なおさら、マリを想うことは切なかつた。

マリに始めて逢つたのは、夏の夜の雑踏する戎橋の上であつた。

五彩のネオンが眩しいまでに回転し、明滅する橋の下には提灯をつけたアベツクのボードが楽しそうに行き来していた。

「よう、坂田、あいかわらず不景氣なつらをしやがつてよ、うーい」

ビールの酔いで、トマトのように真赤な顔をした学友の拳闘部選手の山下が、にや／＼しながら私の前に立ちふさがつた。口

は悪いし身体は大きいが、性質はきわめて朗かな男である。パンカラの女嫌いで有名なその山下のそばに、よりそつてゐる小柄な少女に私は眼をみはつた。ゆたかな肉付の身体にニールツクの洋装を着飾つて、肩から吊るしたショルダーバックも安物ではなかつた。唇のちよつと濃い、いわゆる

パンツ型らしいコケチツシユな眼が、妖しいほど美しく、私の胸に疼いた。年頃は十八九らしかった。

「おい、誰だい、そのメツチエンは」

私は女に知れぬように、山下の太股をズボンの上から、ぎつとつねた。

「あッ痛、紹介するよ、この野郎、目が早い」

にや／＼笑いながら、山下が、

「こちらが江川マリさん、おれの従妹、ということにおこるか、あはは」

女は、肩をすぼめて、くすつと笑った。

「マリちゃん、こいつはおれのクラスメートの坂田一夫だ、まだおふくろの他に女を知らないっていう、時代錯誤なカタパン野郎さ、もつとも、頭はおれより優秀だね」

山下は照れたように自分の頭をさすった

「おほ、大男総身に知恵がまわりかね、という川柳があつたわよ」

「こらつ、マリちゃん、我橋の上で恥をかゝさんでもいゝじやないか」

山下は熊手のような大きな手でマリの肩をわしづかみにすると、爆発するように笑いながら、橋のらんかんにマリの身体を押しつけた。

「いやつ、山下さんは乱暴だからきらい、ねえ、坂田さん！」

「よせよ、山下、通っている人がみんな妙な顔をしてじろ／＼眺めてるじやないか」

私はマリを押し潰しそりにみえる山下の大きな身体をズボンを引つばった。

マリが私に最初の手紙をくれたのはその翌日であつた。山下から私の住所を聞いたのであろう……。恥づかしいが。私は初恋の相手として始めて知つたマリに、煙のよ

うに燃えて翻弄される他になかつた。

一一

風は強く、波はかなり荒れていた。海水浴場からはるかに沖合へ出ると、漁船の影さえもなかつた。ちぎれとぶ雨雲の隙からとき／＼ぱつと強い真夏の日光が、棒のよりに海へ射る。

私は渾身の力をこめて、ヨットの帆綱を引きしめていた。強い風に揺られる帆は、はた／＼と悲鳴を上げ、ちいさいヨットはざあつと打ち返す波に揺られて、いまにも横倒しになりそうな危険を感じさせた。

「マリちゃん……」

「なあに」

「やつぱり岸へ帰ろう、これで夕立にでも出食わしたらいへんなめに会うから」

「いや、もつと沖へ進むのよ」

「だつて、危いよ、こんな天候では」

私は、マリのわがま／＼にむつとした。手紙の誘いに従つて、香煙園浜へ来たけれどはじめからヨットなど出せる海ではなかつた。

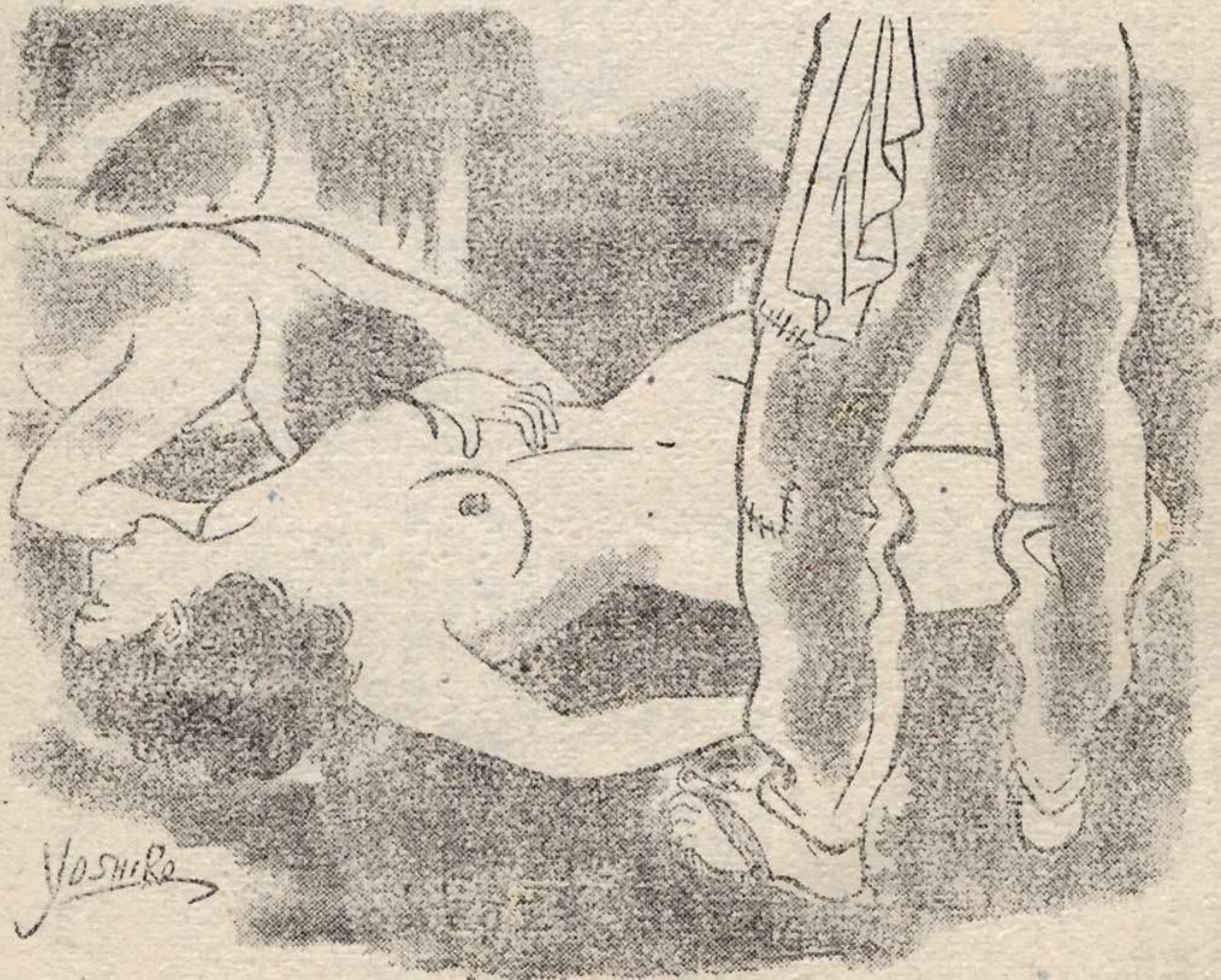
「やめときなはれ、こんな日にヨットはむちやだつせ、わしは商売やさかい、お客さんが貸せといわはるのをこつとわるわけには行きまへんけどなあ」

貸ヨット屋のおやじは、半分喫つたバツトを耳にはさむと、しぶ／＼腰をあげた。私はマリを艇尾にのせると、海水パンツ一つになつて、ヨットを海の中へ押しすめた。腰から腹ぐらいまで浸るところまで来ると、ふなばたに手をかけて、さつとヨットにとび乗つた。

あゝ、それにしても、短い断髪を海風に吹きなびかせ、胸も腕も太股もあらわな、

ニルツクの海水着に包まれたマリの裸体のすばらしい発育ぶりはなんにたとえればいいのだろうか。二つの乳房のふくらみ、

蜂のように丸くゆたかに張つた腰の線、後手に航をあやつるために、膝をそろえて、私の方へ伸ばされている二本の脚。



私は全身に吹きあげてくる感情を、必死におさえて、奥歯を噛みしめた。

ヨットは木の葉のように怒濤へ突進する帆はいまにも吹きちぎれそうに、ぎり／＼と帆綱を軌しませる。

「あつと上るしぶきで、マリも私も頭からずぶぬれなのである。」

「帰ろう、マリちゃん」

「……いゝえ、もつと沖へ」

「……」

「勇気がないのね、坂田さんは」

「だつて」

「だめ、いまこそはつきり云つてあげる」

だしぬけに舵を離すと、マリはすつくとヨットの中に立ちあがつた。

私は、あつと呼吸を呑んだ。

「マリちゃん、立つちやあぶない」

「坂田さん、なぜ、つらいやせ我慢をしてらつしやるの、ほんとうに私を愛しているのなら、はつきりと私の肉体をお求めになればいいのよ！」

「……」

「御交際してもう一年よ、私は気が狂いそうだが、握手と接吻をもう幾度くりかえしたらいゝの、毎日くださるお手紙の情熱をなぜ、あなたは男らしく行動にお出しにならないの……、なにがこわいの、なにを躊躇なさるの、私、処女じゃありませんわ、男性の感情がどんなに激しいかぐらい、よく知つてますわ」

「僕は、僕は……方法がわからないんだ、男と女の」

「おほほ、おほほ、純真すぎるのよ、あなたは……、もつと勇気を出すことよ、どんなあばずれ女だつて、女の肉体は自分から男に迫つてゆけないの、坂田さん、もし、

立場がちがつて、私が男だつたら、女にこするわよ」

マリは女豹のように跳躍すると、私の胸にとびついてきた。ああむけに押し倒されたたたんに、引きしめていた帆綱は私の手から離れた。

「あつ」

横なぐりの風をまともに受けたヨットはたちまち、ぐうつと傾いて、荒れくるる波の上に横倒しになつた。

「死んで、死んで、私といつしよに」

マリは絹をさくように叫ぶと、私の胸に両手をしつかりと巻きつけ、脚を私の脚に絡めた。ざぶんと海面へ投げ出されると、私はマリもろとも、鉛のように海中へ沈んで行つた。

があつと口から鼻から流れこむ潮水の苦しき。呼吸もできない苦しみにもがこうとする腕も脚も、なまあたゝかい女体からみついていて自由には動かなかつた。叫ぼうとすればにがいがらつぽい水が咽喉に奔入する。

耳に入つた水のために聴覚も失つた。眼をひらけば眼に沁む水。沈んでゆく海の底の闇と冷たさに全身の皮膚がびり／＼と蹙る。絡みあいもつれあつて、頭を下に際限なく沈んでゆきながら、言語に絶した生命の恐怖が腹の底からこみあげる。

私の腕に、胸に、脚に、ぬらぬらと粘りつけ、締めつけているのが、果して熱愛している江川マリその人だろうか。いや、いやそんなはずはない。海に住む魔女だ、私の若い生命を海底へひきつりこんで絶とうとする怪物の仕業なのだ、もうろろとする意識と、窒息してゆく肺の苦しさをこらえて、私は

「くそつ、死んでたまるか」

と残る全身の力を奮い起たせた。水圧の加減でいく分軽くなつた女体を、私は夢中でつき放した。なんにも聞こえぬ、なんにも見えぬ海底の闇で、私はなお粘りつく女体を無中で蹴とばし、かきむしり、撲りつけた。海藻のように指にからみつく女の頭髮、ぐやりと柔かい体。生命の恐怖に直面するとその相手が誰であろうと、太古の男の野性を掻きたてられて、悪魔に対するように、その手から逃れようとする本能。ぶく／＼、ぶく／＼と無数の泡が立ちのぼる。

その窒息直前の死闘が、今でも私には十数時間つゞいたような感じがする。だが、本当は僅か二、三分の間のことにちがいない。

だしぬけに相手の肉体がふわりと離れたと、同時に私の身体も、急に浮力を得て、みる／＼海面へ上昇して行つた。

「ぶうつ」

拔手をきる力は尽きていた。こらえにこらえた水を鯨のように吹き出した私は、昏倒するように再びぶく／＼と沈みかけた。その瞬間、なにか強い力が私の胸に加わり、海上に吊り上げられた全身に、うすら冷たい雨風が横なぐりに吹きつけた。

助けられた、ほつとする気の緩みで、私はうつら／＼と昏睡に落ちて行つた。

夢の中で誰かゝ何か喚きながら次第に近づいてくる。眼をあけると、

「学生さん、気がついたかい、そやから、わしははじめから反対したんやで」

心配そうに覗きこんでいるのは貸ヨット屋のおやじの顔であつた。番小屋の床の砂の上にむしろを敷いて私は寝かされてい

た。

せまい板葺の小屋の真中には、かつかつと薪が燃えていた。

「マリちゃん……」

「娘さんかいな、危いところで助けたけどなあ、えらい怪我してなはる」

怪我？、私は、はつとおやじが頭でしゃくつた方へ顔をねじむけた。わかめのように濡れた髪が、青ざめた顔に乱れてへばりつき、ぼろ／＼に破れたぐしよぬれの海水着。私が海底で夢中でかきむしり、なぐりつけ、蹴りとばしたための生傷が、マリの顔に、胸に、太股に幾筋もの跡を残し、滲み出した血が、とろ／＼と、潮水にまじつて、しづくとなくなつていった。マリも気を失つて寝かされていたのだ。

「……学生はん、あんたら、まさか」

それが心中のしぞこないじゃあるまいなという意味を含んだ間であることは、じつと私の顔をのぞいているおやじの眼の色で読みとれた。私は黙つて首を横にふつた。

「ほんならえ、たゞ、ヨットが風でひつくりかえつただけや、……警察にとゞけたら、若いあんた方に傷がつく、誰にもなんにも言わんときまひよ」

た。

おやじは深くうなづいて、薪をくべ足した。

私の頬にひとすじ生ぬるい涙がこぼれて砂に沁み込んで行つた。

人眼をはぐかつて、その夜、マリと私はとつぷり暮れてから、番小屋を出た。風川公園をお互いに一言も物をいわずにあるいて、阪神の夙川駅で、マリは神戸行に、私は大阪行の向い合つたプラットホームに立つた。

……そして、別れた。



あれほど頻繁だった交通も、それつきりぶつりと絶えた。私にもマリにもその情死未遂はひどい打撃であつた。

三

は恋死よりも強い、という。美しい恋愛

至上主義の言葉である。だが、私は、あのヨットの件以来、その言葉に大きな疑いをもちはじめた。

私はたしかに江川マリを熱愛していた。だが、突然に彼女から死を挑まれたとき、いつたい、彼女にどんな態度をとつたらう

か。まるで憎んで憎みきれぬ悪魔のようになり彼女の抱擁をふり放し、つき飛ばし、かきむしつて逃れようとしたではないか。

恋の欲びも、生命の恐怖の前にはもろくも負けてしまふものか。人間が生命ある限り生きようとする慾望は、たとえ、それが浅ましい悩みであるにしても、人間がこの地球の上に在る限り一番根強いものではなからうか。

私とマリの場合だけではない。相思相愛の覚悟の情死の場合でも、たいがいは、お互いに憎悪と怨恨に歪んだ二眼とみられぬ醜い物凄死顔になつてゐるという。肉体を許しあい、後世を誓いあいながら、情死の断末魔には、お互いが地獄の使者のように見えて、男女の区別を忘れて死闘を展開する。……これがいつわりのない人間の正体なんだ！

生きようとする人間の執念のすさまじさ。

それに比べて、男女の愛慾なんてものは物の数にも入らぬ肉体の遊びにすぎない。とにかく学生の自分には学問だけが本領だ。

「くそつ、人間はとどのつまり自分一人の他に信じられるものはなんにもないんだ、恋がなんだ、女の肉体がなんだ、男にはもつと大事な仕事というものがあんだ！」

私は必死になつて、怠けていた勉強に没頭しはじめた。

「どうやら熱病が治つたようだね、若い時分は誰でも一度経験するものさ、まあいい、坂田君、わしの期待を裏切りたまうな

よ」

めき／＼立ち直つてきた私の成績に、温厚な教授は上機嫌だつた。それよりも私の眼頭が熱くなつたのは、同じ青春の悩みを知つてくれる多くの学友たちであつた。

マリとのヨットの事件は、ぜつたい秘密が守られていたが、若い彼等の敏感な神経は、私の深い傷心に触れないよう、はらはらといつも氣を使つていてくれるのだつた。「坂田、あまり根をつめると病氣になるぜたまには愉快にさわごうじゃないか」

卒業の迫つた日。講義が終つたあと、私がノートを折匏に入れて席を起とうとする、四、五人の友達に、にこ／＼しながら席のまわりをとりまいた。

「うん、ありがと、しかし、今夜は卒業論文の仕上げをやる予定があるんだ」

「君の熱心さにはあきれられるなあ、学生生活ももうすぐ終りだぜ、まあ一晩ぐらいはつきあいたまえよ、実はちよつとその用意もしてあるんだから」

「行こうよ、坂田」

「吉田先生も出席してくださいさるんだぜ」みんなにすゝめられると、さすがに押しきつて断わるわけにも行かなかつた。

私はドル入れをつかみ出した。

「いつものように割勘だらう、いくらだいい会費は」

学友たちは顔をみあわせると、
「いや……、今夜はすき焼で饗宴を飲むんじゃない、もつと面白い計画があるんだ、割勘は要らないから、とにかく黙つてついて来たまえ」

私の学校は見晴らしのいい宝塚沿線の高原に建つていた。駅まで三丁あまりのだから坂を下りながら、

「どこへつれてゆくんだい、神戸か、それとも大阪かい」

とたずねても、

「万事まかせておきたまえ、とにかく君は黙つてついてくればいゝんだよ」

と誰もとりあつてくれなかつた。

その晩、私のつれてゆかれたのは、宝塚だつた。歌劇大劇場からもう一つ上手の橋を渡ると、旧温泉旅館が並んでいた。通りがかりの警察派出所に、鶯谷派出所と書いてあつた。

「こゝだよ、坂田」

それは立派な洋館であつた。私は全く見知らぬ邸の堂々とした玄関に、出迎えた女中さんが

「いらつしやいさし、お待ちかねですわ、さあどうぞ」

とスリッパを揃えてくれたのにどぎまぎした。

狐につまゝれたような気持で中へ入ると別の女中がすぐ私だけを案内してくれたのは、思ひもかけぬ大理石造りの豪華な浴槽であつた。さあつと惜しげもなく溢れる清らかな湯の中に、私は首までゆつたりと浸つた。

「よう男前が一段と上つたぞ、さてと、坂田君、モーニングの着方を知つてゐるか」

湯から上ると、私の制服はなかつた。

「冗談じゃない！、僕は生れてまだモーニングなんか……」

眼を白黒する私にかまわず、四人が、りでワイシャツ、ネクタイ、縞ズボン、チョッキ、上着といやおうなしに着せられた。

「ど、どうするんだい」

「まあ花君さんは黙つていろ、花嬢さん

道化者の嘲笑

笹田 豊

——で、私に身を引けとおつしやるの？

青いセーターの女は、冷い微笑を浮べ乍ら相手を見詰めた。

和服の娘は、テーブルに目を伏せたまま、沈黙をつづけていた。

生暖い空気が、重苦しく鬱んだ春の夜である。花瓶にさした椿の紅が、息詰るような雰囲気、一層強く廻り立てている。

しかし、それは無理よ。

女は相手に構わず続けた。

——だつてそうじゃない、私に思い切れても彼は私を離しはしないわ。それに……

女の微笑は冷たさを加えた。

——一体、彼はあなたを愛しているのか知ら？

娘は顔を上げた。明かに、怒りの色が動いていた。

——愛しているわ。

——そう。どんなにして？

娘の唇は、女の自信を増したばかりである。

——それが問題だわね、口では何とでも言えてよ。

再び沈黙がつづいた。

——どんな事、例えば？

娘は一瞬赤くなつた。しかし、既に或る決心を固めていた事は明かであつた。

——手を握つたわ。

——それから？

——抱いて呉れたわ。

——それから？

娘の顔は一度燃え上つた。

——接吻したわ。

女は、皮肉な微笑を洩らした。

——それだけ？

娘は真青になつた。絶望の影が顔をよぎつた。紫色の唇から、しやがれ声が洩れた

——そ、それだけだわ。

女の勝利は完全なものであつた。

二

一週間後の夜、二人の女は、再び向ひ合つて坐つていた。

——それで、御用件は？

セーターの女は、相変らずの冷たさを満ちて、口を切つた。

——別れて頂きたいの。

無感動な答えであつた。それだけに、一種の凄さが感じ取られた。

女は、探るような目で相手を見詰めた。微笑の影は既に消えていた。

——お分りになりました？

和服の女は唇を、僅かに歪めた。自身ではほゝえんだ積りなのかもしれない。

——私にも権利が出来まし

たの上。

青白い頬に、ほのかな紅がさした。暫らくの間、女達は無言のまゝ睨み合つていた。突然、若い方が相手の手を握つた。

——お願い、私を苦しめないで。

涙が溢れ、胸が震えた。見せかけの冷静な跡形もなかつた。

——私は彼を愛しているわ。彼も私を愛しているわ。あなたはもうそれを疑えない

青服の女は、例の笑いをちらと浮べた。

——そうだわ、彼は私のものよ。もう誰にだつて触れさせはしないわ。あなたは、当然身を引くべきよ。

昂奮した女は沈黙を守つてゐる相手の冷やかさに、ますます苛立つた。

——あなたは笑つてゐるの？ いゝわ、奪いたければそうなさいよ。その代り……

一瞬、言葉がと切れて、無気味な沈黙がつづいた。

——私はあなたを殺してよ。

流石に相手も、顔色を変え。しかし、すぐ元の冷静さに帰つた。

——おつしやる事よく解りましたわ。

女主人は、始めて答えた。

——要するに、私達は同じ資格の所有者つて厭なのね、それも名譽ある資格の……

自嘲的な笑聲がそれに続いた。

出来れば、あなたに譲歩したいとは思ふの。けれど、私だつて彼を——

——愛している積りよ。



は三十分も前に衣裳づけが終つてお待ちかねだ」

「いゝ加減にいたづらもよせよ、学生の僕が結婚してどうするんだい」

「なんでもいゝよ、とにかく言う通りにしろ、この場に及んで迷がすもんか、おつとこれを忘れるな」

きちんと折つた白麻ハンカチを上衣の胸ポケットに刺しこむと、私はあつけにとられたまゝ大広間にひっぱり出された。

正面にうや／＼しく控えた黒い僧衣の牧師さんが捧げている厚い聖書。広間の両側にきちんと整列している学友たち。吉田教授は謙厳無比な顔で、きらりと片眼鏡を光らせて、牧師さんの横に並んで立っている。隣りの部屋から静かに、しかも華やかな喜びを溢れて流れてくるレコード音楽は……、まぎれもなく、リストの結婚行進曲……、一体これはなんのことだ、私は夢幻の世界にさまよつてゐる気持であつた。

「……お手をどうぞ」

後から忍びやかにさゝやかれて、私ははつとした。いつの間にか、私の横には、純白の結婚衣裳に、ふわりと頭から白いベールを冠つた花嫁がよりそつていた。香水のにおいがふんと鼻に沁みだした。無我夢中でその柔かい片手を握ると、私はうつとりした歩調で牧師さんの前へ歩み出して行つた。「あつははは、結婚式の予行演習はこれで終りだ、さあみんな隣室へ行つてくれたまえ、何も御馳走はないが、大いに食べて、虹のような諸君の氣焔を聞こうじやないかやあ、どうも御苦労さま！」

吉田教授は眼鏡を外すと、愉快そうにから／＼と笑つた。「道子は衣裳をぬいで坂田君をつれてきなさいよ、わしは一足先に

あなたに不可能な事が、私に出来る筈があつて？」

彼女は真面目であつた。のみならず、最奮の氣味も無くはなかつた。

「彼が奪われ、ば、私だつて、あなたを殺しかねないことよ。」

女の態度は、こゝで、がらりと變つた。

以前の冷たさが、再び戻つてきた。

「馬鹿ね、私達は。殺すの殺さないのつて……愚劣よ、笑うべき愚劣だわ。」

セーターの女は、微笑を浮べ乍ら呟いた

「どうして氣附かなかつたのかしら、カードが最良の判者だつて事を——。」

三

——よくつて？

皮肉屋は、相手の顔をじつと見つめた。

「すべては、あなたの選択にかゝつてゐるのよ。」

二人の横顔は、スタンドのシェードに、

紅く輝いてゐる。時折、客の唇がひきつれるように動く。テーブルの端のグラスに、

目が走る事も稀ではない。二つに分けられたランプの背が、不吉に光つてゐる。

和服の女は目を閉じた。油汗が、富士額

にじつとり滲んだ。胸が大きく喘いだ。荒い呼吸が鼻孔を洩れた。男の顔。グラスの液体

「あゝ、とても駄目だわ

大粒の汗が鼻頭に光つた

「どうしても？」

「笑いを含んだ冷たい声であつた。」

「私にはやれない……」

「じや私が……」

「女は手を伸した。左を——」



「しかし、手は右に戻つた。指が震えていた。」

「——さいは投げられてよ。高い声が、ヒステリックに笑つた。異様に光る四つの目が、扱ばれた一組のカードの背に落ちた。上の一枚に手が掛つた。めくられた。」

「スベード1。」

深い溜息がもれた。あるじの指は、既に二枚目にかゝつてゐる……

問題の道化は、二十枚目に到つても遂に現われなかつた。確率は、客の不利を示している。細長い指は、残された六枚に、最後の挑戦をつづけた。

クラブ9。

ハートK。

ハート3。

二人の顔を恐怖が流れた。青白い額に、髪が粘りついてゐる。

ダイヤQ。

スベード7。

病的な熱氣を帯びた視線が交叉した。客は再び目を閉じた。

主はじつと唇をかんだ。

女達の目の前を、二つの幻が通りすぎて行つた——男の顔。グラスの液体。

最後の一枚に触れた手は滑稽な程ふるえてゐた。息が止る。つばを飲み込む。

「あゝつ。」

かすれた声が同時にもれた。

JOKER。ジョーカー！

四

「私の負けよ。主は、強いて微笑を作ろうと試みた。しかし、醜く口許がひきつれたに過ぎなかつた。」

「皮肉なものね……」

昂奮の後にくる虚無感が、二人を包んでいた。沈黙がつづいた。

「お約束に従つて……」

敗北者の声は、意外に落着いてゐた。

「あなたの方の幸福をお祈りするわ。」

女は無難作にグラスを手にとつた。男の顔が一度浮んだ。つゞいて胸が。腹が。背が。手が。脚が。しかし、冷い触感を肩に感じた時凡ての幻は消えた。

戦慄が背筋を走つた。恐怖が顔を歪めた。

次の瞬間、グラスが壁に碎けた。

女は相手にとびかゝつたのだ。

怒号。罵声。悲鳴。沈黙。

春の夜が更けて行つた。

× × × × ×

「どうしたの？ 元氣をお出しなさいよ。」

女は、男の首に腕を巻き乍ら、鼻をならした。

「夕刊の記事がそんなに氣になつて？」

「馬鹿な！ あんなもの……」

「実際馬鹿な事をしたものね。第一、愚劣じやないの、殺し合いをした挙句、首を吊るなんて……」

「全くだ。」

「さ、もう斯んな話は止めにして……」

「何時もの様に抱いて頂戴……」

「もつと強く……もつと」

【FIN】

食堂へ行くからね」

あとに残された私はまだ夢心地で、芝居だつた花嫁のあたゝかい腕をにぎつていた。「おほい、お驚きになつたでしよ、あたしもお父さまに、急に、道子、お前今夜花嫁になるんだよ、と命令されてびっくりしましたわ、衣裳はこの間結婚した姉のを借りましたのよ、……お父さまのいつものいたづらになれていますけれど」

おかしそうに私にさくやくその人の顔をベールのかげにふとのぞいたとき、私はめまいがした。他人の空似というが、あまりによく似ている……忘れようとして忘れられないあの女、江川マリに。

「マリちゃん」

呻めいて思わず抱擁しようとする、

「あら、私、道子ですわ」

ふしぎそうにその人はあどけない眼をみはつた。

やがて花嫁衣裳をぬいだ道子さんと、元の制服に着かえた私が食堂へ入つて行つたときには、もう卓上に幾本もの空のビール瓶がならんでいた

「いよう御兩人！」

「お嬢さん、素晴らしい花嫁ぶりでしたよ」

「坂田、本物の結婚式のときには、あんなにふるえるなよ」

どつとにぎやかな笑い声が渦をまいた。教授は満足そうに愛嬌と私の顔をかわるがわる見まわして、なにか一人でうなづいていた。仮装結婚は私の傷心を忘れさせるための愉快な芝居であつた……。

私はじんと胸が熱くなつた。

四

心配していた就職の件も、卒業と同時に

すらくとまとまつた。旧三菱系の大きな船舶会社で、講和会議がまとまつたら早速アメリカ支店を設けるらしい口ぶりだつたことも私に明るい希望を抱かせた。初任給一万五千円と、とびぬけてよい待遇も他の会社に就職した学友たちを羨ましがらせた。おまけに、道子さんとの婚約を父の教授が内々許してくれる肚らしいことが、私を有頂天にさせた。

……だが、私の胸には、ときどき、ふつと別れて三年になる江川マリの面影が暗い記憶といつしよに蘇つてくる。怒濤の海に「死んでよ、私と一緒に！」

と絶叫して、私もろとも沈んで行つた不良少女マリの狂おしい情熱の肢体の感触がいまでもぬらくと私の皮膚を無気味にはいまわる。

番小屋の焦火の光りに照らし出された、べつとりと髪がへばりついたマリの青ざめた寝顔が思い出される。

もしも、あの海底にマリに絡まれたまゝ生命を絶つていたら……、今日のこの生きる喜びを味わう機会が永久に訪げれなかつたにちがいない。運命のふしぎさと怖ろしさ……。

ぶつくり文通の絶えたマリは今、どこでどうした生活をしているのだろうか。

あの情死未遂の秘密は、私の口からも、マリの口からも決して他人に語られることはないであろうが、男から男へ転々と移りつゝ、マリはもうきれいに私のことなど忘れてしまつてゐるだろうか……。

あまりにもマリに容貌のよく似た道子と近い日、いたづらの芝居ではないほんとの結婚式をあげると聞いたなら、マリの女心の動揺はなくてすむだろうか。

私は眼をとじた。

チリチリ、と卓上の受話機が鳴つた。

「坂田さん……、あたし道子なの、これからママと心齋橋へ買物に行きますの、会社がおすみなつたら、久しぶりに大阪へいらつしやらない？……、ええ、ママが坂田さんをお誘いなさいと云つてますのよ、じゃあね、六時半に、松竹座の前で」

若々しい女声が受話機の中で、びちくとおどつていた。

会社はサンマータイムの四時に終る。私は退社のベルの鳴るのを、なんべんも腕時計をたしかめながら待つていた。

飛ぶように阪急の三宮駅へ。特急車が梅田駅へすべりこんだのは五時半に少し前であつた。こんどは地下鉄で難波まで。

約東の松竹座前へ来ても、まだ六時にはなつていなかった。私は道子の待ち合せに夕刊を買うと、戎橋のらんかんに凭れた。

まだ明るい宵である。また、きはじめた、ネオンもまだ色が淡いが、せつかなボートだけはもう川面を漕ぎはじめていた。

マリに始めて逢つたのこものこの戎橋の上であつた。

らんかんに凭れて、川面を眺めながら、ふと、私の声がかすれた。

「マリ……」

いけないことであつた。一人の女を待ちながら、もう一人の女の名を口にすること、は、二人の女を同時に侮辱することになるはつと顔を赤らめたが、切ない慕情は押さえきれなれなかつた。

「マリ」

二度目の私のつぶやきが洩れたとき、

「えつ」

先から私の隣りに、やはりらんかんに凭

れてボートの群をみていた一人の女が、ぱつとはじかれたように、顔をむけた。

派手なワンピースだつたがふりむいた女の顔は、あの江川マリにちがひなかつた。私は、電撃をうけたように棒立ちになつた。マリの顔にはみるゝ憤怒とも驚きとも哀願ともつかない複雑な表情の波が打つてきた。

「御元気でしたのね、坂田さん」

「……あなたもね」

あとの言葉はお互いにせつなかつた。

「すつかり見ちがえましたわ、三年の間に、いゝ紳士におなりなすつて」

「いま、どこに？」

「……この近所のホール、でも決していらいしやらないでね、お願い」

「どこかでお茶でも飲まない？、話したいことがあるから」

「いゝえ、これでお別れますわ、さよなら坂田さん」

「なぜ？」

「お話していると、また、あなたが好きでたまらなくなりますもの」

黙つてマリのさし出した手を握つた。

「毎年、あなたに始めてお逢ひした時分がくると、私はこゝへ来てましたのよ、それだけをお忘れにならないで！」

そりうと、マリはくるりと私に背をむけた。雑踏の中にまぎれこんでゆく女の後姿に、今でも愛慾に傷つき、よろめき、一人の道のあるいてる寂しい影が漂つていくことを、私はしみみと見た。

道子はもうすぐ来るだろう。私は松竹座の方へ足をむけた……。マリに逢うことはもう二度とあるまい、と思ひながら。(完)

讀者應戰女闘返信

私がお相手致しましょう

北海千珠子様

御もとへ

神戸
伊藤繁子

私とお相撲取らないかつて、結構ですわ。私も実はお相撲大好き、日本が古来から伝えて居る国技をスポーツに生かして女性もドシ／＼お相撲を修練すべきだと思えますわ。

何の攻防の用具も持たないで原始そのまゝの裸身に業を競うことこそ、ケレン味もなく、醜魔化しもない肉体の相剋に、美しい精神が自然に育くまれると云うものですわ。

貴女は常にメトマーズとして色々とお研究の事と存じますがこれを見る者より演ずる者自身の方がかえつて楽しみなものです。メトミこそスポーツの美と舞踊の美が併せ持つ極致が私達女性によつてのみ表現出来得る特権だと云つても差支えないと存じます。

私の郷里は富士を背にして海に近い部会ですが、子供の頃から太平洋の寄せる潮に驚きで競えられた私は何時しか裸身のスポーツにのみ興味を持つ様になつてしまいました。なお亡くなつた私の祖父は大の相撲ファン

ながめる事があります。十四貫五百、五尺三寸のこの体は青春の燃える様な血潮の盛り場を求めて小麦色に光つて居りますわ……あら初めてお便りする貴女へ自分の事のみ申しまして失礼の程お容赦下さいませ。

兎に角私も貴女の云われる「メトミ」マニアの一人として身を以つてもつと十分に深く女闘美の緻なす美しい振舞いの数々を研究してみたいと願つて居ります。

他日時を定めて貴女にお会いしたいと存じて居ります。お互いに同好の道に赤色々話も一としおはずむ事かと思ひます。

おつしやる通り勝負は時の運むしろ二の次ですわ、あくまで私達のメトミの道に健全なスポーツと一方舞踊化するとも出来る相撲というものを試みて見ようでは御座居ませんか。何とそうお思ひにはなりませんか。

女子の競輪、野球、又最近に拳闘、レスリングの試合も女性選手を出場させて居る現在、メトミシングの中に相撲の本領を發揮させて女のみの持つ肉体の線の美しさを作り出すのは当然私達の行く道になんのさまたげにもならないことだと思ひます。

女の角力という一般の人はすぐ、以前にもあつた様な見世物の所謂女力士などを連想して

な

集 募 稿 原

特別に変つた面白い読物を募集致します。材料だけでも結構です。

- 一、告白記 (枚数二十枚迄)
 - 一、体験記 (枚数二十枚迄)
 - 一、探訪読物 (枚数三十枚迄)
 - 一、暴露讀物 (枚数二十枚迄)
 - 一、變態讀物 (枚数三十枚迄)
 - 一、軟派文獻 (枚数二十枚迄)
 - 一、小話、笑話、漫才、冗談コント
 - 一、漫画、挿繪、寫眞、口繪、其の他
- 締切は毎月十五日、次号に掲載。
一、開封第四日までに送付下さい。
二、採用決定しました分は、折返し御返事の上、発送を相当稿料差上げます。原稿は原則としてお返ししません。
送付先 曙書房内 奇譚クラブ編集部

何んとかく好色趣味なもの、様に思われるのは残念なことですわ。

この意味でも益々北海さんの御健闘と御献身を心からお祈り申して居ります。

では乱筆にてつまらぬ事のみくどく／＼と申述べまして大変失礼致しました。何卒御ゆるし下さいませ。

亦他日親しく御拝顔の機を樂しみにペンを置くことに致します。かしこ

昭和二十六年六月二十七日

又下寫眞分譲

六円切手十七枚にて裸寫眞三枚一組並に目録お送りします。代理部

直接購讀者募集

半年分 六冊(送料共) 五〇〇円

(定価値上の際も据置)

右御支払込の愛読者の方々に特別景品として裸寫眞三枚一組無代進呈。振替又は小為替にて御送金下さい。

奇譚クラブ 第五卷第九号 定價 九十円

九月号 毎月一回 一日発行

昭和二十六年八月三十日印刷
昭和二十六年九月一日発行

編集兼 吉田 稔
発行人 上田 庄之助

印刷所 曙書房
發行所 大阪府堺区内菅原通四丁三〇
電話 大阪三四九五六番
電話 堺一七四六番

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可 (毎月一回 一日発行)
昭和二十六年一月二十四日 日本国有鉄道特別波承認雑誌 第一八七号
昭和二十六年八月三十日印刷 昭和二十六年九月一日発行 (第五卷第九号)

奇譚クラス 九月号

定價 九十円

爆弾娘行状記……続湯の町騒動……加茂川清子

怪奇探偵小説……妖魔の最後……津田文吉

売淫婦白書……肉体の驟雨……笠置良夫

古相諷刺奇譚……木賃ホテル紳士録……能登一三

同性愛無理心中……**望・怨・花**……松井籟子

艶色云々……百円札の雨……佐々木直

夜之助好色旅記……秋宵夜譚……乙宮多己雄

純情乙女の告白集・織姫の悲哀・悲しき轍・

悉く慾乱舞……小間使の日記 (鍵穴から覗いた人生)・
諸国好色地図……(連れ込み宿の女中)……(マニキュアガール)・

人工性器・花木 実

上海愛慾行脚・楊 馬珊

女医の肉体当番・穴吹 武

変態奇譚怪奇集

○いつまでも若い夫人の秘密・
○人形と心中する純情娘・
○阿片窟につごめく人の群・

躍進する雑誌界の寵児

奇譚クラスの
次号予告!!